
孤独と闇と希望と

ただの行商人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独と闇と希望と

【Nコード】

N3800Q

【作者名】

ただの行商人

【あらすじ】

九年前の大戦争を経て現在。人の手で生み出され、望みもしない力を植え付けられた少年 天戸零は、四大国直下の《組織》の一員として、ただ利用されるだけの日々を過ごしていた。多くの人間の命を奪い、そんな自身に価値を見出せなくなった零は、ある日「任務」という名目で学校生活を送るよう指示される。孤独な闇の中、彼は何を思い、何を求めるのか。やがて、無情にも歯車は回り出す。主人公最強設定の学園ファンタジー小説です。

主要キャラ編（前書き）

要望があったので作り直しました。
随時更新していきます。

勿論、サブキャラ編も作ります。

主要キャラ編

あまとれい
天戸零

- ・年齢：15歳
- ・身長：171cm
- ・主要武器：刀
- ・属性：-
- ・髪の色：漆黒
- ・瞳の色：漆黒
- ・人物像：冷静、鈍感
- ・備考：主人公、大陸最強の人物

あまとあかり
天戸明

- ・年齢：15歳
- ・身長：164cm
- ・主要武器：-
- ・属性：治癒
- ・髪の色：白
- ・瞳の色：薄赤
- ・人物像：クール、照れ屋
- ・備考：メインヒロイン、零と同じ出生の秘密を持つ

かなつぎるり
神無月瑠璃

- ・年齢：17歳
- ・身長：159cm
- ・主要武器：-
- ・属性：火、雷、氷、風、土
- ・髪の色：青
- ・瞳の色：水色

- ・人物像：仲間思い
- ・備考：零の親友、相棒、理魔法を極めし者

月下結衣
つきもとゆい

- ・年齢：16歳
- ・身長：168cm
- ・主要武器：刀
- ・属性：雷
- ・髪の色：黒
- ・瞳の色：茶
- ・人物像：天然
- ・備考：零の幼馴染、重夫の孫、芽衣の姉

月下芽衣
つきもとめい

- ・年齢：15歳
- ・身長：156cm
- ・主要武器：刀
- ・属性：雷
- ・髪の色：黒
- ・瞳の色：茶
- ・人物像：生真面目
- ・備考：零の幼馴染、重夫の孫、結衣の妹

身長：芽衣<瑠璃<明<結衣<零

髪の長さ：零<芽衣<瑠璃<結衣<明

サブキャラ編(前書き)

こちらも随時更新していきます

サブキャラ編

ふるいけじゅん
古池淳

- ・年齢：15歳
- ・主要武器：剣
- ・属性：土
- ・備考：1 - A所属、《暗部》所属の父親を持つ、チキン

くまざきよし
熊沢義之

- ・年齢：15歳
- ・主要武器：弓
- ・属性：雷
- ・備考：1 - A所属、熊のような体格のKY

ターナ・ニコラエヴナ・カレーニナ

- ・年齢：17歳
- ・主要武器：槍
- ・属性：火
- ・備考：瑠璃のクラスメイト、3 - A所属、北国生まれの両親を持つ

ふじもとちづる
藤本千鶴

- ・年齢：18歳
- ・主要武器：弓
- ・属性：氷
- ・備考：生徒会長、4 - A所属、腹黒

みやぎすすむ
宮城進

- ・年齢：18歳
- ・主要武器：双銃剣

- ・属性：風
- ・備考：生徒会副会長、4 - A所属、千鶴の幼馴染

柳沢葵 やなぎざわあおい

- ・年齢：16歳
- ・主要武器：銃
- ・属性：火
- ・備考：生徒会書記、2 - A所属、結衣と並んで二学年の二大美女

片山徹 かたやまとおと

- ・年齢：38歳
- ・主要武器：斧
- ・属性：土
- ・備考：1 - E担任、体術担当教師、精神年齢が低い、独身

浅沼幸平 あさぬまこうへい

- ・年齢：38歳
- ・主要武器：小刀
- ・属性：風、氷
- ・備考：1 - C担任、錬金学担当教師、徹の同期、妻子持ち

藤本香織 ふじもとかおり

- ・年齢：39歳
- ・主要武器：弓
- ・属性：雷
- ・備考：1 - A担任、言語学担当教師、千鶴の母親、腹黒

ケビン・フロル

- ・年齢：53歳
- ・主要武器：双剣

- ・属性：風
- ・備考：教頭、南国出身

月本重夫
つきもとしげお

- ・年齢：71歳
- ・主要武器：刀
- ・属性：雷
- ・備考：第十六代目【雷切】、零の師、結衣と芽衣の祖父

月本鏡花
つきもときょうか

- ・年齢：40歳
- ・主要武器：薙刀
- ・属性：火
- ・備考：結衣と芽衣の母親、旧姓「佐伯」

エイダ・バース

- ・年齢：28歳
- ・主要武器：千本
- ・属性：闇、氷
- ・備考：西国出身、アクセサリーを集めることが趣味

クオン・ジハ

- ・年齢：33歳
- ・主要武器：大槍
- ・属性：風
- ・備考：東小国出身、白スーツを好んで着る

マリア・フェレ

- ・年齢：21歳
- ・主要武器：-

・属性：-

・備考：南小国出身、金髪の美女

プロローグ

あの男達を殺せ。

白衣を着た男はそう告げた。

年は五十代半ばだろうか。所々に見え隠れする白髪が、彼が若くないことを表していた。

その顔は歪んだ好奇心

狂気で彩られている。

なに、いつものことをやればいい。

男はそう付け加えると、目の前のまだ五歳程の少年に、ニヤニヤと纏わりつくような笑みを向けた。

笑みを向けられたのは、黒目、黒髪という、東国においては別に珍しくもない少年。

病院で着るような薄手の服に身を包み、そこから伸びる手足は、握ったら折れてしまいそうなほど細く小さい。ただ、その眼だけは、歳に似合わない異彩を放っていた。

およそ感情と言うものが見受けられない。あまりにも純粹で、冷たくて、そして哀しかった。

少年は理解したように小さく頷くと、渡された刀を持って、引きずるように歩いていった。

その様は、糸を切られたら動きを止める操り人形を想起させるものだった。

扉を開けると、鉄の錆びた臭いとほこりの臭いが強く鼻をついた。真っ暗な中、外から光の筋が数本漏れる。

少年は立ち止まると、無音の空間に全身の神経を傾けた。音を聞き取るのではなく、感じ取ることでのみ捉えられる囁きに身を委ね、空気と言う媒体を介して生物の「呼吸」そのものを感じ取る。

誰に教わったわけでもない本能的な少年の行動は、結果として無音の暗闇に潜む存在を正確に捉えた。

その時だった。

狂ったような叫びと共に長身の男が刃物を振り回してきた。

最早正気の沙汰とは思えない行動。その証拠に、男の目の焦点は合っていなかった。

「ああああああ！」

定まらない足取りの中でも、刃物の狙いは明らかだった。少年の首だ。

まだ五歳程の子供に対して非情とも言えるその行動を、少年は別に驚いた様子もなく、後ろに下がってあっさりとかわす。

さらに空間と一体になった少年は、ピンと張り詰めた空気に微かな違和感を感じ、暗闇の先を見据えた。まだ瞳孔が開き切っていないためか。網膜には何も映らない。ただ何者かの存在を「確信」した少年は、刃物を持つ男と自分の体、そして姿の見えない相手を一直線上に並べ、次の瞬間に、弾かれたように体を捻った。

大気を震わす銃声が轟いたのは、その直後。

少年を狙ったであろうその弾丸は、予想外の動きのため命中することは叶わず、その先の刃物を持つ男の胸を貫いた。

臓器が潰れる歪な音と共に、赤い液体が飛び散る。

男の目の前にいた少年は、その生暖かい液体を頭から被る形になった。

一方の銃弾を放った男は、目の前の自分より遥かに年下の少年に、

今まで感じたことのない恐怖を抱いた。

少年の持ち物は刀一本。

それに対して男の持ち物は二丁の銃。

状況を見れば明らかに男が有利であり、誰もが少年の身を案じた
だろう。

それでも男は圧倒的な力の差を感じ、その恐怖は暗闇に身を縛り
付けた。

そして男は見た。

少年が、ゆっくりとこちらを振り向くのを。

そのキョトンとした表情が、返り血で赤く染まっているのを。

「あああ……」

その瞬間、男の中で何かが切れた。

「うわあああああああ！！！！」

男はパニックに陥って、銃を連射する。

しかし少年は僅かに体をひねると、それだけで銃弾をかわす。

どの弾も少年に当たるか当たらないかの所を通過していく。

それは男の恐怖心をさらに煽った。

そして次の瞬間、男は何が起こったか理解できなかった。

？

少年の姿が見当たらない。

確認しようとしても体が動かない。否、体がなかった。

寝ているわけでもないのに床が驚くほど近くにある。

ああ、そうか。俺は……死ぬのか。

遠くに首のない自分の体が見えた。その瞬間……
体は電池を抜かれたように床に崩れ落ちた。

やや遅れて大量の血が噴出す。

生臭い鉄の匂いを一面に撒き散らし、空間を鮮やか過ぎる赤に染め上げていく。

少年はその様子をボーツとしたように見つめた。

降り注ぐ赤い血が目の中に入り込む。

しかし、それすら興味がないようだった。

「大成功だ！」

突然、歓喜の声が沸き起こった。

白衣を着た男達が次々と飛び出してくる。

嬉々としてデータを眺め、大騒ぎしていた。

少年はやはり、キョトンとした表情でその光景を眺めていた。

ブログ（後書き）

ゆっくり更新していきます。

2011/07/11 改訂

ちょっとホラーチックになっちゃったかも……

1話 人が支配する大陸

九年前、大陸全土を巻き込む戦争があった。

ある者は地位や金のために。

ある者は正義と愛国心のために。

ある者は愛する者の未来のために。

ある者は己の戦闘意欲を満たすために。

さまざまな思いが交錯したこの戦争は、当時人口約三十億人の大陸から、約四分の一の人間の命を奪った。

史上最悪と言われたこの大戦は後に【神々の黄昏《ラグナレク》】と呼ばれ、人々に深い傷を残した。

東のカルディナ王国

北のセレス王国

南のシウルリウス王国

西のウォーラルト王国

これら大陸の四大王国はこの戦争を悔い、二度とこの惨劇を起こさないよう、四国同盟を結ぶと、大国、小国から集めた十三人の最も優れた武人、魔道士から成る中立の《組織》を結成。

条約を破れば《組織》の人間が制裁を与えるという仕組みを作り上げた。

この《組織》の下、各国は争いもなく、九年間で急成長を遂げた。未だ戦争の傷が残る中、人々は死んでいった仲間のため、あるいは自分の明日のため、少しずつ立ち直っていった。

各国間の貿易も盛んになり、大陸は平和に包まれた。

……あくまで表面上の話だが

2話 王の呼び出し(前書き)

いよいよ主人公が登場します。

2話 王の呼び出し

空気が夜色に染まっていた。

無音の空間に、時計の針の音と自分の呼吸音が、やたらと五月蠅く聞こえる。

目を開けると、ぼんやりと、はっきりしない世界が、徐々に瞼の裏に像を結んだ。

そこで初めて、自分が眠っていたことに気が付く。

少年

あまとれい
天戸零は暗闇の中、時計を探した。

四時十九分。

つまり零は約一時間半眠っていたことになるわけだ。

久しぶりに寝たな、と思いつつ、徐々に覚醒する意識の片隅で、寝る前との明らかな変化を感じ取った。やがてそれは疑問となり、零の頭にすんと音をたててはまり込む。

寝る前に電気を消した覚えはない。

見ると、机の電球は弱々しく点滅を繰り返していた。どうやら寿命のようだ。零は小さく溜め息をつく、立ち上がって部屋の明かりをつけた。

寝ることは好きではない。

例え寝たとしても、今日のように机で数時間だけ目を閉じるだけだ。故に、彼の部屋にはベッドがなかった。さらにに言くと、布団もなかった。それ以外は、必要最低限のものしか置かれておらず、やや素っ気ないことを除けば、普通の部屋と言って差し支えはない。

零は湯を沸かすとコーヒーを入れ、ゆっくり口に含むと、今日自分が呼び出された理由を考えた。おそらく新しい仕事だろうが、そ

れにしても周期がおかしかった。つい先日も「ベノム」を倒したばかりである。そう続けて零に仕事が続いてくることはないはずだ。

（まあ、いいか。向こうの考えなんて興味ないし。考えたところでわかるわけもない）

開き直ると、まだ多くの者が眠る暗闇の中、目的地へと歩きだした。

明け方であるためか、風が少々肌寒い。だが、気にならなかった。所詮は人形なんだと、誰かが囁くのが聞こえた気がした。

しばらく歩くと、目的地　王宮に着いた。時刻は五時十六分になっており、指定された時間にも丁度よかった。

大きな門には、門番が二人。

歩きながらゆっくり進んでくる零を、彼らはまるで、長年の宿敵であるかのように睨んだ。

「子供がこんな時間に何の用だ」

威圧感がある声だった。零は怯まない。

「面会の予約をしてあります」

「面会？　こんな時間に？　誰と？」

門番の態度は明らかに高圧的で、変なことを言ったらすぐにつまみ出そうとしているのが見て取れた。実際、零の存在が怪しいのは、誰の目から見ても明白だった。普通、王宮を訪ねる人間は、貴族や騎士隊長クラスの人間であり、零のような十五、六歳の人間が訪ね

てくることなど、滅多にないからである。

だが、ここでこのまま帰るのは、言うまでもなく論外だった。零が無表情のまま取り出したのは、アポイントメントシート面会予約紙。一部の人間しかもっていない、ある意味で貴重レアなものだ。門番は驚いた表情の後、すぐさま怪訝な表情を浮かべた。

言いたいことは容易に想像がつく。

なんでこんなガキが。

それでも、もはや通さないわけにはいかない。零は頭を下げながら中へ入ると、門番の視線が自分に向いていないことを確認し、サツと裏口へ回った。ごくごく一部の人間しか知らない、王宮の隠された扉。その扉を迷いなく開け、誰にも見られてないことを再度確認してから、静かに中へ入る。

「おはよう。待っとつたよ」

声が出したのは、その直後。

あまり使われていないためか、けっして掃除が行き届いてはいえない空間に、場違いとも思える老人がひとり、いた。赤と橙色が混じった豪華な服には、ところどころに光沢が見られる。彼を初めて見るどんな人間でも、一目で高い位についていることを悟るだろう。やや長く生やした白いひげや顔のしわからは、彼がそう若くないことが伺える。それでも力強く響く声は威厳を感じさせて止まないものだった。

「お早う御座います、御命令通りに参上致しました」

「ふむ、わざわざよく来てくれた。なんせ、こちらから出向くことは出来ないのね」

「いえ、私が来るのは当然でしょう。寧ろ足りないくらいです。王のお蔭で、不自由なく生活できているわけですから」

「それこそ当然だろう。君の活躍は私もよく知っているつもりだ。まるで申し分ない働きをしてきている。我が国としても鼻が高い。これからも期待しているよ」

零は深く頭を下げた。社交辞令も終わりだ。いつまでもここに留まるつもりはない。

零は今日呼び出された理由を聞くべく、王に向き直った。

「ところで今日は……」

「わかっておる。これから話そう。あれを見てくれ」

そう言うと、王は遠くの掲示板に貼つてある紙を指差した。大分距離が離れた所にあるその紙を、零は見据える。

身体強化：部分展開：視力

「入学式……ですか？」

拍子抜けたように尋ねた。

抜けきらない、いや、寧ろ湧き上がる疑問は、零の表情を怪訝なものへと変えていく。そのまま、体内に循環させた魔力を解いた。

この様子を一般の人間が見たら目を丸くしたのであろう。

基本的に、魔力とは魔法を放つために使われるものであつて、今のような身体を強化する魔法は、かなり熟練した魔道士でないと、扱うことはおろか、魔力を練ることすら容易ではない。しかも魔力の量を少しでも間違えると、腕が吹き飛んだり、体内の血管が破裂したりするため、かなり正確な精度で魔力を調節しなければならぬ。部分展開 とくれば尚更だ。実際、精神が不安定な状態で身体強化 を行った魔道士が死亡した例も、過去に何件も報告さ

れている。それをまだ幼さの残る少年が、いとも簡単にやってのけたのだから驚くのも無理はないだろう。

しかし、王は別に驚いた様子を見せなかった。知っているのだ。この少年にとつては、たかが 身体強化 である。それごとき、驚くには値しない。

「知つての通り今日は国立カルディナ学校の入学式がある。それに出席してもらいたい。勿論生徒としてだ」

「……はあ、しかし何故ですか？」

国立カルディナ学園とは、東の大国であるカルディナ王国屈指の名門校であり、毎年八百人ものエリートを輩出している。卒業した人間は王国直属の兵士や魔道士になったり、有名な研究所に所属したりする。つまり国の重要な役職に就くことになるのだ。そのために、毎年三十倍程の倍率を誇り、国内の最難関校のひとつとなっている。

しかし、それでも零が通う理由にはならない。

九歳の時に《組織》の一員となり、以来中心として行動している彼には、学校に通う理由がないのだ。そんなことは、この王が誰よりもよく知っているはずだった。

「君の正体は基本的に極秘事項だ。知っているのは四大王国の王と《組織》の人間だけ」

「……………」

「それはこれからも変わらん。君の存在は公に知られてはならない」

それは俺が……

そう思いかけて、零はそのマイナスに傾きかけた思考を振り払った。

「今の世の中、君の年齢の人間はほとんどが学校に通う。明らかに未成年の若者が平日に街を歩いているのは……おかしいだろう？」

そういうことか。

零は内心で合点がいったように呟いた。そこで、疑問をひとつ口にする。

「当然、制御装置リミッターは付けたままですよね？」

「勿論だ。お前にとっては、たかが九割だろうがな。敵う奴などいるはずもない」

「……大丈夫なんですか？」

「なに、子供だとは誰も夢にも思わないだろう。実際、未成年なのはお前と「虹の女神《イリス》」だけだからなあ。そつだ、学校にはあいつも通ってるぞ。お前の先輩というわけだな」

それは初耳だった。言われてみれば「虹の女神《イリス》」もカールディナ王国の人間だし、年も二つ上なだけだ。《組織》の中でも、年が近い彼女とは会話も頻繁に行う仲である。

「わかりました。仰る通りにします」

「うむ。では今日の用件は終わりだ。くれぐれも人目につかないようにここを出よ」

零は深く頭を下げると、王宮を後にした。

2話 王の呼び出し（後書き）

2011/09/04 改訂

昔の文章を読むと、まだ慣れてなくて初々しい感じがしますね。

3話 入学式という試練(前書き)

読んで下さっている方、ありがとうございます！

これからも応援よろしくお願いします！

3話 入学式という試練

四月八日午前九時。

国立カルディナ高等学校入学式開催。

約八百人の新入生が、真っ直ぐ伸びる絨毯に沿って入場し、大規模なホールは、在校生と合わせて三千人を超える人間で埋まった。

その中には少年 天戸零もいる。

カルディナ王国において、彼のような黒髪は珍しくない。いや、よく見れば彼ほどの塗り潰したような黒、いわば「漆黒」は稀有であるが、それでも注意して見れば、という程度のものでしかない。にも関わらず、彼が新入生の中で目立っている、もしくは浮いていると感じた人間は少なくなかったであろう。それは、天戸零という人間が持つ類まれな容姿と醸し出す雰囲気、新入生の中で異彩を放っていたからである。

やや緊張したような表情が多い中で、零は憂鬱そうな、疲れた表情をしていた。

ちなみに彼は式の最中、こんなことを考えていた。
入学式とは何のためにあるのか、と。

にゅうがく・しき【入学式】

『入学に際して行われる儀式。主に新入生を歓迎する儀式』

(大陸中央認定東国大辞典コウジーンより)

新入生を歓迎するため。

学校を挙げての祝いの儀式。

零はさまざまな定義を順に頭に思い浮かべ、しかし首を左右に振る結果となった。

零から言わせれば、入学式というのは「祝いの儀式」というより

も試練や罰ゲームの類に近いように感じた。

繊細な頭　　例えるならばガラス細工だろうか　　をした校長の話は長々と聞かされ、頼んでもいないのに「おめでとう御座います」と繰り返され、しかもその間身動きができない。

何が楽しくてこんなことをするのか、と思わざるを得なかった。

周囲を見渡した。皆、若干緊張したような面持で、真剣に話を聞いている。それを見て、ふと「習慣」という単語が浮かんだ。

おそらく零以外に、このような疑問を抱く生徒はいないだろう。彼らからすれば、式を挙げるのは、区切りという意味合いにおいても当然の事だからである。学校というものに通ったことがない零には些か理解し難い事実であるが、楽しいか楽しくないかの問題ではなく、やることが「ルール」なのだ。

一つの結論に辿り着いた零は、直立不動のまま動かない周囲の人間に、まるで他人事のように感心した。

退屈を紛らわすように、今朝の王の言葉を思い出す。

学校には【虹の女神《イリス》】がいるぞ。

(探してみるか……)

零は目を閉じると、三千人以上の生徒がいる大ホールの中から、目的の人物の気配を探り始めた。

あたかも空間に溶け込むように、一体化するように。

身を漂わせ、それでも我を保ったまま意識を肉体から遠ざけると、後方五十三m程の地点に、うまく隠してはいるが、明らかに他と違う魔力の持ち主を発見した。それは、赤色の中に一つだけ青色が混じっているかのようなもので、見つけることは割と容易いものだった。

零は口の端を吊り上げると、密かに魔力を練った。体内にうねる魔力の渦を一本の細い糸に凝縮し、目的の人物へと伸ばしていく。言語として発せられるはずの電気信号を、張り付いた魔力の糸が相手の脳へと直接流し込む。

意思疎通：念話

(もしもし、リリ?)

「うわっ！」

後方から、零のよく知る声がホール中に響いた。

(はぁー 退屈だな)

少女 神無月瑠璃かみなしるりは周りに気づかれないように、小さく溜め息をついた。

長い髪は美しい藍色で彩られ、赤いカチューシャを付けている。瞳の色は髪色よりも薄い水色に輝き、神秘的な雰囲気を漂わせていた。

今日は入学式である。

朝から大ホールへ集められ、頭の薄い校長の話や、聞きたくもないPTA会長の話を聞かされていた。

瑠璃は左手で長い前髪をかき上げると、周囲の人間をチラッと見渡した。どの人間も気だるそうな表情で、中には居眠りをしている人間も居る。

(みんなも昔は、今の新入生みたいにガチガチだったのにね)

小さく苦笑してから、瑠璃は欠伸を噛み殺して壇上へと向き直った。相も変わらず、どこかの会長やら代表者が話を続けている。国立の、しかも最高峰の学校なだけあって、やはり関係者は多く、毎年のことながらも長引きそうだと感じた。

瑠璃は先程から、誰かに見られているような感覚を味わっていた。それはほんの僅かな気配だったが、誰かから探されているような気配だ。

周囲を見渡す。自分を見ている人間は愚か、振り返っている人間すらない。

(やっぱり気のせいかな)

しかしそれ以上に、瑠璃はだるさから来る眠気に対抗するのに精一杯だった。正体不明の人間からの視線を感じたら、普段はもっとピリピリしてしまう筈なのに、今回は何故か、まるで緊張感が働かない。それどころか、安心感さえ感じてしまっていた。

そう、これは自分に馴染みがある人間の視線^{もの}。

悪意はまるでない、愛しささえ感じてしまう視線^{もの}。

徐々に視界がぼやけ、意識が落ちていく。

その時、

(もしもし、リリ?)

突然頭の中で声が響いた。それは瑠璃にとって、完全なる不意打ち。

電撃のように走った驚きは、反射的に彼女に大声を出させた。

「うわっ!」

大声が大ホール中に響く。瑠璃が、しまったと思った時にはもう遅かった。悲しいことに、入学式の最中で瑠璃の声はとてもよく響いてしまっていた。

周りから向けられる不思議そうな視線に、瑠璃は顔がカアアッと赤くなるのを感じた。

「ご、ごめんなさい！ なんでもないです！」

必死に首を振って、どうぞ続けて下さいとアピール。意図を察したのか、教頭はコホンと咳払いをしてから式を再開した。

瑠璃はその様子に、ホツとしたように胸を撫で下ろすと、先程話しかけてきた人物について思考を走らせる。

そもそも 念話 が使える人間事態が、四年制のカルディナ学校の中でも、数えるくらいしかいないのだ。しかしその中で、入学式の最中に話しかけてくる人間に心当たりはなかった。

そこで気づく。さきほど頭の中に響いた台詞の中に、彼女にとって特別な固有名詞が含まれていることに。

リリ？

「リリ」が呼び辛いという理由で、瑠璃を「リリ」と呼ぶ人間を、彼女は一人だけ知っていた。

まさか……と思いつつ、繋がったままの魔力の糸に 念話 を走らせる。

(えつと…… もしもし?)

(ああ、ごめん。驚いた?)

半笑いになっているであろう様を想像させる少年の声。それを聞

いた時、おぼろげな予想は確信に変わった。

(れ、零!?)

(正解)

(えええ! ど、どこ?)

(リリの前にいる新入生の列の中。今日の朝、王に言われてね。一応は『任務』ってことになるのかな)

瑠璃は深呼吸をすると、気持ちを落ち着けた。先程の眠気は、すでにきれいさっぱりなくなっている。

零が新入生の列の中にいる。それはつまり、そういうことだと、瑠璃は答えにもなっていない解答で納得した。

(そっか。私と同じような理由で、か)

(そういうことだ。これからよろしく“先輩”)

(あはは…… 私が先輩か。なんか変)

瑠璃は苦笑を漏らす。普段と立場が逆転したことに、奇妙な違和感を感じていた。

それからの二人の会話は、入学式が終わるまで続いた。ただでさえ「退屈」ということで意見が一致していた上に、話し相手としてもお互いに申し分ない仲であるため、この結果は当然と言えた。瑠璃の話によると、この学校の校長はやはり、いつも話が長いらしい。式が終了し、また後でと伝えると、零は 念話 の糸を切った。ゾロゾロと歩く新入生達に連なり、これから自分が一年間過ごすであろう教室へと向かう。

一方の瑠璃は、急に上機嫌になったことを彼女の友人によって指摘され、丁度良い言い訳を見つけることに苦労した。

学校生活の幕が上がる。

3話 入学式という試練（後書き）

【虹の女神《イリス》】さん登場です〜

2011/09/06 改訂

4話 Eクラス(前書き)

お、お気に入りが9件・・・

ありがとうございます！！

4話 Eクラス

長い廊下を歩くと、零のクラスに着いた。

1 - E。

大きく表示してあるプレートを見ると、零達はゾロゾロと教室の中に入っていた。

ひとつの学年に八百人もの生徒が居るこの学校は、ひとクラス八十人で、A〜Jの十クラスに分かれていた。クラス分けは入学試験の出来や、入学書類のデータ（魔力量や過去の経歴など）を参考に、評価が高い生徒から順番にA、B、C、……と分けられる。零のクラスはE、つまり丁度真ん中である。書類等は、全てカルディナ王がやってくれたため、何が書いてあるか全く知らなかったが、それでもEクラスは妥当だろう、と零は心の中で思った。

零たち《組織》の人間は、通常制御装置リミッターをつけている。そのため解除しない限り、戦闘能力のほとんど、数字にして約九割が抑えられ、きわめて平均的な身体能力、魔力量になっているはずだった。加えて、過去の経歴（大会記録など）も何も無い。よって、書類のデータだけを見れば、零がEクラスであることは、誰が見ても当然のことだった。

……二学年に上がる時は成績で振り分けられるらしいけど。

現に、二つ上の瑠璃はAクラスのトップである。

また、校内模擬大会では負けなし、つまり国立カルディナ学校最強の名を欲しいままにしていた。

本人曰く、普通にやっていただけだと言うが……

所詮、零たち《組織》の人間と一般の人間の实力差は、力を抑えたくらいで埋まるものではないのである。

……俺も来年になったら上がってたりして。

奢りも自尊もなく、そんなことを考えると、自分の席に着いた。零の席は最も廊下側の後ろから二番目の席だった。

しばらくして教室のドアが開くと、担任と思われるガツチリした体型の男が壇上に立った。

「まずは入学おめでとう。俺はこのEクラス担任の片山徹だ。かたやまとあるこれから一年間よろしく」

そう言っつて小さく礼をする。零はいつもの癖で目に魔力を込めると、筋肉のつき方や体型、纏うオーラから、担任のデータを概算で弾き出した。

魔力量：737

属性：土

メインウェポン メインウエポン アクス

主要武器：斧

……近距離戦闘を主体としながら、魔力量も多く、二通りの戦い方が望めるバランス型。

自分の席から一步も動かずに力を測定した零は、純粋に優秀な教師だと判断した。

魔力量は一般の人間で平均350、カルディナ学校の生徒の平均でさえ500前後であるため、目の前の教師は普通に考えても、かなり多くの魔力を保有していることになる。

この世界には、大きく分けて分けて、理魔法、ことわり光魔法、闇魔法、空間魔法の四つがある。理魔法はさらに五つの属性、火、雷、氷、風、土に細かく枝分かれする。

基本、人々はこの五つの属性の中から、自分に適した属性を選び、専門属性とする。正確に言うと、一つしか選べない。

魔法の属性は、そのほとんどを生まれ持った才能に依存している。火属性が適する人間もいれば、風属性に長けた者もあり、原因は未だはっきりとは解明されていないが、血筋にも依存すると言われている。中には、稀に二つの属性を持つ人物もいる。しかし、そういった人間はごく稀であり、大抵は天才と呼ばれて国から重宝される。そんな中、全大陸中で、五つ全ての属性を極めた人間が二人だけ存在する。

【万能者《オールマイティ》】と【虹の女神《イリス》】だ。そんなわけで、二人は大陸全土の民の憧れの存在であり、また《組織》に所属することは、最も名誉なことと言われている。

ちなみに、光、闇、空間の属性を持つ人間は、理属性に比べて圧倒的に数が少ない。特に空間属性の人間は、大陸中を探しても二桁いくかいかないかである。

武器の方は主に剣、槍、斧、弓、銃の五つに分類され、そこから細かく派生する。

剣の派生形として大剣、刀など。槍の派生形として薙刀 といった具合だ。

魔法と同様に、普通の人はこれらの中から一つの武器を選び、主要武器とする。

武器は魔法と違い、生まれついで属性は存在しない。そのため複数の武器を「使う」だけなら誰でもできるのだが、ほとんどの人間は一つに絞って鍛え、また、学校もそう指導するように定められている。

これは、二つの未熟な武器を使うよりも、一つの極めた武器を使う方が、実践では圧倒的に役に立つからだ。それに、武器によって使用する筋肉の部位が異なるため、必ずその人との相性がある。

相性が存在しないのは【勇者の証（デュランダル）】くらいだろう。【万能者《オールマイティ》】の名を冠する零も、全ての武器を扱うことはできるが主要武器メインウェポンくらいは存在する。

それを使うかどうかは別問題であるが。

「今日はこれから一人ずつ自己紹介してもらおう。じゃあ廊下側から」

片山先生がそう言うと、前から順番に自己紹介が進んでいった。零の席は廊下側の後ろから二番目だったため、順番はすぐに回ってきた。

「天戸零です。属性も主要武器もまだ決まメイソウエホンっていません。好きなものはコーヒーです。よろしくお願いします」

着席すると、少し教室がざわざわしている。周りの女子がチラッとこちらを見ては目を背ける、という動作を繰り返していた。

(……流石に属性も武器も両方未定つてのはマズかったか)

そんなことを思いながら、自分が使用する武器と、選択する魔法をなにしようか考える。

学校に通うことになった以上、零も何か一つ選ばなければならなかった。

「よし。全員終わったところで、明日の予定を話すぞ。明日は春季休暇明け試験の後、身体検査だ。持ち物は教材が全部入りそんな袋を、各自持って来い。合格に浮かれて休命中、遊んでた奴はいないだろうな？ 明日のテスト、頑張れよ？」

全員の自己紹介が終わると、片山先生はニヤニヤしながら、突然そんなことを言い出した。

聞き覚えのない単語に、思わずポカンとしてしまう。

当然テストの事など、零は知らない。

驚いて周りを見渡すと、「わかってますよ」という自信満々顔の人間と、「そうだった」という青ざめた顔の人間にきれいに分かれていた。さすがEクラスと言ったところか。しかし、零の反応はそのどちらでもない「何それ？」だった。

「お？ どうした天戸、驚いたような顔して？」

零の反応があまりにも特徴的だったためか。

片山先生がニヤニヤした顔を零に向ける。もう零の名前を覚えたようだ。

「……先生、それは全員強制ですか？」

「当たり前だ。入学書類に書いてあっただろう？」

そんなことを零が知るはずもない。

書類など一度も見えていないし、そもそもあることすら知らされていない。

「天戸、お前……浮かれてたな？」

クラス全員の視線が零に突き刺さる。

完璧な誤解を前に、しかし零はそれを解く材料を持ち合わせていなかった。

別に浮かれてたわけではない。そもそも話、零に春季休暇などないのである。

小学校、中学校と共に通っていない零にとって、学力試験は未知数だ。

零は頭を抱えると小さく呻き声を漏らした。

(リリから教科書でも……貸して貰うか)

明日が憂鬱だった。

4話 Eクラス（後書き）

ようやく世界観の説明が終わりました。

零は全ての属性、武器が使えます。

5話 思わぬ刺客（前書き）

評価して下さい。ありがとうございました。

おかげで筆者は頑張れます！

5話 思わぬ刺客

三年前 大陸北西部

二人の人間が無言で時を紡ぐ。
ひとりは二十五歳前後の青年、もうひとりはまだ幼い少年。

二人の存在は異質だった。基本的に国外は人外の生物の住処であり、二国間の移動は特殊な魔法障壁を施した「モネット」と呼ばれる乗り物で、専用のルートを通じて行われる。そのため、生身の人間が国外にいることはまずない。例えいたとしても、やがては魔獣の餌にされる。

そんな中、二人は静かにその場に立っていた。

「来たか」

青年の発した声と同時に大地が鳴る。やがて地面が割れ、その割れ目から十数匹の魔獣が出現した。

カニバルプラント
食人植物の群れである。

一匹が3メートル程で、大国の騎士団ひとつに相当するこの魔獣は「階級認定魔獣」と呼ばれ、その中でも上位のCランクに位置づけられていた。

「ピギヤアアアアアア！」

食人植物は甲高い声を上げると、大量の触手のようなものを二人へ伸ばす。

「メンドくせえな」

男がそう呟くと、触手は二人に届く前に燃え上がり、たちまち灰になった。

敵が一瞬怯む。

すると、別の食人植物が黄色い液体を吐く。見るからに毒性が強そうなの液体は、しかし彼らに届く前に蒸発し、気体になった。

「雑魚は任せます」

「おう。お前は？」

「今回の任務を果たしてきます」

「へえ〜 『インペリット』だっけ？ 毒を纏ってるみたいだぜ。

視覚毒って言ったか？」

「知ってます」

「あと二時間くらいで専用のマスクが完成するみたいだが…… それまで待てばいいんじゃないか？」

「時間の無駄でしょう」

少年は事もなげに答える。その様子に、青年はやれやれと肩をすくめた。

「ん、わかった。じゃあ言っ来てい。こっちの雑魚は俺がぶっ殺しておく」

「頼りにしてますよ【業炎《カルマ》】」

「任せろ【万能者《オールマイティ》】」

言葉を交わすと、二人は分かれた。

【業炎《カルマ》】と呼ばれた青年は再び食人植物の群れへと向き直る。

（それにしても、アイツ…… どうやって倒すつもりだ？ まさか

目を閉じたまま戦うつもりか？)

魔力を練りながら、先程分かれた少年のことを考える。しかし、すぐに考えるのをやめた。

(ま、問題ないだろう。あいつが負けるわけねえからな)

【業炎《カルマ》】は練り上げた魔力を一気に放出し、陣を構成する。その陣は食人植物カニバルプラントの群れの真下に出現し、膨大なエネルギーを放った。

理魔法：火：齋ナズナ

壮大な爆音と共に齋の花のような煙が昇る。先程まで食人植物カニバルプラントがいた場所には大きなクレーターができ、魔獣達の残骸が転がっていた。

かつて「インペリット」と呼ばれる魔獣と戦ったことがあった。

この魔獣は体から常に毒ガスを出しており、目を開けていると失明してしまうという、なんとも厄介な相手だった。

まず、目を閉じた状態で20分ほど攻撃を避け続けた。

耳さえ聞こえていれば、攻撃をかわすことは零にとって難しいことではない。

空気の流れなども感じ取って、徹底的に避け続ける。その間に、攻撃傾向、嗜好、パターン、方法、最大瞬間加速度、最高速度、瞬間最大威力と、ありとあらゆるデータを脳に刻み込んだ。

データの収集が終わると同時に構想を練る。

しかし、それは構想というよりも、むしろ予知に近いものだった。どの瞬間、タイミングで、どう動くか、相手が何秒後に何メートル先へ移動し、どの角度から何を行うのか。

また、零が攻撃をどう防ぐと、相手がどういう反応をしてどんな行動に出るのか。

零は、収集したデータを元に膨大な量の演算を行い、誤差100分の1未満でそれらを脳内シミュレートしてみせた。

結果、見事「インペリット」を討伐。

零が攻勢に転じてから僅か七分の出来事だった。

【万能者《オールマイティ》】の脳は大国ひとつに匹敵する。

これはその時【勇者の証《デュランダル》】が残した台詞である。

そんな零にとって……

数学、物理学、錬金学のテストは楽勝だった。

問題を読んだ瞬間、頭の中で計算が終了する。

途中式が全く書かれていない零の計算用紙を見た者の、誰もがこいつはバカだ、と思ったことだろう。実際、数学のテストを開始五分で終わらせ（途中式は書かなくてよい形式だった）、残り時間ずっとボーっとしていた時は、周りから哀れむような視線を受けた。

教室には特殊な結界が施されてあった。おそらく、魔力による不正を防ぐためだろう。零がその気になれば、結界を解除することなど容易だが、その必要もなさそうだ。

次の科目は「大陸史」だった。

これは零も知らないと言えない訳で、若干心配していた科目だったが……

（なんだ、意外と余裕だな）

内心でほくそ笑むと、次々と答えを埋めていった。

零はシャッターアイなので、見たものをそのまま記憶することができる。昨日は帰ってから瑠璃に小、中学の教科書を借り、一通り目を通したので、試験もほとんどの問題を解くことができた。

(なんか、焦る必要はなかったかも……)

そんなことを考え、のんびりしていたそのとき、
ヤツは現れた。

そいつは言語学(200点満点)の後半100点部分に潜んでいた。

問1、下線部Aの時の主人公の心情を100字以内で記しなさい。

(下線部Aとな? どれどれ……)

『今すぐ彼女に会いたかった。会って抱きしめたかった。しかしそれはできない。会ってしまえば、何かが壊れてしまいそうだったから』

………は?

頭が混乱した。

まず問題の意味が理解できないという、致命的な状況に陥った。そもそも、「壊れそう」とは何が壊れそうなのか。訳もわからず、「大切にしている置物を必死で守ろうとする心情」と記入。

字数を確認。確かに百字以内である。ルール違反は犯していない。

次の問題に移っても問題は無いだろう。

問2、下線部Bの行動からうかがえる主人公の性格は次のa～dの内どれか。ひとつ選びなさい。

「君とはもう一緒にいられない」

彼はそう言うと、彼女の手を無理矢理振り解いた。

a、親に言われた事を、大人になっても守ろうとする義務感の強い性格。

b、他人を傷つけることを恐れ、自ら拒絶する臆病な性格。

c、他人の幸せのために、自分の感情を押し殺し、自らが犠牲になるうとする思いやりのある性格。

d、自分の都合で、周りの人間を振り回すことにためらいのない、自分勝手な性格。

……難問だった。(注 正答率97%)

分からないなりに理論を構築しようと試みる。

まずaは違うだろう。この小説の主人公は親なんざ道端の石ころぐらいにしか考えていない。故にボツ。続いてcも違うだろう。他人思いとは思えない。さつきもガラスの置物の心配をしていたはずである。(注 してません)

答えはbかdだ。

第六感がdと告げたため、おとなしく指示に従った。

言語学のテストが終わると、教室中で、特に女子が盛り上がった何か話していた。さすがは女性か。社交的な人間が多く、仲良くなるのも早い。

「今の小説すごい面白かったよね！」

零は額を全力で机にぶつけた。

教室が騒がしかったため、その音が響かなかったのは不幸中の幸いか。

「うん。私も、今日のテストで今の小説だけはできた」

……何故だ？

疑問が零の心を支配する。

言わずもがな。零にはおおよそ自信と呼べるものがない。

会話に耳を傾けると、小さく肩を落とした。

身体測定は特に変わった事もなく終わった。

零は自分のデータが書かれた用紙を眺める。

身長：171cm

体重：55kg

魔力量：536

属性：未定

メインウェポン

主要武器：未定

至って普通だ。自信を持ってそう言える、二項目が未定なのは珍しいが、それでも一年のこの時期に全くないわけではない。魔力量もいたって普通だ。にも関わらず、周囲からは物珍しげな視線を多く浴びた。

(なんで注目されてんのかな……?)

零は疑問を浮かべると、かつてリリに、自覚がどつこのどつこの言われたことがあるのを思い出した。

自分で気づいていないだけで、目立つことをやっているのかもしれない。

(……気を付けよう)

零は教室へと足を進めた。

5話 思わぬ刺客（後書き）

次回、新キャラが数人登場する予定です。

6話 栄光に赤を添えて（前書き）

主人公に何の武器を選択させるか決まりません・・・

属性は決まってるのですが・・・

6話 栄光に赤を添えて

朝から気分は最悪だった。

なんとなく予感があったが、まさかこんなに早いとは。採点者の方々お疲様でした、と行ってあげたい。

黒板には「赤点補習者」と書かれた紙が貼ってあった。

嫌な予感を覚えつつ、その紙を見ると、そこには一人の生徒の名前。

322E 天戸零 (言語学：小説)

(はあ) やっぱり)

零は大きな溜息をつくとき、自分の席へ向かった。ふと気になったことがあって、後ろの女子生徒に声をかける。

「ねえ、ちよつといい?」

「わっ! は、はい、なんでしょう!」

なにやらテンパリまくっている少女に苦笑しながら、出来るだけ優しい口調で尋ねる。

「赤点つて…… 何点から?」

「えつと…… 赤点ですか? たぶん20点以下からだ……」

「……………うん、ありがとう」

要するに、零は二十点以下だったということだ。

零が頭を抱えていると、教室はいつの間にか人が多くなっていた。

皆、教室に入るとまず黒板を見、次に零を見た。
非常に恥ずかしい。

このクラスで赤点は零ひとりだから余計にだ。

「よし、全員席につけ」

一言そう言うと、片山先生が入って来た。

先程まで喋ってた面々が弾かれたように前を向く。

「まず今日の予…… お っと、大事なことを忘れていた。
おい天戸」

呆れたような視線を零に向ける。

(う…… やっぱりきたか)

零は覚悟を決めて返答する。

予想は出来ていたことなので、別段驚きはしない。

ただ、外れて欲しい予想だっただけに、良い気持ちはしない。
…当然だが。

「なんで御座いましょうか、片山大先生様」

零の返答に、クラスの何名かが噴き出す。

「お前…… 赤点だつてな」
「そつみたいですね」

あくまで淡々と、主導権を握られないよう話を進める。

「自分の小説の点数知ってるか？」

「知りません」

「0点だ」

「……………」

二十点どころか零点だった。そいつは間違いなく赤点である。零に反論及び抗議の権利はない。教室からの含み笑いは敢えて聞かなかったことにした。

「天戸零が零点って狙ってんのか！」

その瞬間、教室に笑いに包まれた。

ネタにされた本人としてみれば面白くない。何故ならば、零は決して狙ったわけではなかったからだ。そこだけははっきりさせておきたかった。

「先生、俺は極めて真面目に解きました！」

言ってしまったから「ん？もしかしなくても、それはもつとダメなのでは？」と思ったがもう遅かった。なにもかも。

片山先生の表情が、呆れたものから哀れんだものへと変化したのは、時間で表すと一瞬にも満たない。

「そうか…… 天戸、強く生きる」

そう言うと零から目を逸らし、今日の予定を話し出した。

釈然としないながらも、事実なのだから仕方がないと割り切り、周りの視線を流す。

「それと、昼に食堂で十位までの成績優秀者の名前が貼り出される

から、各自見ておけ。互いに切磋琢磨して伸ばして行って欲しい」

(食堂……か)

ぼんやり考える。

零は昼は何も食べない。朝もコーヒーだけで済ませることが多い。夜は何かしら口に入れるが、栄養というものを一切考慮しない食事だった。

別に料理が出来ないわけではない。はっきり言って、零の料理の腕は相当なものだ。それは零が、一度見ただけでその料理の作り方を完全に記憶できることも影響している。しかし、零は自分のために料理を作らない。「食べる」という動作に興味がないからだ。

生きるために食べるなら、俺は何も食べないだろう。

そんなことを思う。

実際、零が食事をするのは自分の細胞と血が暴走するのを防ぐためだった。そんなDNAの「鎖」がなかったら、零は一生食事をしなかったのではないだろうかと考えたこともある。

零は自分の生きる理由がわからなかった。

昼になると、教室の中は人が少なくなっていた。残っている人は弁当派なのだろう。となると、ほとんどの人間が食堂派ということになる。

(さて、この昼の暇な時間を何して過ごそうか)

リリの所へでも行くこうかと考えていたその時、突然Eクラスの教室のドアが開いた。

「レイ！ いる！？」

そうやって飛び込んで来たのは、零と同じ1学年の赤のラインの制服を着た少女と、2学年の緑のラインが入った制服を着た少女の二人組だった。

零はその二人を知っていた。

「いた！ 芽衣ちゃん、いたよ！」

「あ！ ホントだ！！」

二人は騒がしく零の所まで走り、その中の一人は零の肩（ただし首にかなり迫った位置の肩である）を掴んで前後に揺すった。

「ちょっと、どういうこと！ この学校に入学したなら、何でそのことを言わないのよ！ 久しぶりなんだから、こっちに帰ってきたなら、まず私達の所に来るのが常識でしょう！？」

「……………わかったわかった。わかったから……………お、落ちt g t r m」

見事に首の動脈を圧迫した両手は、はっきりと言葉を発することを許さない。

零は言葉にならない悲鳴を上げると、少女
月下芽衣しづもとめいの手を剥がした。

「零君、久しぶりだね。四年ぶりかな？」

のんびりした声に顔をあげる。

こちらの少女は月下結衣^{つきもとゆうい}。名字が同じであることからわかるように、芽衣の姉である。

妹と違って天然な結衣に、ホツとしたように顔を向けた。

「ああ、もう四年か。二人とも大きく……ってそりやそうか」

我ながらおかしなことを言っていると途中で気づき、言葉を切る。昔はどうだっただろうか。どんな顔で、どんなことを喋っていただろうか。

いざ目の前にすると、沢山の言いたいことが溢れてうまく言葉を紡げなかった。そしてそれは、芽衣と結衣も同じなようだった。

「……師匠は元気？」

やっと思いついた話題がそれである。

本人を前にして、その場にはいない人間のことを聞くのは、久しぶりに会った人間として些か無礼かとも思ったが、彼女たちはそんな些細なことを気にするような人間ではないし、何よりずっと気にしていたことでもある。そして案の定、まるで気にした様子もなく、あっさり答えてくれた。

「うん。毎朝起きて、まず最初に零君の刀の手入れしてるよ」

結衣の言葉に、相変わらずだな、と苦笑する。

師匠とは第十六代目【雷切】月下重夫^{つきもとしげお}のことである。零は十歳の時、国から月下家に預けられ、二年間をそこで過ごした。当時、人を恐れ、近づく者を本能のまま殺そうとする凶暴さを持った零を引き取り、刀の使い方、命の重み、世界の常識を教えた重夫に、零は尊敬と感謝の念を抱いていた。今でも彼には頭が上がらない。彼女達はその重夫の孫だ。

零の刀とは、刀匠でもある重夫が打った刀で、月下家の最高傑作と謳われる銘刀、鳴神【雷切】のことである。零は月下家を出る時、その刀を授かった。しかし、余程のことがない限り、もう刀は握らないと決めていたので、その刀は月下家で預かってもらっていた。御しきれない力は使用者自身も傷つける。零はそのことをよくわかっていた。

最高の刀は最高の使用者に使って貰いたい。

重夫の言葉を思い出す。それは刀匠としての言葉なのだろう。それでも 使われない刀に価値はない、と零は思う。だからこそ、重夫が毎朝、零の刀を磨いている姿を想像して、ちよつとした罪悪感に包まれた。

「それはそうと、今までどうしてたのよ？ っっていうか、どうしてレイがEクラスなの？ 私も姉さんもAクラスなのに…… 昔からレイは……」

そこまで言った芽衣の口を手で塞ぎ、口元を芽衣の耳に近づけた。

「芽衣、出来れば俺のことはこの学校内で話さないで欲しい。特に昔のこととか、あまり知られたくないから」

「……ちよつと待って」

「友達とかに聞かれても、ただの幼馴染で通して欲しいんだ」

「わわわわわわわわわわわわ！」

「……………聞いている？」

変な叫び声を上げる芽衣を、訝しむように見つめた。よく見ると耳まで赤く染まっている。

「……何 やってるの？」

突然廊下から響いた声の主は、神無月瑠璃だった。

「月下さん？ ……ああ、そっか。だから零と知り合いなのね」

瑠璃が一人で納得したように呟いていると、結衣が瑠璃へと話しかけた。

「こんにちは、神無月先輩。どうされました？」

「私は零に、一位おめでとう って言いにきたのよ」

「は？ 一位？」

零が呟くと、月下姉妹は「あっ！」「っと言って、思い出したように話し出した。

「そつよ！ そもそもそのために来たんだっただ！ レイ、アンター位よ！ ……赤点だけど」

「そつそつ、三科目満点なんてスゴイよ零君！ ……赤点だけど」

聞くと、零は二位の人間（ちなみに芽衣だが）に大差をつけて一位だったようだ。

平均点と零の得点は、

言語学	0 9 3 / 2 0 0	平均点：1 1 7 . 3
数字学	2 0 0 / 2 0 0	平均点：1 0 6 . 9
物理学	2 0 0 / 2 0 0	平均点：0 9 9 . 7
錬金学	2 0 0 / 2 0 0	平均点：1 2 1 . 1
大陸史	1 8 3 / 2 0 0	平均点：1 3 9 . 2

となつてゐる。まさか一位だとは思わなかつたので、素直に喜ぶ。……赤点だがそこには目を瞑ることとする。ちなみに、二年生のトップは結衣で、三年生のトップは瑠璃らしい。さすがである。

「そういえば、神無月先輩は零君と仲が良いんですか？」
「うん、ス・ゴ・ク いいよ。まあ、“相棒”ってトコかな」

……心なしか空気が冷たいように感じた。
リリも結衣も、基本的には誰にでも優しく接する人間である。それなのに、今の二人は様子がおかしい。
一体どうしたと言うのだろうか。
そして何故「スゴク」を強調したのか。

月下姉妹は、零が《組織》の人間であることを知らない。
一緒に暮らしてはいたが、零は制御装置（リミッター）をつけていたし、本当のことを知っているのは重夫だけだった。

「ふうん、そうなんですか。零君がいつもお世話になってます」
「……まるで零の保護者みたいね」
「ええ、似たようなものです」

「……」
「……」

非常に怖かった。

大陸最強の人間を震え上がらせるとは、常人には不可能の業である。
ろつ。

結衣と瑠璃は笑っていたが、それが余計に怖かった。

冷や汗を掻きながらその様子を見つめていると、不意に横から声がかかる。

「レイ、相変わらずお昼は食べないの？」

「……まあ、ね」

「そうなんだ……」

短い沈黙が流れる。

「ちゃんと食べないと駄目よ」

「……」

「いつでも」

「ん？」

「いつでも帰ってきていいのよ？」

零を心配そうに見つめる。その目を見ながら、懐かしいな と思っただ。

昔、零が《組織》の任務で出かける時、玄関で見送るのと同じ目だ。

不安

当時、何をしに行くかも解らない零を見送るのは不安だったのだろう。

零はその目を見ながら、

「ありがとう」

そう言って、笑った。

零は自覚していなかったが、それはこの世のどんなものよりも……寂しい笑顔だった。

7話 孤独を共有する者 前編（前書き）

PV6500 ユニーク1000突破！

大変ありがとうございます。

まだほとんどお話が進んでませんが、飽きずに読んで頂けたら幸いです。

7話 孤独を共有する者 前編

昼は食堂で過ごすのが日課になっていた。

四限目が終わると、必ず月下姉妹がEクラスにやってくる。零も昼は予定はなく、むしろ暇なので断る理由もないまま、彼女達についていった。

相変わらずコーヒーだけだが。

「それで？」

「……ん？」

「武器は何にするか決めたの？」

零の主要武器は未だ未定のままだった。

属性は‘氷’に決めた。理由は瑠璃が‘火’と‘土’を選択していると知ったからだ。この学校は国内のエリート校だけあって、二つの属性を持つ生徒は特別珍しいわけではない。そのため、瑠璃は二つ選択した。さすがに三つは大陸中でも例がないため、断念したようだが。

‘氷’は‘火’と対になる属性で、‘土’とも相性が悪いわけではない。どうせ学内模擬大会では戦うことになるのだから、少しでも戦いやすい属性を選ぼうと思ったのだ。ちなみに芽衣も結衣も属性は‘雷’である。【雷切】一門の人間は例外なく皆‘雷’の性質を帯びるらしい。

「いや、まだ決まってるない」

「どうすんのよ！？ もうすぐ模擬大会よ？」

「……やっぱり刀は選ばないの？」

結衣が少し寂しそうに聞く。それに苦笑しながら頷いた。

二人は零がどんな武器でも使えるのを知っている。刀以外の武器の基礎をつくったのも月下家だったし、よく手合わせもしていた（もちろん9割抑えた状態で）からだ。当時は零の習熟速度の異常さに疑問を抱かなかつたらしい。気づいたのは後になってからだとか。

「二人も知ってるように、俺は普通頭をフル活動させて戦う」

二人は頷く。昔から零は頭脳で戦闘するタイプだった。

「でも、刀を持った時は違う。むしろ何も考えない」

「何も考えない？」

「うん。ただ体の動くままに、本能のままに戦う。頭で考えること全てを感覚が伝える。多分あの状態なら寝ながらも戦える」

「……相変わらず規格外ね」

「でも、これは怖いことだ。何故って、手加減が出来ない。気付いたら相手を殺してましたってことにもなりかねないから。だから、刀を使うのは少し恐ろしい」

かつて自分の力に飲み込まれそうになったことを思い出しながら、苦々しげに語る。

重い雰囲気振り払おうと思ったのだろうか。

その様子を見た結衣が、明るい声で言った。

「でも、零君ならどんな武器でも大丈夫だよ。実際、私達一度も勝ったことないもん」

「……それもそうね」

「はは」

小さく苦笑を漏らす。

だから何の武器にしようか悩んでいるのもあるのだが…

そんなことを思うと、青い髪の少女が人ごみを掻き分けて近付いてきた。

神無月瑠璃だ。

彼女は、零が食堂に来るようになってからは必ず一緒に昼食をとるようになっていた。以前瑠璃は、お昼の時間は必ず一人で過ごしていたらしい。零と一緒にいるのを見て、周りの人間（男子生徒限定）が悔しそうな視線を向けていた。どうやら瑠璃は全男子生徒の憧れの的のようだ。

「相変わらず人気だな」

「やほー 芽衣さんに結衣さんもこんにちは。人気？ うーん、やっぱり大会で全優勝つてのが関係してるのかな？」

「おそらくそうですね。でも、今年はどうなるかわかりませんよ？ 零君は強いですから」

「うん、知ってる。“相棒”だから でも、私に簡単に勝てると思わないでね」

「はいはい わかってるよ」

正直、瑠璃に勝つのは大変だろう。もともと魔力量は瑠璃の方が上だから、残量に注意しなければならない。

負けるとは思わないが、簡単に勝てる相手とも思えなかった。

しばらくするとチャイムが鳴り、零たちは階段で分かれた。

基本的に真面目ではない零はギリギリまで廊下で時間を潰す。

三年の廊下を散歩していたら、突然声をかけられた。

「おい、その1年」

「……はい？」

見ると、3学年の男子生徒だった。その顔には見覚えがない。胸には「A」のバッヂをつけており、プライドの高そうな顔をしていた。

「お前、天戸零だよな」

「そうですね、何か御用ですか？」

男は零の態度に一瞬ヒクツと顔を引きつらし、威圧するような態度をとった。

「……あまり調子に乗るなよ、たかがEクラスの一年が」

「……はい？」

「一位だったくらいで調子に乗るなって言ってるんだよ！」

「いえ、別に調子に乗ってなんかいませんよ」

「お前がさつき話してた人間は誰だか知ってるのか！」

そこまで聞いて、この男がなぜ怒っているのか理解した。さつき零と話していた人間というのはおそらく、神無月瑠璃のことだろう。学校中の憧れである瑠璃と入学したばかりのEクラスの一年が親しく話しているのが気に入らないのだ。しかも、この男は零が一位だったから、瑠璃と親しくなったと思っている。

検討違いもいいところだ。

「瑠璃さんに気安く近づくな。彼女はお前のようなザコと違って天才なんだ。お前と話をしてもいいような存在じゃない」

「はあ……」

その返答に我慢の限界が来たのか、男はいきなり零の胸ぐらを掴んできた。零はそれに抵抗せず、両手をあげる。言い返す価値もないと判断したのだ。

「この…… 赤点の劣等生が」

低い声で脅す。顔は紅潮しており、今にも殴りかかってきそうだった。

その時、

「何をしている」

階段の方から声がかかった。

男はその声の主を見ると、零の制服から手を離す。

「弱いものいじめか？ お前は生徒を引っ張っていく立場だろう」

「……すみません」

男はそう言うと、不機嫌そうな顔をしたまま、自分の教室へ戻っていった。

あの様子では、反省などしていないだろう。零には極めてどうでもいいことであるが。

「大丈夫か？」

声の主は真面目そうな顔で眼鏡を掛けており、最上学年である黒のラインが入った制服を着ていた。その胸には、'A'と書かれたバッジをつけている。

「ありがとうございます、わざわざ助けて頂いて」

実はあの状況を、零は少し楽しんでいたのだが、そんなことを口にするほど愚かではない。

素直に礼を述べる。

「いや、構わない。君は天戸零君だな？」

「そうですけど、なぜ？」

「俺は宮城進^{みやぎすすむ}。ここの生徒会副会長をしている」

宮城進とは、4学年の2位の欄に名前が載っていた人物だ。それが目の前にいるのだから、零は少し驚いた。

「副会長さんでしたか」

「そうだ。君の噂は聞いているよ。一位で赤点というのは珍しいからな」

「……それはもう勘弁して下さい」

もうすっかり「一位で赤点の人」という認識が広まっていることに、大きな溜息をついた。

あまり好ましい認識のされ方ではない。

「ああ、すまない。でも君も気を付ける。中には君のような生徒を妬む者もいる。この学校の生徒はレベルが高い。Aクラスの間とかなれば、おそらく今の君では相手にならないだろう。怪我をしたくなかったら、さっきのような態度は慎んだ方がいい」

「わかりました。気をつけます」

零は素直に頷いてその場を去った。

もう午後の授業が始まるまで、時間がなかった。

「どうだった 彼は？」

陰から女性の声が響く。

「俺が見た限りだと強そうには見えないな。ただ学があるだけだ」

「分からないわよ。爪を隠しているのかも知れない」

「何故そう思う？」

「進、あなただって覚えてるでしょう？ 『Eクラスで一位』 この響きを」

「……神無月瑠璃か」

「そう。彼女も最初はEクラスだった。普通の生徒かと思ったけれど、蓋を開けてみたらテストでは不動の一位。大会では私や進を倒して見事優勝。今や全生徒の目標よ」

「それはそうだが…… そんなイレギュラーが立て続けに起きるのか？」

「まだ何とも言えない。そうかも知らないし、そうじゃないかも知れない。でも、もうじき判明するわ。校内模擬大会はもうすぐだもの」

そう言つと、優雅に微笑んだ。

夜になると雨が降ってきた。

零は相変わらず眠らない。

特に、雨の晩は決まって嫌な夢を運んでくる。

たまに見る昔の夢。

それは真っ赤な色に彩られている。

零の記憶の中で、最も思い出したくないもののひとつだ。

ふと、玄関に人の気配を感じ、反射的に時計を見た。

0時59分

とても人が訪ねてくるような時間ではない。

どうしようか悩んでいると、チャイムが鳴った。

眠っているとは思わないのかと思いつながら、仕方がないのでドアを開ける。

そこには……

長く、白い髪を腰まで伸ばした少女が、ずぶ濡れで立っていた。

8話 孤独を共有する者 後編

何かをしたいと思ったことがなかった。

昔から誰かに命じられるままに、あるいは本能に従って動いた。それは今も変わらない。

空っぽ

ゼロ

“無”から生まれた「モノ」には何も与えられなかった。

人は何か意味があつて天から命を授かるのよ

ならば……

ならば天から授かった命でない場合は？

人ですらない化物だった場合は？

美しい言葉は時に冷たい刃となる。

奪つために与えられた命に、守ることなどできない

わかっている。

でも、だからこそ

その出会いは特別だった。

雨の音が響く。

全てが闇に包まれる中、少女だけが異彩を放っていた。

「……………君は？」
「……………」

少女は見るからに弱っていた。とりあえず、零は少女を部屋に入れる。

「えーと、どうしようか……」

まず少女の体を温めるのが先決だろう。見ず知らずの人間にそこまでの義理はないが、今にも倒れそうな少女を放っておくわけにはいかない。

零は風呂場に行くと、魔力を練った。急ぎなので、風呂が沸くまでのん気に待ってなどいられない。湯船に氷を張ると、熱で氷を溶かして水にし、温度を40度に調節する。

「まあ、まずは風呂に入って。話はそれからだ」
「……………うん」

少女は素直に従った。その様子に、零は安堵する。
抵抗でもされたらどうしようかと思っただからだ。

しばらくすると、少女が風呂場から出てきた。服は零のジャージを着ている。他にまともな服がないため、洗面所に置いておいたのだ。裸で出てこられても困る。

「いくつか質問していい？」

「……………うん」

「君はどこから来た？」

「……………ルネ」

「どっやって？」

「……歩いて」

ルネはカルディナ王国の東に位置する都市だ。自然が豊かで、第一次産業が栄えている。別にここから遠く離れているというわけではないが、歩いてくるには相当の距離だろう。普通に考えてもまる1日以上かかるはずだ。

「どうしてここに来た？」

「会いたかったから」

「誰に？」

「あなたに」

わけがわからない。

そう思いながらコーヒーを口に含む。

見たこともない少女に、会いたいと思われるようなことをした記憶はなかった。

そこで、零は少女が着ていた服を思い出す。

雨に濡れていてよくわからなかったが……

まさか

弾かれたようにその服を手を取った。

病院で着るような薄手の服

その服の裏側には大きく「1」と書かれていた。

「名前は!？」

「……え？」

「お前は何て呼ばれてた!？」

「……」

「……」

「『番号』」

ポツリと呟かれた言葉に、零は脱力したようにその場に座り込んだ。

怒り 悲しみ 憎悪

あらゆる感情が渦巻く。

実験だ

ニヤついた男達の言葉が脳裏にフラッシュバックした。

胃液が逆流する。それを堪えようと、咽に激痛が走った。

頭がグラグラして正常な思考ができない。

零はそのまま意識を手放した。

暖かった。

この世に作り出されてから初めて感じる温もりだった。

ここはどこだ？

目を開ける。

殺風景な部屋。

いつも通りの自分の部屋だ。

(あれ？ いつの間に寝たんだ？)

そう思って体を起こそうとしたが、身動きがとれない。
そこで異変に気づいた。

「うわっ！」

昨日の少女が上に覆いかぶさっていた。
見事に少女の膝と上半身に挟まれている。おそらく零を膝枕して
いるうちに、自分も寝てしまったのだろう。

「……んん」

零の声で目を覚ましたのか、少女がゆっくりと目を開けた。

「……おはよう」

「……おはよう。まずはどいてくれる？」

「ごめん」

そう言つと、少女は零から体をどけ、ゆっくりと立ち上がった。
零は束縛から解放されると服を正し、少女に向き直った。まだ頭が
うまく回転していない。昨日のことを思い出すと、途切れ途切れ言
葉を紡いだ。

「えっと、つまり君は、そういうことだよね」
「そういうこと」

零は重々しく溜息をつく。

「俺の他にいたってことか…… 知らなかった」
「私は知っていた」

「いつから？」

「最初から。会わせては貰えなかったけれど、私と同じような人間がいることは知らされていた」

少女がはつきりとした口調で言った。

それは昨日のような弱々しい態度と違い、意志を感じさせるものだった。

「一晩寝て、体力が回復したからだろうか。」

「俺は『戦争用人型兵器』の試作品『零号』として試験管の中で生まれた。君は？ 見たところ、俺とは別の目的で作られたように見える」

「……私は『ただの人間』としてつくられた。いかに自分達の手で『普通の人』を作り出せるかってことで」

つまり、マッドサイエンティスト共の自己満足のために作られたってことか。

零の中でどす黒い何かが鎌首をもたげる。

かつて零を作り上げた科学者達は皆殺しにしたが、もうひとグループあるとは思わなかった。

「連中の所から逃げてきたのか？」

「そう」

「どこにいるか分かる？」

零はその連中も皆殺しにするつもりだった。

自分をこの世に生み出したこと

それは零の中で何年も続く恨みだった。

「わかるけど、彼らはもうそこに居ないと思う」

「……何故？」

「私がどこへ向かったか知っているはずだから」

（成程 奴等は、俺が殺しに来ることを恐れてるってことか）

他人の命は平気で犠牲にするくせに、自分達の命は惜しいらしい。彼らのそんな態度に、零は反吐が出そうになった。

「大丈夫、連れ戻させはしない。俺がさせない」

「……いいの？」

「ああ、そつちが嫌じゃなければ」

「ここにいたい」

はつきり述べる少女に、笑みを返した。

「そつだ、名前どうする？ 俺は『番号』なんて絶対に呼ばない」

「……何でもいい」

「いや、何でもいいって言われても。なんか希望が……」

「何でもいい」

零の言葉を遮って強い口調で言う。

「あなたがつけてくれるなら、何でもいい」

そう言う少女に、零は口を噤む。

意外と押しが強い少女の態度に驚いた。

「……とはいっても、ね」

零は目に魔力を込めて少女の能力を測る。

「別に普通……！」

零は自分の目で見た様子に驚愕する。

魔力量：419

属性：治癒

治癒は、零が持っていない唯一の属性だった。いや、正確に言うと「治癒」というのは属性ではない。どちらかというと、特殊能力に分類される。零自身、治癒の力を持つのは一人しか知らない。それほどまでに希少価値が高いのだ。

（ああ、そっか）

零は納得した。

自分はただ『奪う』ためだけに生まれた。
何かを与えることは許されなかった。
それに対して、目の前の少女は『癒す』ために生まれた。
生まれながらにして、与える力をもっていた。

「俺はさ」

「？」

「何もない。興味も関心も意志も何もない」

空っぽ 零 それが自分

でも目の前の少女には……

せめて『明日』があつてほしい
世界に認められない自分と違って、世界から照らされる存在であ
つてほしい

「……『明』」

「……え？」

「^{あかり}明ってどう？ 嫌なら他を考えるが」

「アカリ……」

そういつと、少女はにっこり微笑んだ。

せめて彼女には幸せになつてほしい。

零は生まれて初めて他者の幸福を願つた。

零は自分のような存在が生み出されることを望まなかった。

こんな思いをするのは自分だけでいい。

自分の他に犠牲者は出してはならない。

そう思つて生きてきた。

そのため、少女の存在は、零にしてみれば望まないもの……のは
ずだった。

しかし、

皮肉なことに、零は少女の存在に喜びを感じていた。

「そついでば……」

零が時計を見る。

11時51分

「学校！」

もうとっくに日は昇っていた。今更間に合うはずもない。

（あれ？ つまり、そんな長いこと寝てたってことか？）

意識がない間、妙に寝心地が良かったのを思い出す。
あんな安らかに眠ったのは初めてだった。

「……アカリ」

「ん？」

「もしよかったら、また今度アレ、やってくれる？」

アレの意味がわかったのだろう

明は顔を真っ赤にして頷いた。

8話 孤独を共有する者 後編（後書き）

遅いメインヒロイン登場です！

次の更新は少し遅くなるかも知れません。

見捨てられないかと、内心ビクビクしております・・・

9話 共通点に潜む影（前書き）

【業炎】を【業炎《カルマ》】に訂正しました。

抜けてることに気付かなかった・・・

9話 共通点に潜む影

やわらかい風が髪を揺らした。
木漏れ日が差し込む。

神無月瑠璃は一人、校庭の大木の下で静かな時を過ごしていた。
樹齢千年にも及ぶらしく、古く威厳のある様子が気に入っていた。
零が入学する前はいつもここで昼を食べていたものだ。今では訪れることも少なくなっただが、それでもお気に入りであることに変わりはない。

何より人がいない。

注目されるのを好まない瑠璃にとって、一人になれるこの場所は貴重な安らぎの場であった。校内にいと、どうしても周りの注目を集めてしまう。

目を閉じる。

風、臭い、音、熱。

全身で世界を感じる。

幼い頃はよくこうしていた。

家の庭で、世界を感じていると、必ず父が頭を撫でてくれた。

母は 変わった子ね と笑いながら、よく昔話をしてくれた。

過去に思いを馳せながら、全身の力を抜く。

「なーにしてんの」

突然人の声が響く。

振り向くと、快活そうな顔に赤い髪の毛を後ろに束ねた少女が笑いながら立っていた。

「短いスカートの美少女がこんな所で寝転がってたら、襲って下さ
いって言ってるようなもんだよ?」

「ターナ、今帰るところ?」

「そ。今日は顧問がいらないから早めの終了」

ターナと呼ばれた少女はサバサバした態度で答える。顔にはイタズラっぽい笑みが張り付いていた。

「ルリは? 放課後に残ってるなんて珍しいじゃん」

「ちよつとね、人待ちかな」

「ふうん? それって、最近よく一緒にいるあの一年生君?」

瑠璃の体がピクツと動くのを見て、ターナは確信したようにニンマリて笑った。

「アマト君だっけ? 有名だよな。1位で赤点でEクラス。やたらルリと仲良さそうだけど、どういう関係?」

「……え、えと相棒みたいなの?」

「相棒? それってルリがやってる秘密のバイトとやらの仲間ってこと?」

「ま、まあ そんなと」

どうも歯切れが悪い。瑠璃の顔を見ると、明らかに動揺していた。待っている人が零だと、一発で当てられたことに驚きを隠せないようだ。ターナはその様子を見て、さらに追い打ちをかける。

「……付き合ってるの?」

「え？ えええええ！ ち、違うよっ！！！」
「じゃあ好きなの？」

瑠璃の顔がみるみる赤く染まっていく。普段の学校生活では割とクールな方である彼女の反応としては、非常に珍しいものだった。この反応を見たら、彼女のファンがさらに増えるのではないだろうか、とターナは心の中で思う。

「いやー ルリかわいい！ もう反則だよ」

「……ターナ からかわないで」

「いやいやホントだって。でも彼・えっとアマト君？ たぶん競争率高いと思うよ。前にもクラスの女子が噂してたし」

それを聞いて、瑠璃は何とも言えない心境になった。確かに、零が入学すると知った時から、予想はしていたことだった。本人は全く自覚がないが、彼は一般の男子生徒と比べても、遙かに整った顔立ちをしている。人気が出てしまうのは仕方がない。でも、それは少なくとも校内模擬大会が終わってからだと思っていた。しかし、ターナの話聞く限りではもう既に人気が出始めているらしい。そうなると、これから先どうなってしまうのだろうと心配になってしまう。

「ま、大丈夫だって。さっきのルリのかわいさを見せつけりゃあ、1年のガキなんざイチコロさね！」

「ち、ちよっとターナ！」

「いやいや、だって彼と話してる時だけ別人みたいに明るいじゃん。自分で気付いてる？」

「う……」

瑠璃の顔がさらに赤くなる。そこでもうひと押しとばかりにもう

一言。

「おろ？ 否定しないってことは認めたってことでいいのかな？」

直後、ターナの体が宙を舞った。

何故こんなことになった？

零は自分の行動を振り返る。

ついさつき学校があることを思い出し、サボろうかとも思ったが、さすがに無断欠席はマズイと思ってわざわざやってきたのだ。

なにしろ赤点の補習がある。

人数も全体で四人しかいないので、サボったら確実にバレる。それだけは避けた方が無難だと判断してのことだった。そして真面目に（零補正がかなり掛かっているが）補習を受け、帰ろうと思っていた所だったのだが……

「……で、何でしょうか先生」

現在地、職員室 生徒曰く「化物達の巣窟」

多くの先生方の視線が集まる。

「いや、遅刻した理由くらい聞こうかと思ってな」

片山先生が楽しそうに言う。その目には純粹な興味の色が宿っていた。どうやら叱るために呼んだのではないらしい。

「言わないと駄目ですか？」

「五限目に『おはようございます』って入って来て、理由を話さな

「いつて選択枝はないだろう？」

至極真つ当なことを言われ、口を噤む。どうやら何か言わないといけないようだ。

しかしアカリのことをどう話そうか。

考えていると、名案が浮かんだ。

「先生、この学校にもうひとり生徒を入学させることって出来ますか？ 幸い、まだ学校始まってから2週間ちよつとしか経ってませんし」

零が言い出したことが意外なことだったのだろう。片山先生は少し驚いた表情をした。

「ん？ 転入生ってことか？ 書類と面接と試験が通れば可能だぞ」

その言葉に安堵する。零が学校に行っている間、明を一人にしておくわけにはいかないと思って、どうしようか考えていたのだ。話した所によると、マッドサイエンティスト達の『普通の人を作る』というコンセプトに従い、一般の教養は受けてあって、学力の面は全く問題なさそうだった。むしろかなり賢い。おまけに「治癒」の能力者となれば、Aクラスは間違いないだろう。

「お前が遅刻したのも、そのことが関係してるのか？」

「はい。ちよつと親の面倒なつながりで、俺が面倒を見ることになりましてね」

「天戸、お前……親御さんは？」

「いません」

「……そうか。スマンな」

片山先生が複雑そうな顔をして俯く。どうやら零の両親は死んだと思っっているようだ。零には最初から親が存在しないので、別に死んだわけではないのだが、それを説明するつもりはないので、片山先生の解釈を訂正することもしない。そちらの方が、何かと都合も良い。

「それで、ちょっと遅れました」

「そうか、わかった」

今の時代、【神々の黄昏《ラグナレク》】によって親を亡くした子供は珍しくない。そのため、対応にも慣れているだろう。あまり深く追求してこなかった。今の零にとっては有難いことだ。

その後、書類を貰ってから、巣窟をあとにした。

(こいつが……)

浅沼幸平あさぬまこうへいはたった今出て行った男子生徒について考えた。

すでに授業は始まっているため、Eクラスに行く機会も何度かあったが、注意深く見るのはこれが初めてだった。

赤点で1位。本人はこの認識を嫌がっているそうだが、彼を説明するには最適な表現だ。それほどまでに珍しい。事実、自分が教員になってからも、ここまで学力が偏った生徒は見たことがなかった。

「先生方、今の生徒が天戸零です」

片山徹が大きめの声で説明する。

わざわざ彼を職員室までつれてきたのは遅刻の理由を問うため

はなく、実はこのためだった。

「見たところ普通の生徒ですよ。特別な何かは感じません」

「私もそう思います。浅沼先生はどうですか？」

周りの教師が次々に言葉を発する。その中のひとりが幸平に話を振った。

「私も同意見です。ただ…… 今回の錬金学のテストは、平均点こそ低くはないが、満点はほぼ不可能な内容にしたはず。時間的にもレベル的にも。しかし彼は別に時間が足りなかった様子もなく、マニアックな魔方陣の問題までアツサリと解いていました」

幸平の言葉に、再び沈黙が降りる。

「ふむ、やはり神無月瑠璃のケースに酷似していますね」

眼鏡をかけた男性がその沈黙を破った。ケビン・フロル この学校の教頭である。

ケビンは椅子から立ち上がると言葉を続けた。

「今度の校内模擬大会で彼の成績が優秀だった場合、彼のクラス昇進を行いますよ」

教頭の異例の決断に、職員室にざわめきが起こる。かつて年の最中にクラス昇進が行われたことはない。それ故の反応だった。

「こう立て続けにEクラスから優秀な人材が生まれては、我が校の分析能力の信頼を損ないます。外部からは既に、疑いの声が上がりに始めていますので」

幸平は、それも仕方のないことだろうと思う。

国立カルディナ学校は国を代表する学校だ。その学校が生徒の力量を測り間違えるということはあってはならない。実際、二年前はOBやOGから何件かクレームが来た。今回のケースはその時と似ている。

似ている点といえばもうひとつあった。

神無月瑠璃と天戸零には、過去の経歴がまるでない。

親の名前、生まれた場所、全てが不明だった。調べても見つからない。わかるのは名前と性別と年齢だけ。

まるで誰かが……

そこまで考えて、思考を振り払った。

考えてわかることではない。

そもそもそんなことをする人がいると思えないし、する理由もわからない。

だが……

二人の書類を眺める。他の生徒と違って明らかに空欄が多い書類。

それを見て、何かが背筋を這い上がってくるような感覚を覚えていた。

9話 共通点に潜む影（後書き）

ストーリーがあゝ

進まない

10話 白と黒(前書き)

感想、評価お待ちしております

こんな小説ですが、読んで下さっている方々に感謝!!

10話 白と黒

「それでは行つて来ます」

「行つて来るね、おじいちゃん」

芽衣と結衣は、穏やかに笑う老人　月下重夫に声をかけた。
もう70歳を超えているにも関わらず、その体は衰えた様子もなく、
姿勢はまるで手本のように美しい。

第十六代目【雷切】

その一振りは雷を両断すると謳われた一門の当主。

重夫は、玄関へ向かう愛孫ふたりに向かつて笑みを深くすると、
思い出したように言った。

「そう言えば、早く零を家に連れて来んか」

「「えっ！」」

二人が同時に声を出す。結衣は視線を横にずらし、芽衣は少し顔を赤くした。

「いや、何ていうか…　もう私たち子供じゃないし…」

「は、はい…　ちょっと恥ずかしいような気が…」

その二人の様子に、重夫は呆れたような顔をする。

「何が恥ずかしいだ。一緒に風呂だつて入ったことあるくせに」

「「ぶっ！！！」」

ポツという音と共に顔から湯気が上がった。芽衣にいたっては目を回している。

「おじいいいいいちゃん!!!!!!」

結衣の怒鳴り声に、やれやれと首をすくめた。どうやら愛孫と愛弟子の關係は、昔と何一つ変わっていないらしい。あいつも罪な男だな、と思う。

四年間連絡もなく過ごしてきた。

その間に、孫の二人がもらった恋文の数など数え切れない。

それに、一切応じようとしなかった愛孫を見て、まるで幼い頃の自分を見ているような気がした。

(人生でそんな異性と出会えたことは、果たして幸か不幸か)

久しく会っていない愛弟子の顔を思い出す。

別れる際に、ふたりは言葉を交わさなかった。

頭を下げる零

それを、ただ黙って見つめる重夫

その時間は、永遠に続くかと思えた。

何を考えていたかは覚えていない。もしかしたら、何も考えてなかったのかも知れない。ただ、その時の音、臭い、空気は鮮明に思い出せる。

そういえば……

(あの後は大泣きする二人をなだめるのが大変だったなあ)

真っ赤な顔をした愛孫を見ながら、重夫は懐かしむように微笑んだ。

「お早う、月下さん！」

「ああ、お早う」

挨拶してくるクラスメートに返事をしながら、芽衣は自分の席へ向かった。

天気は晴れ。

いつも通りの気持ちのいい朝である。

「月下さん知ってる？ 今日このクラスに転入生が来るらしいよ？」

「転入生？ しかもこのクラスに？」

転入生というのは、時期を問わず珍しい。しかも、最難関校であるこの学校の、しかもAクラスに入ってくる人間など滅多にいない。教室がいつもより騒がしいのはこのせいか、と思った。

曰く、編入試験のテストでほぼ満点

曰く、面接官が見とれてしまう程の美少女

そして最も驚いたことは……

「治癒う！？」

「そうそう、そうらしいよ。なんか実技の試験で実演して見せたとか。まだ公にはされてないみたいだけど」

それも当たり前だろう。その噂が事実だとしたら、おそらく大陸で二人目の能力者ということになる。

大勢の人間がこの学校に押し寄せてくる可能性があった。

(すごい生徒が入って来るわね……)

芽衣が感心していると、教室のドアが開いて担任
藤本香織ふじもとかおり
が入ってきた。一瞬にしてざわめきが止まる。Aクラスともなると
エリート意識が強い人が多く、教員がいる前では喋らないというのが
暗黙のルールになっていた。

「えー お早うございます。もう知っている人も多いと思いますが、
今日から新たにもう一人、このクラスに入ることになりました。早
速紹介しましょう。天戸さくん、どうぞ」

天戸さん???

全員の顔が硬直する。

知らないわけがない。

その名字は今、最も有名と言っても過言ではないもの。

空気が止まったかと思えるAクラスの教室のドアが静かに開く。
そして、ひとりの少女が入ってきた。

クラスメート全員が息を呑んだ。

透き通るような白く長い髪、スカートから伸びる細く長い足、少
し赤みを帯びた目と白い肌。

芽衣はそれを見て思わず、

(綺麗……)

そう思ってしまった。

無表情でさりりとした態度は、どこか懐かしいような……

懐かしい？

芽衣は沸きあがった感情に疑問を抱く。当然見るのは今が初めてだ。過去に会った記憶もない。それでも、久しいと感じずにはいられなかった。

「天戸明です。よろしくお願いします」

「何と！ 天戸さんのために昨日、私が机を用意しておきました」
そこ、座ってね」

「はい」

未だ息を呑むクラスメート達の視線の中、明は表情を変えずにその席へ向かった。場所は廊下側の一番後ろ。名前が「ア」で始まるため、全員の学籍番号がひとつずつずれることになる。

「皆、仲良くしてあげて下さいね」

担任の声がやたらと大きく聞こえた。

休み時間になると、明の周りには人が集まった。
全員の疑問はひとつ。

天戸零とはどういう関係か？

「血は繋がってないけど、親戚みたいなもの」
「「「血は繋がってないの！？」」「「「「

一際大きな声が響く。

芽衣はその人だかりに加わっていないが、会話は食い入るように聞いていた。なんせ、零と関係ある人物だ。零には身内がいないと思っていたが、話を聞く限りだとやはり実の親戚ではないらしい。

「え、じゃあ一緒に住んでるの？」

「そう」

「……なに

！！！！！」

男子も女子も悔しそうな声を出した。

「くそっ 何でアイツばっか！」

「Eクラスのくせに……」

「うそっ 天戸君……」

クラスメイト達が次々に呟く。

悔しがる男子、嘆く女子。

もちろん芽衣もビツクリだ。そんな話は今までに聞いたことがない。

（もしかしたら、この前遅刻してた時に何かあったのかも……）

芽衣は、零が夜に眠らないことを知っているため、何かがあったと感じていた。

しかし、

（同棲してるのか）

明に対して、どうしても嫉妬心が沸き起こってしまふ。

明は美人だ。誰が見てもそう言うだろう。今も質問に答える様子は、クールビューティーという言葉がぴったり当てはまる。身長も女子にしては高い方だ。

スリーサイズ？

考えるまでもなく負けている。(悔しいので、完敗とは言わない)

芽衣は、零と明が並んでいる様子を想像した。

真っ黒な髪と真っ白な髪が風に揺れて……

(あ、お似合いかも)

芽衣はど　　んと落ち込んだ。

噂が広まるスピードはとんでもなく速いと零は思う。今日のごとは、もう学校中に広まっているらしい。零のプロフィールには、「1位」と「赤点」と「Eクラス」の他に、「遅刻」と「同棲」が加わっていた。改めて噂の恐ろしさを思い知る。

原因は何だったか。

言うまでもない。明が言った言葉だろう。

明の入学は驚くほどスムーズに進んだ。テストではどの科目も高得点を叩き出し、教員達を驚愕させた。面接では質問に対し、的確に答えた。そして何より、教師陣を最も驚かせたのは魔法の性質である。零と出会った当初はまだ覚醒していなかったが、方法を説明するとあっという間に「治癒」の力を発現させた。かつて零がその

方法を試した時、零には何も起きなかった。‘治療’が自分にはない唯一の能力であると悟った瞬間である。それに対して、明は一発で力を開花させた。やはり、自分の目に間違いはなかったと思う。

全て順調だと思っていたが……

「目線が……痛い」

「……ごめん」

所在地：食堂

明が同棲していると認められたため、すっかり注目的になってしまっていた。今も、男子生徒から零に、女子生徒から明に、鋭い視線が突き刺さる。最も、零が感じているのは前者だけだが。

「……まあ 仕方ないことだよ。二人とも外見目立つから」

瑠璃が諦めたような口調で言う。瑠璃には先日、補習が終わるまで待ってもらって事情を話した。零の秘密を知っている彼女ならば、説明し安いし協力も得安いと思ったのだ。男の零では、出来ることに限界がある。主に、制服や私服の見立ては彼女に頼んだ。終止、何故か不機嫌そうだったが、明とは楽しそうに話をしていたので大丈夫だろう。

あとは芽衣と結衣の二人への説明だが……

「零君、この子……えと明ちゃん？ と一緒に暮らすことになったって本当？」

迫るように尋ねてくる結衣を見て、やはりそれほど重要なことなのかと思う。正直、周りの反応などこれっぽちも考えてなかった。

「うん 別に変なことはないよ?」

「まあ、零君（アンタ）はそうだろうけど（でしょうね）……」

……息ピッタリ。

信頼されていると捉えるべきか、馬鹿にされていると捉えるべきか。

「じゃあ、問題ないよね」

「うっ」

頭で理解はしていても、納得できない部分と言うのはやはりあるのだろう。芽衣と結衣は、お互い顔を見合わせると、深い溜息をついた。

「そもそも血は繋がってないのに親戚ってどういうこと?」

「ああ……」

複雑そうな顔で… 例えるならば、ラーメン屋でカップ麺を食べている人を見るような目でこちらを見てきた。二人は零の出生の秘密を知らない。月下家で知っているのは重夫だけだ。

短い沈黙が降りる。

「……二人は俺が最初に月下家にやってきた時のこと覚えてる?」

当時を思い出す。

殺すことしか知らなかった頃。

人と石ころの区別も出来ないほど目が濁っていた頃。

「明はそれに関係する犠牲者と思ってくれていい」

二人の表情が揺れた。

再び沈黙が降りる。

怖かったのだろう。

穴ぼこのような目をした少年と一緒に生活するのは、どうしようもなく恐ろしかったはずだ。

それでも、二人は零を受け入れてくれた。

普通に会話をして、普通に稽古して。

そして今回も……

「私は零君を信じます」

「私も…… レイを信頼してるから」

結衣は静かに、芽衣ははっきりと口を開いた。

やはり二人は何も聞かなかった。零のことも、明のことも、何も聞かなかった。

「いつか話してくれればいいです」

詳しいことを秘密にしたままの零を、二人は受け入れてくれた。

淡白な言葉は、時に全てを包み込む優しさになる

零はその優しさに、笑みを返した。

「零……」

明が寂しそうな顔で零の顔を見る。大変なものを見てしまったよ
うな顔だ。

「ん？ どしたアカリ？」

「……何でもない」

「？」

急いで顔を背ける様子はどこかぎこちない。見ると、明だけでな
く他のみんなも同じような表情をしていた。

「あら？ みんな、どうかした？」

暗い話になってしまったのがいけなかったかと、皆に問いかける。

「いや、なんでもない。それよりもさ！ みんなも早くご飯、食べ
よー！」

わざとらしく元気に言う瑠璃に、零は首を傾げた。

「明ちゃん……」

瑠璃が影から声をかける。それに反応して、顔を向けた。零はそ
れに気づかない。

「今の…… 見たよね」

「……見た」

あんなもの見たのは初めてだった。

笑顔の下に、感情という感情を詰め込んで、破裂しないように必死に耐えてるような……

「あれが“天戸零”だから」

先程の表情を思い出す。

自分と同じ境遇の少年の認識を改めて……

小さく頷いた。

10話 白と黒（後書き）

次回、校内模擬大会編に入ります。

11話 初戦（前書き）

急いで打ったので、読みづらい上に、誤字脱字が多いかも知れませ
ん。

あったら教えてください。

11話 初戦

「あと何だっけ？」

「……醤油」

明の言葉に、ああそうだったと頷いて売り場へ向かった。

商品は原則として奥の方から取る。理由はもちろん賞味期限だ。手前の品と奥の品とでは期限がだいぶ違う。零はそれを確認してから、期限が長いほうの醤油をカゴに入れた。

明が来てから、夜はきちんと料理を作るようになっていた。零ひとりでは作らないが、まさか自分と同じ食生活をさせるわけにはいかない。昔、料理の本に一通り目を通しておいて良かったと思う。

「これで終わ……ん？」

「？」

目的の物を見つけ終わった時、ふとこちらを見ている人物がいることに気がついた。

その人物は活発そうな笑みを浮かべながら二人のところへやってくる。

「アマト君じゃないかー」

「……すみません。どちら様ですか？」

失礼な返答かとも思ったが、本当に見覚えがないので仕方がない。そもそも、零は一度見た人間の顔は滅多なことがない限り忘れないので、目の前の少女とは初対面のはずだった。

「あー 話すのは初めてだよ。あたしはターナ・ニコラエヴナ・カレーニナ。ルリと同じクラスの3年だよー」

(ああ、確か)

かつて、瑠璃に仲が良い友人について尋ねたときに話していた少女のことを思い出した。髪は赤く、瞳は青く色づいている。零のこととはきつと瑠璃から聞いたのだろうか。

しかし…

「カレーニナ先輩は北の出身ですか？」

「あー 親がね。あたしは生まれも育ちもココだよ」

ターナの言葉に、自分の予想は間違っていなかったと確信した。親が北の出身ということは…

「何も聞かないのかい？」

無言になった零を見て、事情を知っていると思ったのか、ターナは零に問いかけた。先程までの元気な表情に少し影が浮かぶ。

その様子を見て即座に、自分が首を突っ込むことではないと判断した。

「聞いて欲しいのなら聞きますよ」

「へえー 何も聞いてこなかったのは君が二人目だよ」

「二人目？」

「ルリも君と同じような返答をしたのさ」

ターナの言葉に、成程と頷いた。たしかにリリなら自分と同様なことを言うだろう。

もしかしたらそれがきつかけで仲良くなったのかも知れない。

「ところで今日は買い物かい？」

「ええ、まあ見ての通りです」

「夫婦仲良くお出かけとは妬けますな」

「……いや、夫婦じゃ　　ってアカリも顔赤くするのやめなさい！」

「／／／／」

一転して最初の様子に戻った赤髪の少女を見て、強い人間だなと思った。

ついに校内模擬大会の日がやってきた。

この大会は一年度に二回行われる。五月の始めと年が明けてからの二月、つまり最初と最後だ。その成績は、1、2、3学年の生徒にとつては来年度のクラスに、4学年の生徒にとつては自分の進路に影響する。そのため、生徒達の気合は半端ではない。なんせ、将来がかかっているのだ。皆、好成績を残そうとやる気まんまんだった。ただ一人を除いて……

「……負けていい？」

「」「駄目に決まってるでしょ！！」「」

零が言った言葉は即座に却下された。

大体、この学校は生徒が多過ぎだと思う。なんせ三千人以上もいるのだ。しかも、その中で順位をつけようと言うのだから、面倒な

ことこの上ない。零はだるそうな顔でトーナメント表を見た。

「だって… 勝ち進めば今日だけで9回も試合が…」

「零、我慢」

明まで零の考えを却下する。どうやら手抜きは許されならしい。

この校内模擬大会は少し変わった制度が設けられていた。まずは学年内で争い、順位を決める。その中で、限られた人数が決勝トーナメントの出場権を得る。ちなみに、出場枠は1学年から一人、2学年から二人、3学年から二人、4学年から三人の計8人である。つまり、零が決勝トーナメントに出るには、1学年の中でトップにならなければいけない。それはつまり、800人の中で一番ということであり……

「うわー メンドクサイ〜」

どうしてもそう思ってしまう。

仕方のないことだと言いつつ、訳したいところだ。

「え〜 今日諸君にとって初めての校内模擬大会だが、是非とも正々堂々、自分の力を出し切って欲しい。対戦相手はくじ引きだ。A、C、E、G、Jクラスの人間が引くことになってるから、早速諸君にも引いて貰う」

そう言つと、片山先生は大きな箱を教卓に置いた。零たちは順番にそれを引いていく。皆、少し緊張した面持ちで並んでいた。やはりこの大会は、これからの生活にも大きく影響するためだろう。零

にはほとんど関係ないことなのでよくわからないが。

「よし、じゃあ開け」

ピラリ

周りから、「あーうー」という声が漏れる。零も続けて自分の引いた紙を開いた。

1 3 2 B

(Bクラスの人間か)

誰だか知らないが、ご愁傷様だと思っ。

おそらく勝つ。いや、この学校の人間なら教師も含めて誰にも負けない。

負ける要素があるとしたら瑠璃だけだろう。

「全員確認したかー？ じゃあ頑張れよ。解散！」

やたら嬉しそうな片山先生を見て、この人の精神年齢はかなり低いのではないかと思った。

『只今より1回戦を開始します。出場者はアリーナへ集まって下さい』

放送を聞いて、零は重い腰を上げた。今まさに……重要な(？)試合が始まるつとしていいる。

「零、頑張つて」

明が小さくこぶしを握る。彼女はついこの前転入してきたばかりなので、今日は出場しない。なんでも、準備が間に合わなかったとか。とはいっても、明の力は戦うためのものではないため、全く必要ない。

「じゃ、行って来るよ」

零はそう告げると、自分の番号が書かれた場所へ向かっていった。

対戦相手はもう来ていた。身長は零より高い。ガッチリした体格に真面目そうな顔をしていた。

いつものように相手の能力値を測る。

魔力量は（今の）零と同じくらいだったが、筋力は若干負けていそう。腕の筋肉のつき方から推測すると、武器は大剣だろう。属性は風だと判断した。

「君が322E？」

「Aクラスにひとり増えたから、もうすぐ323Eだけだね。そっちは132B？」

「そうだ。じゃあ今日はよろしく」

「ん、こちらこそ」

Bクラスの少年は、堂々とした態度だった。おそらく、相手が格下だと思って少し安心しているのだろう。二人はお互いの確認と挨拶を軽く済ませると、指定されたステージの両脇へ移動した。そこには審判と思われる教員がひとり立っている。

確か名前は……

「浅沼先生、こんにちは」

審判のひとりには錬金学の担当である浅沼幸平だった。幸平は零の挨拶に「おう」と一言だけ返すと、専用の防具を手渡した。

「これを着ろ」

「ああ、これが例の魔法結界が施してある防具ですか？ 随分と薄くて軽いですね」

渡されたものは、防具というよりは上着に近かった。しかもかなり薄い。

「問題ない。それを張ったのは俺だ。教員が全力で攻撃しても壊れない」

幸平の言葉を聞いて、防具を注意深く観察する。

なるほど、よく見たら頑丈そうだ。零や瑠璃が全力で破壊しようとしなければ解除されないだろう。注ぎ込まれた魔力量は380くらいか。

分析を終えると、渡された防具を着て武器を選んだ。今回は相手が^{ライジンサーベル}が大剣なので、零は^{ダガーナイフ}小刀を使用する。もちろん本物ではなく、大会用の模擬刀だ。結局最後まで決まらなかったのだ。相手は武器によって変更することに決めたのだ。幸い、1学年の生徒はまだ武器決まっていない人がいるだろうということで、特別に許された。

準備が済み、ステージ中央へ向かう。

お互いに礼をして……

「試合開始！」

浅沼先生の合図と共に、相手との距離をあけた。それに対して、相手の少年は大剣を抜いて距離をつめる。

ダッシュのスピードはなかなかのものだ。すぐに零との距離を詰め、そのまま大剣を横に振るった。それを身をかがめてかわすと再び距離をとる。

零が思った通り、完璧な近距離型の人間だった。ときどき剣に風を纏わせて剣速を上げているが、攻撃として魔法を使うことは一切していない。その動きを見て、無駄が多いと感じた。

近距離型の人間は基本的に魔力の残量を考える心配がなく、試合が長引けば有利になることが多い。しかし、その代わりに自分の体力はしっかり把握しておかなければならない。目の前の少年は動きこそ速いが、ワンパターンな上に最初から全力攻撃である。相手が弱ければそれで通用するが、熟練者が相手では自滅だ。現に、少年はもう息があがってきている。

5回程繰り返すと、少年のデータも取れてきた。注意することは、この少年は腕を振るときに関節が3ミリ伸びることだ。その速さから攻撃が届くまでの時間を計算し、今までの行動から一転して、自分から距離を詰めた。少年は零の行動が変化したことで少し動揺しながらも、チャンスとばかりに渾身の一撃を見舞う。

その一振りは……

零の前髪の数本を揺らしたただけだった。

まさか当たらないとは思わなかったのか、驚愕の表情を見せる。

文字通り隙だらけ。小さな子供でも見逃さないようなその大きな隙を、零が見逃すわけもない。

ゆっくりとその首に、小刀を軽く押し当てた。

「し、勝負あり！」

浅沼幸平の言葉が響く。

その声を聞き、零は大きく息を吐いて両手を下ろした。

11話 初戦（後書き）

ちよつとスランプかも・・・

文が汚い気がします。

ちよつと時間があまりないので、次の投稿は少し遅れるかもしれませんが、

12話 それぞれの思い(前書き)

書きあがったので投稿します。

少し短めですが、御了承ください。

12話 それぞれの思い

(ふん、こんなものか)

浅沼幸平は目の前で行われている戦いを見て鼻を鳴らした。

わざわざこの試合の審判を志願したというのに、とんだ見当違いだったようだ。

天戸零は押されている。それも同じ学年のBクラスの生徒に。今も防戦一方で攻撃することも出来なさそうだ。この分ではAクラス昇進の話もなかったことになるだろう。

(杞憂に終わったな)

幸平は手元の資料を見る。

二年前、神無月瑠璃の試合を見た時はその力は圧倒的だった。相手が何をしてくいても全く動じず、全てを飲み込むような気配はまるで底なし沼を連想させた。

対して、天戸零にはそれが無い。どこまでも一般的で普通だった。

(ん?)

そこで異変に気づいた。

天戸零は未だ抜刀すらしていない。それに対して相手の男子生徒は既に息が切れている。

(まさかわざと……)

そう考えてから、首を振った。

有り得ない。

あの猛攻の最中に手を抜く余裕など、1年生の段階では不可能である。

あのBクラスの人間の剣速は、1学年の中ではかなり速い方だ。

現に、天戸零も全て紙一重の差でかわしている。それだけ余裕がないということだ。

しかし……

(ギリギリとは言え、全てかわしているのも事実か)

逆に考えれば、全て完全に見切っていると言つことも出来る。

幸平が考えにふけっていると突然、天戸零が前に走り出した。

端から見れば自滅行為だ。

それもそうだろう。

今まで後ろに下がって紙一重だったのに、前に出たら当たるに決まっている。

だが、幸平は見てしまった。

(なんだ、あの目は!?)

わけもなくゾツとした。

全てを見透かすような目。

それは二年前の少女の目とあまりにも似ていた。

気づいたら天戸零の小刀は、相手の男子生徒の首筋に当てられていた。

それを見て慌てて声を出す。

「し、勝負あり!」

幸平は激しい動悸を抑えるのに精一杯だった。

「ありがとうございます」

零はBクラスの男子生徒に挨拶をすると、ステージの脇へ……

「ち、ちょっと待ってくれ！」

行こうとしたが止められた。

少し動転しているのか、少年は上擦った声で尋ねる。

「君は… 君の名前を覚えてくれないか？」

「へ？ …… まあいいけど。天戸零」

「あまと…… 君がか！？」

少年が何かに気づいたように叫ぶ。おそらく名前だけしか知らなかったのだろう。悔しそうな顔をしてみせた。

「くそー 相手が悪かったか。最初はいい感じだとおもったんだけどなー」

「最初から飛ばし過ぎじゃない？ まずは威力が小さくても確実に隙をつくる攻撃をしないと」

零の言葉に、そうかー と肩を落とす。

「まあ、いいや。全力でやれたし！ 俺は照也てら テルって呼ばれる。

今日は楽しかったよ。また今度相手してくれ」

「ああ、いいよ。よろしくテル」

零は照也と握手をすると、今度こそステージを後にした。

零は人と戦う時に、自分で定めているルールがある。それは相手の力を見定めて、その少し上の力で勝つことだ。

人間は強大な力を前にすると潰れてしまう。

零の力は若い芽を摘んでしまう可能性があった。

それ故、相手が十ならば十一で、百ならば百一の力で勝利するよう心がけている。今の試合も、零に剣が届くまであと少しだったと思わせることが出来たはずだ。

相手に全力を出させる。

それはとても重要なことだった。

「お帰り」

「あ、零。お疲れ」

明は瑠璃と一緒に零を待っていた。「お疲れ」という言葉に苦笑を漏らしながら（別に疲れてないからである）二人に近づいて、そこで異変に気づく。

「そついやりり、あなた試合は？」

「え？ ないよ」

「はああ？ なんでだ？」

瑠璃の答えに驚愕する。

明に試合がないことは知っているが、瑠璃に試合がないとはどういふことか。

「知らないの？ 前回優勝者は予選免除だよ？」

当然、そんな話は聞いたことがなかった。

ということとは……

「リリ、お前は今日ずっと暇なのか？」

「そう。暇で暇で困っちゃう」

「……クソ、俺はこんなに面倒な思いをしてるのに」

「頑張ってる」

瑠璃の態度に、拳を握り締めた。

大会は順調に進んだ。

零は当然のように勝ち進み、残りあと1試合になっていた。トーナメント表には3人の名前が残っている。

天戸零

月下芽衣

ふるいけじゅん
古池淳

つまり、下の二人のどちらかが零の対戦相手ということになる。零個人としては、当然芽衣と戦いたいのだが……

「“古池”か……」

その名前は東国に限れば“月下”と同じくらい有名だ。

国にはそれぞれ、日の光が当たらない「影」の部分が存在する。主に政治の極秘事項などだ。そして、必ずそれらを秘密裏に処理する集団が存在する。俗に《暗部》と呼ばれる集団だ。当然、彼らは一般人を遙かに凌ぐ力を持っている。まさに「一騎当千」という言葉がピッタリ当てはまるような人間の集まりだ。そして、この集団の手に負えないものが、零の所属する《組織》にまわってくる。

零も過去に、《暗部》とは苦い思い出がある。

“古池”はその《暗部》の人間を多数輩出してきた名門で、特に召喚魔法を生業とする一族だ。

(芽衣……勝てるか)

無言で結果を待った。

「……ありがとうございました」

月下芽衣は対戦相手の少年に頭を下げた。

圧倒的だった

今まで味わったことがないプレッシャー圧力の前に、成す術もなく負けてしまった。

「いい試合でしたが、僕の勝ちですね」

古池淳は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

180cmはあるであろう身長と端正な顔つきは、美形と言って

差し支えないだろう。だがその瞳には、他者を侮辱するような色を宿していた。

「月下の人間がこの程度では、僕の優勝も間違いなさそうですね」
「くっ……！」

芽衣が唇を噛む。

祖父が大事に守ってきた一族を馬鹿した淳をきつく睨んだ。
しかし、そんな芽衣の視線を笑って受け流す。

「では次に戦うまでに、僕が退屈しない程度にまでは強くなっている下さい」

淳は、そのまま嘲るように去っていった。

「お疲れ」

「レイ……」

試合から戻ると、零がひとりで待っていた。表情は無い。きっと結果を知っているのだろう。

「ごめん、負けたわ」

芽衣は感情を押し殺して、無理に笑って見せた。いびつな顔になっているかも知れない。それでも、目の前の少年に落ち込んだ表情を見せるのは嫌だった。

「そっか」

「……うん」
「悔しい？」

零の言葉に、小さく頷いた。
悔しかった。

零と戦えないことも、一族を馬鹿にされたことも、そして全く齒が立たなかったことも、全て悔しかった。
言葉に詰まる。

そんな芽衣の頭を、零が優しく撫でた。

「え？　ち、ちょっと何やって……」

突然のことに軽くパニックになりながらも、そこまで言って言葉を失う。

「御苦労さん。そして800人中3位おめでとう」

零が笑いかけた。
いつだったか。

零の心の傷を癒せるような存在になろうと誓ったことがあった。
そう思わせるほど、零は悲しくて孤独な少年だった。

でも、いつも逆に癒して貰ってばかりで。
それが嬉しいと同時に辛くて。
自分はなんて無力なんだ、と思ってしまう。

零は誰よりも闇を抱えている。それにも関わらず、他者の闇も包んでしまうような優しい少年なのだ。本来なら、その優しさに、これ以上甘えてはいけない。

それでも……

芽衣は唇を噛んで俯いた。

た。
夢の手の温もりは、遠い日の父親の温もりと、とてもよく似ていた。

13話 弱肉強食（前書き）

隙間時間を使って作成

ちよつと駆け足気味になりました。

13話 弱肉強食

『只今より、1学年決勝戦を開始します』

ようやく本日最後の試合だ。

零は首を回すと、既に決勝トーナメント進出を決めている月下結衣の方を見た。

「じゃあ行ってくるから」

「うん、いつてらっしやうい。芽衣ちゃんは大丈夫だから気にしないで〜」

のんびりした声が響いた。この姉妹は性格が全く違う。

天然な姉と神経質な妹。

だが、それでよくバランスがとれていた。

そして、お互いがお互いを思いやっている。見ていて羨ましくなるくらい仲が良い。

それを確認してから、ステージへと向かった。

「君が天戸零君ですか」

「……そうだけど」

「まさかここまで来るとは正直驚きです。学力だけでなく、腕も立つようですね」

「古池の人間にそう言って頂けるとは光栄だね」

零の言葉に、ふふんと鼻を鳴らす。

相変わらず余裕の笑みを浮かべていた。零が嫌うタイプの人間だ。

「まあ、今日のところはゆっくり休んで、明日は僕の応援でもして下さい」

「この試合で俺が勝てば、あなたの試合はもう終わりだけど？」

「僕に勝つつもりですか？ あなたが？」

古池淳は、おかしくて仕方がないというように笑った。

「マグレで勝ち上がってきた割には随分と自信があるようですね。

早くEクラスの教室にでも戻ったらどうです？」

「こつ見えてもボチボチ強いと思うよ？」

「そうですね。それは楽しみです」

淳は嘲笑を浮かべながら去っていった。

(さて、今回は趣向を変えてみよう)

零はステージの端へ向かうと、^{サイス}鎌を手にとった。

とは言っても、今回これは使わない。何故わざわざ大きな武器を選んだかという点、手加減していることを端的にわからせるためだ。1学年の試合と言えど、決勝ともなれば、それなりの人間が観戦に訪れる。現に、零のステージの周りには既に全学年の生徒が男女を問わず大勢集まっていた。その公の場で、古池淳を潰すつもりだった。

本来、相手の少し上の力で勝つことをルールにしている零にとって、それは異例のことだった。しかし、一度叩き落とした方がいい人物というのは必ず存在する。彼はその最たる人間だ。

零は鎌を背中に背負うと、ステージ中央へ足を進めた。

「試合開始！」

審判の合図と共に、古池淳は魔力を練った。

周囲の砂が彼の足元に集まる。やがてそれは高さ30mを超す足場になった。

彼の属性は土

使い方によっては攻めと守りを同時に行える属性だ。

(さて、世界の広さを教えてやるか)

零は戦闘中に、今日初めて魔力を使った。

身体強化：部分展開：足

この試合はこれだけで戦うつもりだ。

目の前に大量の土が現れる。それはやがて、百を超える槍になって零に襲いかかった。

零は走り出す。

加速、加速、加速。

四方八方から迫り来る土の槍の僅かな隙間を、すり抜けるように駆ける。あるものは耳の横を、あるものは足と足の間を通り抜けていく。なおも加速を続ける零の体は、やがて地面とほぼ平行になっ

た。

その勢いのまま、地面を強く蹴って上に跳躍。三十メートルも上にいる淳との差を一瞬でゼロに縮めた。

「なっ……!!」

「随分と卑怯な戦い方するじゃないか」

空中で体勢を整え、落下の力も利用した鋭い蹴り。

淳はそれを慌てて腕でガードする。今は魔法結界が張られている防具を身につけているために体に直接のダメージはないが、本当だったら腕の骨が折れているだろう。

「くっ!!」

零の蹴りの衝撃で後ろに後退する。そんな彼を、無表情な目で見据えた。

「ここにいれば俺が攻撃できないとでも思ったか？ それは大きな間違いだ」

「くそっ!!」

淳は剣を抜くと零に斬りかかった。型も何も無い素人の動き。芽衣の方が何倍も綺麗に動くだろう。零は淳の突きをアッサリ避けると、重心が左に傾いていることを確認して、その足を刈った。

「うわっ!!」

ドン という音と共に淳が尻餅をつく。

何とも無様だと思いながらも、カワイソウなので立ち上がるまでポーっと待っていてやる。そんな零の態度に頭にきたのか、再び剣

を振り回してきた。きつと、今まで魔法だけで戦ってきたのだろう。剣術は、幼稚といっても過言ではないものだった。零は同様に足を払うと、淳の体を下に叩きつけた。

「はあ、はあ…」

淳は立ち上がると、悔しそうな表情を浮かべた。零が武器を構えてすらいなくても、淳のプライドを踏みにじった。

肉弾戦では勝てないと判断したのか、淳は魔力を練り始めた。そのまま、零と距離をとるように移動する。

その魔法が構築されるのを、零は待たなかった。すぐに距離を詰めると、淳の腕を掴んで空中に放り投げる。

「うわああああ!!」

30mほど高い位置にある足場から、淳の体が落下した。

この位置から落ちたら、防具の結界の耐久値もゼロになるだろうかと考える。下に落ちていった淳を眺める。

「へえ〜」

淳は落下直前に砂を集め、クッションの代わりにしていた。その判断力に、素直に感心する。普通の生徒なら今ので勝負がついていただろう。やはり古池の名は伊達ではないようだ。

零はその後を追って空中に身を投じる。

試合を観戦している生徒から、あっ！　っという声があがるが、零は何事もなかったように着地した。

「……あなたは一体何者ですか？」

「さあてね〜」

「……ど、どうやらあなたを甘く見ていたようです。僕も本気を出しましょう」

何を今更、と思いながらも、何かやるようなので待っていてやることにした。淳の周りに魔力が集中する。本来なら隙だらけだが……

(……ああ、召喚魔法か)

その魔力には覚えがあった。古池の十八番ともいえる魔法。何が出てくるか興味があつたので楽しみに待つ。

召喚魔法：狐蛇グルーギス

甲高い声と共に現れたのは、巨大な蝮局とくろを巻いた蛇だった。その知能の高さから「狐蛇」と呼ばれ、恐れられている魔獣の一種だ。

(へえ、大したもんだ)

周りの生徒達がざわめいていた。無理もない。見るのが初めてである生徒がほとんどだろう。その巨大な体躯に、小さく悲鳴をあげる女子生徒もいた。

「これが僕が呼び出せる最強の魔獣です」

「さすが古池といったところか。まさかコイツを支配下に置いてるとは思わなかった」

「降参してはいかがですか？ 場合によってはその防具を突き破りますよ？」

淳は勝ち誇つたような笑みを浮かべた。今まで劣勢だったくせに、それを棚にあげて「降参してはいかがですか？」とは恐れ入る。そ

んなに負けるのが嫌なのだろうか。

しかし、彼は決定的な間違いを犯していた。

「ひとつ教訓を差し上げよう」

「はい？ 何ですか今更？」

「召喚する魔獣はよく考えた方がいい」

「何を言っているんです？ 負け惜しみですか？」

淳が鼻でせせら笑う。

「まあ、いいです。これで僕の勝ちですね。思っていたよりも強かったですよ。さようなら、天戸零」

狐蛇が零に襲いかかる。

その巨大な口が開き、牙を突き立てようとした。

周りの生徒の悲鳴が響く。

審判の教員があわてて試合を中断しようとした。

誰もが、零がやられたと思った。

「なっ……」

声をあげたのは淳だった。

先程までの嘲笑が驚きと恐怖に変わった。

全体が静まり返る。

審判でさえも口をあぐり開けていた。

狐蛇は、零に牙を突き立てる寸前のところで動きを止めていた。

零は何もしていない。

ただ黙って立っているだけだ。

それでも、狐蛇が攻撃してこないことを知っていた。

前述したように、狐蛇は知能が高い。獲物を巧妙に罠にしかけ、グルーギス確実にしとめる習性を持っていた。その賢さは、多くの生物にとつて恐怖の対象になる。だが、今回はそれが裏目に出た。この蛇は、自分よりも強い相手には決して攻撃しない。つまり、零が強者であると悟ってしまったのだ。零の殺気に、硬直してしまっていた。

「何故だ！？ 何故攻撃しない!？」

淳が動転したように叫んだ。今起きたことが信じられないようだ。

「だから言ったでしょ。よく考えろって」

零は蛇の巨大な頭を撫でた。

狐蛇はゆっくり頭を下げると、気持ち良さそうに体を丸めた。

「さて、どうする？ コイツを召喚したことで、お前の魔力は尽きてるはずだ。まだ続けるか？」

「クソ…… クソおおお！」

直後審判が試合を止め、零の決勝トーナメント進出が決まった。

13話 弱肉強食（後書き）

何か意見がありましたら、遠慮なく教えて頂きたいと思ひます。

14話 少年の思い、少女の決意（前書き）

評価して下さった方々、本当にありがとうございます。

筆者は頭上がりません。

読んで下さっている方々全てに感謝です！

14話 少年の思い、少女の決意

「賭けは私の勝ちみたいね」

「そうだな。お前の言った通り、爪を隠していた」

天戸零と古池淳の試合を観戦していた二人は呟いた。

肩には最上級学年であることを示す黒いライン。そして胸には生徒会役員であることを示す赤いバッヂ。

副会長の宮城進と、会長の藤本千鶴だ。

「彼、明日はあなたが相手でしょう？ 羨ましいわ。私も戦ってみたかったのに」

「馬鹿言つな。今の實力見ただろ。あの“古池”相手に圧勝だぞ。しかも武器も魔法も使ってない。俺が勝てる見込みは薄い」

「あら、前大会3位入賞者が随分と気弱じゃない。もっと堂々としていたらどう？」

「そうしたいのは山々だがな。……千鶴、気づいているか？」

進の問いかけに、無言で頷く。

「ええ。彼も似たようなもの付けていたわね」

それは零の腕にはめてある制御装置リミッターだった。

「ふー やっと終わった」

零は背伸びをすると、あくびを噛み殺した。
ようやく本日の試合が全て終わった。めでたく決勝トーナメント
進出である。

「お疲れ」

「おー、アカリ ただいま」

「……過ぎ」

「は？」

「零、格好良過ぎ」

一瞬目が点になる。

格好良過ぎとは、先程の試合のことだろうか。

本来ならば誉め言葉のはずだが、しかし明の表情はどちらかと言
うと不機嫌なものに近かった。

零が首を傾げる。

「えーと、ありがとう？」

「……」

「あの一 アカリさん？」

普段からよく喋る方ではないが、今の明はさらに無口だった。さ
すがに心配になって顔を覗き込む。

「何かあったのか」

「……」

「アカリ」

「…な、なんでもない」

「ホントに？」

「なんでもない！」

零は気づいていなかったが、二人はキスの直前のような体勢になっていた。

それに気づいた明が真っ赤になって顔をそらす。

無表情なくせに、割とすぐ赤くなるよなー と思いつつ、

「アカリって、意外と恥ずかしがり屋？」

「……バカ」

ふいつと顔を背ける明に、苦笑を漏らした。

その日、天戸零の写真が女子生徒の間で飛ぶように売れていたことを、零は知らない。

「で、何コレ」

「明日のトーナメント表だけど？」

「違う。俺が言っているのは組み合わせのことだ」

零が手にしているのは明日からの決勝トーナメントの組み合わせ表。それによると、瑠璃とは決勝で戦うことになっていた。仕組まれたとは思えない。

「だって仕組んだもん」

「やっぱりか!？」

「前回優勝者の権限でね」

「はあゝ 別に決勝じゃなくたって……」

「うっん。決勝じゃなきゃ駄目なの」

「何ソレ。どどういうこと？」

戦うのが目的なら、わざわざ決勝でなくてもいいだろう。何か他に理由があるのだろうか。

「……そういうこと」

「アカリ、何かわかったのか」

「零、明日は負けて」

「はい？」

「ちょー！ 明ちゃん、何言ってるの!？」

明の言ったことに、零と瑠璃が驚く。勝てと言ったり、負けると言ったり、無茶苦茶だなと思う。

「……まあ、俺は別にかまわ……」

「零君、明日はおじいちゃん来るから」

「おし、明日も頑張ろうか」

師匠が来るとなれば話は別だ。恩人の前で、無様な姿を晒すわけにはいかない。

と、そこで考えを止めた。

「……結衣、それは本当か？」

「うん、毎年この大会は見に来るんだよ」

「……そっか」

改めて事の重大さを思い知る。

約4年ぶりなのだ。

赤点の補習で会いに行けなかったが、本来なら真っ先に会いたい人物だった。

恩師の顔を思い浮かべる。
思い出されるのは別れ際の姿。
ただ静かに見守ってくれた姿。

「アカリ 俺やっぱ勝つよ」

「…うん、頑張つて」

「順調にいけば、二回戦は私とだよ」

「え？ あ、ホントだ」

どうやら、今回はリリに感謝しなければならぬようだ。

零は苦笑を浮かべると、笑顔の瑠璃に向かってお礼を言った。

翌日、朝から大勢の人間が国立カルディナ学校に集まった。どうやら、この大会の決勝トーナメントは一般公開されており、一種のお祭りのようなものになっているようだ。中には国のお偉いさんも来ているらしい。さすが、国内最大の学校といったところか。そしてそのステージは……

「広っ!!」

当然の如く広がった。ご丁寧にスクリーンまで設置されている。普段立ち入り禁止のこの建物が何のためにあるのか、たった今理解した。

現在、零たち出場者は、教室の一角で諸注意などを受けている。正直だるい。そんなことよりも、早く偉大な恩師の所へ行きたかった。

月下重夫は早起きだ。加えて、楽しいことがあると待っていていられ

ない人間だ。そのため、今日ここに来るとしたら孫娘と一緒にやってくるはず。つまり、もう来ているだろう。

「えー 諸君にはカルディナ学校代表として…」

長い

この校長は確か、入学式の時も話が長かった。

(くそ、繊細なのは頭だけにしてくれ…)

そう思った直後だった。

突然ドアが開いたかと思うと、一人の女子生徒が入ってきた。美しい黒髪はウェーブがかかっており、スタイルも抜群の美少女だった。その部屋にいた人間全員が息を呑む。いや、正確には零と結衣以外の人間が息を呑んだ。

「零くうくん、ここにいて聞いてきたから来ちゃった」

間違いない。

この口調、仕草、そして大胆さ

「……何やってるんですか、鏡花さん」

「あー ひどーい。4年ぶりなのに」

「なっ…… お、お母さん!!」

「「「お母さん!?!」」」

瑠璃を含めた全員が驚きの声を出した。

無理もないことだろう。

目の前の女性は制服も着ているせいか、どこから見ても零たちと

同年代に見えた。

だが、彼女の名前は月下鏡花つきげとかがと結衣の実の母親である。

「鏡花さん、その制服は……」

「そんなことよりも、お義父さん待つてるから早く〜 ほら、結衣ちゃんも〜」

鏡花は零と結衣の腕を掴むと、半ば引きずるように歩き出した。

「ちよっ 鏡花さん！ 自分で歩けますから！」

「お、お母さん！ スカートがシワになる！」

「では皆さん、二人を借りていきます」

全員がポカンとする中、零たちは慌ただしく出ていった。

「お義父さ〜ん、拉致つてきました！」

「おう！ よくやった鏡花！」

敬礼する鏡花、それに親指をたてる重夫。

それに、相変わらずだな〜 と苦笑した。

見ると、その横には諦めた表情の芽衣と、若干引きつった表情の明もいた。

「久しぶりだな、零」

「お久しぶりです、師匠。本当だったら、もうちよっとマトモな再会がしたかったんですけど……」

「なに、堅苦しいのは御免だ。どうせなら、楽しく過ごしたい。そ

れに、お前も全然ウチに来ないし、今も注意だなんだって言うから
じれったくなつてな」

「あの制服は何ですか？」

「鏡花が学生時代のものだ。あいつもこの卒業生だからな」

「それを何故今日？」

「さあな。似合うからいいじゃないか」

重夫が笑う。鏡花の方を見ると、ウインクをしてきた。確かに似
合っているのは否定できない。今も、数人の男子生徒が彼女を見て
いた。

（まあ、いいか）

そう思うと、小さく笑った。

「零」

一転して重夫の態度が変わった。それはいつかの稽古のよう
な表情だった。

それを確認して姿勢を正す。

真剣な顔でお互いを見据えた。

「本当に久しぶりだな」

「はい」

「元気にしていたか」

「変わりありませんでした」

「そうか」

短い沈黙が降りる。

騒がしい校庭で、そこだけが空気が止まったように静かだった。

「彼女がアカリさんか」

「そうです」

「お前にしてはいい名前をつけた」

「ありがとうございます」

「結衣が言うには、彼女はお前と同じ犠牲者らしいな」

「はい、俺と同じく人の手で生み出された命です」

「やはりそういう意味か」

「……」

「お前がどう思っているかは知らん。何を考えているのかも知らん」

「……」

「だがな、どんな目的であれ、彼女は生まれ、そして今生きている。

それは紛れもない事実だ。ならば……」

重夫が言葉をきる。

真っ直ぐに零の目を見た。

その瞳に吸い込まれそうになる。

「お前が守れ」

空気が止まったかと思った。

そう思わせるほど、強く頭に響いた。

なおも、重夫が言葉を続ける。

「お前の手で、お前のやり方で、あの子を守って見せる」

つまり、「奪う」ために作り出された零に、「守れ」と言っているのだ。

ずっと昔に零が諦めたこと

それを、重夫は「やれ」と言う。

(一体、俺はこの人にどう恩返しをしたらいいんだろう)

零は悲しく笑うと、深く頭を下げた。

頭を下げることでしかできなかった。

今度こそ、俺は何かを守れる人間になれるかも知れない。

零は思いを新たにした。

「アカリちゃんかな？」

「? はい」

零と別れてから、重夫は明に話しかけた。

穏やかな表情

それはいつもの月下重夫だった。

「改めて名乗ろう。俺は月下家第十六代目【雷切】月下重夫」

「……天戸明です」

重夫が笑いかける。

「アカリちゃん、突然だが君に頼みがある」

「私に？」

「ああ、そうだ」

「はい……」

「零と……同じ人間だそうだな」

明が無言で頷く。

「そのことだ。どうか……どうか零を支えてやってくれんか？」

「私が？」

「そうだ。あいつは強い。でもだからこそ、全て自分で抱え込んでしまふ。自分で何もかも片付けようとする癖があるんだ」

「……」

「このままだと、いつか破裂しちまうかも知れん。それが防げるのはアカリちゃんだけだ」

「私……だけが？」

「そうだ。俺じゃ駄目だった。久しぶりに会ったが、アイツ……寂しそうな笑い顔は変わってなかった」

「……」

それは明も見ることがある。

あの笑顔のことだ。

「あいつは自覚がないだけで、多くのものを『守って』る。もつと報われるべきなんだ。だから、それに気づかせてやるキツカケが必要だ」

「…はい」

「そのキツカケになってくれんか？」

懇願するような目。

きつとこの人は、零のことを本当に大事に思っているのだろう。

それが全身から滲み出していた。

断る理由は、ない

だからこそ、

「はい」

強く頷いた。

「ありがとう。　そつだ最後に……」

「？」

「アカリちゃんは、零のことをどう思っている？」

沈黙が降りる。

零のことをどう思っているか、それは……

「…わからない」

正直に答えた。

今まで何度か自分に問いかけたことがあった。

「ふむ」

「でも……」

「ん？」

「零が他の子にモテモテなのは…　イヤ」

「ほう、そうか」

重夫が笑みを深くした。

「今はわからなくてもいい。だがな、その感情はとても大切なものだ」

「とても…大切？」

「そうだ。人として、愛すべき感情だ」

重夫が明の頭を撫でる。

その笑みはとても穏やかだった。

その暖かい手の温もりを感じながら

明は決意を新たにした。

14話 少年の思い、少女の決意（後書き）

何か一言ありましたら、遠慮なくどうぞ

15話 飛び抜けた洞察力（前書き）

意見があったので、これからは「・・・」よりも「……」を採用します。

実はちょうど迷ってた所だったんです。

15話 飛び抜けた洞察力

『勝者、月下結衣選手!』

大歓声が沸き起こる。

その中、結衣が相手に向かってお辞儀をした。

やはり予定通り、結衣とは戦うことになりそうだ。

「結衣、お疲れ」

「あ、零君。ただいま」

「師匠と鏡花さんはあの辺にいます」

「わかった。ありがとう」

そう言うつと、長い黒髪を揺らしながら走っていった。そういえば結衣のあの髪型を見るのも久しぶりだ。彼女は戦いの時だけ、その長い髪を横でひとつに縛る。そうすると、うまく切り替えられるのだそうだ。

もつとも、その髪型はかつて零がリクエストしたものだということ、零は覚えていない。

『只今より、第4試合を行います。2465A宮城進選手、322E天戸零選手はステージ中央へ集まって下さい』

(さて、行くか)

零は背伸びをすると、指定された場所へと向かった。

「天戸君、今日はよろしく頼む」

「ああ、宮城先輩。先日お会いしましたね」

「そうだな。あの時は悪かった」

「はい？ 何がですか？」

零の記憶が正しければ、彼は零を助けてくれたはずだ。零がお礼を言う必要があるにせよ、謝罪される理由はない。

「あの時、俺は君の力を見誤って、君では他の生徒に勝てないと言った。大きな間違いだった」

「ああ、そのことですか」

確かに、そんなことを言われたかも知れない。零としては全く気にしていなかったのだが、律儀に謝罪する進には好感が持てた。

「いえ、全然気にしてませんよ。そんなことよりも、今日は宜しく願います」

そう言って握手をする。

進の手を握って驚いた。

(へー 珍しい)

「先輩は双銃剣ツインペイオネツですか？」

「あ、ああ 知っていたのか？」

「いえ、今知りました」

動揺する進に向かって笑って答えた。

双銃剣は近距離と中距離の両方を戦える一見便利な武器だ。ただ、使い勝手がいいとは言えない。当然近距離では双剣ツインタガなどの近接武器には及ばないし、中距離では弓ボウなどの遠距離武器に及ばない。つまり中途半端なのだ。

そんな武器を使っているということは、彼の戦術はひとつしかない。

「試合開始！」

審判の合図と共に、魔力で目を強化した。零の予想が正しければ、進の体にはある現象が起きているはずだ。

(やっぱり)

進の体内には、魔力が循環するような流れが出来ていた。まさか、学生のうちからこれが出来る人間が“月下”以外にいるとは驚きだ。

身体強化

普段零が当たり前のように行っていることだが、それは本来、熟練の魔導師が長い訓練の末に身につけることができる技だ。学生の間には身につける人間などほとんどいない。

進が駆ける。

本来の彼の筋力、体格では1.2秒かかる零との距離を、僅か4秒足らずで詰めた。

双銃剣は相手との距離を支配することで真価を発揮する武器だ。進はその特性をすっかり理解していた。

撃たれると思うよりも速く、零の体は動く。軸を左足から左手へと移行させて体を回転させると、進の真横に着地。銃の照準からの回避も同時に行う。そのまま振り抜かれた進の腕をとると、反動も利用して鮮やかな投げ技を決めた。しかし、進は空中で体を捻ると、倒されることなく地面に着地する。

バランス感覚は射撃の要^{かなめ}銃を使いこなすにはバランス感覚と空間把握能力に長けている必要がある、進も例外ではなかった。

(これは……俺もそれなりでいかないのかな)

進の戦術の弱点は、《身体強化》における魔力の制御のために、他の魔法を使う余裕がないことだ。零たち《組織》の人間にとって造作もないことだが、一般の人間には荷が重すぎるのである。

零は魔力を練る。

それは、魔力をただ「使う」だけの今までの戦闘と違うれっきとした「魔法」

周囲の温度が一気に低下すると、足元から氷が現れた。それは勢いよく広がり、辺りの地面を浸食していく。やがて、ステージの半分が氷に覆われた。

突然のことに、進が驚きを露わにする。それほどまでに、一瞬の出来事だった。

「まさかこれほどとはな。君の属性は氷だったのか」
「えーと、はい」

取りあえずそういつことになっているので頷く。今この場で、全部使えるなどと言えるわけがない。

「さすがだ。だが……」

銃剣を持ち直す。

「この程度の氷なら問題ない！」

進が地面を蹴った。

氷の上にも関わらず、通常とほとんど変わらぬ動き。素直に見事だと思う。

だが、目的はそれではない。

「……………っ！」

進の連撃の雨を、零は一步も動かずに全てかわし切っていた。

彼の卓越したバランス感覚と強化された肉体ならば、氷の上でも戦えることなど百も承知。

本当の目的は呼吸を読みやすくするため。

そしてそれは、データの収集をより容易にする。

「くっ……」

進が引き金を引く。最初の二発は直接、残りの二発は回避行動も計算した射撃。しかし、零は前進すると、その僅かな隙間に身を滑り込ませた。

そのまま回し蹴り

進はそれを銃剣をクロスさせてガードする。

(いい反応だけど)

ここから体を47・3度回転させると……

「!?!」

零の左足は進のガードの上をすり抜けた。
膝の一撃が進の顎に命中する。

これはダメージをメインとした攻撃ではなく、一瞬でも進の方向
感覚を狂わせるのが目的。

案の定、進は一瞬零の居場所を見失った。それは零を前にして致
命的な隙。

その隙を、見逃さない

進の懐に潜り込むと、その両手から銃剣を叩き落とし、拳を寸前
の所で止めた。

「……参った」

進が両手を上げる。

『勝者、天戸零選手!!!!』

大歓声の中、大きく息を吐くと、結衣と同じようにお辞儀をした。

「さすがだな天戸君。完敗だったよ」

「いえ、先輩もいきなり強化 使っから驚きましたよ」

「君だって昨日使っていたらろう？」

進の指摘に苦笑を浮かべる。

「さっきの試合、途中から俺の動きが読まれてたみたいだったが、
どうやったんだ？」

「…ああ、あれですか？ コレですよ」

零が手に取ったのは進の銃剣。

「ん？ それがどうしたんだ？」

「先輩、攻撃する前に銃を持ち直す癖がありますよね。こんなふう
に」

零がその動きを真似る。

それは進自身、気づいていない癖だった。

指摘されて驚いた表情を見せる。

「…知らなかった」

「直した方がいいですよ。タイミングがバレバレですから」

そう言っって、零が笑った。

僅か数分間にその癖を見抜いたこの少年に、進は尊敬と恐れを
抱いた。

「……おかえり」
「おー ただいま」

明に迎えられて帰還した。そこには重夫達もいる。

「零くうくん 相変わらずカッコイイわねえ」

「はあ、ありがとうございます」

「私と結婚する？」

「……はい？」

「ちよつと、母さん！ 何言ってるのよ！！」

その様子を見ていた芽衣が、零と鏡花の間に入った。何やら手に大事そうに何かを…… 写真だろうか？

「芽衣、それ何の写真？」

「え？ ええ！？」

芽衣が慌てて手を後ろに回した。よく見ると、顔は赤いし、テンパっている。

「なに？ 俺に見せられないようなもの？」

「か、関係ない！ レイは関係ないから！！」

右手をぶんぶんと回す。

「芽衣ちゃん……買ったんだ」

「芽衣……カモになってる」

「う、うるさい！ だいたい、姉さんだってさっき……」

「わ ……！……！」

もう零の入り込む隙間はなかった。
諦めて立ち上がると、その様子を見て微笑む鏡花と重夫に首を傾げた。

「やっほー ルリ」

「？ あれターナ？」

「君にお宝を差し上げよう。これが何か、わかるかなー？」

「何って、写真？」

「じゃーん！」

「え、あ、え！ ええ！？」

「親友のよしみで、コレを君に譲ってあげよう！ 大変だったんだよー？」

「い、いや 別に私は……」

「おろ？ いらないのかい？ ならしよーがないなー 誰かに売って……」

「ま、待って！ ちょっと待って！」

「素直に欲しいって言いなさいなー」

「うっ…… ターナのばか」

「はいはい、ごめんよ。んじゃあコレね」

「……………」

「もしもしルリさん？ 顔が真っ赤ですけど？」

「うるさい……」

15話 飛び抜けた洞察力（後書き）

毎度、読んで下さってありがとうございます。ただの行商人です。活動報告の方で、筆者から皆様に質問を投げかけております。

内容は「ハーレムは拡大すべきか、否か」というものです。

ストーリーが大きく変わることはありませんが、この意見によってとあるお話を組み込むかどうかを決めようと思っております。

時間がある方だけで結構ですので、この小説の感想か、活動報告かのどちらかに意見を頂けると嬉しいですよ。

特に意見がなければ、筆者の独断で決めます。

長くなりました。ではこれで〜

16話 天戸零 vs 天戸明（前書き）

たくさんのご意見ありがとうございます！

16話 天戸零 vs 天戸明

藤本千鶴

神無月瑠璃

月下結衣

天戸零

決勝トーナメントの1日目は、結局この4人が勝ち残った。

明日は藤本千鶴 vs 神無月瑠璃、月下結衣 vs 天戸零 という組み合わせになる。

零にとっては予定通り。

だが多くの人間にとって、それは異例の事態でしかない。

零はEクラスの人間で、しかも1学年だ。国中のエリートが集まるこの学校で、それは本来あり得ない。

当然のように、注目の的になった。

「……疲れた」

ドサツ という音を立てて零が倒れ込む。

今までの《組織》の任務でも、ここまで疲れを感じたことはなかった。月下家を出てから、ほとんど一人だったことも影響しているのかも知れない。そもそも、大勢の人に囲まれることに慣れていないのだ。

「大丈夫？ まあ、私も最初はそうだったよ」

声が出た方を見ると、瑠璃が缶コーヒーを持って立っていた。ありがたい配慮に、お礼を言ってお礼を受け取る。

「リリ、そう言えば一つ聞きたいことがあったんだ」
「うん？ なに？」

「……カレーニナ先輩だけど」
「……ああ、会ったの？」

瑠璃の言葉に無言で頷く。

そんな零に対して、表情を暗くした。

「別に零が気にする必要なんてない」

「出来ることだけでもしておきたいんだ。それで償えるとは思わな
いけど」

「償うなんて言わないで」

瑠璃が悲しそうな表情を見せた。

懇願しているようにも見える。

そんな瑠璃に笑いかけた。

「全て背負うことに決めたから。何もかも自分がやってきたことは、
全部」

「……」

「どう？」

「……北カルディナ総合病院、だったと思う」

「総合病院か…… まだいい方だ」

「うん……」

「リリ」

「……」

「ありがとう」

その言葉に込められた二重の意味を瑠璃は理解した。否、理解し

てしまった。

そのために

ただ黙って立っていることしかできなかった。

「そうだ〜 今日久しぶりにウチに泊まったらどうかしら〜？」
「はい？」

瑠璃と別れると、いきなり鏡花が話しかけてきた。

それは意外な提案。

突然のことに驚いた声を出した。

「どうかしら〜 お義父さんも賛成よねえ〜？」

「そりゃあいいな！ どうだ零？」

「ああ、でも……」

四年ぶりの月下家

行きたくないと言えば嘘になるが……

「アカリがいますから」

そう、明がいる。

零が泊まることになれば、彼女はひとりになってしまふ。いくら

鏡花の提案でも、それはできない。

「だったら、明ちゃんも一緒に来て貰えばいいじゃない〜 知ってるでしょ？ ウチは広いのよ〜」

「まあ、そうですね……」

確かに月下家は広い。零と明の二人どころか、団体で訪れてもま

るで問題ないだろう。

「零くんの部屋も、あの時のままにしてあるのよ〜 掃除だってしてるわ〜」

暖かい目。

月下鏡花特有のものだ。

零はこの人の空気が好きだ。一緒にいると、こっちまで和やかな気持ちになる。

重夫に目をやる。

いつものように笑っていた。

「……………では、アカリに言ってみます」

「そうこなくつちゃ〜 楽しみにしてるわ〜 あの子達にも伝えておかないと〜」

嬉しそうに走り出す鏡花に、自然と笑みがこぼれた。

「……………って、俺が作るんですか!?!」

「言ったじゃない〜 楽しみにしてるって〜」

「料理のことだったんですか!?!」

現在、零と明は月下家の台所で、大量の食材を前にしていた。かつて零がここで暮らしていた時は、鏡花の手伝いでよく料理をしていた。その時に覚えたものも多い。その味を忘れていなかったのだろ。いきなり夕食を任された。

「いや〜 楽しみねえ〜 零くんの手料理なんて久しぶりよ〜」
「こついうのって、俺が御馳走して貰う方じゃないんですか？」
「いいじゃない〜 細かいことは気にしないの。 ねえ？ 明ちゃん」

話を振られて、明は少し困った表情で零を見た。
少し珍しい。

普段の明なら、無言で頷くか首を振るかのどちらかだろう。

「まあ、いいですけど。アカリ、手伝ってくれる？」

「……わかった」

零が頼むと、明は嬉しそうに頷いた。

彼女は、零が何かを頼むと割と喜んで引き受けてくれる。表情こそ変わらないが、纏う空気が明るくなる。今のような料理の時などは特に顕著だ。

「おお、零が作るのか。そいつは楽しみだな」

そこで重夫が道場から戻ってきた。

零たちが来たことを喜んでるのは重夫も同じのようで、まるで子供のようにはしゃいでいる。こついう所も相変わらずだな、と苦笑した。

「そう言えば、あの二人は？」

考えてみると、結衣と芽衣がいない。

零たちが来るや否や、どこかへ走っていったように見えたが……

「なに、大方自分の部屋の掃除でもしてるんだろっ」

「随分とまた突然ですね」

「片付けるモンでもあるんじゃないか？ 見られたくないやつとか」

ニヤリと口元を曲げる。

その真意を図りかねて、零は首を傾げた。

さて、何をつくるか。

考えを巡らせながら冷蔵庫を開いた。テーブルに食材は大量にあるが、どうせなら中途半端なものから使った方がいい。鏡花のことだから、使いかけのものは別にしてあるはずだ。

「あー よし！ アカリ、玉ねぎを微塵ぎ……」

「イヤ」

「……」

「……」

そう、いくら零の頼みでもこれだけは聞いてくれない。零がニッコリ笑いかけると、逆にニッコリ笑い返してきた。普段無表情な分、そのギャップからくる攻撃力は計り知れない。さすがの零も一歩押しされた。

だが、嫌なものは嫌なのである。

「前は俺が体を張っただろ！ 今日のはアカリの番だ！」

「イヤ。玉ねぎは零の仕事」

「冗談じゃない

そんなものが仕事にされてたまるか。

「……よし、ルールを決めよう」

「？」

「これから玉ねぎを刻むのは交代で行う。いいな」

「わかった。前は私がやったから、今日は零がやる」

「コノヤロウ……」

意地でもやらないつもりらしい。

「……何故そこまで玉ねぎを拒む？ いいか？ 玉ねぎには栄養が満天だ」

「食事をきちんと取らないくせに、よく言う」

「……くそ、反論できない

ちゃんと食事を取れ、という明の説教を今まで無視し続けたことを、今更ながらに後悔した。

「楽しそうねえ」

鏡花は台所で練り広げられる戦いを観察しながら微笑んだ。二人の様子はまるで新婚夫婦のようである。

「お母さん、もしかして零君が料理してるの？」

「あら、結衣ちゃん、部屋の掃除は終わったのかしら？」

「う、うん。まあね」

ぎこちない様子で結衣が答える。それを見て、鏡花は新しいおもちゃを見つけた子供のような顔になった。

「仲いいわねえ〜 零くんと明ちゃん」

「……………うん」

「もう夫婦みたいよねえ〜」

「……………うん」

結衣は見るからに萎んでいった。そんな娘を、鏡花は抱きしめる。

「いや〜ん 結衣ちゃんカワイイ〜」

「ち、ちよっとお母さん！」

鏡花はそのまま自分の娘をもみクチャにし始めた。

「零くう〜ん、見て見て！ 結衣ちゃんかわいい〜」

「わっわっわ ……」

暴走した母親を止める術は、もうなかった。

「じい様、これは？」

「おお、芽衣か …… ってまた随分と気合入った服装だな」

「き、気のせいです！ それよりも！」

芽衣は至るところで繰り広げられる戦いを指差した。顔は半分啞然としている。呆れ顔と言ってもいい。

「これは一体……………」

「だ　　！　お前、今変えたる！」
「変えてない。私は最初から、チヨキ」

一際大きな声が響いた。
どうやら零と明はじゃんけんをしているようだ。

「ほら、お前は零の手伝いでもして来い」
「あ、はい」

芽衣が零たちの所へ向かう。

「お、芽衣！　いいところに……　　って着替えたのか？」
「え、ええ。ちよっとね」
「まあ、いいか。それよりもアカリが冷たくてさ」
「……む」
「玉ねぎを……」
「零、私がやる」
「はiiiiiiii!?!」

その様子を眺め、重夫はひとり微笑んだ。

願わくばこんな日々が……

いつまでも続きますように。

16話 天戸零 vs 天戸明（後書き）

皆様からの意見をもとに、最終的な判断はまた後ほどお知らせ致します。

それまでは、まだ意見を出していない方も、どんどん送って頂いて構いません。

もちろん普通の感想も大歓迎です。

より多くの方に楽しんで頂けるよう頑張りますので、これからも応援よろしくお願い致します。

それでは、これにて〜

17話 黄金の夜(前書き)

重要な回になります。

やっとストーリーが……ちょっと進んだ。

17話 黄金の夜

宮城進は生徒会の仕事を終わると、荷物をまとめて帰る準備をした。

今日は大変な一日だった。

大会の運営をしながら、自分も試合がある。しかも、4年生である進にとっては非常に大切な試合だ。

負けてはしまったが、自分の力を出し切れたので不満はない。いや、出させて貰ったと考えた方がいいか。おそらく天戸零は、進が力を出し切れるように手加減して戦っていた。端から見ればほぼ互角だったように見えるかも知れないが、実際に戦ってみると嫌でもわかってしまう。彼と自分では天と地の差がある。

(あの頭脳には驚いた)

握手をしただけで進の武器を判断したであろうその分析力。

一瞬で相手の癖を見抜くその洞察力。

もはや超能力の域まで達していると言っても過言ではないだろう。むしろ超能力であると言って貰った方が納得できる。

そのまま幼馴染の少女を見た。

藤本千鶴

この学校の生徒会長

彼女は天戸零と神無月瑠璃を生徒会に入れたらしい。そのため
に今、策を練っているとかいう話だ。

(まさか…藤本先生の力を使うつもりか?)

何か企んでいそうな千鶴を見て、女の怖さを再認識した。

結局、夕食は玉ねぎと米をバターで炒め、白ワインと魚介類、肉、あわび等を盛り込んだものになった。

名付けて「地中海風山菜リゾット」

なるべく脂肪分を抑え、野菜で栄養バランスも整えた。我ながら良い出来である。

「……御馳走様でした!」「」

「お粗末様です」

零は全員の満足そうな表情に、ホッと胸を撫で下ろした。不評になるとは思わなかったが、やはり多少の緊張はするものである。

「将来が楽しみねえ」

「? どういうことですか?」

「一体どちらを選ぶのかしら」

何やらニヤニヤした顔を自分の娘達に向ける。その視線に気づくと、二人はボツと赤くなつて目を逸らした。そのままアカリに目を向けると、不機嫌そうにこちらを見ている。

どうやら、事情が飲み込めてないのは自分だけのようだ。

「零くんは相変わらずねえ」

「……鏡花さんに言われたくないんですけど」

「零、お前は変わってないな!」

「……師匠にも言われたくありません」

「零、バカ」

「なんでアカリまで!?!」

理不尽ではないか。

そんな零を尻目に、結衣と芽衣はお互いに小さく火花を散らしていた。

夜

重夫はひとり、庭に腰掛ける。

今宵は月が綺麗だ

まるで空が金の山をひっくり返したような色をしている。

そんな月を眺めながら、無言で時を刻む。

「風邪を引きますよ」

声がした方を見ると、鏡花が立っていた。

手にはお酒を持っている。

「おお、悪いな」

「いいえ それより、何を考えていたんです?」

鏡花の問いに、重夫は答えなかった。いや、それが答えと言って
もいい。

そんな義父に対して、鏡花は笑いながらお酒を注いだ。

「嬉しそうでしたね、あの子達」

「…そうだな」

「あんな表情を見るのも久しぶりじゃないかしら」

夕食時の様子を思い出して微笑んだ。

「6年前に零くんが来るまで、あの子達は抜け殻みたいでしたから」

「それはお前もだぞ」

「……え」

「アイツが死んでから、お前は時々魂が抜けたような顔をしていた。気がつかなかったか？」

義父の言葉に、驚いた表情を見せる。

重夫は笑って注がれたお酒を口に運んだ。

「そう…でしたか。気づきませんでした」

「無理もない。お前は誰よりも、この家を守ろうと必死だったからな」

月下家から笑顔が消えた日

自分が信じていたものが、大切な人を奪っていった日

そんな時、国が保護した零を預かるよう命令が来た。

「あの時はどうなるかと思いましたが…」

鏡花の言葉に苦笑を返す。

当時、子供を預かる余裕など、鏡花と重夫にはなかった。まだ幼い孫たちの心のケア、そして自分の心の整理。それだけで頭が一杯だった。

それでも、重夫は零を引き受けた。

理由はひとつ。

息子に似ていたからだ。

顔や体格が、という意味ではない。その目、空気が似ていた。

「俺は息子の育て方を誤った。優しいアイツに、ただ人を殺し、叩きのめすだけの剣を教えちまった」

それは重夫の中で、一生続くであろう後悔。

「だからな、言ってみれば零は俺の罪滅ぼしみたいなモンだ」
殺すための剣はやがて自分を殺す。

このままでは、目の前の少年は自分の息子のような最期を辿ると思った。

「結局、俺は自分のために零を引き取ったんだ」
「でも、零くんにとって、お義父さんは恩人です。あの子達にとっても、そして私にとっても」

鏡花の強い言葉が響く。

それは、重夫の胸に溶けていった。

「……そうか。すまないな鏡花。お前には助けて貰ってばかりだ」
「いいえ 私こそ、お義父さんがいなかったら今こうして笑えませ
んでしたから」

月明かりの中、二人は笑い合った。

互いの存在を確認し、互いに感謝するように。

「零は道場の方か？」

「ええ、そうだと思います。何か？」

「……ちと、話したいことがあってな」

そう言つと、重夫は黄金の光の中を歩き出した。

神経を集中させる。

何一つとして動くものはない中、零は刀を取った。

鳴神【雷切】

重夫が打った刀にして、月下家の家宝

同時に零の刀でもある。

ゆっくりと息を吐く。

抜刀

その瞬間、今までの静かな空気が爆発したかと思うほど、零の『

『氣』が変わった。

感情という感情が消える。

感覚が研ぎすまされ、全てが刀を振るためだけに機能する。

そのまま一線。

形のない大気に傷をつける。

その傷が塞がる前にもう一線。

目にも止まらぬ速さで刀を振るう。

一通りの型を確認し、そこで刀を納めた。

「見事だな」

道場の隅から声が響く。それは恩師である月下重夫だった。

「4年ぶりに刀を取ったとは思えない」

「俺の戦いの全ての核になってますからね。体に染み着いたままですよ」

零は笑うと、刀を置く。

「零、お前に話しておきたいことがある」

重夫がただならぬ雰囲気で言葉を発した。恩師のそんな態度に、零も正座をして姿勢を正す。普段は打ち解けたように話しているが、こういう時は正座をするのが零の中でのケジメだ。

「いいか、これから俺が話すことは証拠も何も無い。単なる俺の想像だ。故に聞き流して貰っても構わない。だがお前には一度、話しておきたかった」

「? はい」

聞き流して貰っても構わない、という言葉に疑問を浮かべた。大抵、重夫がこの空気を纏う時は大切なことを言う。それを聞き流してもいいとはどういうことなのだろうか。

零の疑問を余所に、重夫はなかなか口を開かなかった。まるで、何か躊躇っているようにも見える。

零はひたすら待った。

「……お前が出ていってから、ずっと考えてたんだ」

ようやく重夫が口を開く。

零は黙ってそれを聞く。

「お前は研究者達に作り出された。そうだな？」

「はい」

「お前にはありとあらゆる人間のDNAが含まれてる。そうだな？」

「……はい」

重夫が何が言いたいか理解出来ず、ただ頷く。

「おかしいと思わないか？」

「おかしい？ なにが？」

零が科学者達に作られたことの一体何がおかしいというのだろうか？

だが、零は嫌な汗が額を濡らすのを避けることが出来ない。

なおも重夫が続けた。

「お前が完成するまで、ありとあらゆる実験を積み重ねたはずだ。時には失敗し、一からやり直したこともあったかも知れない。それは一体どのくらい時間がかかったんだ？ 行われていた場所は？ そして……」

一旦言葉を切って告げる。

「その費用はどこから来る？」

空気が止まった。
蛇に睨まれた蛙のように動けない。

考えたこともなかった。言われてみれば、疑問に思わない方がおかしい問題だ。

零を作り出すため、あの研究者達は莫大な資金を必要としたはずだ。

研究機材、施設、土地

そして過去の偉人のDNAサンプル

その入手源は？

そのルートは？

その費用は？

とてもただの研究者達で解決できる問題とは思えない。

そんなことが出来るとすれば……

「わからんぞ。言っただろう？ 確証も何もないただの想像だ」

「……」
「だがな、そういう可能性もあるって話だ」

それが事実だとすれば、「戦争用人型兵器」である零は、また別の目的があつて作られたことになる。

まさか【神々の黄昏《ラグナレク》】は予定されていたものだと
でも言っのたろうか。

……その場合

アカリは一体……

17話 黄金の夜（後書き）

次回は零VS結衣になります。

少し遅れるかも知れません。

18話 天戸零 vs 月下結衣

夜が明けた。

闇の中を降り注いでいた金色の光も、太陽が発する透明な光に飲み込まれ、夕べの出来事がまるで夢だったかのように思わせる。零は昨夜、重夫と別れた後、ずっと変わりゆく空を眺めていた。

考えたいことが山ほどあった。

自分のこと、明のこと、《組織》のこと

考えて答えが出るわけもないが、それでも考えずにはいられない。しかも、こういう時はどうも悪い方に考えがちだ。今、零の頭の中には、考えうる限り最悪のシナリオが出来上がっていた。運が悪いことに、筋もすっかり通ってしまふ。

(やめよう……)

そう思って立ち上がると、隣の部屋へ向かった。

白い髪と白い肌の少女が静かに眠っている。その様子は、どこかの絵本に出てくる人形のようなだった。零は腰をおろすと、明のやわらかい髪を撫でる。

「……一体、何のために造られたんだろうな」

返ってくるはずもない答えを求めて、零は未だ眠り続ける少女に問いかけた。

目覚ましの音で目を覚ました。

いつもと違う天井。

そう、昨日は月下家に泊まったのだった。

明は奇妙な違和感を感じたまま寝返りをうつと、再び目を閉じた。月下家は本当に広かった。今寝ている部屋だけでも、零のマンション全体くらいの広さはあるかも知れない。

部屋は障子と襖で区切られており、お風呂は伝統的なヒノキ風呂。お風呂が好きな明としてはとても嬉しいことだった。布団も、やわらかくて気持ち良かった。

「アカリー 起きろー」

聞きなれた声がして目を開けた。
黒髪の少年の顔が目の前にある。

「アカリ、お早う」

「……………」

「おーい、起きてるかー」

「…………… っ！」

そこでようやく何が起きているのか気が付いた。部屋に零がいる。それはつまり、寝顔を間近で見られたということだ。恥ずかしさのために、真っ赤になって跳ね起きる。その反応に、零は「おおっ」と言っ後ずさった。

「いつから……………」

「ん？」

「いつから……………いた？」

「あー 十分前くらい？」

「あ……………」

両手で顔を覆う。

明はそのまま部屋を飛び出していった。

「それはあんまりじゃないかしら？」

「……申し訳ありませんでした」

現在、零、土下座中。

大陸最強の【万能者《オールマイティ》】が土下座をしているところなど、《組織》のメンバーが見たら目を丸くするだろうか。いや、むしろ大爆笑するか。

しかし、これは仕方のないことだ。

とてつもない笑顔でどす黒いオーラを纏う結衣と、とてつもない怒り顔で木刀を向ける芽衣、それに鏡花が加われば、プライドだの恥ずかしいだのと言っている場合ではない。こういう場合は素直に頭を下げるのが一番なのだ。

「それで？」

「はい？」

「どうして十分も眺めていたのかしら？」

結衣と芽衣の気配が一層鋭くなった。どうやらこの返答次第で、今日学校に行けるかどうかが決まりそうだ。うまくいけば無傷で済む。だが、逆に大ダメージを負う可能性もある。それ故、慎重に言葉を選ばなければならない。まずは当たり障りのないところから攻めていこう。

「えーと、少し考えたいことがあります」

「あら〜 エツチなこと？」

なんてことを言うのか。

まるで開始一手目で王手をかけられたような気分だ。しかも、その横を飛車と角で武装している。これは相当うまくやらないと切り抜けられそうにない。

とりあえず防御だ。守りを固めなければ負けてしまう。

「何を言ってるんですか鏡花さん。そんなことあるわけ
っ
てちよつとタンマ！ 違うから！ 違うって！」

鏡花の言葉で竜と馬に進化した姉妹が襲いかかってきた。鬼のよ
うな形相のふたりに命の危機を感じた零は、慌てて弁解する。それ
を見た鏡花はイタズラっぽい笑みを浮かべた。

策士だ。

間違いなく鏡花さんは策士だ。

そう思いながら、自分の今朝の行動を後悔した。こんなことにな
るなんて夢にも思わなかった。どうやら、年頃の女性の寝顔を見る
というのは大変なNGだったらしい。

「零、ちよつとこっちに来い」

「はい！ 何でしょう師匠！」

天の恵みとばかりに重夫のところへ飛んでいく。こういう時の重
夫は期待を裏切らない。きつと何かいい解決案を提示してくれるは
ずだ。

「この状況を脱したいか？」

「はい……」

是非。

心の中で叫びながら、恩師の小さな声に耳を傾ける。

「だったらな……あの二人の耳元でこう囁くんだ」

「はい……」

「……ってな」

「……え、それだけですか？」

なんとも普通の言葉に、零は拍子抜けたように聞き返す。それに、重夫は笑って頷いた。

「いいからやってみろ」

「……わかりました」

有言実行。

すぐに二人に近付いて、耳元で囁く。

「『俺は笑ってる君達が好きだ』（棒読み）」

「えっ」

「なっ」

効果はてきめんだった。ポツと音がしたかと思うと、突然湯気が上がる。

予想外の効き目に驚きながら、心の中で重夫に感謝した。どうやら危機は乗り越えることができたらしい。

「面白いな」

「ええ、面白いですね」

「ははははは」

「ふふふふ」

影で大人ふたりの不気味な笑い声が響いた。

今日行われるのは二試合だけである。

藤本千鶴 vs 神無月瑠璃

月下結衣 vs 天戸零

くじ引きの結果、零の試合が午前、瑠璃の試合が午後になった。
『只今より、準決勝戦を開始します。0824A 月下結衣選手、
322E 天戸零選手はステージ中央へお集まり下さい』

放送を聞いて立ち上がる。

「じゃあよろしく、結衣」

「うん！ 久しぶりだね」

もうすっかり普段通りになった結衣が嬉しそうに髪を結って刀を手に取る。それほどこの試合が楽しみだったということだろう。確か、戦ったのは4年前の道場での稽古が最後だったはずだ。

（あれからどれくらい成長しているのか……）

楽しみにしていたのは零も同じだった。結衣は昔から、速さだけでなく重夫に匹敵するのではないかと思わせるほどの才能を発揮していた。ただ制御が甘く、一振り目を避けられると大きな隙が生まれる。

「試合開始！」

魔力を練ったのは同時だった。お互いに魔力を体内に循環させる。

身体強化

そのまま結衣は刀を構えた。刀身を地面と平行にして先端を零に向け、息を大きく吐く。

陽の構え

先程までののんびりした表情の面影はまるでなく、別人ではないかと思わせるほどの空気を纏った。なんとも懐かしい空気だ。

地面を蹴ったのは一瞬。

その一瞬の間に、結衣の刀は零の目の前にあった。

想像以上の速さに判断が遅れる。進すすむの強化した状態よりもさらに速い。おそらく纏う魔力の密度の違いだろう。零は刀の軌道を、結衣の腕を半径とした円運動の計算を用いて弾き出し、持っていた小刀で冷静に受け止めた。

続いて結衣の薙払い

これは今見た速さから結衣の筋力を推測し、そこから導き出される加速度から刀が届くまでの時間を計算してかわす。

最後の突き。

零はこれ待っていた。

自ら前進すると結衣の懐に潜り込み、隙だらけの右腕を掴んで投げようとした。

(……………?)

異変に気付く。

強化されているにも関わらず、結衣の抵抗する力はあまりにも弱かった。不審に思っただけで確認すると、結衣の強化が解けている。代わりに左手に魔力が集中していた。

(マズイ……)

急いで投げるのを中断すると魔力を練り、大気中の水分を凝縮させる。

結衣の左手から雷が放出されると、間一髪のところまで零の氷の盾がそれを防いだ。

休む間もなく、結衣が長刀を逆手に持ち替える。

結衣の左手からの攻撃に気をとられて、右から攻撃に対する注意が疎かになった零に、容赦ない一撃が迫る。

一方の零の判断も早い。

前か、後ろか。

考えるより先に体は走り出し、結衣に向かって体当たりをする。宙を舞いながら放った結衣の一撃は、紙一重の距離を残して空を切った。

目の前で繰り広げられる攻防に、観客全員が釘付けになる。もはや子供同士の戦いではない。達人同士の戦いと言っても、誰も異論を唱えないだろう。

結衣が構えを変えた。

今までの構えと違って、今度は刀を下段に構える。

陰の構え

力で押す『陽』とは逆に、『陰』は相手の力を利用する構え。故

に「強化」を施す必要がない。

零は距離をとった。

無闇に攻撃するのは危険だと判断したからだ。そのまま利用されてカウンターを食らう可能性がある。

そう考えるのも束の間、結衣の周囲に魔力が集中していった。その魔力の質に眉をひそめる。

これは「魔法」ではない。もう一段階レベルが高いもの……

判断すると同時に、魔法陣が現れる。

魔法の上級技「術式」

理魔法：雷：スパークブラスマ閃光雷鳴弾

広範囲の空間に電撃が走る。

いくつもの雷が落ち、零の周りの地面が窪んだ。

命中するのは時間の問題か。

いくら零でも、雷の落下点まで割り出すことはできない。

零は走り出すと、唯一の安全地帯に向かった。その場所とは結衣の周辺だ。

結衣は零が近づくのを確認すると再び構えを変えた。

刀を鞘に納め、目を閉じる。

抜刀一線の構え

実戦においては、対戦者のどちらがどれだけ早く相手の急所に手を伸ばせるかが勝敗を決める。

この構えは、それを念頭に置いた『月下流』の真骨頂。鞘走りを利用した東国最速の剣技。

(……なるほどね)

結衣の気迫に、零は唇の端を僅かに釣り上げた。

『陽』で打ち合い、『陰』で距離をとらせ、『術式』で攻撃。そこで近づいてきたところを『抜刀術』で迎撃する。

おそらく前もって考えておいたであろう作戦だ。零が夜、つまりないことで悩んでいる間、きっと結衣は布団の中で賢明に考えていたのだらう。

今日のこの時のために。

ならば、それに真つ向から立ち向かわなくてはならない。

零は足を踏み出した。

結衣の抜刀術の射程範囲は半径23mから。もうすぐその射程に入る。

零は全身の神経を集中させ、五感を使って空気の流れを感じ取った。

「感覚」が上か。

「速さ」が上か。

零はその射程に足を踏み入れた。

18話 天戸零 vs 月下結衣（後書き）

戦闘描写……書きにくいですね。

読み辛かったら申し訳ございません…

19話 一緒にいる理由(前書き)

おや？ アカリが……

19話 一緒にいる理由

一人の男が国立カルディナ学校の門をくぐった。

年齢は30代半ばくらいだろうか。白いスーツに白い帽子、それにキザったらしい仕草が周囲の人々の目を引いた。

そんな視線などお構いなしに、男はポケットに手を入れたまま電光掲示板に目を向ける。

『準決勝戦 月下結衣 vs 天戸零』

男はそれを見ると、さも愉快そうに、ヒュ〜と口笛を吹いた。

「明日……明日だな」

男はそう呟くと、相変わらずキザったらしい仕草で帽子をかぶり直し、くるっと回転してその場を後にした。

結衣が動いた。

風と一体化したような速度で、射程内に入った零に向かって駆け出す。その時間は1秒にも満たない。

零はギリギリまで結衣の右手に注目した。

強化 の密度を、目：腕 8：2 に調節し、耳を澄まし、空気を読み、結衣の動きの解析に全力を注ぐ。

結衣の刀が鞘を走る。

どれほどの速さかは見当がつかない。おそらく一瞬というよりはゼロタイムに等しいだろう。

零は動かない。
空間を一筋の光が流れた。
まだ動かない。
刀が迫る。
まだ動かない。
刀が届く。

そこで、ようやく動いた。

甲高い音が空間を震わせる。
目を見張る大衆の視線の先には、軽い笑顔を浮かべる両者の姿があった。

「……さすがだね」
「ギリギリだったけどね」

結衣の刀は、零の小刀の柄で防がれていた。
あまりの速さに、刃を返している暇がなかったためだ。
何かが焦げた臭いが鼻をつく。
超速により、結衣の靴は擦り切れて、少し溶けていた。

零は予め組み上げておいた術式を展開させる。

理魔法：氷ワイト・ケージ：氷壁拘束檻

その瞬間、氷が結衣の四肢を氷漬けにし、動きを封じた。

『し、勝負あり！！』

大歓声の中、審判の音が響いた。

零は術式を解除すると、結衣に肩を貸す。結衣は嬉しそうに零に寄りかかってきた。楽しかった。

こんな気持ちになったのも、久しぶりかも知れない。

「おかえりなさい」

「ただいま……って、またそれ着てるんですか？」

いつの間に着替えたのやら、鏡花はまた制服を着ていた。相も変わらず似合っている。

結衣達と並べば、10人中9人は姉妹だと勘違いするだろう。

「それにしても姉さん、惜しかったわね」

「あはは〜 やっぱり零君は強いよ〜」

「でも最後は本当に危なかった。随分と腕を上げたね」

これは嘘偽りのない本音だ。

結衣は4年前とは比べ物にならないくらい強くなっている。かつて零が指摘した一振り目の後の隙も、完全になくなっていた。

「当たり前だ。お前が出ていった後、こいつらはお前に追いつこうと必死で稽古してきたんだ。それこそ血の滲むような稽古をな」
「へえ」

重夫の言葉に感心して二人を見た。ということとは、芽衣も相当強くなっているということだろう。余計にあの「古池」が憎たらしい。大体あいつの戦い方は卑怯だ。しっかりと地上で戦えば、芽衣なら余裕で勝利できたはずだ。

「クソッ…… 今度会ったら顔面パンチでも食らわそう」
「誰にですか？」

「古池のガキに……って、おお！」

顔を上げると、古池淳が目の前にいた。

すぐにその顔面に左ストレートをぶつ放す。

パンという音と共に、淳が勢いよく吹っ飛んでいった。
うむ、爽快である。

「な、何をするんですか!!」

「いや、まさかわざわざ殴られにくとは思わなかった。大したマゾっぶりだ」

抗議の声を上げる淳に対し、晴れやかな笑顔を返した。その様子を、芽衣が啞然とした表情で見つめる。

「あ、天戸零！ あなたは僕に……」

「あれ？ そっぴやアカリは？」

「聞きなさい！」

横でキャンキャンうるさいので、仕方なく聞いてやることにする。

「天戸零！ あなたは僕に勝った男です」

「あーあー」

「明日、優勝しなければ僕が許しません！」

「あーあー」

「……聞いているのですか」

「あ？ 誰だお前？」

「聞いてないじゃないですか！」

本当にうるさい奴だった。会った時からコイツは嫌いだった。本当なら、今話しているのだから嫌だった。これ以上話していたら耳が腐ってしまうかも知れない。

「零くん、そちらはどなたかしら？」

「ああ、鏡花さん。気にしないで下さい。俺に負けたただの敗残兵チキンです」

「くそつ　くそおおお！！」

そのまま淳は泣きながら去っていった。二度と関わりたくないものだと思った。

「はい、これね」

「……ありがとう」

明は瑠璃から缶コーヒーを受け取った。種類はブラック。

明は普段コーヒーを飲む人間ではない。なぜ今飲んでみようかと思っただのかと言うと、少しでもあの無神経な少年が理解できるかも知れないと思ったからだ。

「どう？」

「……苦い」

「ふふつ　ま、そりゃあね。私が飲もうか？」

「……お願い」

瑠璃は笑うと、明から缶コーヒーを受け取った。

そのまま口をつける。

「瑠璃は……」

「うん？」

「よくコーヒー飲むの？」

「んー 結構飲むよ。昔は全然飲めなかったけどね」

「そう……」

明の問いに、瑠璃はコーヒーが飲めなかった頃の自分を思い出した。

確かあの頃、最初は砂糖を大量に入れていた。ブラックなんて夢のまた夢。こんなものを好んで飲むなんて、どうかしているとすら思った。それでも、頑張って飲み続けた。序々に砂糖の量を減らし、ブラックに近づけていった。我ながら健気な自分に苦笑する。

「……零が飲むから？」

「ぶっ！ ごほっ！ ごほっ！」

凶星だった。

明の鋭い一言に、盛大にむせる。

明の言う通り、コーヒーが飲めるようになった理由は、零と一緒に飲み物を飲みたかったからだだった。

なんとも下らない理由だが、あの頃は幼いながらに必死だったのだ。

「瑠璃、単純」

「な、なに言ってるんの明ちゃん！ 違ってる！」

瑠璃が真っ赤になって首を振る。

そのセリフは、見ていて残念になるほど説得力がない。

明は溜息をついた。

自分にはない零との思い出を持っている彼女を、羨ましいとも感じた。

明は零がいるであろう場所へと向かった。

きっと彼は重夫達と一緒にいるだろう。

月下家

零がかつて暮らしていた場所。

天戸零という人間の根本を育んだ場所。

泊まってみてわかった。

零はあの家を愛している。

そして、どうしても自分は場違いなような気がしてしまう。

皆が過去を持っていた。

瑠璃も、結衣も、芽衣も、

全員が零と思い出を共有していた。

(私には……ない)

本当に、自分は零と一緒にいていいのかわからなくなってしまった。

おそらく、三人とも零に気がある。

その中で、零のことをどう思っているかわからない自分が、最も零の近くにいていいのだろうか。

いきなり出てきて、同じ境遇だという理由だけで、零とずっと一緒にいたいなどと思ってしまうのはひどく贅沢なのではないだろうか。

か。

他の女の子と一緒にいて欲しくないと感じる自分は、独占欲剥きだしの醜い人間なのではないだろうか。

考えれば考えるほどわからなくなる。

「お、アカリ、どこに行ってた？」

見知った影が近づいてきた。

零だ。

「どこにもいないから探して……ん？」

不審そうな顔で明の顔を覗き込んだ。

しばらくして左手を顎にあて、考えるような仕草をする。

「……何があった？」

普段信じられないくらい鈍感なくせに、こつこつ時は鋭い。

零の口調は、何かがあったと確信するものだった。

「何も……ない」

「嘘だな。そんな顔してるアカリは初めて見た」

有無を言わさぬ口調で詰め寄る。

零は、明の無表情の下に隠された感情を、しっかりと読みとっていた。

「零は……」

「ん？」

「月下家には戻らないの？」

明の問いに、零は意外そうな顔をした。
まさかそんなことを明から聞かれるとは思っていなかったためだ
ろつ。

少ししてから苦笑して、しかしはつきりと答えた。

「戻らない」

「……どうして？」

零はあの家を愛しているはずだ。それは昨日のことで明白だった。

「あの家には、これ以上迷惑はかけられない」

207

そう言う零の表情を見て、明は重夫の言葉を思い出した。

俺じゃ駄目だった。

重夫が言っていたのはこのことだろうか？

同時に、もうひとつ思い出した。

アカリちゃんだけだ。

私だけ……

私だけが出来ること……

(それなら……)

「ん？ どした？ もしかしてそれだけ？」

「そう。零、ありがとう」

「あ、ああ。まあそれだけなら、それでいいや」

急に機嫌がよくなった明に、零は首を傾げる。
そんな零の腕に、明は抱きついた。

「おわっ！ 何？ 何を……」

「零……早く、行こう」

「はぁ…… 一体どうしたんだ？」

そのまま二人は歩きだした。

今は…一緒にいてもいいのかも知れない。

明は頬を染めると、抱きつく腕に力を込めた。

19話 一緒にいる理由(後書き)

評価して下さい。ありがとうございました。御座います。

これからも応援よろしくお願いします！

20話 あちこちで(前書き)

今回は極端に短いです。

ちなみに、主要キャラは出ません。
ごめんなさい

20話 あちこちで

「負けたわ」

「千鶴、お疲れ。でもよく頑張ったじゃないか」

宮城進は戻ってきた幼馴染に声をかけた。

「これで決勝はあの二人ねえ」

「ああ、全てお前の言った通りになった」

「うふふ、これで卒業まで、私のお昼は進の奢りね」

進は笑う千鶴に向かって苦笑いを返した。

「それにしても……何かしらね。あの規格外な展開速度」

千鶴の言葉に無言で頷く。それは進も思っていたことだった。

天戸零にしる神無月瑠璃にしる、「術式」の展開スピードが速過ぎる。

月下結衣との試合でもそうだったが、最後に彼が使った術式はほんの一瞬の間に構築された。あれでは動きようがない。

（俺の時はほとんど体術だけだったが…）

やはり手加減されていたのは間違いなさそうだ。

怒りはない。むしろ感謝している。

実力も出せないまま負けてしまったら、卒業後の進路にも影響が出る。取りあえず、自分の力はどこかのお偉いさんに見て貰えただろう。

(彼らは……卒業後どうするのだろうか)

圧倒的な力を持つ二人のことを考えた。

零と瑠璃が、それでも実力のほんの一部しか出せない状況にあるとは、彼らに知るよしもない。

〈職員室〉

「やはり、こうなりましたか」

教頭、ケビン・フロルは眼鏡をかけ直した。

先程、神無月瑠璃が勝利し、決勝はイレギュラーな二人の対戦となった。予想はしていたものの、実際そうなってみるとやはり驚きを隠せない。

「さて片山先生、天戸零のAクラス昇進は決定でいいですね？」

「……俺、結構アイツ好きだったんですけどね」

片山徹が少し残念そうな顔をする。

スペックが高いくせに、妙にいじりがいのある零を、徹は気に入っていた。

それを見た浅沼幸平が口を開く。

「徹、諦める。天戸の力はさんざん見たはずだ。少なくとも学生時代のお前よりは強い」

「んだ？ それを言うなら幸平だって同じだろ」

二人は学生時代からの同期だ。故にお互いを名前で呼び合い、時々このような口論が起こる。別に仲が悪いわけではなく、むしろ逆でとても良い。それがわかっているのも、ケ빈は二人を放置して藤本香織へ顔を向けた。

「藤本先生、またもう一人増えることになりましたが、よろしいですか？」

「はい！ まあ、生憎彼とは面識がありますからね」

「…ああ、なるほど」

そう。

彼女の担当科目は「言語学」

天狗になりがちなAクラスの生徒の豊かな人間性を育むための大切な科目。

そして、零が最も苦戦している科目。

(どうなることやら)

ケ빈は腕を組むと、書類に目を落とした。

「さあて、いよいよかしらね」

女の活発な声が響いた。東国の言語ではない。

その声は弾むような口調で、パーティー前の子供達を連想させる。

服装は極めて派手だ。

全身にアクセサリーを取り付け、歩く度に金属音が響く。

しかし、誰も女の方を振り向かない。

あまりにも目立つ格好のはずなのに、すれ違った人でさえもその女に目をむけようとしない。否、女に気付いていないのだ。

別にそれに気にした様子もなく、むしろ当然だという顔で女は人々の中を歩く。

「……あららら」

突然足を止めた。

苦い顔をしながら、向かってくる人影を眺める。

その人物は白いスーツ、白い帽子、赤いネクタイ、それに、口元には微笑を浮かべていた。

今朝のキザったらしい男だ。

それを確認すると、女は耳についたリングに指を通し、リィインと音を響かせた。

「「「!?!?!」」」

人々が驚いた顔で女を見る。

100人いたら100人が振り向くであろう格好をした女に、今まで気付かなかったことを驚愕した。

異質なこと。

普通なら有り得ないこと。

それでも、その現象は確かに起きた。

「アンタも観戦？」

さつきとは違う言語で白いスーツの男に問いかける。

この言語を知らない人間はいない。

大陸共通言語、別名CL(Central Language)
と呼ばれるものだ。 問いかけられた男も同様の言語で答える。

「もちろんだ。こんな面白い戦いを私が見逃すと思うか？」

そう言っつて帽子をかぶり直す。

女は嫌そうな顔をした。

「まあ、誰かに会うんじゃないかとは思ったのよ。よりによってア
ンタとはね」

「お前は何のために来た？ まさか貴様が観戦のためにだけにわざわざ西から来るとは思えない」

そう言う男に対し、女は得意気な顔で鞆に手を入れた。

中から数枚の写真が現れる。

それに、納得したように頷いた。

「なるほど。隠し撮りとは相変わらず趣味が悪い」

「苦労したのよ。あのコの気配察知力は尋常じゃないからね。この
アタシが660m離れた暗闇から、細心の注意を払って撮影したの
よ」

「高性能なカメラを無駄なことに使うな」

男が呆れたように言い放つ。

真横にいても気付けない程に気配を殺せる彼女が、そこまでしな
ければならない人物。

その人物に驚きを表さないのは、それが当然のことだからか。

「ま、おかげでたんまり儲けたけどね。売り上げは想像以上よ」
「フツ 奴も大変だ」

写真を見ながら男が笑う。

「あー ところでアンタだけ？ もう一人ぐらい来るんじゃないか
と思ったけど。婆さんとか、どうせ暇でしょ？」
「直接は来ないだろう。もしかしたらその辺に目が浮いてるかも知
れないぞ」

「……………気持ち悪いこと言わないでくれる？」

女はゲンナリした顔をした。

「それなら、あの熱血バカは？」
「『リミットステータス制御状態での戦いなんかつまらない』とか言ってた」
「……………いや、全力でやられたらこの国なくなっちゃうでしょ」
「それだけで済めばいいがな」

聞いたら目ん玉が飛び出そうな話を、平気な顔をして語る。

「アンタは聞いてる？ 今度の集まりのこと」
「聞いている。再来月の17日に中央に集合セントラルというものだろう？」
「そう。なんか『牙』の連中が動いててね」
「キバ？ 東寄りの……………この国の周辺ではないか」
「だからアタシがここにいるのよ。もう少ししたらまた潜ってみる
つもり」

アクセサリーを弄びながら楽しそうに言う。

一方の男はヒュ〜と口を鳴らした。

彼らの腕には、零や瑠璃と同じような黒い腕輪がついていた。

20話 あちこちで（後書き）

次回は決勝戦になる…かな？

毎度読んで下さってありがとうございます〜御座います〜

21話 雲の上の戦い 前編(前書き)

前置きが長くなりました。

後編へ続きます。

21話 雲の上の戦い 前編

幻想的な風景が広がっていた。

空は赤から紫までの七色に染まり、昼間のように明るい。

それにも関わらず、宝石を散りばめたような星がキラキラと輝いて、乳白色の銀河系を形成している。

まるで、神様の涙がそのまま川になったかのようなようだ。

「リリ……」

不意に少年の声が響く。

少年は、漆黒の髪を風に揺らし、見るもの全てを恋に落としそうなほど嘆美な笑顔で語りかけた。

「零……」

一方の少女も、同様に少年の名前を口にしながら近付いた。

お互いに手を取り合う。

二人の表情は晴れやかだった。

今この瞬間、世界で最も幸せなのは彼らだと主張しても、異を唱える者などいるはずもないと確信させるほどに、二人は幸せそうな表情を浮かべていた。

彼らは抱き合うと目をつぶり、顔を近づける。

その唇がまさに今、重なり合おうという瞬間

ピピピピピピピ

「……………」

無機質な電子音が部屋に鳴り響いた。

神無月瑠璃は布団から出ると、忌々しそうな顔で眠りを妨げた悪魔を見据えた。

……まあ、確かにお決まりだ。お決まりだけでも！

瑠璃は憤る。

あと1秒！ あと1秒待ってくれてもいいじゃん！

(も~~~~ サイク！)

そこまで考えてから、自分が見た夢を思い出して赤面した。何故あんな夢を見たのだろうか。

今日が決勝戦だというのが影響してるのだろうか。

瑠璃は立ち上がると、洗面所へ向かった。

体中が火照っている。

鏡を見ると、トマトに赤いペンキを塗ったのではないかというほど真っ赤な顔していた。

とても他人に見せられる顔ではない。

(うー あー もう！ 私はガキか！)

両手で頬をパンと叩く。

特別なことは何もない。ただ並んで写真を撮るだけだ。緊張する必要などまるでない。

(それが今回の目的なんだから……)

瑠璃は蛇口を捻ると、勢いよく水を出した。

最悪だ。

気分も体調も最悪だ。

零はウンザリした顔で窓の外を見た。

零の心情を知ってか知らずか、外は呆れたように快晴である。思わず、空に向かって術式を打ち込みたい気分に襲われた。

「う、お……」

「……大丈夫？」

零は首を回すと、顔をしかめながら呻き声を出した。

夕べは椅子に座っていたら、30分ほど意識が飛んでしまったのだ。首はその時痛めた。

「ちゃんと布団で寝ないから、そうなる」

「布団ひとつしか買ってないし。アカリと一緒に寝ればいいのか？」

「エッチ」

「……何を想像してるんだよ」

無表情のまま目線を冷たくした明に対し、盛大な溜息をついた。

昨日寝顔を見られたたことをまだ怒っているのだろうか。それにしては機嫌が悪いような気がするが。

「ま、何にしても」

零が背伸びをする。

「今日は頑張りますかね」

そう言ってあくびをした。

「すごい数ね…」

月下芽衣は、学校に集まった人の数に目を丸くした。昨日でさえも相当な人数だとは思っていたが、今日の数はそれを遙かに越えている。やはり決勝ともなると、注目の度合も違うのだろう。

「姉さん、瑠璃先輩って、確か前回姉さんが戦ったのよね？」

「そうだけど……」

「どうだったの？」

芽衣の問いに対し、結衣は何かの幼虫を噛み潰したような顔をした。

「強いよ…… なんか、零君みたい」

「レイみたい？」

「うん、気配というか…次元というか…」

結衣は、零が昨日日本気を出していないことを知っていた。

追い付きたくても、まだまだ遠くにいると感じてしまった。

瑠璃を前にすると、どうしても対抗しようとしてしまうのは、彼女が零の横で戦える力を持っているが故だろう。

「あれ〜？ ところでお母さんは〜？」

「……あっちの方で男子に声かけられてた」

芽衣の呆れたような顔に、結衣は楽しそうに笑った。

『では、対戦者の登場です！』

マイクを持った元気な女子生徒が声を張り上げた。それに伴い、ワァアという歓声上がる。

零は知らなかったが、決勝戦は始まる前に、対戦者にインタビュ―があるらしい。何とも面倒なものだ。

『まずはこの方！ 二種類の魔法を駆使し、舞うように戦う無敗の女王！ 3学年の神無月瑠璃さんです！！』

瑠璃が登場する。

その瞬間、「ウオオオー！」という声が上がった。

さすが、男子生徒には人気があるようだ。

『続いてこの方！ 赤点ながらも見事1位を獲得し、Eクラスながら決勝に進んできた今大会のダークホース！ 1学年の天戸零さんです！！』

紹介のされ方に、ぶっ倒れそうになりながら零が入場する。

その瞬間、「キヤアアアー！」という声が上がった。

これには零も驚いた。てっきり、場が静まり返ると思っていたからだ。

『え〜 二人はお互い全く未知の相手になると思いますが…』

（（未知ねえ〜）（）

零と瑠璃は微妙な顔をする。
それもそのはずだ。零も瑠璃も、お互いの実力など知り過ぎるほど知り尽している。

(ねえ、どうする?)

女子生徒が説明している間に、瑠璃から 念話 が届いた。

(どうするったって……)

零が言葉を切る。

この戦いでは、瑠璃の真骨頂である 全属性複合魔法 は使えない。
い。

また、零の十八番の「無属無形の型」も使えない。
使ったら大変なことになる。

(こんな狭いところじゃ何もできないだろ……)

(だよなー)

広大なステージを前にしてそんなことが言えるのは、おそらく彼らだけであろう。

尤も、彼らにとって「十分な広さ」と言えば、大陸の何分のいくつを必要とするかわからないが。

所詮、《組織》の人間は異端の中の異端
人にして人に非ずなのだ。

(だいたい、変なことしたら王様に怒られるだろ?)

(うーん、確かにそうかも)

(ま、適度に軽くやりましょうや“相棒”さん)
(オーケー！)

満天の笑顔で瑠璃が頷いた。

『では、二人に意気込みを述べて貰います！ 神無月さん！』

『はい、えーとボチボチ頑張ります』

『天戸さん！』

『まあ、いつも通りやります』

『二人とも、全力で悔いのないよう頑張ってください！！』

(いや全力出せないし…)()

零と瑠璃は苦笑しながら頷いた。

『只今より、決勝戦を始めます。それでは試合開始！』

決勝戦は放送によって試合が始まった。

瑠璃は術式を展開させる。

その数は四つ。

(……これでこの反応か)

零は観客席を見て、思わず笑ってしまった。

全員が一樣に、顎が外れて床につきそうな顔してる。

これは相当抑えて戦う必要があるそうだ。

驚くのも無理はない。

「術式」は、使えるだけでステータスなのだ。組み上げるのも5〜6秒かかる。その上、2つも同時展開できる人間が、果たしてこの大陸に何人いるのか。

それに対し、目の前の少女は4つも同時に、しかも1秒にも満たない時間で展開させたのだ。

元々、単純な魔法勝負なら瑠璃に分がある。

零の場合、術式の展開まで2秒はかかる。それでも異常な速さだが、達人同士の撃ち合いにおいて、1秒は天と地の差がある。

理魔法：火：火球

ファイア・ボール

高熱のエネルギーの塊が零へ向かう。

一つは直接

二つは回避させないため

そして、最後の一つは本命だろう。他の火球よりひと回り大きい。

零はすぐに、受け止めるという選択肢を捨てた。

零の「魔法」で作りだした氷の盾など、「術式」の前では何の意味も成さない。貫通するのが目に見える。

零は魔力を練り、持っていた小刀に冷気を纏わせた。

武器属性付加：氷

そのまま 強化 を施し、走り出す。

あるものは弾き、あるものはかわし、あるものは流す。

地を舞うように、最小限の動きで丁寧かつ冷静に対処していく。

さらに、魔力を練った。

小刀に氷が集まり、その形を変えていく。

武器形状変化：大鎌

実は、氷属性を選択した一番の理由はこれだった。

自由に武器の形を変えることができる。

それはすなわち、【万能者〈オールマイティ〉】としての力を反映させやすいということだ。

零は地を蹴ると瑠璃へ接近する。

空中で大鎌を振った反動を利用し、体勢を整えてそのまま一線。空気を斬り裂いたかと錯覚させるほど鋭い一撃を見舞った。

22話 雲の上の戦い 後編(前書き)

3日間更新できなくてゴメンナサイ

急いで投稿したので、誤字脱字が多く、読みにくい可能性が大です
(汗)

22話 雲の上の戦い 後編

コンクリートをノコギリで削ったような鈍い音が響いた。

(ま、そう簡単にはいかないよね)

内心でそう呟くと、零は大鎌を防いだ「物体」を見据えた。
奇妙な撫で肩、3m程の長身、無機質な表情

召喚魔法：土人形^{ゴーレム}

ゴーレムはその太い腕で零の氷の鎌を掴むと、そのまま粉々に握り潰した。

なおも、未だ空中にいる零に殴りかかる。

零は体を捻り、足をゴーレムの方に向けると、その腕の動き合わせて膝を曲げ、バネの原理を用いて瑠璃と大きく距離をとった。

零は一旦深呼吸すると、頭を回転させる。

斬撃武器は相性が悪い。土人形を撃破する方法は主に二つ。

ランス^{ランス}で貫くか、大槌^{ハンマー}で粉碎するか。

ただ、どちらにしる今の零には問題があった。

確かに氷を纏わせて武器の形を変えることはできる。しかし、それはあくまで「形状を変化」させているだけであり、実際の武器よりの性能は大きく劣る。

故に、撃破するまで零の武器の耐久値がもたない可能性があった。

土人形^{ゴーレム}はとにかく 堅い。

動きは鈍いが、その分普通の攻撃や魔法ではびくともしない。

攻撃が二発入って、何とかなるかどうか五分五分という所だろう。

「！」

完全に油断していたためか。一瞬判断が遅れた。

零がそれに気付くことができたのは、背後で何かが風を切る音が聞こえたからだ。

後ろを振り向く間もなく、本能に従って全身のバネを左に傾ける。爆音と共に、零が今いた場所には巨大な拳が降ろされていた。

(もう一体いたのか……)

ゴレム
土人形

しかし普通のものではない。

さっきのとは違って、コイツは手の部分だけが異常に大きく、代わりに全身が細い。その姿は異形。存在は不気味そのもの。

召喚魔法：狂った土人形
マッド・ゴレム

ただのゴレムよりも動きが速く、かつ攻撃的なゴレムの亜種。このゴレムは厄介なことに、知能が低過ぎて感情というものを持っていない。つまり、殺気がないということだ。零は基本、殺気を頼りに攻撃を察知するので、このような敵とは非常に戦い辛い。瑠璃もそのことを計算に入れて召喚したのだろう。“古池”が召喚の名門だと言うのが馬鹿らしくなってしまいそんな鮮やかさだ。

零は天を仰ぎ、二匹のゴレムと、さらなる術式を展開させる瑠璃を眺めた。

「あっはっは！ 随分とやられてるじゃない！」

派手な格好の女が笑い声を上げた。
その横には白いスーツの男。

「イリス様もえげつないことするわねー なに？ 惚れたコはいじめたくなる性格？」

「うるさいぞ。少しは落ち着け」

男は呆れたように言いながら足を組み替えた。

その仕草は様になっていて、赤い薔薇を持っていたら間違いなく絵になるだろうと思わせる。

二人の存在は誰から見ても異常だった。

まず彼らがいる場所。それは観客席ではない。そこよりもずっとずっと上の方。

つまり空中だ。

空中に二人の大人が浮いていた。男の方は腰まで掛けている。

さらに、そんな目立つ行動をしているにも関わらず、騒ぎだす人間は一人もいない。と言うより、誰も彼らに気付いていない。

「まー 今回の戦いは【万能者〈オールマイティ〉】には制限が有り過ぎるかしらね。武器も魔法も満足に使えないなんて、さすがのあのコでもキツイでしょー」

「それでも、奴がアツサリ負けるとは思えない」

「あら、アンタはそっち派？」

「どちら派でもない。私は私の意見を言ったただけだ」

「フン」

つまらない奴だとしても言いたそうに、女は鼻を鳴らした。

それを気に留めた様子もなく、男は微笑を浮かべて観戦する。

「お前は見たことがあるか？」

「はあ？」

「お前はあの目を見たことがあるか？」

男に言われ、今戦っている少年の目を見る。途端、背筋に悪寒が走った。

氷のような瞳。

戦いながらも、全く別のことを考えているような目。

「……ナルホドね」

「ああ、たぶんな」

「だったら、久しぶりに拝ませて貰おうかしらね。あのコの特技を」

再度笑顔になった女が笑う。

風に揺れて、アクセサリーが「リンツ」という音を響かせた。

足場が全て火の海になった。

零は薙刀に形状変化させた武器を用いて地面を円錐状に抉り取り、瑠璃の炎が進入できない足場を作り出す。

29……28

その少ない足場を目掛けて、二匹のゴーレムが零に襲いかかった。その4本の腕を避けながら、零はタイミングを見計らう。

16……15

瞬間、零の目の前に火柱が上がった。瑠璃の魔法によるものだ。それを確認して、零は魔力を練る。

武器形状変化：大槌^{ハンマー}

そのまま大きく振りかぶり、ゴーレムに向かって振り抜いた。

9……8

零の大槌が砕け散る。

その一撃によって大きくバランスを崩したゴーレムが、瑠璃の炎の渦に飲み込まれていった。

一体撃破。

しかしもう一体いる。

マッド・ゴーレムは、武器も持たず、大きな隙を作った零に、容赦なく拳をおろした。

もちろん、零は無抵抗である。

(あれ？ いけるかな?)

瑠璃が僅かに勝利を思った。

疑問形なのは、この程度で目の前の少年が倒せるとは思っていないからである。零は、今までどんなに劣性でもそれを覆してきた。相手に安心感を与えることすら、彼の計算の内なのだ。ならば今回も……

瑠璃がそう感じた瞬間だった。

1……0

トランプスベル
時間差展開発動

召喚魔法：氷狼
アイス・ウルフ

三匹の真つ白い狼が、地面から突然現れた。

それらはゴーレムの腕を噛み千切り、瞬く間に氷漬けにする。

零はゴーレム二匹の四本の腕を避けながら、その勢いも利用して一力所にダメージを与え続けていたのだ。

瑠璃の予想が見事に的中した、ということになる。

トランプスベル
時間差展開

これは大陸で「万能者《オールマイティ》」にしか出来ないと言われている技である。

その理由は二つ。

一つは、たとえ出来たとしても、タイミングが合わなければ意味がない上に、魔力の無駄使いになるということ。

もう一つは、そもそも魔力のコントロールが限りなく不可能に近い、ということだ。

これを使うには、一度構築した魔法を展開させずに留めておく、という離れ技を行わなければならない。

ある研究者曰く、『つまようじの上に鉛筆を乗せ、その上に槍を乗せて、さらにその上に木の丸太を乗せたものを、指一本でバランスをとることより百倍正確なコントロールが必要』らしい。

ちなみに、この話を聞いた零が、「それは指が痛そうだ」などという180度ズレた感想を述べた時は、『《組織》の人間全員が驚きを通り越して呆れた、というのは余談である。』

形成逆転。

瑠璃はその状況を冷静に分析した。

自分のゴーレムはことごとく破壊され、逆に零の周りには氷狼が三匹。

さらに零の術式が発動した。

理魔法：氷：暴風雪^{ブリザード}

吹雪が吹き荒れる。

瑠璃が作った火の海は見事に氷漬けになり、歪な氷山がいくつも出来上がった。

しかも、白い雪に溶け込んで氷狼の姿が見えない。

彼らの術式は天災に匹敵する。

それ故に、今の狭い（？）場所を吹き飛ばさないよう、威力をかなり抑えている。

勝機があるとすればそこしかない。

瑠璃は目を強化すると、吹雪の中を動く影を探った。

（いた……！）

まず一匹、見つけた瞬間に術式を構成、展開。

理魔法：火：炎渦陣^{エル・ファイア}

一撃で氷狼を撃破。

続いて二匹目、三匹目も同様に撃破。

残るは零だけ……

その瞬間、蛇のように姿勢を低くして疾走しながら、零が小刀を振り抜いた。

全身のバネ、遠心力、全てを左手に集中させた最速の一撃。

（間に合うか……！）

瑠璃は魔力を練ると、自分と小刀の間に土の壁を作り、その一撃を防ぎきった。

（ふい）間に合った）

瑠璃は手で汗を拭く。

零の氷狼は全て撃破した。

零の最速の一撃も防いだ。

これでまたお互い　　ん？

瑠璃は零の顔を見て思考を止める。

笑っていた。

思わずその笑顔にドキツとなる。

零は指をパチンと鳴らした。

氷狼が瑠璃の背後に現れる。

（あっ、もう一匹……）

それは先程自分が零に仕掛けた戦術。

しかも、この時の瑠璃は完全に無防備だった。

氷狼が瑠璃へ向かう。

「チエックメイト」

パリン

小さな音と共に、瑠璃の防具が破壊された。

「最後油断したね」

「いや、それは……」

「ん？」

零の笑顔に見惚れたから……と言いかけて、慌てて口を嚙む。
そんなこと恥ずかしくて言えない。

「どうかした？」

「……何でもない」

『優勝は天戸零さんです！！！！』

大歓声の中、零と瑠璃はお互い笑い合った。

22話 雲の上の戦い 後編(後書き)

次回は校内模擬大会編ラストです！

感想、意見などが御座いましたらどうぞ！

23話 オダヤカナニチジヨウ(前書き)

第2章完結です！

次話から第3章です。

23話 オダヤカナニチジョウ

(伝統なんてどうだっていいじゃない!)

月下芽衣は心の中で叫んだ。

先に断っておくと、彼女は伝統をととても大切に作る人間である。学校行事にしる、月下家の作法にしる、一度も疎かにしたことはないし、これからするつもりもない。その彼女が、何故こんな自己中心的ともいえる感情を抱いたかということ……

「はい、では二人とも、もう少し寄って下さい」

国立カルディナ学校の伝統行事のひとつ。

校内模擬大会の優勝者、準優勝者の記念撮影。

しかも、この写真は歴代入賞者ということで、学校の歴史に永遠と残ることになる。卒業アルバムにも大きく載る。今回の優勝者は天戸零、準優勝者は神無月瑠璃。つまり……

「では天戸さん、神無月さん、撮りますね」

そう、この二人のツーショットが歴史に残るといふことなのだ。

別に二人は何も悪いことはしていない。正々堂々と戦い、1位と2位になったのだ。強い人間が上位に入賞するのは当然のことであり、誰もそれに文句を言う権利はない。そんなことは芽衣だってわかっている。しかし、だからこそタチが悪い。このモヤモヤをどこへぶつければ良いのかわからないのだ。そんなわけで、彼女は「伝統」というものに、不満をぶつけているのである。

「う」

浮かない声が出た。横を見ると、姉の結衣が自分と同じような顔をして目の前の光景を見ている。自分と違い、結衣はあと一歩だったため、悔しい気持ちも強いのだろう。

「姉さん、声漏れてる」

「う」

ダメだこりゃ…

芽衣は早々に注意を諦めた。

こうなってしまったら、彼女の耳には何も届かない。前に、店で売ってるドーナツを見た時も、同じような反応をしていたような気がする。確か動物の形をしたもので、買って貰ったにも関わらず、最後まで食べるのを拒んでいた。

「……………」

後ろでは明が複雑そうな顔をしている。言葉ではうまく表現できないが… 強いて言うならば困惑だろうか。そしてそれに不安を感じているように見える。最近一緒にいてわかったことだが、彼女は零が絡むと、途端に表情が揺れ動く。今回だってそうだ。本来の明ではこのような顔はしない。

「はあー 可愛いな〜」

小さく俯く明を見て、つい言葉が漏れる。人形のように美しい彼女が悲しそうな顔を見ると、哀愁漂うものがある。これを見ていたのが自分ではなく母親の鏡花だったら、間違いなく押し倒していただろう。

(うう　ただでさえ強敵が二人もいるのに…)

芽衣は人目も気にせず、大きな溜息をついた。

零と瑠璃がいる所から平面距離で約200m、地上からの高さ約300m、直線距離にして約360m。普通の人では目を強化しても視認が難しい距離の空中に、二人はいた。

「さーて、楽しい戦いも終わったし、アタシはまた潜ってみるとするかしらね」

「ふむ、私も帰るとするか」

女が背伸びをし、男が立ち上がる。

その瞬間だった。

(どうも、【夜霧《ユリシイズ》】に【天空神《ウラヌス》】)

脳内に声が響く。念話だ。しかもC.L。セントラル・ランゲージ。咄嗟に遠方を見ると、天戸零がこちらを見て笑っていた。どうやら、完全に気付かれたようだと悟った二人はそれを見て、苦笑と微笑を浮かべた。

(あらー　やっぱりこの程度の距離じゃバレちゃうか……)

(お久しぶりですエイダさん。観戦ですか?)

零がどこか茶化したように言う。

(見てたわよー　随分とスケールが小さい戦いだっただじゃない?)
(観客全員を氷漬けにしてもいいなら、もっとやりましたけどね)

(おー コワイコワイ)
(冗談ですよ)

もはや原型を留めないほどにボコボコのステージを前にしても、こんな会話ができるのは彼らだけの特権だろう。

(時にオールマイティ、お前は今度の集まりは知ってるか?)

(いえ、まだ聞いてません。そのうち手紙が来ると思いますけど)
(再来月の17日だそうだ)

(あれ? 変わった時期ですね。わかりました。リリにも伝えておきます)

(頼む。では私はこれで)

(アタシももう仕事するからー じゃーね坊や)

(……ああ、はい)

それを境に 念話 が切れた。

神無月瑠璃は緊張していた。

心臓はバクバク。顔はカチカチ。

魔獣討伐の任務の時ですら、周りから「緊張感なさ過ぎ」と言われるほど自然体な彼女が、ここまで緊張しているのにはワケがある。

「はい、では二人とも、もう少し寄って下さい」

優勝者と準優勝者の記念撮影。

一方の零はいつも通りの平常心。しかも、どこか遠くのほうを見て苦笑している。

(人の気も知らないで…)

瑠璃はその態度に大きく溜息をつく、内心で毒づいた。

「では、撮りますねー」

「……リリ、顔が怖い」

「うっ… しょうがないでしょ!」

「何でそんなに緊張してんの?」

「零は緊張しなさ過ぎだつて!」

カチカチになっている瑠璃を見て、零は吹き出す。そして、瑠璃をフワツと抱きかかえた。

曰く、お姫様抱っこというやつだ。

突然のことに、瑠璃が目を白黒させる。

「なっ なっ なにを」

「リリ、覚えてる?」

「はあ!？」

「初めての共同任務の時」

「あ……」

零の言葉で一気に頭が冷えた。

覚えていないわけがない。初めて零と一緒に任務をこなした時のこと。まだお互いにそこまで親しくなかったときのこと。

「……覚えてるよ」

「この状態で俺が走ってたよね」

零が苦笑を漏らす。

「知ってた?」

「ん？」

「あの時、私は死ぬつもりだったんだよ」

瑠璃が笑う。いつもと違う、どこか影が差す笑み。無理をして笑っているようにも見える。

そう、瑠璃はその任務で死ぬもりだった。

生きていても仕方がないと思った。それに、死ぬことも怖くなかった。

魔獣の群れの中に、自ら飛び込んだのだ。

それを、零が助け出した。

「私さ」

「……」

「あの時、零を恨んだんだよね。なんで死なせてくれなかったのかって」

「……」

「でもね、すぐ間違いだったって気付いた」

零のことを知り、自分はなんて勝手な思い込みをしていたんだろうと思った。

自分が一番不幸だと勘違いしていた。

悲劇のヒロインを気取っていた自分が恥ずかしくなった。

決して見下す、という意味ではないけれど、彼が懸命に生きているのに、自分は何なのかと思った。

「私ね、感謝してるよ、助けてくれたこと」

「……」

「死んでたら、今こうして皆と、うっん零と一緒にいらなかったから」

「……」

「だからさ、零」

「……」

「ありがとう」

先日、零に言われた一言。

いつか自分も、零に言おうと思っていた。

悲しそうに言うのではなく、満面の笑みで。

その笑顔を見た零も、笑顔を返した。

パシヤ

「「あ」「

シャッター音に、二人が固まる。

「いやー 御免なさい」二人ともいい笑顔だったから、つい撮っちゃった」

写真屋の人が可愛く笑う。まるで鏡花さんみたいな人だ。話をさせたら、きつとウマが合うだろう。

「どうします？ 撮り直しますか？」

「あー」

瑠璃のほうを見る。

体から湯気を出して倒れていた。とても起き上がれるようには見えない。

「……まあ、いいんじゃないでしょうか。彼女はあの様子ですし」

「わかりました〜 ではこの一枚だけでよろしいですね？」
「はい、お願いします」

写真屋さんと別れ、倒れている瑠璃を抱きかかえる。
軽い

それは17歳の少女の体重。

(こんなのが最高クラスの魔道士だもんな)

小さな少女に対し、笑みを漏らした。

『ありがとう』

瑠璃の言葉が甦る。

当時は、重夫の教えを守ることと頭がいつぱいだった。そのため、自ら死にゆく瑠璃を見て、我武者羅に助け出したのだ。けれど、その行為が彼女の今に繋がっているとしたら…

(俺が生まれたのも、意味が……)

腕の中で目を回す少女に、再び笑いかけた。

「零君！」

「はいっ！」

大声を聞いて、後ろを振り向く。
結衣、芽衣、明がジト目で見ていた。

「…な、何でしょうか皆様」

「何でわざわざお姫様抱っこで撮るのよ〜!」

「いや、あれは正直な話、事故でして……」

その後、鏡花も加わり、零の弁明は困難を極めた。

今日もニチジョウはオダヤカである。

23話 オダヤカナニチジヨウ（後書き）

思ったことですか？

この世界、まだ1ヶ月しか経ってませんね…

24話 黒い企み（前書き）

第3章です。

おそらく、最後の章になると思います。

24話 黒い企み

面倒(?)な大会を経て、昼のひと時。

いつものメンバー、零、明、瑠璃、結衣、芽衣は食堂にいた。

正直言っただけかなり目立つ。

「得体の知れない1年」の称号を獲得した零、謎の白髪美少女転入生の明、(元)無敗の女王の瑠璃、【雷切】の孫の結衣と芽衣。男女比は考えないことにした。

当初は、周りからの視線が気になったりもししていたが、「仲がいい奴が偶々女子だった」と割り切り、今では開き直っている。自慢ではないが、彼女達以外に心を許せる人間は、この学校にいない。一部の男子生徒から見れば、きつと自分は嫉妬の対象だろう。4人とも容姿はかなり整っているし、瑠璃や結衣は入学してから今まで結構な数の告白を受けているらしい。おそらく、明と芽衣も、これからそうなるだろうが。

(なんか俺、場違いだな)

零本人は、自分の容姿に全く自覚がない。

「ん?」

ふと、人影がこちらに近付いてきているのを感じた。

零の集団はあまりにも個性的な面々で、話しかけてくる生徒など今までにいなかったため、かなり珍しいことだった。……実は、それが月下姉妹の企みだったりもする。

「こんにちは、天戸君」

「藤本会長と宮城副会長? こんにちは。どうされました?」

やってきたのは藤本千鶴と宮城進だった。

「少しいいかしら」

「ええ、構いませんよ。生徒会のお誘いなら断りますが」

零が先手を打った。

この二人が零に話しにくることなど限られている。かつて瑠璃も勧誘された、という話を聞いていたため、自分もされるのではないかと思っていたのだ。そして今は丁度大会も終わった時。タイムイン格的にはピッタリだろう。

「あら、用件はわかっているみたいね。話が早くて助かるわ」

零の予想は当たっていた。やはりお誘いのために来たようだ。しかし、零の先制パンチが効いているかどうかは甚だ疑わしい。まるで断られるのが分かっていたような口ぶりである。

「天戸零君、あなたに生徒会役員になって貰いたいのです」

「そうですか。お断りします」

何とも言えない空気が漂った。千鶴も零も、お互いに笑っているが、それは心からの笑みではない。腹の内を探るような笑みだ。周りにいた人間も脂汗を滲ませながら、その光景を見つめる。

実際に、零は生徒会の仕事などやりたくはない。いつ任務が入って欠席することになるか分からないし、そんな状態で引き受けるのも、明らかに無責任だ。

「理由を聞いてもいいかしら？」

「逆にお聞きします。なぜ俺を指名するんですか？ 他に適任の人

ならいくらでもいるでしょう」

「あら、あれだけの頭脳ブレインと戦闘技能アクティブスキルを持っていて何を今更？」

千鶴が楽しそうに言う。

「その二つの要素と生徒会の仕事の関係は？」

「まず一つは書類処理能力。いわばデスクワークね。生徒会は学校の行事等に、予算や人員を割り当てて、正確かつ効率的に事を進める必要があるわ。もちろん限られた時間内で。頭の悪い生徒には出来ないことね。二つ目は抑止力。人間は通常、自分より力のある存在には逆らえない生き物よ。それは単純な力的な意味合でも、権力という立場的なことでも。逆を言えば、自分より力のない存在には従わない。この点についても、あなたは合格ね。全校生徒の前で、あれだけの力を示したから。最後は、カリスマ性かしら。この点も、あなたはまるで問題ない」

予め用意していたのかと思わせるほど、スラスラと言う。零はそれを、変わらぬ態度で接した。このような場では、あいての空気に呑まれたほうが負けだ。同時に、空気を自分のものにした者が勝者となる。零は千鶴の主張を全身を耳にして聞き、一つずつ潰していくことにした。あくまで変わらぬ口調で。

「書類処理能力の件ですが、俺は今までにデスクワークというものに携わった経験がありません。正確かつ効率的に進める必要があるのなら、不慣れな俺では本末転倒です。それに、学力はあくまで筆記試験パーテストの結果であって、生徒会の仕事とは何の関係もないかと。次に、抑止力の件ですが、それは生徒がやらなくても、先生がいるのですから、特に問題ないと思われます。おそらく、教員に逆らえる生徒などいないでしょう。そして最後のカリスマ性ですが、俺には何のことだかさっぱり分かりません！」

「「ぶつ！」」

見ていた生徒の何人かが飲み物を嘔き出した。聞いていた千鶴と進がポカンとした顔で零を見つめ、アカリ達は呆れたような顔をした。

しかし本音だ。解せないものは解せない。

零は、自分が生徒を引つ張っていく力があると思えないし、皆がついてきてくれるとも思えなかった。

「神無月さん、彼、まさかいつもこんな調子？」

「……はい、まあ」

「そう… 大変ね」

なにやら意味深なことを言って瑠璃から目を逸らす千鶴。

「ふふ、私、ますます君が欲しくなっちゃったわ」

「…何故ですか」

「今日はもう時間がないから引き返すわ。また後日勧誘しにくると思っけど。進、行きましよう」

「いいのか？」

「また来るって言ってるでしょう。とりあえず今日のところは、よ」

そのまま二人は去っていった。

「ふいゝ 乗り切った」

「レイ、そんなに生徒会に入りたくないの？」

「当たり前だろ。学校の雑用を好き好んで引き受けるほどお人よしじゃないよ、俺は」

はつきりと零が言う。そもそも、なにかに拘束されるのが嫌だった。只でさえ、色々なことに自由を縛られているのだ。これ以上増やしたくはない。と言っても、何をするわけでもないのだが。

「瑠璃、生徒会って今何人？」

「3人かな… 書記と会計が空いてると思ったけど」

それを聞いて納得した。いつから会長をやっているか知らないが、その二つの席に零と瑠璃を入れるつもりだろう。大体、今まで3人でやって来れたなら、今更増やすまでもないと思う。いや、それより驚くべきことは3人でやって来れた事実の方が。どうやら、千鶴達はかなり優秀な生徒会役員のようなのだ。

「そ〜いえば、もうすぐ中間試験だね〜」

「うっ」

結衣が爆弾発言をした。それは零が考えないようにしていたこと。

「零君はまた赤点かな〜？」

「そうね、楽しみだわ」

「いや！ 今回はない！」

「……根拠は？」

明に問われ、自信満々に説明する。

「あのな、補習を受けて分かったことだが、俺は小説が苦手なわけじゃない」

「えっ そうなの？」

「……リリ、そんなに驚かないでくれる？」

「だって……」

「ん〜 じゃあ何が苦手なの〜？」

「それはな……」

全員の視線が集中する。

「『恋愛小説』が苦手なだけなんだ！」

高らかに宣言した。

場が静まり返る。

「前回のテストは恋愛小説が題材にされた。だから俺は全く分からなかったし、それも仕方がなかった。だがおそらく！ 二回続けて恋愛小説が題材になることなど天文学的数値に等しい。よって、今回は出ない！ ならば、俺が赤点を取る要素はない！」

コブシをグッと握る。

「……………普通の小説の問題は解けるのに『恋愛小説』になった瞬間解けないって……………」

「姉さん、レイだから」

「あゝ そうだったね」

「仕方ないだろ。誰かに好意を向けたことも、向けられたこともないし……………」

バキッ！！！！

大きな音が響いた。

瑠璃、結衣、芽衣の三人が、自分の箸を折っている。

.....

ずずずっ

無言の中、明がお茶をすすする音だけが響いた。

「.....あのさ、箸それ、学校の.....」

「.....」

「.....もしもし？」

「うっ、もうっ」

「姉さん、レイだから」

「はあ~~~~」

三人がそれぞれの反応を返す。

「.....零」

「お、おお、どしたアカリ」

「鈍感」

「.....」

「.....」

「えっと、ごめんなさい？」

わけも分からず謝っても、明の機嫌は直らなかつた。

零はひとつ見落としていた。

「お母様」

「あ！ 千鶴ちゃん どうかしたの？」

「今度の中間考査の内容ですが、また『恋愛小説』にして欲しいんです」

「あら、千鶴ちゃんならジャンルなんて正直関係ないでしょう？」

「……なぐんてね」

藤本香織は邪悪な笑みを漏らした。

「彼ね、天戸くん」

「うふふ、さすがお母様。私の考えなどお見通しですね」

「可愛い娘のことだもの。当然でしょう？ それで、何？ また『

恋愛小説』を題材にすればいいの？」

「はい、お願いできるでしょうか？」

「とーぜんよ。というか、既にそのつもりよ」

「……既にですか？」

意外な母親の返答に、驚いた顔をした。

「天戸くん、きっと今回は大陸史も満点を取ってくる。CLは完璧だから、ここで点を与えないようにしろって、他の先生方からも言われてるのよ。過去に、満点を取った生徒はいないから」

「…なるほど。では、私が改めて言うまでもなく、そうするつもり

だったと」

「そうね〜 なにより…」

香織が言葉を切る。

「私が彼の苦しむ姿が見たかったり… な〜んてね」

「…お母様も黒いですね」

「千鶴ちゃんこそ。私に似たのかしら？」

.....

「「ふふふふふふふふふふ」」

その様子を見ていた片山徹は、顔を青くして去っていった。

25話 動く歯車(前書き)

皆様、地震は大丈夫でしょうか。

25話 動く歯車

七年前 六月十七日十四時五十七分

「こちら本部管理室。第一研究所、応答願います。こちら本部管理室。第一研究所、応答願います。………駄目です！完全に音信が途絶えました！」

「第一研究所の様子は！？」

「未だ爆発の危険性があるそうです。無闇に近付くのは危険かと」

「クソッ！もしかして他国に知られたのか！？これは極秘のはずだぞ！」

「確認を急げ！ 国に《暗部》の要請を！」

本部は大混乱だった。

大勢の人間が青ざめた表情で走り回り、無線機を相手に怒鳴っている。誰もが夢ではないか、という淡い期待を抱いていた。しかし、それは幻想であることを、疲れて痛む足と手が証明していた。

「情報が入りました！ 目標、ロスト。生態反応……なし」

無情なデータが画面に写し出される。それと同時に、走り回っていた人間は呆然と立ち尽くし、書類の束は力無く床に広がった。

「何故……」

手で顔を覆い、椅子に腰を下ろしてうなだれたのは、この研究所の総責任者である原道雄だ。その顔は蒼白で、目には絶望の色を宿している。初めての事態に、どうしたら良いのか分からなくなっていた。釣られるように、周りの研究員も俯く。

その時だった。

静まった空気を裂くように、電話の着信音が響いた。
場に緊張が走る。

原博士は、震える手で通話のボタンを押した。

「はい……」

「私です」

「っ！ あ、天戸先生！！」

目ん玉の眼球が飛び出して、反対の壁に激突しそうな声を出した。
その声を聞いた人間も、驚きで目をボールのように丸くする。

天戸博士と言えば、若干15歳で博士号を獲得し、その後も国に
仕えてさまざまな研究を完成させた天才だ。（ちなみに女性である）
世間では一般に「創造者」の異名で知られ、本名な伏せられている
が、研究者なら知らない者はいない。この研究所の創設者でもあり、
そんな人物から直接電話が掛かってきたことに動揺するのは当然と
言える。

「も、申し訳……」

「いえ、そんなに固くならないで下さい。ちょっと確認したいこと
があっただけですから。それで？ 「零号」はどうになりました？」

「……ロストしました。原因もまだ分かっておりません」

「ふうむ、やっぱりですか」

「は？」

相手が偉大な上司であることも忘れ、原博士は素っ頓狂な声を出
した。てつきり今回の失態の責任を追及されると思っていたので拍
子抜けしてしまったのだ。と同時に、彼女の言葉に疑問を持った。
やはり？

「あの、天戸先生……」

『今回の事故は皆さんには何の責任もありません。なるべくして起こったことです』

「しかし、原因がはっきりしない現状では何とも……」

『原因？ そんなものはありませんよ。全部アレが引き起こしたことです』

「引き起こした？ まさか！ 自力であの研究棟を脱出したということですか！？ 有り得ない！」

驚愕に顔が歪んだ。彼はまだ8歳なのだ。確かに、この前の実験では、騎士隊長クラスの間人を7人同時に相手し、掠り傷ひとつ負わずに見事勝利して見せた。あれには驚きを隠せなかったが、今回は規模が違う。もはや自然災害の域に達している。いくらなんでも不可能だろうし、そんなことをする意志も理由も、あの生き物にあるとは思えない。

『有り得ないと言っても、実際に起きたのです。現実から目を背けてはいけませんよ、原博士。アレに常識は通用しないのです。皆様はそういう存在を造り上げたのですよ？』

「……………」

スペシャルリスト

第一人者の言葉に口を閉ざす。反論する材料は持ち合わせていなかった。そもそも反論する理由はない。彼女が言うことに間違いがないことなど分かっていたが、とっさに否定してしまったのだ。

「すみません……」

『いえ、構いませんよ。ところで、「番号」の方は変わりありませんか？』

突然の話題転換に、原博士は眉をひそめた。実は電話をしてきた

本来の目的はこちらだったのではないかと思わせるほどの不自然さだ。

天戸先生は最近、頻繁に『壹号』の様子を知りたがる。この前もそれに関するデータを送ったばかりだ。「ただの人間を造る」というコンセプトの割には、異常な執着ぶりだった。それについて、前から不思議に思っていたのだ。

不思議と言えば、『零号』が成功した後すぐに『壹号』の実験が始められたことや、試作体の『零号』は戦闘用なのに、『壹号』は違うことも、よく考えればおかしい話だった。

「異常はありません。あるとすれば、以前送った『零号』にない奇妙なデータですが……」

『それは問題ありません。当然のことですから』

「では正常です」

『分かりました。「零号」はこちらで回収しておきます。原博士は混乱を鎮めて、事態の收拾を図って下さい』

「回収……ですか？」

『こちらに任せて下さい』

「……了解しました。ではお願いします」

『じゃっ 失礼します』

そのまま電話が切れた。あまりの呆気なさに、近くにいた研究員も口をあぐりとあけている。

天戸先生は今回のことを知っていたようだった。全く驚いた様子はなかったし、予定通りだと言いた気な雰囲気すら感じさせた。こちらがとんでもないパニックになっているにも関わらず、だ。

(何かがあるのかも知れない。私にまるで知らない何か)

原博士は、燃え上がる第一研究所をモニター越しに見ながら、他

人事のように考えた。

人生に「突然」は付き物だ。

別に「ジェットコースターのような人生」などと大袈裟に言うつもりはないが、物事はいつも突然やってくる。だからこそ、その一瞬一瞬を心に刻み込むのは、とても重要なことだと思う。そうしないと、あまりにも儚く消え去ってしまうから。

「天戸、お前は今日からこのクラスじゃないから」
「……………は？」

いきなり担任に拒絶された。

……………

いやいやいやいや、おかしいだろう。
今の流れは明らかにおかしい。

「あのー先生、俺が何かやりましたでしょうか？」

「やっただろう。女子とあんなことやこんな……………」

「やってません」

「夜中にいきなり服を脱ぎ……………」

「脱いでません」

「まあ、そんなwakeで……………」

「どんなwakeですか？」

「お前は今日からAクラスだ」

……………ああ。

「これは先生方の全員一致で決まった。お前がどうしても嫌なら考えるが……どうする？」

「もしかして、委員会から苦情でも来ましたか？」

「……鋭いな」

零の予想は当たっていた。

先生方は隠していたつもりかも知れないが、この前の大会で、零の戦闘力を測っていることなど、最初からとくに気付いていた。

尤も、悪い話ではない。

明も芽衣もいるから、この際、移動してしまうのもいいかも知れない。別にクラスがどこだろうと、興味はない。

「うふふ、ようこそ天戸君」

「あ、天戸零！」

……

入室早々、最悪の歓迎を受けた。

「やっぱEクラスに帰ります」

「待ちなさい！」

腕を掴まれて、逃走は見事失敗する。

失念していた。

Aクラスには古池淳^{バカ}と藤本香織^{オニ}がいたのだった。

「ダメですよ。もう名簿は新しく作り直しちゃったんですから。02A 天戸零 今変更は許しません。早く自己紹介でもして席

に座って下さい」

「俺は今日、クラス変更の話聞いたんですけど」

「君、断らないでしょう？」

「…まあ、そうですね」

零の意志を聞く前から、事は決定事項だったようだ。若干不愉快な気がしなくてもないが、零の性格をしっかりと把握していたことについては流石と言える。諦めて簡単な自己紹介をした。知らない人間はほとんどいないと思うが、形式というやつだろう。（その時、女子生徒の目が輝いていたことは横に置くとする）

席は前と同じ、廊下側の後ろから二番目の席になった。後ろは明である。これは、五十音順の並びから考えると必然だった。このクラスに移ったことの利点の一つと言えるだろう。芽衣の席は少し遠いが、やはり知り合いがいるというのは良いものだ。以前のクラスでは、誰も話しかけてこなかった。（恐れ多くて、話しかけることを躊躇っていたのだが、零が知る余地もない）

「それにしても…早かったわね」

「Aに上がるのが、ってこと？」

「うん」

「苦情がきたらしい。主に委員会と、たぶん卒業生の人からも。リリの時もそうだったみたいだから、俺の場合（二回目）は早めに手を打っておいたんだと思う」

「あーなるほどね」

頷く芽衣はどこか楽しそうだ。

「よう、天戸零！ 覚えてるか？」

「？」

「あれ、熊沢君？」

「熊沢善之……くまざわよしゆき……だったか？」

「そう！ 覚えててくれたのか。良かったぜ！」

零たち三人の会話に遠慮なく割り込んできたのは、先日零が予選で戦った相手だった。名字のように、熊のような体格で、豪快に話しかけてきている。きつと誰に対してもこんな調子なのだろう。気を使わなくて助かるが、イニシャル通り、KYかも知れない。こんな体格のくせに、弓使いアーチャーだというのは、世の間違っていると思う。（見た目に合わないだけで、実力は十分だったが）

「いやー それにしても、お前がこのクラスに来るって藤本先生から聞いた時は驚いたぜ」 戦った時はもっとビビったがな！」

「そんなに驚くことか？」

「ああ、そりゃあな！ 月下さんなんて跳ね……」

「ちょ、スト ップ！！」

「明さんだつて机か……」

「！！！」

善之は芽衣と明に口を押さえられる格好になった。端から見れば美少女二人とじゃれ合う幸せな少年（動物？）に見えなくもないが、呼吸も満足にさせて貰えなさそうなどころを見ると、ただの（動物）虐待かも知れない。まあ、自分で言ったことだから、自業自得か。口は禍の門、とは昔の人はよく言ったものだ。

「むぐっ ぐっ むー！」

零は苦笑しながら、「美女と野獣」を見据えた。

東の小国「シンラ」

「なあ、首領^{トシ}は本気なのか？」

「ああ、間違いない。近々出る予定だそうだ。明日には『ステアー AUG』10式を乗せたトラックが到着するらしい」

「戦争でもするつもりか？」

「いや、あの人のことだ。何か考えがあつてのことだろう。お前等だつて分かっているはずだ」

仲間の言葉に、一瞬で沈黙した。

行き先のない自分達を受け入れ、匿ってくれた首領に対して、彼らは海より深い恩義を感じていた。今生きているのも、あの人のお陰だ。

「俺はあの人に従う。あの人がやれと言えばやるし、そのためなら命も惜しくない」

「俺もだ！」

「もちろん！」

松明の光が揺れる中、彼らは拳を固め合つた。

無情にも、歯車は回り出す。

25話 動く歯車（後書き）

読んで下さっている方、全てに感謝です！

26話 中間テスト(前書き)

お気に入りか450件を超えました!

正直信じられません(汗)

駄文ですが、大目に見てやって下さい

26話 中間テスト

例えば、陰謀によって、自殺に追い込まれた人がいる。

例えば、陰謀によって、巨万の富を得た人がいる。

例えば、陰謀によって、憎しみに胸を焦がした人がいる。

このように、一つの陰謀は百の人生を変える力を持っている。その力は、歴史をも大きく変えてきた。

何故こんな話をしているのか？

それは、今この瞬間、陰謀が働いたことに気付いた少年がいるからである。

時は中間試験、真つ直中。

数学、物理学、錬金学と、今回は大陸史も完璧だった。

わからない問題などひとつもない。そもそも、普段生活している中で、テストよりも遙かに複雑で難解な演算をこなしているのだ。

その膨大な計算すら頭の中、しかも一瞬で行う零にとって、学校の問題などお遊びにもならない。丁度、大陸の最先端で活躍する研究者が、幼稚園児のクイズを解くようなものだろう。どのくらい余裕だったかと言うと、後ろの席である明が発する鉛筆の音から、その答案を頭の中に再現し、かつ採点まで済ませるほどだった。（ちなみに今のところ、彼女はひとつも9割を切っていない）学校の名誉のために言っておくと、カルデイナ学校のテストは決して簡単ではない。むしろ、他校から比べれば、とんでもなく難問だ。それでも平均点が高めなのは、この学校の生徒のレベルが高いことを示している。とは言っても、この二人は異常だが。

そして科目はついに最後。天戸零の天敵、または唯一の弱点とも言える科目「言語学」。

四月はこれの補習のせいで、大変な目に合った。(『自業自得』
という四時熟語は禁句である)

師匠である月下重夫に会いに行くことは叶わず(時間が来ると稽古が始まってしまったため)、藤本香織には散々馬鹿にされた。大体、「100字以内で書け」という表現はおかしいと思う。

カルディナ王国が誇る辞典「コウジーエン」には次のように書かれている。

いない【以内】

『それを含み、それよりうちがわ。また、距離や時間、数量などで、それより少ない範囲』

つまり、100字以内なのだから、別に10字や20字で書いたって文句を言われる筋合いはないわけである。それを、あの先生は「最低8割書け」と言う。たかが一教師がコウジーエン先生に逆らってよいのだろうか。零は密かに憤慨していた。

前半100点部分のCLを難なく通過し、いざ問2へ。

第二問 主人公の「僕」は、同じクラスの美咲みさきに、密かに思いを寄せている。ある日「僕」は、親友の健二けんじが美咲に告白しているのを目撃してしまう。本文はそれに続く内容である。これを読んで、以下の問いに答えよ。

.....

例えば、陰謀によって、テスト中もがき苦しむ人がいる。

ぬあ

!!!

問1、「僕」が下線部Aのような気持ちになったのはなぜか。
80字以内で記述しなさい。

下線部A『僕は、落ち込む健二を励ましながらも、胸の内で魚が跳ねるような気持ちを抑えられなかった』

汗が額を濡らすのが分かった。そんなことは分かるのに、肝心の答えは全く分からない。ふと前を見ると、藤本香織が邪悪な笑みを漏らしていた。睨み返すと、ますます笑みを深くする。まるで悪魔だ。これからは、彼女を才二ではなく、デーモンと呼ぼうと思った。記念すべきデーモン・香織誕生の瞬間である。

そんな零の事情などお構いなしに、時計の針はどんどん進んでいった。

ピラツとページをめくる音が後ろから響く。どうやら明も、CLを終えて小説に入ったらしい。と同時に強烈な視線を感じた。感覚が鋭い零だからこそ、より鋭敏に感じてしまう。明が後ろから凝視しているのは間違いなかった。

こっそりと芽衣の方に目を向ける。彼女は何やら笑うのを必死に堪えるような顔をしていた。

一段と汗が噴き出す。かつて魔獣と戦った時でも、ここまで汗をかいたことがあっただろうか、いやない。

しかし、焦れば焦るほど分からなくなってくる。だんだん、自分が何をしているのかすら分からなくなってきた。

文字の渦に飲み込まれる。

溺れ死にそうになる直前……

キーンコーンカーンコーン

(色んな意味で)終わりの鐘が鳴った。

「数学200点、物理学200点、錬金学200点、大陸史200点、言語学……112点」

「相変わらず極端だな、あいつは」

「でも今回は小説で12点取ってる」

「まあ、決して誉められた点ではありませんが……」

片山徹、浅沼幸平、藤本香織の三人は、零の得点について話し合っていた。

彼の得点は、912/1000

今回も、見事トップを飾った。

二位は天戸明。

901/1000 という数字は、普通ならトップ間違いなしの得点だ。彼女も、零ほどではないが、言語学があまり得意ではないらしい。唯一、9割を超えていなかった。

「しかし、レベルが高いな……」

「ええ、そうですねー」

「藤本先生の娘さんだって凄いでしょ？」

「とは言っても、彼らほどではありませんよ。千鶴ちゃん人間ですから」

「……軽く酷いこと言ってますよね」

香織の黒い発言に、徹は冷や汗を流した。

「普通なら、月下芽衣の得点で十分トップが狙えるんだがな」

「何点だ？」

「827点」

「……そうだな」

「いつそのこと、彼らだけ違う内容のテストにしてみますか？」

「それすらアツサリ解きそうな気がする……」

「同感だな」

「何なんでしょうね、あの二人は」

職員室にて、天戸の二名は密かに人外認定された。

尤も、この事実が零たちにとって笑えないものであることを、彼らが知る由もない。

翌朝、神無月瑠璃はいつも通りに登校した。

この前の大会で「無敗」は崩れてしまったが、周りの環境は何一つ変わらなかった。(零と瑠璃の戦いの内容を、何人が正確に理解できているかは甚だ疑問だったが)唯一変わったことと言えば、零との関係を頻繁に聞かれるようになったことだろうか。その度にバクバクする心臓を抑えるのは、瑠璃にとって易しい作業ではなかった。特に、ターナはそれすら見抜いてくる。そのため、顔が赤くなるのを抑える、という作業も加えなければならなかった。ちなみに、全然抑えられてない、というのはターナの談である。

「神無月さん、おはようございます!」

「ああ、おはよー」

律儀に挨拶する男子生徒に笑顔で返すと、彼は赤くなって去っていった。

気にも留めず、自分の教室へと向かう。

掲示板を見て、いつもと違う紙が貼ってあることに気付いた。

赤点補習者

(ぷっ！ まったくも)

「うちのダンナったら、しょうがないんだから」

「ホントそうよねー？ …… ってターナ！」

いつの間にか、赤毛の少女が隣に立っていた。
心を読まれたようなタイミングに、動揺を隠せない。

「あーヤダヤダ。朝から脳内ピンク色？」

「ち、違……」

最早たじたじである。

ターナの攻撃は止まらない。

「イチヤイチヤを見せつけるのは、この前の写真撮影だけで十分でしょ。やめてよ、暑いから。もうすぐ衣替えだし」

「だから違っって……」

「ルリって実はムツツリ？ あの写真も、夜中に使ってた……」

「なっとなっとなっ何言ってるのー！」

「え？ まさか凶星？ 清楚な顔して意外と……」

「してない！ してないから！」

その会話を聞いていた男子生徒全員が真っ赤になり、席を立ったのは余談である。

「それで！？ 零君はどんな反応してた！？」

「なんか、屍みたいになってたわよ。明さんが入れたコーヒーだけはしっかり飲んでたけど」

「いーなー 芽衣ちゃん、同じクラスになって。なんで私は1年早く生まれちゃったのかなー」

「…仕方ないんじゃない？」

結衣は恨めしそうな視線を妹に向けた。それに対し、芽衣はいたずらっぽく笑う。

「じゃあ、私は上だから またお昼ね〜」

「うん、また後で」

芽衣と別れ、結衣は二年の教室へ向かった。

「結衣さん、おはようございます」

「あ、葵ちゃん、おはよ〜」

「見ました？ 天戸零さん、また赤点みたいですよ？」

「あはは、そうだろうな〜 って思ってたけどね。何たって零君だから〜」

結衣に話しかけてきた少女は、同じく2-Aに所属する柳沢葵やなぎさわあおいである。ちなみに生徒会役員でもあり、会長の千鶴からも頼りにされている。本人は否定するが、かなり整った顔立ちをしており、結衣と並んで2学年の二大美女とも言われるほどだ。（結衣が黒髪のスレートであるのに対し、彼女は天栗色でふわふわした髪が特徴である）そのため、二人が並んで歩く様子はとても人目を引いていた。

「なんか、会長が零さんを役員に推薦してますよね」

「あー この前零君と火花散らしてたよ〜」

「もしそうだったら、私はうまくやっていけるでしょうか…」

「それは問題ないよ　ただ……　うーん」

「何ですか？」

「…やっぱりいいや」

「はい？」

複雑そうな結衣の顔を見て、葵は不思議に思った。

26話 中間テスト(後書き)

感想お待ちしております

27話 飴と鞭（前書き）

少し遅くなりました。

誤字脱字があったら教えて下さい

27話 飴と鞭

零の夜は長い。

それは当然、彼が「睡眠」という、生物に必要な不可欠な行動を拒むためだ。

別に眠気がないわけではない。その証拠に、時々座ったまま浅い眠りに落ちる。それでも問題なく生活できるために、眠らないだけだ。

普通では有り得ない。

睡眠を取らなければ、精神的にも肉体的にも深刻な障害が出ることは、医学的にも証明されている。だからこそ、零の体質は異常といえた。(本人に言ったら、何を今更、と自嘲気味に笑うだろうが)「時間がない」と嘆く人々がいたら、おそらく零の体質を非常に羨ましがらるだろう。睡眠時間を全て活動時間に変えることが出来れば、一体どれほどの時間的余裕が生まれるだろうか。

しかし零は、自分の体質を「便利」と感じたことは一度もない。時間を掛けて「やりたい」と思えることも、「やらなければならぬこと」もない。莫大な時間を、特に何をするでもなく、ボンヤリと過ごしていた。

退屈だ、とは思わない。

そんな感情すら持ち合わせていない。

時計の秒針以外に音がない、真っ暗な空間。

その空間で、ただ一人静かに過ごす。

そんな夜を、毎日繰り返していた。

学校では決して見せない、色のない瞳で。

6時半になると、明が起きてくる。

身だしなみは既に完璧だ。パジャマのまま髪はボサボサ、しかも欠伸を連発しているなどの光景は見られない。人のことは言えないが、本当に今まで寝ていたのか疑問に思うほどだ。（前に大目玉を食らっているので、わざわざ確認してみる等の愚行を犯すつもりはないが）

その後は朝食を取る。

前回の反省（零は『玉ねぎ事件』と呼んでいる）を踏まえて、朝も最低限の量は食べるようになっていた。今では明の料理の腕も上達し、普通の食事ならほとんど作れる。

余談であるが、彼女の部屋には、最近料理の本が増えた。「見せて」と頼んでも、「駄目」と言ってみせてくれない。その時、彼女の顔が真っ赤に染まっていたのだが、零にその理由は分からなかった。

準備が済んだら学校へ向かう。

再び余談であるが、零は自転車を持っていない。

その理由は主に二つ。

一つ、いざという時に身動きが取れない。

二つ、走った方が速い（笑） この記号は、本人が笑いながら（どや顔とも言つ）瑠璃に語ったことに由来する。

しかし、明はそういうわけにもいかないのです、かつて自転車を一台購入することを提案したのだが、意外にも（？）彼女はそれを断り、零と並んで登校することを選んだ。（彼等は気付いていないが、その際に男女問わず、さまざまな視線を向けられている）

今は明と一緒に登校中。

いつもと変わらない日常だった。

後ろから待ち構えたように、藤本千鶴が姿を現すまでは。

「お早う、天戸君に明さん」

何の用か、とは聞かない。

朝歩いている所に挨拶をされて、それに冷たい返事をしたら、客観的に見て千鶴に同情の余地があるだろう。それが分からないほど鈍くはないし、馬鹿でもない。しかし、普段どこか悪どい(?)笑いをする彼女が、年頃の普通の少女のように爽やかに笑っているところを見ると、慣れない分余計に怪しく見えてしまうのは仕方がなかった。

「……お早うございます」

考えていたことが同じだったのかどうか確認する術はないが、見事に明と八毛る。

「あら、朝から息ピッタリね。仲が良くて羨ましいわ」
「それはどうも」

千鶴の言葉に、明は一瞬頬を朱に染めるが、零は態度を崩さない。

「会長、今日はお早いですね」
「ええ、少し話したいことがあるのよ」
「話したいこと?」
「まずは……テストのことね」

ここに来て、ようやく千鶴がいつもの調子に戻った。普通ならば安心するところだが、タイミングがタイミングだけに大した安心材料にはならず、むしろ零の不安を煽った。嫌な予感が脳裏を掠め

る。

「天戸君、今回のあなたの小説の点数は12点。またもや赤点よね」
「……そうですね」

それで終わりではないことは明白だった。でなければ、彼女がわざわざ零を待ち構える理由がない。

「そこで、あなたの成績をつけるにあたり、母はある決断を下しました」

「母？ ああ、藤本（デーモン）香織先生ですか。似てますね」
「よく言われるわ」

なんとか話を逸らそうと試みるが、時間稼ぎにしかならない。
千鶴は気をとり直したように、零に顔を近付けた。

「あなたには、休日や夏休みも補習を受けていただきます」
「……決定事項ですか？」
「勿論よ」
「……………」

ハア〜と盛大な溜息をついた。
別にやることはないので構わないが、これから何度もあの面倒な補習を受けなければならないと考えると気分が沈む。
隣にいる明も、ほんの少しだが寂しそうな表情を見せた。感情を表にすること自体が珍しいので、その様子はどこか儂さを感じさせる。

と、そこで違和感を感じた。

これでもまだ、千鶴が待ち構えていた決定的な理由にはならない。

そんな話は学校に行けば分かることであり、わざわざ千鶴から聞くまでもない話だからだ。まさか、母親から頼まれたわけではないだろう。

零は、考えうる限りで最も可能性がありそうなことを口にした。

「……それで？ 俺が生徒会役員になれば、俺にどんな利点があるんですか？」

明が驚いたように零を見る。

対して、待ってましたと言わんばかりに、千鶴はニヤリと口元を曲げた。

どうやら当たりらしい。

「本当に話が早くて助かるわね」

「もしかして、補習を免除してくれるんですか？」

「それは無理ね。ただ、建前なら作ってあげられるわ」

「建前？」

「そうよ」

千鶴は先ほど近付けた顔をさらに近付けた。小声で話しても聞こえるようにするためなのだが、端から見れば、いかがわしいことをしているようにも見える。身長は零の方が高いので、千鶴は上目使いになっていた。彼女も、美少女と言って差し支えない容姿をしているので、普通の男子生徒なら卒倒してしまうかも知れない。そう、普通なら。

「具体的にはどう言えば？」

しかし、（色々な意味で）普通ではない零に、そんな色仕掛け（本人にそのつもりはないだろうが）はまるで通用しない。尤も、ア

カリと同居していてもドキドキせず、逆にドキドキさせている（こ）
こだけの話である）零にとっては当然のことかも知れないが。

「そうね、簡単に言うわ。例えば、補習と生徒会の仕事だったら、
生徒会の方が優先されるわ」

「つまり、生徒会の仕事があるから補習に出られないと言えば良い、
と？」

「その通り」

「休日は？」

「生徒会の書類で忙しいって言えばいいのよ」

「藤本先生はそれで納得してるんですか？」

「当然でしょう。私の母よ？」

心底楽しそうに笑う千鶴を見て、「蛙の子は蛙」という慣用語の
通り、デーモンの娘はデーモンだったと割と失礼なことを考えた。

「そうだ。明さんもどうかしら？ これから神無月さんも誘う予定
なのだけれど」

「……私？」

ここで、零と千鶴の距離の近さに、非常に不機嫌になっていた明
は、嬉しさと同時に軽い焦燥を覚えた。それは、自分が入らなけれ
ば、零と瑠璃の距離が縮まるという、嫉妬に近い感情だった。千鶴
の飴と鞭の使い方に、密かに舌を巻く。

零にとっても、親しい人が近くにいれば気が楽であり、悪い話で
はなかった。

「……負けました」

零は苦笑しながら両手を上げた。降参の意である。藤本香織の力

もあつたが、今回は千鶴の方が一枚上手だった。

「入りましょう」

「良い返事が聞けて良かったわ。正式な手続きは明日済ませるから、それまで待つてね。明さんも、その気になつたら生徒会室にいらつしやい」

千鶴は今日一番の笑顔を見せた。

裏を感じさせない、綺麗な笑顔に、零もつられて笑みをこぼした。

さて、これらのことは全て、授業が始まる前の朝の時間に行われていたことである。朝に激戦を繰り広げたからと言って、授業が無くなるわけではない。校内模擬戦が終わり、いよいよ本格的な実戦授業が始まっていた。

授業は主に「体術」と「魔術」に分かれ、日によって変わる。それは担当の教師の指示に従うことになつていた。

尚、AクラスならAクラス同士で、学年をまたいで合同で行われる。下の学年の者は先輩から刺激を貰い、上の学年の者は強い責任感が生まれる、なかなか良いシステムだと、零は賞賛した。

今日は1学年と3学年の合同で、「体術」の授業である。

零は校庭の端で、瑠璃に今朝のことを話した。

「まあ、そんな訳で生徒会に入るから」

「私も誘つて言つてたの？」

「言つてたよ。どうする？」

「零が入るなら、私も入ろうかな」

そんな簡単な理由でいいのか？ と思つたが、口には出さなかつ

た。

ちなみに、彼等は校庭の端でサボっているわけではない。

瑠璃の場合は、例外的に体術の授業が免除されている。

それには零も賛成だ。

彼女に体術など必要ない。瑠璃に指一本でも触れることが出来れば、一国の騎士隊長どころか、中央セントラルに配属される警備団の長を名乗れるだろう。それでもお釣りが来るかも知れない。

瑠璃に触れたら、火ダルマになるか、雷が落ちるか、氷人形になるか、風に切り刻まれるか、地中に生き埋めになるかの、どれかを辿ることになる。どれになるかはその時の瑠璃の気分次第だ。(あくまで戦闘中のことであり、日常ではそんなことはない)

一方零の場合は、然るべき相手がいないからだ。

唯一、この中だと芽衣が「然るべき相手」に当てはまるが、今彼女は他の女子の相手をしている。そのため、まるで見学者のようになっていたのだ。

「天戸、今は暇か？」

見れば分かりそうなことを聞いてきたのは、前担任の片山徹だった。

「暇ですけど、どうしました？」

「俺と組んでもやってみないか？」

意外な提案だった。徹の目には、純粹な好奇心が宿っているように見える。やはり、この先生の精神年齢は低いと、根拠なく確信した。

とは言っても、別に断る理由も道理もない。

折角の「体術」担当教師のお誘いを受けないのも失礼だろう。

「いいですよ」

零は快く承諾した。

27話 飴と鞭（後書き）

感想お待ちしています

28話 好きなものは……

東国のトップ校の一つであるカルディナ校。

その生徒は、後に国を支えることになる重要な財産だ。

しかし、どんな宝石も磨かなければ輝かない。

そして、輝かない宝石はただの石ころと同じである。

それ故に、生徒を磨くヤスリのような役割を担う教師は、それ相應の力、トップ校の教員ともなれば、騎士隊長クラスの力が求められる。

片山徹は速さをメインとした戦いを好まない。どちらかと言うとどつしり構えて相手の隙を窺い、狙い澄ました一撃を入れる戦いを得意とする。この戦い方は、相手の攻撃を確実に防ぐ高い防御力と相手の隙を見逃さないための、高い集中力が終始求められる。よって、当然のことながら付け焼き刃で使える戦法ではない。だが、習得してしまえば、これほど安定感のある戦法は他になく、相手にすれば、これほど厄介な敵はいない。

徹は長い訓練の末、このスタイルを自分のものにしていった。

先に仕掛けたのは零だった。

走って間合いを詰めながら体勢を低くし、左手を軸とする回転を加えた回し蹴り。

ダッシュによって生じる前方の力と、回転による遠心力を利用して、零の十八番とも言える強化^{ブースト}。

さすがの徹も片腕だけでは衝撃を殺し切れない。

もう一本の腕も防御に回し、両足を地に押しつけて耐えると、攻撃後の零に生じた僅かな隙に右の拳をねじ込んだ。

対する零も、危機を感じると同時に動き出す。

軸にした左手を地につけたまま、上半身を限界ギリギリまで反ら

して徹の拳をやり過ぐすと、そのまま後ろに手をつき、バック転の要領で回転しながら蹴り上げた。しかし威力が期待できないその蹴りは、丁寧にガードされる。

(……やりにくいな)

向き合って数秒で、零は徹のスタイルを完全に理解した。と同時に、戦い辛い相手だと思った。

まず、決定打が入らない。

今の零にとつて、これは致命的なことだった。

外見からも分かる通り、徹と零では、筋力的にも体力的にも徹が上回る。よって、普通に戦っていたら、先にスタミナが切れるのは零の方だ。さらに、体格的なものもあり、零はガードという手段を持ち合わせていない。

零は、戦い方を変えることにした。

一方、徹は零の対応の速さに感心していた。

特に最後の距離の取り方。

あれでは体勢が崩れた零に追い打ちを仕掛けるどころか、ガードで精一杯だ。

(末恐ろしい子供だ……)

それは紛れもない、心からの賞賛。

相手が生徒であることを忘れてしまいそうな精神の高ぶりを、徹は深呼吸で抑えた。そう、あくまで相手は生徒である。

そこで、零が仕掛けてこないことに気付いた。

痺れを切らし、今度は徹が仕掛ける。

空いた距離を猛然と詰め、拳にその勢いを乗せる。零はそれを冷静に見極め、低い姿勢で以てかわすと、未だ前方への勢いが残る拳の内側へと潜り込んだ。その行動に驚いた徹は、とっさに体を捻り、肘打ちで撃退しようとする。しかし、さらに低い姿勢でそれを避けた零は、限界まで曲がった膝を一気に伸ばした。

避けるのは不可能だと判断し、徹はすぐに腕を交差させて零の掌底を受け切るが、殺せなかった分の衝撃は、徹を大きく後ろに下がらせた。

(浅いか……)

零は、手ごたえに不満を感じた。

どうやら徹は、零の掌底が届く直前に体を後ろに反らし、勢いを軽減させていたらしい。期待したほどの威力はなかった。

「おお、教師を吹っ飛ばすか」

「余裕がないんですよ」

好戦的な笑みに、零は苦笑いした。

そのハイレベルな組手を見ていた他の生徒の反応は、目を見張ったり、溜息をついたりとさまざまだった。

しかし、緊迫した空気は、思いがけない徹の一言で、たちまち霧散した。

「……よし、合格だ！」

「は？」

何が？ という疑問を浮かべる。

そんな零の肩に、笑いながら手を置いた。

「天戸、お前に教えることはない。よって、俺の助手をしてくれ」
「……随分とまた突然ですね」
「知つての通り、この学校は生徒が多い。それに比べて、教師の数は極端に少ない」

それは零も認める事実だ。

カルディナ学校の教員の数は四十五人。クラスは一〜四学年で合わせて四十クラスなので、ほとんどの教員が担任を持っていることになる（故に、合同授業が多い）。確かに、忙しいことに間違いないだろう。

「授業を効率よく進めるためだ。手伝ってくれ」

零はこのとき、「自分が楽をしたいだけでは？」と思つたが、口には出さなかつた。また、自分をAクラスに上げた理由が何となく分かつた気がした。

翌日の昼、言われた通りに生徒会室へと向かつた。

結衣と芽衣は、家で稽古があるので、生徒会活動など不可能である。名残惜しそうにはしていたが、そこはしっかり理解していた。

「で、リリは結局やるの？」

「ん〜 家にいてもやることないし」

零、明、瑠璃の三人は、早めに（零以外）昼食を済ませ、廊下を歩いている。

「俺が入学する前にも、誘われたことあったんだろ？ 何で急に？」
「い、いやっ ホラ！ あの時は知ってる人がいなかったし！」
「？ まあ、そんなもんか」

瑠璃の焦り方に、ちよつとした違和感を感じたが、特に触れなかつた。

そんな零の態度に、瑠璃は内心でホッと息をつく。
前に、「本音は？」とターナにさんざんからかわれた瑠璃にとつては、零の淡泊な態度は、非常に有り難いものであった。

そんなやりとりをしている間に目的地、4階の突き当たりにとどり着いた。

見た目は普通の教室と変わらない。

プレートに書かれた、「生徒会室」という文字を確認し、ドアを開ける。

「失礼しま……」

カチツという音と共に、何かが外れる音がした。

横から一本の矢が、零の頭に向かって超速で走り抜ける。

零はそれを、半ば反射的に掴み取った。

「……面白くないわね」

教室の奥から声が掛かる。

藤本千鶴だ。

カメラを手に、悔しそうな顔で指を鳴らした。

その横には宮城進と、零の知らない女子生徒が座っている。おそらく、三人目の役員だろう。

「何ですか、このオモチャは」

「……オモチヤ？」

驚いている明に、飛んできた矢を見せた。
先端に小さな吸盤が付いている、どこにでもあるような玩具だ。
瑠璃は最初から分かっていたようで、別に驚いていなかった。

「『頭に矢が刺さった天戸零』ってタイトルで、パソコンのフォルダに保存しようと思ってただけだけど、失敗したわね」

「趣味悪いことしないで下さい」

「ま、いいわ。皆さん、生徒会へようこそ」

昼休みという、限られた時間だからだろうか。千鶴は無理矢理に話題を切り替えた。それなら最初にイタズラをしなけりゃいいの、と思いつつ、零たちは苦笑、無言、会釈という、三者三様の反応を返した。

「じゃ、知ってると思うけど、まずは簡単に自己紹介するわね。私は会長の藤本千鶴。で、こっちが副会長の宮城進。ちなみに、私も進も4-Aに所属してるわ」

「……すまないな。千鶴の悪ふざけを止めてやれなくて」

呆れたような顔をしながら謝罪する真面目な副会長に対し、

「先輩の苦勞が分かった気がします」

零は^{いたわ}勞りの言葉を掛けた。

「その横にいる胸が大きい娘は、書記の柳沢葵。クラスは2-A」
「か、会長！ 変な紹介しないで下さい！」

抗議しながら立ち上がったのは、天栗色の髪をした少女だった。背は瑠璃より高く、明よりは小さい。

「以上三人です」

ニコツと笑う千鶴を見て、葵の抗議は受け入れられていないことを悟った。

「えーっと、私達も自己紹介した方がいいですか？」

「あ、別にいいわよ。あなた達のことは、既に知ってるから。何か質問はある？」

話を振られて、零は気になっていたことを葵に尋ねた。

「柳沢先輩、2・Aってことは結衣と？」

「あっ はい。結衣さんとは仲良くさせて頂いています」
「なるほど、そうでしたか」

「零さんの話も、よく聞いてますよ？」

そう言われれば、誰だって気になるだろう。

そして、それは零とて、例外ではない。

「……具体的にどんな？」

「んーっと、そうですね」

葵は、人差し指を形のよい顎に当て、考えるような仕草をした。

「『零君の料理はおいしい！』とか」

これは、前に月下家に言った時の話だろう。

確か、リゾートを作った記憶がある。

「『零君はやっぱり強い!』とか」

強い? 模擬戦の時の話だろうか。

「『零君は鈍感だ!』とか」

これは全く分からなかった。

前に明にも同じようなことを言われたが、何か関係があるのだろうか。

「あら、天戸君は料理ができるの?」

「まあ、ちよつとしたものなら作れます」

「……零、あれは『ちよつとしたもの』とは言わない」

「あ、私も明ちゃんに賛成」

千鶴の問いかけに対する、零の何気ない返答は、一緒に暮らす明と、かつて手料理を振る舞ったことがある瑠璃によって、全力で否定された。(零の料理が「普通」だと思っているのは、彼のみである)

「じゃあ、零さんは何が好きなんですか?」

葵の純粹な疑問に、零は困惑した。

端から見れば、至って当たり障りのない問いである。

しかし、基本的に食事を取らない零からすると、学校どんな問題よりも難問であった。(ただし、小説の問題は除く)

相当焦っていたのだろうか。

零の返答は、爆弾発言であった。

「……え〜と アカリの手料理です」

これは、お世辞でも何でもない、零の本心である。

特に好きなものも嫌いなものもない零の中で、「おいしいものにカテゴライズされたものと言えば、それしかなかった。

しかし……

「っ！／＼／＼／」

その台詞は、明の白い肌を真っ赤にさせ、瑠璃を落ち込ませ、さらに現生徒会役員の三人をも気恥ずかしくさせる力を持っていた。

「え、えつと天戸君？ そういうラブラブ発言は外では控えてくれないかしら……」

「いや、そういう訳ではないんですけど…… ただ事実を言っただけと言いますか」

零の食生活を知る瑠璃はともかく、（それでも彼女は胸のモヤモヤに現在進行形で苦しんでいるが）何も知らない人間が理解できるはずもない。

あの千鶴までもが、若干恥ずかしそうにしているところを見ると、今の発言は相当マズかったようだ、ようやく事の重大さに気付いた。

対して、その様子を見た葵は、親友である結衣が言っていた『零君は鈍感だ！』という台詞の意味を、早々に理解した。

この後、前の席が零であることもあって、明は授業に集中できず、苦しむことになる。

28話 好きなものは……（後書き）

これで5月は終わりです

おかしいな、進行が遅いぞ……

感想お待ちしております

29話 死んだ部屋（前書き）

またまた、ちょっとしたアンケートを行います。

29話 死んだ部屋

生活感のない部屋だった。

比喻表現の中に、「部屋が死んでいる」というものがあるが、これほど「死んでいる」という表現がピッタリ当てはまる部屋も珍しい。

何もなかった。

テレビや冷蔵庫などの電化製品は勿論のこと、食器や衣類もない。ある物と言えば、窓に掛かったボロボロのカーテンと、床に敷いてある同じくボロボロの布団、そして、ハンガーに掛かる、まだ新しい国立カルディナ学校の制服だけであった。

そんな部屋の一角に、場違いなように存在する影があった。

まだ幼い、零と同じくらいの年齢の少女だ。

肩にかかるかかからないくらいのショートヘアは、黒から少し色素を抜いたような色。体格はスレンダーで、どちらかと言うと、可愛いというよりも美人の類に入る。

ただ、年頃の少女にしては、明らかにおかしい部分が、彼女にはあった。

彼女は、衣類を身につけていなかった。

ピンポーン

チャイムが鳴る。

部屋の住人であるショートヘアの少女は、玄関へと向かい、訪ねてきた人物が誰なのか確認もせずにドアを開けた。いや、確かめる必要などないのだ。この部屋にやって来る人間など、最初から分かっている。

「よう、素羅^{ソラ}。今いいか？」

「ええ、大丈夫です」

「そんじゃ、邪魔するぜ」

少女は訪ねて来た男を、躊躇うことなく部屋に招き入れた。まさかこの少女が、一瞬の内に着替えることが出来る、などという特技を持っているはずもない。当然の如く、全裸のままである。しかし、この男は、少女のそんな格好に全く触れず、いつものことだと言わんばかりに部屋に入った。年齢からすると、父と娘の関係に見えなくもないが、二人の間に漂う雰囲気は、そんな暖かいものなど微塵も感じさせない。

「うへー 相変わらずつまんねートコで寝てるなー」

入室一番に、男は呆れた声を出し、ボロボロで頼りないカーテンを開けて、閉じ込められた朝の光を逃がした。

男が、「住んでる」ではなく「寝てる」と表現したのは、少女がこの部屋を、ただ寝るためだけに利用していると知っているからである。

「オイオイ、キッチンも埃だらけじゃねーか。ちゃんと食ってんだろーな？」

「勝手に漁らないで下さい。毎日三食、しっかり食べてますから大丈夫です」

「三食外食か？」

「昼は学食です」

「料理する気は？」

「ありません」

会話の中でも、少女の感情が動く様子はない。あくまで事務的な口調のままだった。互いに目を合わすことすらしていない。

ただ、男が少女をそれなりに心配していることは見て取れた。

「……学校はどうだ？」

ようやく制服に着替え始めた少女は、男の「どうだ？」が、校内の見取り図のことを言っているのか、それとも学校生活のことなのか、一瞬考えた。が、見取り図のデータは随分前に送ったことを思い出し、後者であると判断した。

「変わったことは何もありませんよ。平和ボケした方々と馴れ合うつもりもありませんし」

「まあ、お前からすりや学生なんて、ただのお気楽集団にしか見えねーだろうよ。ただなあ、あそこは一応エリート校だろ？」

「何が言いたいんですか？」

「つまりだ」

言葉を切つて頭をボリボリ掻き、さも面倒臭そうに視線を少女へ向ける。

「ちったあ骨のありそうなガキはいねーのかつてことだ」

「残念ながら」

「かーっ！ お前も腕が鈍なまっちまうんじゃねーか？」

男はイライラしたように吐き捨てた。

少女は答えない。

部屋から、音が消えた。

ただでさえ無味乾燥な部屋から、「会話」という音声を取り除くと、より一層「死んでいる」部屋に近付く。普段住んでいる少女は

ともかく、男がこの「沈黙」という名のBGMに堪えられるはずもない。だからこそ、少女が何か思い出したような顔をしているのを、男が見逃すはずはなかった。

「どうした素羅？」

「……いえ、いるにはいるかも知れません」

少女の表情が、わずかに揺らぐ。

「本当か。お前のお眼鏡にかなう奴がいるのか？」

「ええ、高校生離れした実力の持ち主が二人ほどいます」

「ほう……」

男は感心したように息を漏らした。

「『剣聖』の孫とかか？」

「違います。彼女達も強いですが、やはりまだ未熟です。『剣聖』には遠く及びません。私が言っているのは、また別の二人です」

「お前に、触れるぐらいは出来そうか？」

「……どうでしょうね。場合に寄ります」

ただ、事実を淡々と述べるかのような口調。その中に、虚栄心や自尊心は欠片も見あたらない。

見る人が見れば、あの鈍感な少年に似ていると感じるかも知れない。

着替え終わると、今日初であろうか。少女は男と視線を重ねた。

「それで、連絡事項は？」

澄んだ声が、やたらと鮮明に響き渡る。話はここからが本番だとしても言うように。

少女の迫力に押された……わけではないだろうが、男もこれまでのだらしのない態度を改め、はっきりと述べる。

「日時が決まった。当初の予定通り、6月23日の文化祭、正午に決行する」

「分かりました。準備をしておきます」

実にシンプルなやりとり。しかし、シンプルさの中に、言葉で表せない「何か」を感じさせた。

この二人は、今までに一体何度同じ台詞を交わしてきたのだろう。それが分かるほど、洗練されていた。

そして……

「やめても、いいんだぞ？」

「今更、ですよ」

これも何度目かのやりとりだろう。

男はバツの悪そうな顔を向ける。

「お前なあ…… 言いたかあねーが、その無駄にいいルックスと、無駄にいいスタイルを、こんな無駄な仕事で一生棒に振るつもりか？」

「そんな『無駄に』を連呼されても、褒められてるようには聞こえませんよ？」

少女は、クスリと笑った。

滅多にないことなので、男は若干動揺しながら、照れ隠しに指を鳴らす。

「気持ちは嬉しいですけど、私の居場所は、もうここにしかありません。言ったでしょう、『馴れ合うつもりはない』と」
「それは違ちがいよ。居場所なんか、その気になりやーどこにでも作れる。作るうとしねーだけだ。お前は俺と違わかってまだ若わかいんだ。人生まだまだこれからだぜ？」

「……ありがとうございます、白ハクさん。では、私は学校ですから」
逃げるように男に背を向け、靴を履き、静かにドアを開けた。
朝の日差しが玄関から差し込み、少女を照らしていく。
振り返りもせず、声も掛けず、ドアを静かに閉めた。

「馴れ合うつもりはない、か」

一人になった部屋の中で、ポツリと呟く。

「じゃあ何でお前は学校に通い続けてんだ？ 任務期間はとっくに終わってるだろーが」

カーテンの隙間から、少女が登校する様子を盗み見る。

朝の日差しは足元で途切れ、男を照らすことはなかった。

6月、衣替えである。

だからと言って、何か変わったことが起きるわけではない。敢えて言うならば、白が目立つようになった制服を着た明から、感想を

聞かれたことぐらいだろうか。

その時は、素直に「可愛い」と述べた。
全くをもって嘘ではない。心からの本心だ。

ただでさえ白い肌と白い髪を持つ彼女が、白い制服を着ると、白さが際立って、ある種の神々しさを感じさせる。

……のだが、

「おーい、生きてるかー」

「……／／／／」

やはり、彼女は相当の照れ屋らしい。（これを言うと、「バカ」と言われるので口には出さないが）

零が感想を述べるや否や、赤くなって飛んでいってしまった。折角の神々しさが台無である。

「恥ずかしいなら聞かなきゃいいだろ……」

「……バカ」

結局、バカと言われてしまった。

とは言っても、最近よく言われることなので、別段気にすることも無い。それはそれで良くない慣れだとは思ったが、原因がよく分からない現状では、どうすることもできない事実である。最終的に、黙って馬鹿にされているのがベストであると判断した。DMに聞かなくてもないが、これは不可抗力である。

零は、機嫌がいいのか悪いのか、よく分からない表情をした明と共に、教室のドアをくぐった。

「文化祭での、クラスの出し物を決めるわよー！」

デーモン・香織が、何かに決意したように声を張り上げた。

いい歳して何をはしゃいでいるのかと、極めて失礼なことを考えていたら、まるで心を読んだかのようなタイミングで、香織の視線が突き刺さった。

「天戸くん？ 分かったかしら？」

「……なぜ俺にだけ、再度確認を取るんですか？」

「天戸くんが馬鹿だからよ」

デーモン・香織の言葉に、遠くで芽衣が「うんうん」と頷いた。

ひどく心外である。

なんだか今日はこればつかな、と思いながら、だるい心境を溜息に乗せた。

「さて、決めるとは言ったけれど、私が受け持つクラスの出し物は毎年決まっているのよ」

嫌な予感がした。

先日、娘と対峙した時に感じたものと同じような予感だ。きっと、ロクでもないことを考えているに違いない。

零は、香織の言葉に耳を傾けた。

「このクラスは、『メイド&ホスト喫茶』をやるわよ！」

予感的中。

やはり、ロクでもないことだった。

きつと、彼女のことだから、メイドかホストに話し掛けられてニヤニヤしている客を観察するという、悪趣味極まりないことをする

のが目的だろう。そういう人間なのだ、彼女は。

それでも、クラスの生徒達の反応は悪いものではない。

女子からすればホスト姿の男子が、男子からすればメイド姿の女子が見られるのだから、当然と言えば当然か。

どちらかと言うと、男子のやる気の方が高いように見えるのは、明と芽衣がいるからだろう。

しかし、その男子生徒の中に、目を輝かせている古池淳チキンの姿を認めた時は、所構わず殴り倒したくなった。

「一応書くわねー」

そう言いながら、「メイド役」「ホスト役」の二つに分け、五十音順に名前を書いていく。

冥土役メイド

・天戸明

・天戸零

・安藤……

・
・
・

おかしなものが見えた気がした。

「疲れ気味か？」

などと独り言を言い、目を擦ってから再度黒板を見る。

冥土役メイド

・天戸明
・天戸零

・
・
・

やはり、その『おかしなもの』は消える気配を見せない。
零は目を点にしながら、毎秒100回程のスピードで瞬きをまはたした。
その様子を見た明が、後ろで小さく噴き出すが、今はそんなことは
どうでもいい。メイドがなぜその漢字なのかと、そんなこともどう
でもいい。

決定的に、何かが終わっている気がした。

「あら、天戸くん。どうしたのかしら？」

この瞬間、彼女が意図的に行っているのだと悟った。

「……………やりませんよ？」

「ん〜？」

「俺は絶対にお断りですよ？」

「ん〜？」

「眼光」という名の刃を、香織は「図々しさ」という名の鎧で粉
砕する。

わざと聞こえるように舌打ちをするも、全く効果はなさそうだっ
た。

「だったら、ここは多数決の原理で決めましょう」

29話 死んだ部屋（後書き）

さて、投票するのは読者の皆様です。

メイドにして、他のキャラをビックリさせるか、ホストにして鈍感パワーを爆発させるかは皆様にお任せします。

注1、私としては、どちらも面白そうなので、どちらでも構いません。

注2、忙しい方は、無理をなさらないで下さい。時間がある方だけで結構です。

注3、特に意見がなかった場合、筆者の独断で決めます。

注4、面白い意見については、小説内で使わせて頂くことも御座います。

尚、活動ページに今後の予定について記しました。

もしよろしければ、見ておいて貰えると嬉しいです。

長くなりました。では。

30話 Sモード(前書き)

思った以上に忙しくて、二週間以上間があいてしまいました。

すみません〜

色々と意見をくださった方、ありがとうございます！

おかげさまで、ストーリー展開を考えるのが非常に楽しかった〜

「あ、これ俺の意見だ」という瞬間が訪れるかもしれません〜

30話 Sモード

ベクトルが異なる喜びと悦びを、同時に胸の内に滞在させる。
古池淳は、そんな器用なことをやってのけた。

まず一つ目。

担任の藤本香織が「『メイド&ホスト喫茶』をやる」と主張した時、淳の体は歓喜に震えた。（そんな彼に怒りを喚起させた生徒もいるが）

ここだけの話、彼は「メイドさん」が大好きである。

「いままでに何回メイド喫茶に行ったことがありますか？」という質問を投げかけられれば、間髪を入れずに「わかりません」という返答が返ってくるだろう。それは無論、「多すぎていちいち数えていない」という意味である。

そんな淳のことだ。

クラスメイトの女子がメイド服を着ると聞いて、自然と目が発光現象を起こしてしまうのは当然のことであり、寛容な心をもって表現すれば、仕方のないこととも言える。

淳は、普段嚴重にロツクが掛けられた脳内ピンク色フォルダにアクセスし、脳内着せ替えツールを起動させた。

視線をそのまま芽衣へ向ける。

肩にかかるくらいのセミロングヘア。清楚な顔立ち。強気な瞳。
そんな芽衣の頭に、白いフリルのついたカチューシャを乗せてみる。

（お、おおおおお！ い、いいんじゃない？）

自分のキャラが崩壊していることにも気づかず、メイド服の芽衣

を脳内でひとしきり堪能する。

垂れそうになるよだれを拭い、三日月がふやけたような目を、今度は明へ向けた。

透き通るような肌。透き通るような声。そして透き通るような髪。そんな明に、エプロン状の前飾りがついたフリルのミニスカートを着せてみる。

(キャツツツツツッホウウウウー!!!)

自らを容姿端麗な少年と語る淳は、今自分がどこにいるのかも忘れ、醜く顔を歪めて悶えた。

彼のテンションゲージが限界突破していることは言わずもがな。

あの熊沢義之くまざわが話しかけることを躊躇うくらい、周囲の人間はドーン引きだった。

古池淳はその時、誰もが認める変態であった。

彼を現実引き戻し、かつ別の悦びを抱かせたのは、またしても藤本香織の、しかし今回は言葉ではなくて文字だった。

黒板に書かれたのはメイド役の人間の名前。

その中には、淳がライバルと認めた(ただし一方通行な感情であるが)天戸零の名前が書いてある。

さんざん香織と言いつ争った結果、どうやら多数決でメイドにするかホストにするか決めることになったようだ。

(くっくっくく天戸零… 多数決でメイドを勝たせ、あなたに恥をかかせてあげましょう…)

先ほどのだらしのない顔とは打って変わり、腹黒い笑みを浮かべる。濁った光を瞼の裏に隠し、濁った悦びを、含み笑いに乗せた。

(メイド服を着て、冥土に送られて下さい。あ、僕、今凄くうまいこと考えましたね)

にやけながら自画自賛してみる。

(せいぜい公衆の面前でみっともない女装をさらけ出し、全女子生徒から幻滅されて下さいよ...)

「結果発表」 残念だけどホストの勝ちね」

「いえ、当然ですから」

疲れたように溜息をつきながら、零は自らの手で黒板の名前を消していった。それに伴って、徐々に胸の内の不安も消えていく。零は、心臓に悪影響を与えた黒板の正の字を睨んだ。

多数決は、予想外に大接戦となった。

野郎の女装を見たがるような奴がいるわけないと高をくくっていた零は、次々と出てくるメイド志望の意見に、終始冷や冷やしっぱなしだった。

「そっいえば……」

零は、無言の圧力を、メイドに投票した芽衣にかけた。

零の視線に気づいたようで、芽衣はバツが悪そうに視線を空中に漂わせ、誤魔化すような半笑いを浮かべた。

「お〜〜い、芽衣い」

近づいて、ゆっくりとその肩に手を置く。

すると、芽衣はビクッと体を震わせた。

「いやー 驚いたなあ〜 まさか芽衣がそんな嗜好の持ち主だったとは」

「い、いや、ち、違うのよ」

「違う？ ほほう、何が違うのかな？ 何が違って、俺にメイド服を着せようとしたのかな？」

「え、えーっと、それは……その」

攻める零と、対照的に口を閉ざす芽衣。

普段、芽衣が文句を言っただけ、それに苦笑する零の姿を見慣れているクラスメイト達は、そのいつもと違う風景を、興味深そうな目で見た。

「さあーで、たっぷりと言いつつ聞こうかなあ〜」

「あ……え」

零が無理やり肩を組み、密着するように座ると、芽衣は再びビクッと震えて、少し赤くなりながら、もじもじし出した。

その様子を見た女子生徒の一人が、ポツリと呟く。

「月下さん…… もしかして喜んでる？」

「なっ」

不意に後ろからかかった声に硬直する。

徐々に自分がなにを言われたのか理解し、そして

「そ、そそそんな訳ないじゃない!!!」

大慌てで否定した。

耳まで真っ赤になりながら。

「なな何で私が喜ばなくちゃならないのよ!」

「ああ…… うん、なんか…色々ごめんね?」

「そ、そもそも私は」

「おっと、話を逸らすなよ?」

このまま話が流れることを危惧し、後ろを向いて抗議する芽衣の顔を、腕で強制的に自分の方へ向けた。

結果、必然的に見つめ合う形になる。

「まあまあ、そんな緊張するなって。俺はただ、大切な人である芽衣が、危険な嗜好を持ってしまった理由を聞きたいだけだからさ」

「た、大切な……人?」

「そうそう。ってわけで、教えてくれないかなあ?」

「あ……う」

見ていてかわいそうになるくらい、芽衣が赤くなっていく。

(うわゝ びっくり…… あの強気な月下さんが真っ赤っか)

(これなに? 天戸君のSモード?)

(お、恐るべし天戸零…… でも、ちょっとされてみたいかも……)

(ある意味拷問だよ)

(わ、私は…… う、羨ましいかも……)

(まあ、気持ちはよくわかるよ)

(と、止めなくていいのかな?)

(あー でも藤本先生、すっごくニヤニヤしてるし……)

ひそひそと会話が繰り返される。

ただ一人、明だけが、不機嫌の絶頂のような顔をしていた。

実は、芽衣が何を考えているのかは、零にはなんとなく想像できていた。

昔、月下鏡花にメイド服を着せられたことがある。（零自身は黒歴史だと認識している）

まだ世の常識が理解できていない頃のこと、手を叩いて喜ぶ芽衣と、「れーくん、かわいー！」を連呼する結衣の姿、そして娘たちの笑顔を見て、泣きそうに笑う鏡花の瞳が、やたらと鮮明に記憶に残っている。芽衣も、その時のことを思い出しているのだろう。

そういえば、あの服は

「納つつつつ得いきません！」

零の思考は、勢いよく立ち上がる音と椅子が机にぶつかる音、そして耳障りな声で断ち切られた。

「僕は反対です！」

「どうした古池^{カエル}？」

「ですから　　ってなんでカエルなんですか！？　芭蕉ですか！？」

「古池や　蛙飛び込む　」

「うるさいですよ！」

淳は偉大な俳人の句を一蹴し、強引に話のハンドルを切る。

非常に失礼なことだが、そんなことは今の彼の頭にはないようだ。

「藤本先生、多数決の原理は少数意見を尊重　」

きんこくんか〜んこくん

「ぬっはあああ！」

「おお〜」

零からすれば最高、淳からすれば最悪のタイミングで鐘が鳴る。

「ちよっ 僕の話はまだ……」

「邪魔だ」

「どいてくれる？」

「なに暑苦しく語っちゃってんのー？」

クラスメイトに潰され、

「くそ…… クッソ ……！！」

同時に、彼の悦びのひとつも潰されていった。

ただし、芽衣だけは淳に助けられたと言っていいだろう。

騒ぎに紛れて、明が零の腕を引き剥がしたお蔭で、ようやく零に解放された。

後、彼女はしばらく机に倒れこんでいた。

幼い頃は、ただただ生きること必死だった。

朝はカラスに交じってゴミ袋を漁り、トレーや紙パックの端に残った僅かな食料で飢えを凌いだ。

昼間は光化学スモッグを肺いっぱい吸い込みながらゴミ山を漁り、ペットボトルや缶、瓶などの、少しでもお金になるものを探し

た。

夜は店のゴミ箱を漁り、腐った材料や残飯を持ち帰った。

しかし、必死に生きようとする彼女を、人々は気持ちが悪そうに見つめた。

泣くことが多かった。

母親に手を繋がれて歩き、お菓子をリクエストする自分と同じくらしい少女を見る度に、ナイフで貫かれたかのような痛みが全身を襲った。

冬、ゴミを漁っている最中に、家の中からハッピーバースデーの歌が聞こえてくると、その温もりに、凍えた手を伸ばしてしまいそうになった。

その度に涙を流して、期待することにすら疲れて、
どんなに欲しても、決して叶わないと思い知らされて……

悲しみがこれ以上溢れてこないよう、小さな胸を抱き、丸くなくて眠りについた。

一人だったわけではない。

仲間も確かにいた。

しかし、決まって皆、最後は目の前から去って行った。

ある者は犯罪に手を染め、囚人に。

ある者は薬物に手を出し、廃人に。

ある者は刃物に手をだし、死人に。

一人、また一人と消えていく。

昨日まで一緒だった人が、次の瞬間には二度と会えない人になっている。

少女は、幼いながらに理解させられた。

強くなきゃ、生きていけない

強く強く、生きていこうと思った。

それから、少女は泣くことをやめた。

今まで、辛いことがあるとすぐに泣いていた少女は、その日を境にピタリと泣かなくなった。

心を凍てつかせて、周囲に関心を持つことをやめて

それは、一人で生きることを決めた少女が、自分を守るための防衛反応だった。

人生を変える出来事は、その二年後。

彼女はスラムの一角で、ある現場を目撃した。

「はっはー お前、随分とキツイ顔してんなー 折角の綺麗な顔が台無しだぜー？」

第一印象は「掴みどころがない男」だった。

灰色の、珍しい髪の毛。

ヤクザみtainな風貌のくせに、真っ直ぐな目をした男。

その男は、散歩のためにスラムを訪れたという。

「どーだ？ 俺と一緒に来ねーか？」

「…なぜ私なんですか？」

「あー しいて言うなら、道端に宝石が落っこってたから、かなー？」

ぐっと顔を近づけ、少女の瞳を見据える。

男の台詞は、単に容姿のことを言っているだけではないような気

がした。

「お前には夢があるか？」

「……………」

「やっぱねーか。いや、諦めてるだけか？」

相も変らぬ真っ直ぐな表情。

しかし、口調はどこか自嘲めいていた。

「俺はな、夢を探してる最中なんだ。生きるための糧となる夢をな」

そう言って差し出された手は、今まで見たどんな手より大きくて

……………

それが、素羅ソラと白ハクの出会いだった。

30話 Sモード（後書き）

メイド服もどこかで入れる予定です〜

そのどこかは既に決まっていますが、それまでお待ち下さい〜

感想お待ちしております〜

31話 小さな願い（前書き）

今回は、あるうことか一発書きです。
誤字脱字、多いと思います。

見つけましたら、教えて下さい。

31話 小さな願い

その光景を見た瞬間、彼女はそれが夢であると確信した。暗闇の中、一人佇んでいる。

真つ暗な、底が知れない闇。

その中に、まるで灯台の灯のように光るものがある。

手を伸ばした。

半ば無意識に、ぼんやりと手を伸ばした。

光を掴むと、言葉では表しようもない安堵感が全身を駆け巡った。

私はこの光さえあれば、生きていける

彼女は、何の根拠もなくそう思った。

満たされていた。

麻薬のような、あやしい快樂だったが、それでもいいと思った。

小さく笑いながら、掴んだ目玉を胸に抱いた。

目玉？

彼女は疑問に思う。

次の瞬間、周りの景色が一変した。

何千何万もの膿んだ目玉が、身動きのとれない彼女の五感にへばりつき、腐敗し、神経を苛んだ。

怒りに燃えた目玉、悲しみに暮れた目玉、欲望にで血走った目玉。一つとして同じ感情を宿さないその「目玉」は、悶絶する肉体の内側に入り込み、脳髓をゴリゴリと掻き回した。

あまりの激痛に、「悲鳴を上げる」という選択肢を失う。

必死で腕を動かして、なにかにしがみつこうとするも、拾い上げたのはまだ髪の毛と肉がこびりついた生々しい頭蓋骨だった。

オマエハダレダ？

頭蓋骨が問う。

幼い頃から何度も自分自身に投げかけ、その度に逃げてきた彼女は、今回も殻に閉じこもるように固く目を瞑った。
こみ上げる吐き気と必死に戦いながら、彼女は一人の少年の名を呼ぶ。

零……零……零

痛みと寒さに震えながら、懸命に呼ぶ。

やがて、ふっと体が軽くなり、彼女は重い泥のような夢から、ゆっくりと意識を引き上げた。

まだ暗い。

時計を見ると、針は四時半を回った所だった。

「はぁ… はぁ…」

体を、異常な寒気と不安が襲う。

服は冷や汗でぐっしょり濡れていた。

「う……」

締め付けられるような胸を抑え、彼女は壁にもたれかかりながら、

ドアに向かって歩き出した。
夢で呼んだ少年の姿を求めて

いつもと変わらずに、ぼんやりと外を眺めていた零は、近くの物音に敏感に反応した。

(……アカリ?)

思わず時計を見ると、針は四時三十七分を差している。
本来の彼女ならば、まだ眠っている時間だ。

(気のせいかな?)

不思議に思いながらも、零は立ち上がって隣の部屋　　明が寝
ている部屋へと向かう。

そして辛そうに歩いている明を見つけたとき、自分の聴覚が間違
つていなかったことを悟った。

「あ……」

明も零に気が付いた。

ただでさえ白い肌をさらに青白くさせ、目は充血している。

「どうしたアカリ。なん　　」

零の問いは、突然抱きついてきた明によって、喉の奥に吸い込ま
れた。

一瞬、何が起こったのか分からなくなる。

しかし、何かに怯えるように小さく震える明の体温が、通常よりも遥かに高いと感じた瞬間、零は瞬時に冷静さを取り戻した。

「……熱があるな。大丈夫か？」

「……」

「取りあえず眠ろう。俺がそばにいるから」

小さく頷いたのを確認すると、明を抱えて寝室へ移動し、ゆっくりと寝かせて布団をかけた。

「今日は学校に行かない方がいい」

掛けられた言葉に安堵し、明は目を閉じる。

握られた手から、暖かさが広がってくる。

嫌な夢は、今度は見なかった。

電話関連のものを一切持っていない零は、マンションから学校へと念話を飛ばし、目的の人物を探した。その目的の人物とは、もちろん神無月瑠璃である。

念話はその魔法の性質上、通信相手にも技術がないと、こちらから伝えることは出来ても、相手から返事を聞くことは出来ない。つまり、一方通行の会話になる。念話が使えない一般人では、遠く離れた地点の相手に意志を飛ばすなど、体に負担がかかりすぎるのだ。その点、瑠璃は全く問題がない。改めて、瑠璃がいることの心強さを感じた。

(つてなわけで、アカリが風邪引いたから、俺も休む)

簡単に要件をまとめる。

- (ん、りょーかい。私はそれを先生に伝えとけばいいの?)
(よろしく頼みます)
(オツケー。ところで、明ちゃんの具合はどう?)
(今は眠ってる。熱は…… あー まだちょっと高い)
(そっか。私も後でお見舞いに行くからね)
(わかった。アカリも喜ぶと思う)

瑠璃は現在授業中だというが、はっきり言って彼女には無駄なことなので(そもそも先生よりも魔法に詳しい瑠璃は、よく授業中寝ているらしい)何の躊躇いもなく 念話 を続けてくれる。

- (あ、そうそう リリは好きなやつっている?)
(え?)
(いや、だから好きな……)
(ええええええ!?)

突然話題が180度ずれたことが、凄まじい不意打ちとなって、瑠璃の頭を真っ白にする。思わず大声を出しそうになって、慌てて口をおさえた。

- (な、なんでいきなりそんなこと……)
(ああ、いや、どうやらアカリには気になるやつがいるらしくてさ)
(……え?)

なんでそんなことが分かるのか、という意味合いを込めて、たっぷりと間を置いた「え?」を送った。

その瑠璃の意図を正確に読み取り、零は説明を付け加える。

(今アカリの部屋にいるんだけど…)

(……………)

(本棚に料理の雑誌が並べてあって…)

(……………)

(その中の一つに『気になるあの子に手料理のプレゼント!』ってタイトルが印刷されてるわけよ)

(……………)

(俺の中で色々と合点がいつてさ〜 前にアカリに『見せてくれ』って頼んでも絶対に見せてくれなかったんだけど、こういうことか〜って思ってた)

(……………)

(リリは何か聞いてる?)

「はあ〜〜〜」

大きな、とても大きな溜息が、リアルに飛び出した。

周囲の人間が訝しげに瑠璃を見る。

(もしもし、リリ?)

(……………知ってるよ。ってかわかるって)

(え?)

(たぶんだけどね。一人しかいないと思う)

(へ〜 いいやつ?)

ここで、「誰?」と聞かないところが零の優しさだろう。零は他人のプライベートに勝手に入り込むことをひどく嫌う。今回も、明が風邪を引かなければ、決して部屋に入ったりしなかったはずだ。しかし、ここで「自分ではないだろうか」と微塵も考えないことが、彼が鈍感と言われる所以だと思う。

(うん、いいやつ…過ぎるかな)

(そっか。リリは？好きなやつ、いる？)

(………いるよ)

ポツリと一言。続いて、

(すっすっすっすっごく鈍感だけど)

激しく付け足す。

(お、おお そっか。大変だな)

(大変だよ！)

あんたが言うな！ と思いながら、感情を 念話 に乗せる。
向こう側で、零が笑ったような気がした。

(でも、やっぱり大事な人には幸せになってもらいたい)

(………零？)

不意に届いた真面目な声に、瑠璃は高ぶった感情を一気に沈める。

(いや…さ 俺は恋愛とか分からないし、そんな機能も与えられてないけど、皆は違うんだろ？)

(………どうしたの？ なんかあった？)

(いや別に。ただ、アカリの部屋でさっき言った雑誌見つけて、リリとか他の人はどうなのかなーって思っ、もしそうなら頑張ってもらいたいなーって思っ)

(………)

(万人が幸せに とか思ったりして)

おどけたような声は、どこか寂しさを感じさせた。

(まあ、万人が無理でも、せめて大切な人くらいはって思ったわけよ)

(そう……なんだ)

(うん。だからさ、リリも頑張れよ?)

(い、言われなくても頑張るよ!)

(はは、そっか。でもリリの好きな男ってどんなやつだろうな)

(案外、私の近くにいつもいるかもよ?)

(本当か。今度探してみる)

先ほどの暗さを紛らわすような明るい会話を最後に、
念話
が
切れた。

セントラル
中央研究所本部第一研究館101号

「博士……フェレ博士」

「……」

「起きて下さい。風邪引きますよ」

「……うっ ん?」

「だー もっつ! 博士つたら!」

不意に体を激しく揺すられ、マリア・フェレは心地よい微睡まじろみの世
界から、意識を覚醒することを余儀なくされた。

「あゝ ん? ロー君?」

「あ、起きました? もっ勘弁して下さいよ! 研究室の床で寝る
のはやめて下さいって前に何度も言ったじゃないですか!」

「ふあゝあ」

呆れたように怒鳴る部下を無視し、大きな欠伸をひとつ。

未だ五割以上が活動を拒む頭を必死で動かし、マリアは状況の把握に努めた。

「えゝつとロー君、今日は何日？」

「はい？ 六月五日ですけど」

「んじゃ、今何時？」

「五時十六分です」

「どっちの？」

「P・M.です」

生活のリズムが目茶目茶であることを露骨に表す質問がポンポン飛び出すも、ロー君と呼ばれた部下の男は、全く動じずに即答した。まるで、いつものことだと言わんばかりに。

一方、マリアは「あちゃー」と言いながらボサボサの金髪を抑えた。

「……フェレ博士、まさか僕がセレスに帰ってる間、ずっと研究室に籠こもってたんですか？」

「んゝ 昨日帰ろうと思ってたんだけどね。寝てたら今日になっちゃった」

テヘツ つと笑う。

本来の彼女のルックスならば、それだけで男の一人や二人を虜とりこにすることなど容易いだろうが、如何せん今の彼女は髪の毛ボサボサ、白衣はしわくちゃで、しかもスツピンである。色気を感じるよりも先に、マリアの容姿をもつたいたいと思う気持ちと、その生活態度に対する呆れが、大きな溜息となって口からこぼれ出た。（それで

も美人であることがわかるのだから、元の良さは特筆すべきものがあるだろうが)

「は、博士…… ってことはつまり、一週間風呂に入っ……」

「まーまー落ち着きなさい」

「落ち着けっただって無理ですよ！ え、じゃあ食事は？」

「パンなら食べたよ。その辺にゴミない？」

「これって…… 食パンだけじゃないですか！？ いくら何でも体壊しますって！」

あゝはいはい、と手を振って話を遮り、立ち上がって白衣を正すと、ぐるりと首を回した。

ボキッ！ バキッ！ という破滅的な骨の音と共に鋭い痛みを感じたマリアは、同時に右手の感覚がまるでないことに気が付いた。どうやら、眠っている間、右手は体の下敷きになっていたらしい。

「ん〜じゃあさ、着替えるからちょっと出て行ってくれる？」

「はい？ ここでですか？」

「そういう気分。早くして。それとも見たいの？」

是非！ とは言わない。

男はうやうやしくお辞儀をすると、部屋を出た。

ガチャリとドアが閉まる音。それを確認してから、マリアは部屋のど真ん中で堂々とあくらをかく女性に目を向けた。

「エイダさん、お待たせ。どのくらい待った？」

「5時間…くらい」

呼びかけられた女 エイダ・バースは、ぶすつとしながら、メイクによる浅黒い顔を歪ませた。

全身のアクセサリーが金属音を奏でる。

「起こしても起きないし、起きないから任務も達成できないし、すんごく困った」

「あははー そーりーそーりー！ にしても、相変わらず影が薄いですねー ロー君なんて、隣にいるのに気付いてなかったし」

「響きが悪いから『影が薄い』は止める！ 気配を殺すのがうまいとか、見事な潜入だとか、他にもっとまともな表現があるだろ！」

「まーまー そんじゃ、早速エイダさんの任務を達成させてあげようじゃありませんかー」

「……アタシ、あんたより年上よね？」

「それがどうかしましたか？」

「いや、………やっぱいいわ」

なんでそんなに偉そうなのかと問おうとしたエイダは、反省の欠片もなく「にへ〜」と笑うマリアを見てやる気をなくした。削がれたと言ってもいい。

「早く〜 風呂に入ってないせいで頭がかゆいんですよ〜」

女らしくないことを言う彼女に、諦めたように、任務が書かれた紙を手渡した。

「……………何コレ」

途端、マリアの表情が曇った。

「だから次のあんたの任務」

「なんで？」

「は？」

「なんでこんなメンド臭いことやんなきゃなんないんですか？」

「アタシが知るわけないでしょ」

「やだよ。断る」

散々人を待たせた挙句、「やだ」という台詞を吐く金髪の後輩に、エイダはこめかみを痙攣させた。が、エイダには彼女をに「わかりました」と言わせる決定的なカードを持っていた。

そのカードを……切る。

「あのさ、マリア。実はね……………」

31話 小さな願い（後書き）

皆さんも、体調崩したら休養が大事ですよ。

筆者みために、2時とか3時まで起きてちゃダメですよ。

感想お待ちしております。

32話 スープ（前書き）

31話の最後が切れてました。

申し訳ございません。

やっぱ一発書きなんかするもんじゃないですね。

ということ、訂正前に読んだ方は、31話の最後の600字くらいを先に読んで下さい。

ご迷惑をおかけします。

32話 スープ

親指の上で、シャープペンシルが二回転の綺麗な弧を描いた。藤本千鶴は放課後の生徒会室で、面白くなさそうに肘をつく。彼女はいつたい何が気に入らないのか。それは、今の生徒会室を見れば一目瞭然である。

「……サボリね」

「ち、違いますよ、きつと。さつきも言ったじゃないですか。アカリさんが体調崩したって」

「崩したのは明さんでしょう？ だったら彼はサボリよ」

「……お前は『看病をしている』とは考えないのか？」

零がサボリだと断言する千鶴に、二人が反論する。

各クラスの文化祭出し物が決まった今、生徒会役員の仕事は山積みであると言っても過言ではない。

の割に、現在の生徒会室には、四月当初のガランとした風景が広がっていた。

教室にいるのは、千鶴、進、葵の三人だけ。

「大体、神無月さんはどうしたのよ？」

「お見舞い……らしいが」

「あ~~~~んのバカップルめ！」

千鶴が感情をむき出しにし、拳を握りしめる。

普段の彼女には珍しい行動に、葵は遠慮がちに笑った。

「はあ〜 私も天戸君がいなくて残念です」

「……葵ちゃん、それはどういう意味かしら」

「……………いくらお前でも、奴は苦勞すると思うが」
「へ？ ……あ、ち、違いますよ！」

なんとなく呟いた言葉に、千鶴と進が妙に食いついたことを疑問に思った葵は、少々のタイムラグを経て、その意味を正確に理解した。

長い髪をぶんぶんと左右に揺らし、必死で否定する。

「そ、そういう意味ではなくて、今日、授業が1-Aと合同だったんですけど、天戸君が片山先生の『助手』をしていると聞いて、その……………せつかくだから指導をお願いしようかと……………」

「ああ、確かにその話は俺も知っている。一年から四年まで、既に希望者がかなり集まっているんだろう？ まあ、当然と言えば当然だが」

「ふうん？ それで葵ちゃんも狙ってたわけね？」

「あ、はい…………… まあ」

葵は曖昧に頷く。

「でも……………変じゃない？ 確かに天戸君も凄いけど、神無月さんだって凄くないじゃない。っていうか、凄すぎるじゃない？ 正直、天戸君と神無月さんの試合なんて、私は全くと言っていいほど理解できなかったわよ。いきなり変なところから魔法陣が出てくるし、瞬きした次の瞬間には地面が炎の海になってるし、と思ったら今度は氷の海になってるし」

「あ、それは私もですよ？ 凄いいことしてるっていうのは分かるんですけど……………」

「それで？ 千鶴は何が変だと思うんだ？」

進と葵の視線が集まる中、千鶴は形の良い顎に手を当てて「うー

ん」と唸る。

「何で魔術の授業で、神無月さんをその……『助手』とやらにしないのかしら？ 彼女、もう三年だけど、今まで一度もそんな話が出たことないわよね？」

「……確かにそうですね。あんなに強いのに……」
「ただ単に、担当教師の性格の違いじゃないか？」

体術の担当教師は片山徹であるのに対し、魔術の担当教師はケビン・フロル　この学校の教頭である。

「ケビン先生……確かに、片山先生とは全くタイプ違いますね」

「そう言えば、なんでケビン先生は東国にきたのかしら？ 魔力量800オーバーだったわよね？」

「えっ！ そうなんですか！？」

葵が純粹に驚く。

ケビンの魔力量の多さと、それでいて他国の教員をしているという事実の両方にだ。

「普通、国が手放さないとありますが……」

「でしょう？ 進はどう思う？」

「俺が知るわけないだろう。それよりも……」

進は千鶴の肩を掴み、やや強引に話の主導権を握った。

呆れたような彼の表情に、千鶴は自分の魂胆がバレバレであると悟った。

「えへっ」

「えへ、じゃない。さりげなく自分の仕事をこっちに移動させるな」

「え……あ！ いつの間に！」
「葵、お前も気付け」

進にギロリと睨まれ、千鶴はしぶしぶと仕事に取り掛かった。

「そっか〜 明ちゃん風邪か〜」

夕飯を家族四人で囲みながら、月下結衣は口を尖がらせた。

「せっかく合同授業だったのに……」

「しよがないわよ〜 結衣ちゃんだって風邪引くと、昔はよく零くんに看病して貰ってたじゃない〜」

「そうだな。『焼き芋……焼き芋食べたい！』とか言ってたっけな」

ハツハツハ（もしくはウフフフ）と笑いながら、鏡花と重夫がなだめる。

焼き芋の件についてはよく覚えていたので、結衣は「そうだった？」と惚けるわけにはいかず、結果「うう〜」という唸り声となって口から漏れた。

「で、でも！」

いきなりの大声に、大人二人は笑うのを止め、結衣の方へ向き直る。

どうせこの変な姉のことだから、また変なことを言い出すのだからと密かに予想していた芽衣は……

「風邪引いたときは、あんまりいい思い出ないよ〜！」

その予想があまりに的中していたため、軽い眩暈を覚えた。
……そもそも風邪に思い出もなにもないだろうに。
しかし、結衣の言葉の意味がよくわからなかったので、（理解する必要があるのでどうかは横に置くとする）念のための説明を求め
る。

「……姉さん、『いい思い出がない』ってどういこと？」
「ん？ え」とね。私が風邪引いた時の話でね……」

「あ…… れいくん……」
「ごめん、起こした？」

結衣が深い眠りから覚めると、台所でなにやら忙しく走り回る零の姿が目に入った。

まだ頭がボーっとする。
起き上がろうとすると、ひどいだるさが全身を襲った。

「ちょっと待って。もうちょっとで……おし、できた」
「なにが……できたの？」
「病人用スープ」

そう言って、ミトンをはめた零が鍋ごと持ってきたのは、壊滅的な色をしたスープだった。

「ななななにこのスープ！」

いつもの零の素晴らしい手料理とは似ても似つかないモノに、結衣は警戒を露わにする。

寝起きだというのに、目はパッチリ覚めてしまっていた。

「ん？ 言っただろ。病人用スープだ」

「……おいしくなさそう」

「うん。おいしくないと思う」

「やだよ！ 食べたくないよ！」

零が作った妖しいスープを、必死で拒絶する。

緑色なんだか紫色なんだか判別がつかない色のスープを、素直に口にする気にはなれなかった。

食べたら余計に具合が悪くなりそうである。主に胃腸の具合が。

しかし、結衣の反応を見た零は、かなり大袈裟に悲しそうな顔をした。

「あー 残念だなー スープを最後まで食べれば、この……特製手作りプリンが食べられるのに」

左手のお皿をこれ見よがしに見せつける。

そこには、結衣の大好きなプリン（ジャンボサイズ）が、ぶるぶる震えていた。

上には大量のカラメルソースがかかり、下まで垂れている。胴体は黄金にキラキラ輝き、柔らかさそうに全体が振動している。

結衣は、そのあまりの魅力に、思わずゴクリと喉を鳴らした。

「しかもコレ、カボチャをもとに作ったから栄養はあるし、カロリーも抑えてあるんだけどなー」

「うう……」

「じゃ、四つ作ったから、まずは鏡花さんに食べて貰おうかなー」

零は、その輝くプリンを小皿に乗せ、別室にいた鏡花を呼ぶ。

「鏡花さん、これ作ったんで、もし良かったら結衣の前で食べてみてください」

「うわあ〜 おいしそうなプリンね〜 是非結衣ちゃんの前でいただきます〜」

「ちよっ なんで私の前なの〜 れいく〜ん！ お母さ〜ん！」

零の意図を一瞬で理解した鏡花は、わざわざ椅子を結衣の布団の前まで移動させ、腰をおろすと、さっそくプリンをスプーンでつついた。

プリンに細かい振動が走る。

「わ〜 凄く美味しそうね〜」

「どうぞ、食べてみてください」

「……………」

「やだ〜〜 美味すぎるわ〜!!」

「ありがとうございます」

「……………」

「お？ どうした結衣。食べたければこの病人用スープを……………」

「そ、それはイヤ〜！」

「んじゃプリンはお預けってことで……………」

「それもイヤ〜！」

「んもう 結衣ちゃん、ワガママよ〜」

「だって〜」

「ホレホレ、食べ食べ」

「はい結衣ちゃん、あ〜〜ん」

「イヤ〜〜〜!!……!!」

「……ってことがあってね……」

「……たしかに『いい思い出』じゃないわね」

「あゝ あったわねゝ そんなことゝ」

鏡花が、懐かしそうに頬を緩める。

結衣の過去話に、芽衣は少しだけ同情した。

いつも食い意地が張っている結衣だからこそその行動だったのだから、零が作るお菓子のおいしさを知っているために、そのつらさはよく分かる気がする。

「でも、最終的にプリンはしっかり食ってたよな？」

黙って聞いていた重夫が口を開く。

「そ、そうだけどゝ」

「しかも、あの日を境に、風邪は治ったんじゃないか？」

「そ、そうだけどゝ」

「だったら、むしろ感謝するところだと思っが？」

「で、でも、あの零君だよ!?!」

『あの零君』とはどの零君なのか。

芽衣が疑問を口にする前に、結衣が自ら話し出した。

「栄養があつておいしいものくらい、絶つっつ対つくれるもん!」

「……」

「あの不味さは絶つっつ対わざとだもん!」

「……そうかも知れないわね」

昨日、零から言葉攻め（？）を食らった芽衣には、結衣の言葉が奇妙な説得力を持って聞こえていた。

「零……なに、それ」

「病人用スープ」

「……」
「過去、結衣とリリを一発で治した実績がある」

零の顔に浮かんだ楽しそうな顔を見た瞬間、明の中で何かの警告ブザーが鳴った。

「嫌」

「アカリ、諦める」

「……嫌」

「あんまり強情だと、口移しで無理やり食わせるぞ」

「っ！／＼／＼／＼」

「ホレ、イヤだったら諦めて食え」

おそらく風邪のせいだけではないであろう赤い顔を、零の方へ向ける。

差し出されたスープは、緑だか紫だか分からない色をしていた。

危険を感じる嗅覚が、一気にレッドゾーンへ跳ね上がる。

「零…… 焼けたよ」

台所では、瑠璃が炎魔法でパン生地を焼いていた。

本来オープンでやることだが、瑠璃ほどに力の調節がうまくければ、魔法で焼いたほうが圧倒的に早く、そしておいしくなる。

「じゃー次は右のやつ焼いてくれー」
「おっけー」

瑠璃に指示を出し、再度明に向き直る。

「ホレ、あゝん」

「う……じ、自分で食べられる」

「嘘つけ。起き上がることにすら出来ないくせに」

「あ……う」

「ホレ、あゝん」

「……」

とつとつ観念し、小さく口をあける。

零はその口に、スプーンを滑り込ませた。

「……」

「不味いか？」

「……うん」

少し胸を抑えながら頷く。

その反応に、零はスープが効いていると確信した。

（【知の権化《ミネルウア》】から貰ったもの、意外と役に立つな……）

このスープは不味くなくてはいけない。

だから、普通「美味しいか？」と聞くとところを、あえて「不味いか？」と聞いた。

「正直でよろしい。ホレ、もう一口。あ〜ん」

おずおずと開いた明の小さな口に、素早くスプーンを運ぶ。

その光景を、瑠璃は複雑そうな表情で見つめていた。

32話 スープ(後書き)

感想お待ちしております

33話 ツゲナイ(前書き)

今回は珍しくターナ視点です。

33話 ツゲナイ

六月とは思えないほど、ギラギラと輝く太陽。

無遠慮に巻き散らかされる日差し、熱。

うつすらと滲む汗を手で拭い、熱線の源をギロリと睨んだターナは、網膜を焼く光に顔をしかめ、内心で己は馬鹿かと罵った。

「ありがとうございます！」

にこやかな笑顔で頭を下げる花屋の女性に、同じくにこやかな笑顔を返してから、手元の花束を眺め、バスの時刻表を眺め、最後に腕時計を眺めた。

今日は土曜日。

平日ですら一時間に一本しかない北カルデイナ総合病院経由のバスは、土休日ということで、さらに本数が少なくなっていた。

つい十分ほど前にバスが出てしまったこともあり、次のバスまで二時間近くある。

「あー どうしょつかない」

独り言を呟いてみても、なにか解決策を教えてくれるわけではない。

時間という絶対的な存在を前にターナができることと言えば、ただ待つことだけだった。

緊張しているのだろうか。

何年もの間、心の奥底に抑え込んできた感情が、再び暴走することを恐れているのだろうか。

ふと自分の内情を客観的に分析したターナはしかし、一秒後には首を横に振っていた。

理解しているつもりだ。そんなに甘くはないと。希望はやがて苦痛に変わり、自信を傷つける。

淡い期待は己の無力感だけをはぐくみ、精神を蝕む。

「例外」はあると言うが、自分がその「例外」になる可能性など一%にも満たない。

そんな理不尽な世の中で、人々は自分になんとか折り合いをつけて生きていくのだ。

そう、分かっている。

しかし、どうしても希望を捨てきれない自分がいることを知っていて。

その度、ターナは友人 神無月瑠璃の顔を思い出す。

彼女の強さが知りたかった。自分よりずっと悲惨な過去を持ちながらも、心から笑うことができる彼女の強さが。

仲が良くなる度を感じる、否、感じてしまう。

自分は、九年前のあの日から、全く成長していないことに。すれ違う人々に問いかける。

アナタノ世界ニ、私ハイマスカ？

「こんにちは、カレーニナ先輩」

「うっひゃあ!!」

突然声を掛けられたターナは、奇声と共に肩をビクンと震わせ、持っていた花束を落とすようになる。「そうになる」というのは、落ちる直前に、声の主が間一髪で拾い上げたからだ。

「……大丈夫ですか」

「へ？ あ、ああ、アマト君？」

声の主は、現在いろいろな意味で有名な天戸零だった。

零は未だテンパったままのターナを見て、困ったように半笑いを浮かべる。

「すみません。そんなに驚きました？」

半笑いを苦笑いに変え、謝りながらキャッチした花束を差し出す。一方のターナは、しゃがみこんだ零から花束を差し出されるといイケメンうシチュエーションに動揺し、思わず周囲の視線を気にした。

「あ、ううん。こっちこそゴメンよー！」

「いえいえ、それにしても、道のご真ん中でポーっとしてると危ないですよ」

「へい？」

零に指摘され、いつの間にか白黒になっていた世界が、再び色を取り戻す。

大勢の人。騒がしい街の音。

どうやら、無意識のうちに外へ出て、ずっと突っ立っていたようだ。

傍から見れば、非常に残念な少女だったことだろう。

その事実を認識し、目の前の後輩が苦笑している事実を認めたターナは、一瞬にして全身が熱くなるのを感じた。

この年で夢遊病はマズイ。

「暑さにやられましたか？」

悪戯っぽく笑われ、「うあ〜」と声を出しながら頭を抱える。

「まあ、先輩は日光に弱い体質……」
「そ、それよりもさ！」

いつまでもこんな恥ずかしい話題を続けられることをよしとしないターナは、零の言葉を半ば強引に遮った。

「アカリちゃんの体調はどうなのさ！」

そう、それが、今学校でも、一番ホットな話題。

我ながら不自然過ぎる話の持って行き方だとは思ったが、うまく話題を転換することができたように感じた。もっとも、彼がターナの意図を理解し、話を合わせたように見えなくもなかったが。

「アカリですか？ 今は熱も下がったんで、月曜からは復帰できると思います」

「そうかそうか」 アマト君が看病してあげたのかな？

「ええ、まあ」

「仲睦まじいじゃないか」

茶化すように言ってみる。

「どうでしょうね、本人は嫌がってましたが」

「……え、えと、それは単なる照れ隠しじゃ……」

しかし目の前の後輩には全く効かず、それどころかまるで見当違いな返答を返された。

相手を間違えたかと、ターナは一瞬軽い後悔に襲われる。

「それにしても、よく知ってますね？」

「ん？」

「アカリが体調を崩したことです」

一瞬キョトンとするターナ。

それを見て、零もキョトンとする。

「……いや、そりゃあ知ってるよ」

「……ああ、アカリは有名人ですもんね」

ひとり納得する零に、よほど「あんたもだよ」とツッコんでやりたくなつたが、意味のないことのように思えて、言うのをやめた。瑠璃から、彼の性格についてはよく聞かされているし、今もそれを目の当たりにしたばかりだ。

「アマト君はなぜここに？」

いろいろ諦めたターナは、取りあえず当たり障りのない話題を持ち出した。

「買い物です。アカリは念のため、まだ出歩かないほうがいいでしょうから俺ひとりで」

「なるほどー 前にも買い物中に会ったことあったよねー」

「そうですね。あの時はアカリもいましたが」

そこまで口にして、零は突然口を「あ」の形にして立ち止まった。

「先輩、これからお時間ありますか？」

「……へ？」

「せつかくですから、どこかへ行きましょう」

「……へ？」

二回も続けて拍子抜けた声を出すターナの赤髪を、風が揺らす。

「俺が奢りますよ」

ケビン・フロルは、いつまで経っても現れない人物を、辛抱強く待ち続けた。

時計の長針は、待ち合わせの時間から既に三周をまわり切り、四週目に入ろうとしていた。

最初の頃の緊張は、最早綺麗さっぱり消え失せている。

時間などの約束事をキチンと守る性格のケビンにとって、待ち合わせの時間に遅れるなど、正直信じられないことであった。プライベートであれば、問答無用で帰宅していたであろう。それはつまり、ケビンは今、プライベートで人を待っているわけではないということを表している。

それから三十分ほどだろうか。

ようやく目当ての人物が姿を現した。

長い金髪。遠くからでも目を引く美貌。

南国出身の女性　　マリア・フェレだ。

時間にして、約三時間半の遅れである。

それにも関わらず、別段急いだ様子もなくのんびり歩いてくる彼女に、冷静なケビンも思わず怒りを爆発させそうになったが、自分と相手の立場を確認し、そして相手も忙しい身であることを考え、怒りを胸の中に沈めた。（罪悪感を全く感じていなさそうな彼女の笑顔に脱力したこともあるが）

「マリア・フェレ様、ようこそカルディナ王国へ」
「へろへろ ケビン。遅れちゃってごめんね」

流暢な東国語。

この国に来たのが、これで三回目だとは到底思えなかったが、彼女の頭脳を考えればむしろ当然のことであると、ケビンは考えを改めた。

「モネツトでの長旅、さぞお疲れでしょう。さっそくホテルに……」
「あー ボクさ、そういう堅苦しい挨拶嫌いなんだよね。もっと気楽にして欲しいかもー」

相手を散々待たせ、それでいていろいろ注文が多い彼女は、普通に考えればかなり失礼な輩であろう。

しかし、そんな天真爛漫な態度が彼女にはとても似合っていて、ケビンも怒りを感じる気すら失せてしまう。

「では手短に言いましょう」

当初よりだいぶやわらかい口調で。

「【知の権化《ミネルウア》】改め、マリア・フェレ様、これからよろしくお願い致します」

「うん、ボクからもよろしく」 あ、そうだ」

互いに握手を交わした後、マリアはほんわかした空気を、突然張りつめた空気に塗り替え、射抜くような瞳をケビンへ向けた。

「ボクはボクの夢のために動くから」

一步、また一步と詰め寄る。

「邪魔はさせない」

綺麗さっぱり消えたと思っていた緊張が再び蘇り、ケビンの体を内側からバクバクと叩き鳴らした。

太陽による熱気だけとは到底思えない量の汗が、全身から吹き出る。

「わかり……ました」

「うん、じゃあ月曜にまた」

辛うじて声を絞り出した時には、マリアの表情は普段通りになっていた。

「アマト君は、さ……」

「？」

「絶対に叶わないと分かっても、願わずにはいられない夢があったら、どうする？」

喫茶店にて、ターナはコーヒーを含む零に問いかけた。

なぜそんな質問をしようと思ったのかは分からない。

ただなんとなく、年の割に達観している、天戸零という少年の意見が聞いてみたくなったのかもしれない。

「……難しいですね」

一瞬だけ目つきが鋭くなった後、ポツリとこぼした零の返答は、ひどくシンプルなものだった。

さっきまでしていた文化祭の話とは打って変わって、内容にも空気にも、冷たい気配が滲む。

「……ずっと願ってた、かもしれない」

「……たい？」

語尾に置かれたアクセントに違和感を感じたターナは、釈然としない表情を零へ向けた。

零は笑いながら続ける。

「俺には無理ですから」

「どうして？」

「俺は弱虫なんで、願う続けるなんてそんな怖いこと出来ません。たぶん、すぐ諦めちゃうと思います」

弱いから、諦める。

額を弓矢で打ち抜かれたような衝撃が襲った。

「先輩は、希望を捨てられないことは弱いことだと思いますか？」

言葉が入り込む。

言葉が音になる。

「俺は、それはそれで、ひとつの強さだと思ってます」

音となった言葉は、錆びついた秒針を、止まった時を。

「諦めれば楽になりますからね」

強引に、けれど力強く。

「弱さゆえ、途中で諦めてしまう人も多いですが」

ゆっくり動かしていく。

「先輩はどうですか？」

少女のセカイは回りだす。

「……アマト君は、どうして今日誘ってくれたの？」

「……強いて言うならば償いです」

「ツグナイ？」

「はい、では先輩、俺はこれで失礼します」

「あ、ちよっと、もう少し……」

一緒にいて、と続けるつもりだったターナの言葉は、腕時計を指し示す零によって、喉の奥へ吸い込まれてしまう。

「バス、あと十分切ってますよ？」

「……あ」

二時間近くあったバスの待ち時間は、いつの間にか残すところ僅かになっていた。

これを逃したら、次は何時になるか分かったものではない。

ターナは、慌てて零の後を追って席を立った。

「え、えと、それじゃアマト君またねー 今日^はアリガトー！」

「いえ、こちらこそ」

店の外で慌ただしく別れを告げ、ターナはバス停に向かって歩き出す。

自分でも驚くほど軽快な足取り。

家を出た時の、泥水の中を這いずり回るような重い空気は、今は緑の中を散歩するような心地良い空気に変わっていた。

と、そこであることに気が付く。

「あれ？ 私、アマト君にどこ行く予定なのか話したっけ？」

足を止め、今日の会話の内容を思い出す。

しかし、いくら探しても、「お見舞い」はおろか「病院」という単語すら口にした記憶はない。

当然、何時発のバスに乗るつもりなのかも伝えていない。

「まさか……知ってた？」

病院へ行く予定であることも、そのためのバスが何時間後に出るのかも。

そして、それまでどうやって時間を潰すか困っていたことも。

視線を下に落とす。

手元の花束は、購入したときよりも、色鮮やかになっていた。

33話 ツゲナイ（後書き）

喉がヤバイです。

声が出ない……

感想お待ちしております

34話 大陸一の頭脳(前書き)

え、大変お待たせしました……

え、待ってないって？

そんなこと仰らずに待って下さい(涙)

34話 大陸一の頭脳

茜色に染まる空の彼方から、太陽が徐々に顔を見せ始めると、眩い光を一面にまき散らし、人々に意識の覚醒を促した。

澄み渡る青空には、雲が一つもない。

何はともあれ、一週間が快晴で幕をあけるとするのは悪くない。

促されるまでもなくすでに意識を覚醒させている零は、こんな良い日に憂鬱な気分でのいるのも場違いかと考え、出かけた溜息を苦笑に変えた。

今は六月の半ば。

文化祭の日まで、もうあまり時間は残されていない。そんな状況で、看病のためとはいえ、零は二日間（土日も含めると四日間）も学校を休んだ。

つまりどういうことか。

こき使われるのが目に見えている。特に藤本親子に。

どんな理由をくつつけてみたところで、聞き入れてくれる連中ではないだろう。さらに問題は、教室にも生徒会室にも「藤本」がいることだった。

いっそのこと、「デーモン」から「サタン」へと昇華させようか？

「零、おはよう」

そんなことを考えていると、すでに制服姿の明が発する澄んだアルト声が、暗い方向へ傾きかけた思考をクリアにする。数日前は熱で赤みが差していた頬にも、生来の白さが戻っていた。風邪を引いている時の方が血色が良いというのも、それはそれで奇妙な話だが、彼女にはそれが普通なのである。

「おはよ、アカリ。一応熱測るぞ？」
「うん……」

左手を明の額へ乗せる。

零の鋭過ぎる感覚神経は、たった数秒触れるだけで、正確な数値を弾き出した。

「……三十六度一分、うん平熱だ……な？」

熱がないことは、すでに分かり切っていたことだった。測ったのも念のために過ぎない。

しかし、明の神懸かった白さに徐々に赤みが差し、それに伴って徐々に熱が上がってくるのを感じた零の語尾は、予想外の疑問形となった。

「……なんで照れる？」

「……照れてない」

即座に否定。

そして沈黙。

「いやだつて顔が赤……」

「照れてない」

またしても即座に、しかし今回は若干大き目の声で否定する。

どうやら認めないつもりらしいと理解した零は、強情な明の態度を何とか崩すため、何か気の利いた台詞でも返してやろうと思いを巡らせた。しかし、そんなことに思考を巡らす余裕がある自分に奇妙な違和感を感じ、その違和感の正体が分かった時には、零の表情は自然と綻んでいた。

「どうか……した？」
「いや、なんでもない」

月下家を離れてから四年間、ずっと一人で暮らしていた時間は、ひどく乾いたものだった。

それが今、着実に変わりつつある。

確かに、明は零に潤いを与える存在となった。

取りあえず今は、明が治ったことを喜ぼう。

面倒な文化祭の仕事の件は、甘んじて受け入れよう。

明の頭を軽く撫でる。

その行動が、図らずも明の強情な態度を見事に打ち崩したことに、零はついぞ気が付かなかった。

「……おかしいでしょ、コレ」
「……うん。そだね……」

零と瑠璃は、明らかにおかしな名前が全面に押し出され、堂々としていることにツツコまずにいられなかった。

朝、明と一緒に登校した零は、教室にて芽衣をはじめ、義之や淳（彼は明に対してだけだが）らクラスメイトの拍手喝采を浴びた後、ある場所へ行くよう指示された。

三階の奥の教室。そこは生徒会室の隣で、普段教員が会議などで使用する場所だ。基本的に生徒は入る機会がないので、何をするの

か疑問に思ったが、それ以上に、香織がそれを指示したことに驚いた。

「なんのためですか？」

「ん〜 私も教頭に言われただけなのよ。とにかく、最優先事項らしいわよ」

この親馬鹿なサタン（結局デーモンから進化させることにした）のことだ。真つ先に「娘のところに行って手伝え」と言われるものだと思っていた。しかし、指示された場所は隣の教室だった。

「ん？ 天戸、どうかしたのか？」

「……熊か。いや、なんかいきなり『三階の教室に行け』って言われた」

「心当たりはねえのか？」

「ないな」

零とサタン・香織の会話を見ていた義之が、興味津々といったように問いかけてくる。

「チツ！ たつぷり仕事押しつけてやろうと思ってたんだがな」

「……それが狙いか」

「おうよ！ あと、月下さんとも会話してやれよ？ お前がいない

間、元気なかつたんだからな」

「芽衣が？」

少し驚いた。

芽衣はどんな心情の変化があっても、他人にそれを見せることを嫌うタイプなのだが……

あるいはそれを見抜く義之の観察眼が鋭いのか。

(そういえば熊の主要武器は弓だったな……)

メインウェポン

ボウ

だとしたら、目はいいのかも知れない。KYであることは否定できないが。

「分かった。覚えておくよ」

「おう！ あと、クラスも手伝えよ？」

「はいはい、終わったら手伝うよ」

苦笑しながら1-Aを出る。

そして現在、その三階に位置する目的地に着いたのだが……

「なんだ『Help me・委員会』って？」

零の隣で、瑠璃が微妙な顔をする。

彼女も朝登校してきたら、零と同様に、担任にここへ来るように言われたらしい。

「うーん、この学校にこんな委員会あったかなあ……」

「なかったな」

もう一度、教室の入り口に取り付けられたプレートを見上げる。

つい先日まで「会議室」だったそれは、「Help me・委員会」に変わっていた。

「しかもよく見ろりり。これ……大文字で始まっている。しかも、ちゃんとピリオドが打っている。つまり『文』だ」

「さらによく見ると、動詞で始まっているね。命令形だね。ってことは直訳すると……」

お互いに顔を見合わせ、同時に呟く。

「『私を助ける』委員会」

ピュ〜と風が吹き抜けた（気がした）。

言ってしまったから、言うべきではなかったかも知れないと若干後悔する。

取りあえず、入って見ないことには何も始まらないと判断した零は、微妙な空気を振り払うように教室のドアを開けた。

そして目を丸くした。

「んお？ おお〜！ ゼロちゃん！ ルリリン！」

この学校にいるはずのない人物が床に寝転がっていた。

腰まで届く長い髪は、流れるような金髪。

切れ長の目は澄んだサファイア。

どこからどう見ても美人としか形容しようがない人物、しかし全く女らしくない彼女は、零と瑠璃には色々と馴染みがある人間だった。

「えっ……マ、マリアさん!？」

「なるほどね……」

瑠璃が驚く横で、零は二重の意味で納得する。

これなら、自分と瑠璃だけが呼び出されたことに説明がつくだろう。そして、『私を助ける委員会』も、別に間違っていないことになる。あれから彼女が変わっていないければの話だが。

「ね〜ゼロちゃんでもルリリンでもいいから、ボクになんか恵んで

主に食べられるもの」

……何も変わっていなかった。

流暢な東国語によつて、予想外に早く出た結論に苦笑する。

東国語は、彼女を拾つて育ててくれた恩人が教えてくれたらしい。ボクという一人称も、その時身についたとか。

ボクツ娘こフエチ（？）だったのだろうか。
もう確かめる術はないが。

マリア・フエレ

彼女は、一人では絶対に生活できないと零が確信する人物だ。

おそろしく頭が良い代わりに、他が壊滅的という典型的な天才タイプ。

零や瑠璃と同じく《組織》に属する人間で、冠する称号は「知の権化《ミネルウア》」。

零に「頭脳体術」を教えた張本人であり、かつて大陸に一人しかなかった「治癒」の能力者でもある。「かつて」というのは明が二人目になつたからだ。

「そ、それよりマリアさん、なんでここにいるんですか？」

マリアの頼みは完全にスルし（彼女にはいつものことなので、そのような対応がベストであるとすでに学んでいる）、瑠璃が至極当然の疑問を投げかけた。

普段、彼女は中央セントラルで、助手のロール・アルドと共に研究に打ち込んでいる。

中央セントラルとはその名の通り大陸の中心に位置する場所であり、“オネツト”を使わなければ行くことができない。九年前の大戦争後に建設され、いわゆる完全中立国として成り立っている。

《組織》の本部や四大国の連合、さらには最大の市場など、さま

さまざまな中枢機関が置かれている場所で働く彼女が、東のカルディナ王国にいる。これは明らかにイレギュラーな事態だった。

「まあ……ね。ん〜ゼロちゃんは予想がついてるかな？」

マリアの口から漏れる驚くべき言葉に、瑠璃が零の方へ顔を向ける。

事実、零は九割方予想ができていた。いや、薄々感じていたことが、マリアの存在によって確信に変わったといった方が正しいか。しかしそれは、外れてほしいと願っていた予想だった。

「……念のための保険ですか？」

「半分正解かな。いや、実はもう半分についても予想できてるんじゃない？」

零とマリアの視線が交錯する。

さすがに彼女相手に駆引きは分が悪いかと考え、零は内心で舌打ちをした。

「待って」

突然の瑠璃の静止の声。

それは均衡を意外な形で崩す。

「私は外出てるね？」

瑠璃の目が、真っ直ぐ零を捉える。逸らすことが出来ないその瞳に吸い寄せられる。

問うているのだ、零がどうして欲しいのかを。

そして瑠璃の予想通り、それは零の望んでいたことだった。

「……ありがとう」

「うん、いいよ。ただ、後でちゃんと聞かせてね」

笑いながら教室を後にする瑠璃の背中に、言葉にできない感謝を抱いた。

無理に明るく振る舞っているように見えた。

当たり前だ。その場にいたかったに違いない。

それでも彼女は、零のために席を外してくれた。

「あー せっかく呼んだのに」 相変わらずルリリンはゼロちゃんにデレデレだねえ」 ボク、もう見てていじらしくなっちゃうよ」

「はい？」

「ハア」 何でもないよ。そんじゃ、本題に入ろうか」

零の鈍感っぷりは身をもって知っているので、マリアが特に触れることはしない。

何故そうなってしまったかについても、長年《組織》の医療班として働いてきた彼女は、よく知っていた。

マリアは座る場所を床から椅子へと変え、零にも座るよう促す。

「それで、ゼロちゃん。君の思考はどこまで届いてる？」

鋭く踏み込むマリアに、同じく鋭く切り返す。

「アカリの背後に『国』がいるという所までです」

34話 大陸一の頭脳（後書き）

誤字脱字などありましたら教えて下さい。

感想お待ちしております。

35話 揺るがない意志（前書き）

またまた間が空いてしまいました……

誤字脱字がありましたら教えて下さい

35話 揺るがない意志

正面に並ぶ円柱と、玄関を抜けた先に続く赤い絨毯。天窓から差し込む陽光は色取り取りのガラスによって鮮やかに染められ、厳かな空気が流れる空間を虹色に照らす。

大陸連合本部宮殿。

その名に相応しい重みと風格、そして神々しさが、そこにはあった。

正面階段を上りきり、さらに長く続く廊下を進んだ一番奥。そこに、この風格の源泉ともいうべきものが祭られている。

厳重に閉ざされた扉には、先代の王の姿を描いた肖像が飾ってあった。どの人物も、強く、たくましく、そしてこの大陸を愛した者たちだ。自分の先輩であり、師匠であり、恩人でもある彼らの肖像を前に、カルディナ王はいつものように深々と頭を下げると、長い黙^{もくどく}を捧げた。

王は時々、この場に訪れる。それは決まって、自分のしていることが正しいのかどうか分からなくなったときだ。

心を静め、考える。

自分が何のために在るのかを。

自分が何のために生きてきたのかを。

(我が思いは先代と共に)

胸に手を当て、もう一度礼をすると、後ろを振り向く。

そこで初めて、自分を見つめる視線に気が付いた。

「ごぎげんよう、カルディナの王。こんな場所にいるとは珍しい。主も気が高ぶったか？」

「シウルリウスの王よ、来ておったのか」

厳かな空気の中でも、全く違和感を感じさせない壮年の男性が、そこに立っていた。

足取りはゆっくりだが力強く、迷いの欠片も感じさせない。

「遠路はるばるご苦労であった。セレスの王はもう来ておる」

「あとは西の王だけか。まあ、いつものことだが。それと、【知の権化《ミネルウア》】は間違いなく貴国へ赴いたか？」

「昨日到着したとの報告が入っている」

「そうか。……しかし公言しているようなものだ。良かったのか？」

「問題ない。それも計画の内だ」

重く威厳のある声が、宮殿の空気を震わせた。

マリアはサファイアの瞳を細くすると、顎の下で両手を組んだ。

その表情に、一切の変化は見受けられない。

探るような視線と試すような視線。それらを足して二で割ったような妖しさを前に、しかし零の思考は驚くほど冷静だった。

「ひとつ確認したいんだけど」

零を見つめながら、マリアがゆっくりと口を開く。

「その考えに至ったのは今が初めてじゃないよね？ もっと前から感付いてたはずだ」

鋭い眼差しが零を射抜く。

およそ感情と呼ばれるものを全て取り去ったかのような能面へと表情を変えたマリアは、その美しさも相まって、壮絶な威圧感を放っていた。

誤魔化しは通用しない

それを悟らせるためであると暗に理解した零は、その圧力を真正プレッシャー面から受け止めた。

「気付いてましたよ。あまりにも周りが『穏やか』過ぎましたから『穏やか過ぎた?』」

「はい。マリアさんは、アカリが治癒能力者であることはご存知ですよね」

「勿論だけど……………?」

不意に話題が切り替わったことに、一瞬戸惑う。しかし、それは文字通り「一瞬」だった。すぐに頭を整理して思考を働かせ始める。そして、あつという間に零が言わんとしている『不自然』の存在を認知した。

日常が穏やかであること。

天戸明が大陸で二人目の治癒能力者であること。

この全く関係がないように思える二つの事柄を結ぶ『違和感』。マリアは「なるほどね……………」と呟くと、聞きようによっては楽しそうにも聞こえる口調で、ゆっくりと確認するように話し出した。

「東国が噂の拡散を意図的に防いでたつてことか、確かにそう考えれば、いろいろと説明がつくね」

ひとり頷くマリアに、「話が早くて助かります」と告げ、零は大きく息を吐いた。

今までひとりしか存在しなかった『治癒』の能力者。しかもその人物は《組織》の人間だ。二人目が現れたという話が広まれば、も

つと騒ぎになっていい。実際、明の転入初日は生徒たちの間で騒ぎになった。他国から会いに来る人間がいても、何らおかしいことはなく、寧ろ普通だと考えられるだろう。しかし、今のところの零たちの生活は、驚くほどにゆっくりしたものだ。

「【神々の黄昏《ラグナレク》】が効いてるね。身内を亡くした子供たちは多いし、生き残ってる人物も国に携わっている場合がほとんど。上から圧力をかければ、噂の拡散ぐらい簡単に食い止められるだろうからね」

「マリアさん自身、二人目の『治癒』能力者がいるなんて話、聞いたことがなかったんじゃないんですか？」

「さっすがゼロちゃん。そこまでお見通しか」

南の大国であるシウルリウス王国。その王から言い渡されたマリアの任務の概要は、「東国の学校に行つて、ある少女の病を癒すこと」だった。

馬鹿らしい

そう思ったのは言うまでもない。

たかが一少女のために、何故わざわざモネットまで使つて他国に行かなければならないのか。マリアは当初、その任務を受けるつもりはなかった。

しかし、その学校には零や瑠璃がいること。何より、その少女が『治癒』の能力者であることを、【夜霧《ユリシイズ》】ことエイダ・バースから聞かされ、東国に赴くことを承知した。

「すぐに分かったよ。ボクが念のための保険として遣わされたってね。だってゼロちゃんがいるし」

「アカリの情報はケビン・フロル教頭が？」

「そーだよ。ケビンは東国と南国の友好の証…… 言ってみればパイプ役だからね。アカリちゃんが倒れたって話も、ケビンを通して

国に伝わったんだと思う」

零がEクラスからAクラスに上がったのが早かったのも、おそらくはこのためだろうと思った。

ケ빈は知っていたのだ、零の正体を。

「四大国がアカリを監視していることは、やはり間違いないようですね」

「さて、ここからが本題だ」

それを合図に、突然教室の空気が変わった。

第三者がいたら、気温の急激な低下に身震いをしたことだろう。

それを確信させるほどに、零とマリアの両者の目に宿る光は強かった。

「これは忠告だ。零、君はこれ以上アカリちゃんと四大国との関係について詮索するべきじゃない」

「何故ですか？」

「薄々気付いてるはずだ。これは君にとってパンドラの箱。開けたら最後、どんなに願っても後戻りはできない」

視線が交錯し、ぶつかり合い、視界をどす黒く塗りつぶす。

一瞬でも目を逸らしたら最後、気力を根こそぎ刈り取られるという緊張感の中、二人は一步も引かずに睨み合った。

「今日ボクたちは、アカリちゃんと四大国の繋がりを確信した。でもボクは、それすら四大国の計画の範疇に過ぎないと思ってる」

「……でしょうね。あまりにも動きが露骨です。マリアさんを動かした時点で、隠そうなんて考えてもないでしょう」

「逆に言えば、ボクと零がいても気付けないであろう絶対的な『何か』があるってことだ。正直、これに関してはボクもまるで想像ができない。……嫌な予感がする。とんでもない化け物が潜んでるよ。うな気がしてならない」

「……………」
「もう一度言う。これ以上の詮索は止めた方がいい。これは君のためでもある」

君のためでもある。

マリアの言い回しが、ひどく滑稽に思えて、零は薄い笑みを返した。

「マリアさんは一つ誤解をしてますよ」

「……………誤解？」

「ええ、俺は別に詮索しているつもりはありません。国が何を考えているのかも、それに俺がどう関係しているのかにも興味はありません。ただ、それがアカリに害を成す結果になるというなら、俺は全力でその企みを叩き潰します」

「大陸中を敵に回しても？」

「関係ありません。俺は自分の大切なものを護るだけです。生きて後悔するのは……………もう疲れました」

たかだか15歳の少年。しかし、その「疲れた」という言葉は、表しようもない現実味を帯びてマリアにのしかかった。

骨の奥まで染みついた「後悔」という疲れ。

それを目の当たりにして、マリアはついに零から視線を逸らした。

「ボクはただ、ゼロちゃんにこれ以上傷ついて欲しくないだけなんだけどなあ……………」

苦笑交混じりの声。ただその声は、普段のマリアに似合わずどこか落ち込んでいるように聞こえた。

「……すみません」

「いいよ。無理だつて分かってたし、忠告はボクが勝手にやったことだからね。あ、でも、申し訳なく思ってるなら、最後にボクのお願いを聞いてもらおうかな」

そう言うと、マリアは立ち上がって零の後ろに立った。

そのまま手を伸ばし、後ろからやわらかく抱きしめる。

温かい感触を背中に感じながら、零は流れてくる音に耳を澄ました。

「いい？ ゼロちゃんはもっと自分を大事にすること。ちょっと自分を痛めつけ過ぎ」

「……」

「それと、大事な人に笑っていて欲しいなら、まずはゼロちゃんが笑顔でいること。犠牲と引き換えの幸せなんか、この世には存在しないからね。だから、そんな暗い顔してちゃダメ」

頬をつつかれた零は、まるで不意打ちを受けたような気分になり、思わず「そんなにひどい顔でしたか？」と聞き返した。それには答えず、マリアはただ笑いだけを返す。

「はあ〜 でもお姉さん、ちょっと傷ついちゃうな」

「……お姉さん？」

聞きなれない単語が耳に飛び込んできたため、反射的に聞き返してしまう。そして、どうやらマリアはそれが気に入らなかったようだった。

「……なんで疑問形なのさ。言っとくけど、ボクはゼロちゃんより六つも年上だよ?」

「いえ、知ってますけど」

知ってはいるが、料理を含めた家事全般(そもそも彼女は家にはとんど帰らないが)ができず、女性としての振る舞いに欠けていると言わざるを得ないマリアを、「お姉さん」と認識するのは無理があった。

およそ年上らしいところが見受けられない。

ついでに言うと、女性らしいところも見受けられない。……容姿を除いて。

「ゼロちゃん、すつごく失礼なこと考えなかった?」

「……気のせいです」

「ボクには君の頭の中が透けてみえるんだけど」

マリアの長い金髪が、首筋をくすぐる。

二人の顔は、驚くほど近い位置にあった。

零はマリアの腕の力が徐々に強くなってきたことを感じ、引きつったマリアの笑みに、できる限りの笑みを返した。……作り笑いだっただが。

「……そろそろ放してくれませんか」

「むう、ゼロちゃんはボクじゃ不満なのかな?」

「からかうのはやめて下さい」

「あゝあ、ボクもゼロちゃんと一緒に甘々い学校生活を……」

そこでマリアの言葉は途切れた。

それはあまりにも不自然な途切れ方だった。

マリアの視線は、窓の外へ注がれる。それとほぼ同時に、零の視線も固定された。

視認できる範囲に、何の変化もない。

ただし二人が持つ二つの人外の感覚器官は、常人が全く把握できない微かな変化を敏感にとらえた。

零は気配から。

マリアは音から。

何者かの侵入を感じ取った。

35話 揺るがない意志（後書き）

感想お待ちしております

36話 不可解な敵(前書き)

活動報告で「早めに投稿できる」と言っておきながら、結果的に普通のスピードでした。なんともお恥ずかしい……

36話 不可解な敵

タンツと乾いた足音。

同時に、今まで無風だった空間に突風が吹き荒れた。

飄々とした足取りで不規則なリズムを刻むのは、白ハクと呼ばれた男だ。その影は次の瞬間には消えて数メートル離れた地点へ移動し、また次の瞬間には消える。そんな奇妙な移動を数回繰り返し、最終的には木の上で停止した。

物理的に見て白の体重を支えるには、あまりにも細すぎる枝。しかし、枝は折れるどころか、しなることすらなかった。ただ狂ったように吹く風に、葉を震わせるだけだった。

不意にピ　　ツツという機械音が流れる。音は白の手に握られる無線機から流れていた。

別段驚いた様子もなく、白は無線機を耳に当てた。

『白さん、たつた今到着しました』

「おーし、じゃあ早く済ませろ。誰かに見つからないとも限らねーからな。手筈は事前に説明した通りだ」

大雑把な独特の口調。

これは、彼を知る者にとってはごく普通のことだ。

『え……もしかして自分ひとりですか？　基本的に単独任務は禁止のはずでは……』

「あー、そのことか。喜べ。そいつならもう配置に付いてる。お前の行動も文字通り筒抜けだろうなあ」

白の言葉の意味を図りかねたのか。反応が返ってくるまで、少々の間があった。

しかし、思い当たる節があったようで、すぐに若干興奮した声が返ってきた。

『まさか……素羅^{ソラ}さんですか!?!』

同時に、動揺も無線機越しに伝わってくる。

白は、そつだ、とだけ答えて話を戻した。

「まあ念のためだ。今回の任務は当日の核になる。失敗するわけにはいかねーんだよ。気を引き締める」

素羅が一緒だと聞いて緩んだように見えた気を、もう一度緊張状態に引き戻す。

『わ、分かりました』

「万が一に備えて俺も待機してる。じゃーな。頑張れよ」

それだけ伝えると、やや乱暴に会話を切った。

飄々とした態度の彼に似合わず、虚空を見つめる目だけが、焦点が定まっていないように空っぽだった。

「……分かりましたか？」

一瞬の間を置いて、零が無感情な瞳を向ける。

「うん、校舎裏の方だね。誰かが遅刻でもしたのかな？」

対するマリアは、あくまでいつもの口調。しかし、それが冗談で

あることは、纏う空気の冷たさが証明していた。

「様子を見てきます」

「どうするつもり？」

カルディナ学校は警備が嚴重だ。勿論、今日という日も例外ではない。それは、この学校が国にとって重要な機関であることを示している。しかし気配は学校の敷地内から、つまり何者かが警備の目を掻い潜ったということになる。

真つ当な目的だと考えるには無理があつた。

「取りあえず拘束して目的を聞き出します」

「じゃあボクは一応教室の窓を全部閉めるよう指示を出しておくね」
「助かります」

最後に視線をを交わすと、それを合図に、ほぼ同時に反対方向に向かつて走り出した。マリアは校舎内、零は気配のした窓ガラスの方へ。

半分だけ空いていた窓をやや強引に開け、一瞬の迷いもなく四階から飛び降りる。

限界まで伸ばした膝を、着地と同時に今度は限界まで曲げ、落下の勢いのほとんどを殺す。殺せなかつた分の勢いは、前転することで表面積を広げ、最小限に緩和する。

気配を感じてから一分にも満たない間に、零は校舎裏へ辿り着いた。

人気のない校舎裏。

しかし人気がないからこそ、その場から怪しい人物を見つけ出すことは容易い。

すぐに黒い大きな目のローブを纏った、明らかに学校関係者ではない男に目が止まる。

何かの魔法陣が施された機械、それを設置し終えたところのようだった。

男は零を見ると、目を大きく見開いた。

「なっ!？」

男の動揺が、その場の空気を媒体に伝わってくる。それは見つかってしまったことの驚きというよりは、迷いなく向けられた殺気に怯んだと言った方が正しかった。

しかし零は走ることを止めない。

筋肉のバネを最大限に利用した助走は、たった数歩でスピードを零の最高速度まで引き上げる。

それはさらなる動揺を呼び、二重の動揺に縛られた男は、硬直したまま自分に向かつてくる少年を眺める形になった。

心の際を生み出し利用する絶好のタイミング。

計算されつくした零の頭脳はそれらを意図的に作りだし、数十メートルの距離をいとも簡単に詰めた。

そのまま男の腹部にスピードを乗せた拳打を叩き込もうとしたところ……

「っー!」

前の地面を蹴り、急ブレーキを掛けた。

それと同時に、空気を裂きながら金切声を上げる弾丸が、零と男を隔てる地面にめり込んだ。

国立カルディナ学校から2000メートル以上離れた建物の一室。
そこに、髪をショートに切り揃えた少女　素羅ソラはいた。

その表情に余裕はない。
たった今起こった出来事に目を疑っていたからだ。

(かわされた……?)

自らの腕に絶対の自信を持つ少女は、スコープを覗き込み、無傷の少年を見て驚愕する。

別に殺すために撃つたのではない。こちらの用件は既に済んでいる。あとは男が学校から逃げるための時間さえ稼げれば良かった。そのため、少年の左ひざを軽く削ぎ、機動力を奪うよう狙いを定めた。そう、本来なら少年はその場にうずくまる予定だったのだ。

(タイミングは完璧だった筈……)

しかし命中する一歩手前で、少年は弾かれたように足を止めた。
いや、気づいたのだ、弾丸が迫っていることに。

果たしてそんなことが可能なのか？

素羅は今まで生きてきて、訓練以外で狙いを外したことはない。
これが初めてだ。その事実には絶対の自信にヒビを入れる。

再びスコープを覗く。

それと無線機が鳴り響くのは、ほぼ同時だった。

『どーした？ 何かあったのか?』

白の声だ。

思いがけない通信に、熱くなりかけた頭が冷える。

「……学校の生徒に気づかれました。現在交戦中です」

頭を整理し、状況を簡単に説明する。しかし、白は納得がいかな

いように『ん?』と聞き返した。

『随分早く感付かれたな。でもガキだろ? お前らの相手じゃねーはずだが…… 何人だ?』

「ひとりです」

『ひとりい?』

一段と大きな声をが響く。

『だったらサツサと片付けてサツサと帰還しろ』

「ええ、そうしたいんですけど…… 何かが違うんです」

『違う?』

「つい先ほどですが…… 私の弾丸がかわされました」

息を呑む音が伝わってくる。

素羅の腕前を知っている白だからこそ、それはにわかには信じ難い事実だった。

しかし、素羅はこんな時に冗談を言う人間でないことくらい、彼自身良く知っている。

白は何か考え込むように押し黙った。

『……以前、「学校で骨のありそうな奴」の話をしたことがあったな。お前はその時、二人ほどいると言った。まさかそいつか?』

「…… そうかも知れません。顔は良く分かりませんが……」

『分かった。取りあえずお前は援護を続ける。俺も向かう』

「了解」

素羅の切り替えは早い。

通信を切ると即座にスコープの倍率を調節し、照準を合わせ直した。

(あの辺か……)

零はめり込んだ弾丸の向きや角度からおおよその射撃地点を割り出し、虚空を睨んだ。

(38口径……まさかブレイザーR93タクティカルか?)

真っ先に思いついたライフルの名前。それは南国製のストレート・プル・アクション・ライフルだった。素早く連射が可能で精度も高いが、扱いがひどく難しいライフル。零の予想が正しければ、狙撃手は相当の手練れということになる。

何よりも発砲されたタイミングが絶妙だった。結果的に零の攻撃は中断され、男が体勢を整える暇を与えてしまった。

姿の見えない敵。

この状況下では、非常に厄介な相手だ。

一方、目の前の男は、ハツとしたように魔力を練り始める。魔法陣が展開され、魔力が男の掌^{てのひら}一点に凝縮していくのが分かった。

(炎術か)

判断すると同時に行動を起こす。

男の術式展開速度は決して遅くはない。寧ろ一般人から見たら驚くほど早い。

ただ、相手が悪過ぎた。

零の展開速度は、男のそれを圧倒的に上回る。

理魔法：氷：氷針雨

アイス・ニードル

視認すら難しい速度で創り上げられた魔法陣から、いくつもの透明なつららが降り注ぐ。

それは男の魔法陣を容赦なく押し潰し、貫いた。

何が起こったのか理解できなかったのだらう。男は言葉を失い、呆然としがける。

「ここで何をしていた？」

しかし、零のゆっくりとした歩みは、呆然とする暇すら与えない人間と思えないほど冷え切った二つの眼。

男の本能が、あれに関わるなと緊急ブザーを鳴らす。

男は今までに、いくつもの死線を潜り抜けてきたが、これほどまでに濃い殺気には出会ったことがなかった。

恐怖が全身を塗り潰す。

「何をしていた？」

その最後の一押しは、男の緊張の糸を分断した。否、させられたホルダーから小型のサブマシンガンを構えたのは、経験と言うよりは純粹な恐怖から。

しかし、零は男が動くよりも早く行動を起こしていた。

零の踵かかとが、サブマシンガンを構える腕を捉える。

「があっ！」

トリガーを引くことすら許さず、そのまま叩き折った。

悲鳴をあげて床に転がる男を拘束しようと、零は歩みを進める。

しかし、男が持つ無線機から『逃げて下さい』という少女の声が流れたのを聞き、反射的に上半身を仰け反らせた。

弾丸が鼻先を掠める。

先ほどの威嚇射撃と異なった、明らかに殺意を乗せた射撃。それは一発に留まらず、今度は複数放たれた。

針の穴に糸を通すかのような、という表現がこの上なく当てはまる精密な射撃。

安定して避けるには（そもそも避けられる代物ではないのだが）、零ですら神経を集中させる必要がある。

零が銃弾の雨をかわしている間に、男は 身体強化 を施して逃げの体勢を整えた。

それを黙って見過ごすほど、零は甘くも愚かでもない。

魔力を練る。

空気を振動させることによって生じる風魔法の派生属性 音 波。

理魔法：風：空鳴振動波

ソニックブーム

キィイイという黒板を引つ掻いたような音。

大気が震え、鼓膜を劈く。

方向感覚を致命的なまでに狂わせるその波動は、逃げようとしていた男の両耳を塞がせ、さらに足を止める威力を持っていた。

さらに続けて魔力を練る。

それは一般的な理魔法とは基本構造からして異なる種類の魔法。大陸中を探しても、数えるくらいしか使い手が存在しない魔法。

光魔法：屈折歪曲

フォーカス・オペレイト

光の軌道が無理やり捻じ曲げ、照準をずらす。

今の零の姿は、可変倍率スコープで遠距離から覗くと、二重にも三重にもなっている筈だった。

案の定、正確無比な精度に綻びが生じ始める。

遠距離からの射撃を不可にするだけで、今は十分。

そう判断し、未だ耳を塞いだままの男へ向かって走り出した。

その時だった。

何の前触れもなく、静かだった空気が震え、次の瞬間には呼吸もままならないほどの突風が一带に吹き荒れた。

木々が大きくしなり、葉が舞い、鳥が悲鳴を上げる。

(なんだ?)

いままでと違う種の空気に、零が初めて警戒する。

その直後、空から灰色の髪の毛の男が舞い降りた。

36話 不可解な敵（後書き）

次回は少し遅くなります。テスト前ですので感想お待ちしております。

37話 因縁（前書き）

やっと投稿できました……

待たせて申し訳ないです……

誤字脱字ありましたら教えて下さい。

37話 因縁

素羅ソラからの話を聞いて現場にやって来た白ハクが最初に目にした人物は、特に変わった様子もない普通の学生だった。

髪と瞳の色は塗り潰したような漆黒。

武器などは所持しておらず、素手だ。

(ふーん、アイツが?)

白は顔をしかめた。

想像とあまりにもかけ離れていたため、何か手違いがあったのではないかと疑ったのだ。それも無理はない。目の前には予想を裏切る華奢な少年がひとり。自分の仲間が二人も翻弄されていたとは、まるで想像ができなかった。しかも、その中の一人はあの素羅だ。しかし、体中から血を流して倒れている自分の仲間を見たとき、期待はあっさり裏切られたことを悟った。

「は、白さん…… 来てくれたんですか」

「…… オイオイ、ひでーケガだな。大丈夫か？」

抱き起し、慣れた動作で傷口を調べる。

決して浅くない傷ばかりだったが、そのどれもが見事に急所を外れていた。そのことから、殺すのが目的ではないと判断した。

少年を見据える。

白が創り出した大気の渦は少年の自由を奪い、いまだ地に縛り付けている。

圧倒的優勢。少年からしたら圧倒的な劣勢だ。

しかしその目に焦りは見当たらない。冷静に状況を分析し、打開策を練る策士の目だった。

「気をつけて下さい…… そのガキ、なんか変です」

言われるまでもない。

厄介な相手だと早々に認識した白は、ここで少年の息の根を止める決断を下した。

迷いはない。今までに何人も殺してきた。女も子供も、赤子も。

(どうやってその歳でそこまでの戦闘技能を得たのかは知らねーが……)

当日に計画の妨げになる要素は潰しておくべきだ。

白は動けない少年に向かって、膨大な魔力を練った。

少なからず、零は驚いていた。

今自分を閉じ込めている大気の渦、これは「術式」ではない。ただ単に空気に魔力を練り込んだだけの「魔法」だ。

魔法だけでここまでの威力を出せる人間を、零は今までに一人しか見たことがない。

【天空神《ウラヌス》】の異名を持つクオン・ジハだ。彼は風魔法の第一人者^{エキスパート}で、それに関しては零は勿論のこと、瑠璃すら上回る。目の前の灰色の髪をした男は、風魔法の威力にかけてはクオンと同等の威力だと判断した。

これはおかしなことだった。明らかに一般人が扱える魔法の域を超えている。普通ならば魔力の練りすぎで体に異常が起こるか、運が悪ければ血管が破裂し、死に至る場合もある。

男の様子を探る。炎症どころか、息切れすら見られない。

一体どんな仕掛けがあるのか。いきなり現れたこの男は何者なの

か。

しかし思考の余地は与えられなかった。

男の手に集まる高密度な魔力に、零は敏感に反応した。魔法陣が組み上がり、そのまま放たれる。

理魔法：風：鎌鼬カマイタチ

三日月状に固められた空気が無音で、しかし恐るべきスピードで迫る。予想を上回る展開速度に、零の判断は一瞬遅れた。そして戦闘において、「一瞬」は常に明暗を分ける。今回は零が「暗」となった。

音速の鎌が迫る。今さら術式を展開させる時間はない。魔法で氷の壁を削っても、「術式」がそれをあっさり貫通することくらい目に見えている。しかし、零は大気の渦に飲まれて動けない。

普通ならば諦め、その死神の鎌に首を委ねるだろう。白もこのとき、零の死を疑わなかった。そして、これが白の痛恨のミスとなった。

白は忘れていたのだ。自分の部下が二人も口を揃えて、「あの少年は何か変だ」と述べていたことを

「っ！」

起こり得ない事実を目の当たりにした白に、言葉はなかった。

白の鎌鼬カマイタチは防がれていた。それも脆弱な氷の壁一枚に。

零の考えは至極単純なものだ。

受け止めることも、かわすこともできない威力の刃が飛んでくる。ならば受け止められる威力に弱めてしまえばいい。その考えを以て対処した。

迫る刃は空気を固めた高密度の 대기。その刃に沿って風魔法を使い、低圧の空間を創り出す。高圧な鎌鼬カマイタチは低圧の空間で包まれることよって膨張し、結果白の望んだ威力の半分も満たさない欠陥術式に変化する。そんな攻撃を防ぐことなど、氷の壁一枚で事足りた。

ただ、そんな事を白が知るよしもない。

驚愕に目を見開き、純粋な恐怖を覗かせた。

その隙を逃さない。

体を限界まで低くし、獣のような体勢を取る。同時に大気中の水分を固め、長い爪のような武器を精製した。

獣体術と呼ばれる、今では珍しい体術の型だ。

「チッ！」

盛大な舌打ちと共に白は倒れた仲間を抱え、再度空中に浮かびだした。攻防が入れ替わったと判断したのだ。

その判断は早く、慣れていた。みるみる内に高度を上げ、零を見下ろす形になる。

対する零は地上から丁寧に狙いを定め、強化を施した四肢の力を一斉に解放した。

爆発的なスピードで上昇し、標的の頭を狙う。その攻撃は白のこめかみを掠め、天に突き抜けた。そのまま空中で身を翻し、今度は重力に任せて加速。標的の脇腹えぐを抉りにかかると。

肉を裂く音と共に鮮血が舞った。ただ、手ごたえには不満が残った。望んだほどのダメージは得られていない。

零は落下しながら回転し、太い大木の枝に着地した。

なんとか直撃を避けた白だったが、その顔に余裕はなくなっていた。冷や汗が頬を伝い、傷口に染み込む。

(あー なんなのかね？ あの餓鬼は)

無理やり笑ってみても、引きつってうまく笑えなかった。強がり
に過ぎないことが明白だ。心臓がうるさいほど鳴っている。

無理もない。今の攻防は生死の綱渡りをしたと表現しても過言で
はないものだった。

ただ、休む暇がないことは白が一番よく分かっている。

自分が今いる場所は自らの戦場ともいえる「空中」。対する少年
は「地」だ。再び攻防が入れ替わる前に仕留める必要がある。

白は魔力を練った。

その時だった。

敏感な白の嗅覚が突然危険信号を鳴らし、レッドゾーンへ跳ね上
がった。

鼻腔と口腔を嘗め回す生々しい匂い。それは一瞬接触した際に
いたであろう零の匂い。

白の顔がみるみる青ざめる。この匂いは皮肉にも、自分が一番よ
く知っているものだった。

血臭だ。それも、かなり濃厚な。

別にそれだけならば驚きはしない。普段嗅ぎ慣れてる匂いだ。白
を青ざめさせたのはその生々しさだった。

何千、あるいは何万もの人間の匂いだ。

ぐちゃぐちゃに混ざり合ったその匂いは白の体中を這いずり回り、
神経を引っ掻き回す。

一体どれほどの生き血を浴び続けたらこんな匂いが出せるのか。
しかも自分よりもはるかに年下の少年に。

湧き上がる疑問と吐き気は、白の戦意を完膚なきまでに削ぎ落と

した。
ぼやける視界の中、白はブラックアウトしかけた意識を保つのが精いっぱいだった。

獣体術の特徴としては、そのしなやかな動きと速さ、そして隙の少なさが挙げられる。

攻撃を直撃させることに失敗した零だったが、その後の動きは無駄がなく、迅速かつ最良だった。

宙を見上げ、上空からの反撃に対応しようとする。

(……………?)

疑問が湧き起こった。反撃される様子はない。彼ほどに場馴れしていて経験も実力もある者ならば、すぐにも攻撃してきておかしくはないのだが。

(……………畏か?)

それにしてもおかしい。今は畏を使うタイミングでは決してない。何にせよ、反撃されないのならば攻撃しない手はないだろう。

零は冷静に座標とパワー関係、そして重力加速度を計算すると、再び空中に身を躍らせた。

零と白の距離が縮まる。

ここでようやく、敵が迫っていることに気づいたようだった。

(今度は逃がさない)

零は下から、氷の爪を飛ばした。

上昇する肉体から放たれた爪は自身の初速度も加え、およそ視認不可のスピードとなって空中を駆け抜けた。

もはや白に対処の余地はない。零の判断は確かに最善だった。

ただ、聴覚が聞きなれた金切音を捉えたとき、零は自身の判断ミスを悟った。

銀色の弾丸が三発、零の氷の爪と激突すると、弾けて空中で爆発した。

白はすぐに理解した。こんな芸当ができるのは一人しかない。
素羅だ。

零の光魔法は未だに効果が残っている。しかし、それはあくまで零自身にだ。零の体から離れた物体にはその効果は付与されない。完璧に零の誤算だった。

それにしても恐ろしい腕だ。

零が放った攻撃は近くからでも視認が難しいスピードで放たれていたのだ。それを遠くから正確に狙撃するには、タイムラグも考えて予測撃ちをしなければならぬ。それをやってのけたことになる。訓練云々で得られるレベルの腕ではない、紛れもない天才のスナイパーだ。

白はこの狙撃の援護によって我に返った。自身に纏う大気の密度を上げ、宙を駆ける。路線を変更し、この場を去ることにしたようだった。

逃がさない。

零は魔力を練った。

方向感覚を狂わせる音波の魔法。これで動きを止めることが出来るはずだった。

打ち消された。

白は零の創り出した波長と全く逆の波長を創り出し、相殺したのだ。

いまだに空中に浮かぶ零は、後は落下するだけ。その間に白は風魔法で加速し、カルディナ学校の敷居を越えた。

零の敗北だった。

「へえ、珍しいこともあったもんだね」
「すみません」

その後、零が標的を逃したと知ったマリアと瑠璃は驚きを露わにした。確かに零はいま、制御装置リミッターの制御下にある。しかし魔力の少なさとその威力の脆弱さ、そして筋力の差を、零は今までずっと、己が技術と工夫だけで覆ってきたのだ。それを誰より知っている二人だからこそ、驚きは隠せなかった。

「相手は何人だったの？」
「三人かな。リリだったら一瞬で捕縛できたと思うよ」
「いや…… さすがにそれはないよ」

苦笑しながら手を振る瑠璃だったが、あながち冗談ではなかった。今回の相手はほぼ全員が、遠距離からの攻撃に長けた者だった。そんな相手に体術で挑むのは、本来ならばセオリー外だ。零がそんな暴拳に出たのは、魔法で真っ向からぶつかつたら、完全に力負けすると判断したからだ。

瑠璃ならばそうはならない。寧ろ圧倒的な魔力で正面から粉碎できるだろう。魔法に関しては、零よりも瑠璃の方が上なのだ。

「それにしてもたつたの三人でゼロちゃんから逃げ切ったか。どんな相手だったのかな？」
「そのことなんですけど、マリアさん、この辺で凄腕の風術師とスナイパーと聞いて心当たりはありますか？」

突然の零からの間に、マリアは一瞬表情を険しくした。

「その二人と戦ったの？」

「はい。スナイパーの方は分かりませんが、風術師の方は灰色の髪をした男です」

「零、どういうこと？ 何かおかしいことでもあったの？」

瑠璃が尋ねる。

零は普段、対峙した相手のことには極めて無関心だ。その零が情報を欲しがることは滅多にない。

自覚があるのか、説明は予め考えられていたかのようにすぐに始まった。

「俺が戦ったその風術師、風魔法の威力に関しては、クオンさんと同等だ。術式の方はそうでもなかったけど、すくなくとも展開速度は一般人の水準を遥かに越えてる。あれはあり得ない」

零の話を、瑠璃は静かに聞く。彼女なりに想像しているのだろう。クオン・ジハの風魔法と言えば、《組織》に組する人間ならば知らない者はいない。

「……あるよ。心当たり」

零の話を聞いていたマリアは、記憶を引っ張り出すような表情を浮かべながら呟いた。

視線がマリアに集中する。

「そいつ、『牙』の一員だ」

やたらと喧しく響いたマリアの一言は、零の頭の中で何度も跳ね

返り、思考をぐらつかせた。

37話 因縁（後書き）

感想お待ちしております

38話 悪魔の忘れ物（前書き）

後半ちょっとはっちやけ気味……
誤字脱字等あったら教えて下さい

38話 悪魔の忘れ物

「牙」とは大陸の東端を本拠地とする、元々はテロ組織だった。テロ組織とは言っても、無闇やたらと破壊を好む集団ではなかった。彼等の行動の裏には確固とした信念、曰わく「大儀」がある。「牙」の目的は、神の名の下に理不尽な上下関係のない世界を創ること、つまり弱きを助け、強きを挫くことだった。それ故、少ない人間が彼等を「義勇軍」と称え、中には信仰し、共に十字架を掲げる者すらいたという。

誰かが言った。彼等は英雄だと。

また誰かが言った。彼等は我々の救世主だと。メシア

「牙」の支持は日を追うごとに上がり、所属する人員は徐々に増え、ついには国家レベルの規模にまでその影響力と軍事力、そして政治力を拡大させた。偉大なる正義の国家の誕生かと思われた。

しかし、そんな英雄の国も、呆気なく歴史から消え去った。

今から七年前のことである。一日、いや、たった数時間の間に、千に近い数の人間はまるでミキサーにでもかけられたかのようにバラバラになり、土地は生き物が住むことの叶わない血の池と成り果てた。

後に【フラッディ・クロス血塗れた十字架】と呼ばれる事件である。

地獄絵図。

壁という壁にはペンキで染め上げたかのように血がべっとり貼り付き、床には白目を剥いた生首や、まだ温かい臓器、脳みそが散乱していた。

調査に来たある者は、その生臭い死臭だけで嘔吐した。

またある者はその日以降、夢遊病のようにふらふら歩くようにな

った。

またある者はその光景を見た瞬間に失禁し、狂ったように自分の皮膚を爪で引つ掻き始めた。

血だまりと死体の池は人間の精神を狂わす毒を吐き続け、その狂った領域はしばらくの間立ち入り禁止になった。

結果的に分かったこと、それは死体のどれもに刀傷らしきものがあつたということだけだ。

近隣に住む村の住人は語る。

事件があつた日、まだ幼い黒髪の少年がその場を訪れ、そしてすぐに去つたと。

その少年は自分の身長と同じか、それ以上の大太刀を持っていたと。

「牙」に所属する人間は、その誰もが強靱な肉体と精神を持った人間で、しかも一人の有能な指導者の下、一つの意志によって統一されていた。それ故に大国すら迂闊に手を出せず、それがさらに人々の支持を集めていた。

誰が信じられようか。

それを滅ぼしたのが、たったの一人だったなど
誰が信じられようか。

それが、まだ十もいかぬ子供だったなど

その子供は後に四大国によって捕らえられ、その非人道的な行為から、一部の人間によってこう呼ばれた。

「悪魔の忘れ物」と

「『牙』って……」

瑠璃の目つきが変わった。

あまり良くないことが起きる予感めいたものを感じたのだろうか。感情を消し、目を細めた。

「傭兵団がこんな所へ何をしに来たのでしょうか？」

「分からないね……今の『牙』は昔と違って、金のためなら何でもする裏社会の集団だ。……あまりいい予感はないね」

二人の言う通りだった。

数年前から、少数の男女から成るある集団が裏社会で暗躍するようになってきた。大陸の東に陣を置き、金で動く傭兵団。彼等は、かつて壊滅した組織の名である「牙」を名乗りだした。

ただし、今度の「牙」は、義勇軍と讃えられたかつてのものとはまるで異なる「傭兵団」だった。全ては金で動くためどこにも属さず、護衛や暗殺などの仕事も選ばない。昔と共通することは、強力な軍事力を持っているがために迂闊に手が出せないということだけだ。零はふと、疑問に思ったことをマリアに尋ねた。

「マリアさんはどうしてその風術師が『牙』の人間だと？」

「ああ、前にね、エイダさんが『牙』の様子がおかしいって言ったことがあってね。潜入してみたんだよね」

「ええ！？ エイダさん…… 仕事してたんだ……」

「はは……」

驚く瑠璃に、零は敢えてツツコまなかつた。驚きたい気持ちも十分、いや寧ろ驚かない方がおかしいとも言えたからだ。

「まあ、そのエイダさんからね、『牙』の潜入時に、『ずっと空中

に浮かんでる男』がいたって聞いたことがあるんだ」

零の体がピクリと震えた。

「その男、髪は灰色で背は長身、独特のイントネーションで話す人間だったらしいよ。残念ながら警備が厳しくてエイダさんですらそれ以上は分からなかったみたいだね。どう？　ゼロちゃんが戦った人間と同一人物じゃないかな？」

間違いはなかった。一致する項目は「髪の色」と「風術師」という二点だけだったが、零は三つ目の項目から、その曖昧さを確信へと変えた。

それは何か？

単純に「力量」である。

ずっと空中に浮かんでいた　　はつきり言ってこれは異常である。例えば零の場合、風魔法で空中に浮かんだとして、今の状態では五分が限界であろう。瑠璃の場合、十分は持つだろうが、いずれにしても「ずっと」は不可能である。魔力のコントロール、パワー、そして量、どれをとっても常人の成せる業ではない。零や瑠璃ほどの人間であったとしてもだ。

「何にせよ、これから良からぬことが起きる可能性が高いね」
「そうですね。今回は逃がしてしまいましたが……」

……？
逃がした？

その瞬間、零は逃げ去った風術師に、奇妙な既視感を抱いた。

脳裏に浮かんだのは先日の校内模擬大会、古池淳が召喚した魔獣

グルーギス
狐蛇。

なぜ？

答えは出ない。何か引つかかっている。その違和感の正体は分からないままだ。

「零？　どうかした？」

「……………いや」

心配そうに覗き込む瑠璃に曖昧な返答を返したまま、零は教室を出た。一限目は、もうとっくに始まっている。

結局、違和感の正体は掴めぬまま、零は二人と別れて自分の教室へと向かった。

それが自分の教室であると気付くには、しばらくの時間が必要だった。

「明さん、今度はこの紺のセーラー服を是非！」

「じ、じゃあ……………それが終わったら、こっちのチャイナドレスを

……………」

「いやいや俺が先だろ！　さっきからずっと並んでんだぞ！」

「うげっ！　何よこれ、こんな短い服を着せてどうするつもり？」

「この変態！」

「あれ？　月下さんがいないよ？」

「芽衣ちゃん、こら逃げるな！　みんな着てるんだからあんたも着なさい！」

「う……………」

「クマ、男子の様子はどっ？」

授業中にも関わらず、1-Aの教室ははまるで宴会場だった。座

っている人間は一人もおらず、また制服を着ている人間も一人もない。教員が廊下を通りかかるものならば大目玉を食らいそうな光景である。しかし、騒ぎの中心にいるのがその教員というのとはどういうことなのだろうか。

目の前に広がる大コスプレ大会らしき催しから、やっとの思いで目を逸らした零は、開きかけた教室のドアを半ば無言で閉めた。

「くおら、そこの不良！ さっさとこっちに来なさい！ みんな、捕らえて！」

「なに！ 天戸だと!？」

「やった！ ようやく零くんキタ　　!」

「え……　　れ、零?」

……立ち去ることは認められなかった。

突然開いたドアから伸びる無数の手は、零の抵抗も虚しく、混沌コスプレの空間に引きずり込んだ。

「ふふ……　　ようやく帰ってきたわね」

魔女のような妖しさと妖艶さを醸し出しているのは、かの悪魔だサタン。その威圧感たるや、零をたじろがせ、半歩下がらせるほど。そして零の嗅覚は、ある臭いを捉えた。

「藤本先生……　　もしかしてお酒入ってますか？」

「……　　黙りなさい」

「凶星ですか。何やってるんです？　　朝っぱらから」

仮にも今は授業中のはずだった。現に他のクラスは極めて真面目に勉強に励んでいる。Aクラスでこの不真面目さは、さすがに目に余るところがあるのではないだろうか。

「いいのよ。どうせ教室は防音の壁で区切られてるし、それにここは私のクラス。つまり私がルールよ!」

滅茶苦茶だった。

零はアルコールのせいでハイになっている担任に顔を引きつらせ、教室を見渡した。

窓は閉まっている。どうやら、マリアの警告はしっかり行き届いているようだ。どっちにしろ、ここまで騒がしければ戦闘音も聞こえなかっただろうが。

「よう天戸、随分と遅かったが、何かあったのか?」

「クマか。まあ、そんなことよりも……それはなに?」

再び顔を引きつらせながら、義之が着ている服を指差す。
なんともチャラチャラした服だ。全く似合っていない。

「これか? 俺たちの衣装だ」

「へへ 大変だね」

だいぶキツそうに見える。

ついでに言つと暑そうである。

「俺のことはいいんだよ。それよりもお前はあっちを見る」「あっち?」

義之が指差す方に目を向ける。

男子生徒の塊しか見えない。

「かわいいよなあ……」

「ぶっ！」

奇知外じみた一言に、零は思わず正気を疑った。男子の集団を見ながらウツトリしている義之は、端から見るとただの狂った変人に見えない。しかしそんな零の思考を読み取ったのか、「いやいや違うからな！」と慌てて否定し、説明を付け加えた。

「いいか？ あの向こうには女子がいるんだ。もちろん明さんや月下さんもな」

「ああ、それでか」

それなら分からなくもないかも知れない。零自身、どんな様子なのか見てみたい気がする。

……というか、文化祭の日はメイドとホストの喫茶ではなかっただろうか。

ナース服やセーラー服やチャイナ服がかかっている大量のハンガーを見て、零はふと眩暈に似たものを感じた。

「さて天戸、お前もやれ」

「……は？」

変な声が聞こえた。

「みんなやってるのにお前だけ制服は不公平だ」

その声を合図に教室の騒ぎが静まり、何十もの視線が零の方を向いた。Aクラスの男女が鬼気迫ると言っても過言ではない表情で手を前に出し、徐々に迫ってくる。

「……みんな、何か目が血走ってるんだけど」

恐怖を感じた。にじり寄って来る人間というものが、これほどまでに恐怖を煽るとは思ってもみなかった。後ずさりしながら教室のドアへと向かう。

誰かにぶつかった。
芽衣だった。

「レイ！ 逃げるのは許さないわよ！」
「なぜお前はこういう時だけ邪魔をする!？」

投票の時もそうだった。
なにか執念でもあるのか。

「さて、観念しろ」
「ああ、ようやく目の保養ができる……」
「じゃあ……何のコスプレさせようか？」

何にせよ、出口を塞がれた零に逃げ道はない。

「零……」
「ご愁傷様」

ポツリと……
耳に残った明の台詞を最後に……

滅多に聞くことができない零の悲鳴が、教室中に響き渡った。

38話 悪魔の忘れ物（後書き）

何を着せよっかな〜 現在思案中〜
感想お待ちしております〜

39話 黒歴史再び(前書き)

誤字脱字ありましたら教えて下さい
やっぱこれでしょ

39話 黒歴史再び

「こ、これは……」

息を切らしながら、熊沢義之は感嘆と感動の入り混じった声を漏らした。

「傑作ね。元が美形だからかしら」

続いて声を発したのは藤本香織だ。義之と同様に息を切らしながら、己が才に陶醉している。

「軽傷者十二名、死者一名…… 決して軽い被害とは言えなかったけれど」

呟きながら、死者 古池淳には目もくれず、芽衣は懐かしむような表情を見せた。

「……美人だ つ！！！」「」

叫び声が上がったのは、その直後。1-Aの生徒がそれぞれ十色の反応を示す中、視線の的になっている少年は「貴様ら……」と殺意の籠もった一言を発した。

一般人程度ならばそれだけで気を失うほどの殺気の塊は、今回はかりはまるで威力を発揮しなかった。

無理もない。殺気を放っている人物が、どこからどう見ても可憐な少女にしか見えないのだから。

いくら戦闘力が優れていようと、殺すわけにもいかない学生三十

人余りから、しかも一斉に取り押さえられれば抵抗も虚しく終わる。
(それでも負傷者は大勢出たが)

零はなんと、ウエイトレスの格好をさせられていた。

「ちなみに、あのカツラも私の手作りよ」

「先生さすがっス！」

「恐れ入りやした先生、デーモンいや先生！サタン」

鼻高々に語る担任を、零は殴り殺してやろうかという衝動に駆られた。……なんとか抑えたが。

激しい眩暈の中、零は巫女服姿の白い髪の少女が近づいてくるのを見た。

明だ。

長い髪を後ろで束ね、白と赤の巫女服に身を包んだ明は、普段のイメージと大分異なって見えた。零がいつも通りのコンディションであったならば、鈍感ながらも顔を赤らめるくらいの反応は示したかも知れない。ただし、今の零に他人を褒めるほどの心のゆとりは、残念ながら残されていないかった。とは言っても、明自身はそんなことを気にした様子もなく、寧ろ零の女装を楽しんでいたため、どちらが良かったとは一概に言えなかったが。

「零、私はアリだと思う」

「……余計なことは言わんでいい」

「だって、本当に綺麗。道を歩いていても誰も女であることを疑わない」

「え、なに？ 喧嘩売ってる？」

零の眼光を、明は無表情のまま「てへ」と言って受け流し、目を逸らした。

また、とある女生徒は語った。

「なんとというか…… 女の私が嫉妬するぐらいよ、天戸君」

純粹に褒められても困るだけだ。そもそも嬉しくない。零は返答に窮し、無言でいるという選択をとった。

とある男子生徒は語った。

「マジかよ…… なんでお前、男なんだよ。女だったらほっとかねえってマジで」

寧ろなぜ女装をしているのかをツツコむべきではないのかと疑問に思いつつ、ほっといて欲しいと声にならない望みを抱いた。返答に窮し、またもや無言で場を繋ぐ。

とある古池淳は語った。

「天戸零、僕はあなたのことを誤解していました。謝ります。そして…… 結婚しましょう！ 本当は男だとか、そんなことは関係ありません！ いや、寧ろ男だからこそ……」

彼の言葉は最後に語られなかった。

今回も、零は無言だった。ただし、今回だけは渾身の膝蹴りが淳の顎に炸裂した。

鼻血を噴きながら、淳の体が宙に舞う。「あ、なんだ古池君、生きてたんだ」という芽衣の声をバツクに聞きながら、淳は床に叩きつけられ、静かに目を閉じた。その時、彼の表情が満ち足りていたことは、誰も知らない。

「そんなことよりもさ、先生」

淳が吹っ飛んだことを「そんなこと」の一言で片付けた義之は、密かに香織に耳打ちをした。

「せっかくだから、記念に全体写真でも撮りたいと思いませんか？」

「あら奇遇ね。私もちょうど同じことを考えてたのよ」

「やっぱこのラインナップでそれを考えない奴はいませんよね」

義之は、まず芽衣（メイド服）を見て、次に明（巫女服）を見て、最後に零（ウエイトレス）を見た。

小さい声で、「三大美女でいくね？」と呟く。

ちなみに、二人の会話を読唇術で読み取っていた零は……
全速力で逃亡を試みた。

「しまった、感付かれたか！」

「全員、緊急指令！ 天戸零を取り押さえよ。繰り返す。天戸零を取り押さえよ」

どこかの軍隊のような指令が流れ

「「「うおおおおおおおおおお！！！！」」」

一致団結した集団が再び零に襲いかかった。

余程焦っていたのだろうか。

零がとった行動は、必ずしも最善とは言えないものだった。

まだ授業中であるという安易な考えから、零はなんと、廊下に飛び出たのだ。

不幸は重なる。

そこに、ちょうど居合わせた人物がいた。

「……………へ？」
「……………はい？」

結衣と葵だった。

二人はまず、授業中にいきなり教室から飛び出してくる影に驚き、次に飛び出してきた人間の格好に驚き、さらにはその後からぞろぞろと出てくる意味不明な集団に腰を抜かした。

そんな結衣たちに構っている暇は、今の零にはない。

身につけられたおぞましい衣装のボタンをはずしながら、廊下の壁を垂直に走り、障害物を飛び越え、全速力で風のように駆け抜けた。

「姉さん、何やってるのよ！ 何で捕まえてくれなかったの!？」

「えええ！ だって…………… あ、芽衣ちゃん、メイド服かわいいね」

「ああ、えと、ありがと…………… じゃなくて!」

のほほんと笑う姉では埒が開かないと考え、横でポカンとしている葵に尋ねる。

「柳沢先輩！ レイがどっちへ行ったか分かりますか!？」

「え、あ、天戸君ですか？ さあ…………… すごく綺麗な女の子なら凄いですピードで走っていったのが見えましたけど……………」

「それです！ そいつです!」

「は？ え？ ええええ！ ど、どついうことですか!？」

「え、なになに！ 今のもしかして零くんだったの!？」

混乱する葵に一から説明するには時間はなく、芽衣たちは完全に零の足取りを見失う形となった。

クラスメイト一同（特に男子）が悔やんだのは言うまでもない。

ちなみにその日、零は二度と教室に姿を現すことはなかった。

その半壊したコンクリートの建物は、人の存在を頑なに拒み続けていた。

入口付近から湧き出る奇妙な虫は生ける草木を隈無く食い潰し、上空を旋回する鳥カラスに似た鳥は耳をつんざくような声で鳴き、至る所に滲む赤黒い斑点は、その一つ一つに呪詛の声を宿していた。廃墟だ。

その廃墟に近づく男の影が一つ。

その瞬間、虫は散り、鳥は逃げ、呪詛は沈黙した。

男は気にも留めず、建物の中へと足を進める。床を埃ごと踏み潰し、奥へと足を進めると、迷いなく扉を開けた。

「よお『酉』、おかえりいー」

薄暗い空間から響く女の声。それを合図に、中にいた数人が扉の方を振り向いた。

「ああ、白ハク。今帰ったのか。今回は随分と遅かったな」

「悪わりーな。手間取っちゃった」

「ねえねえ、あたしの『卵』は？」

「ハイハイ、ちゃんと埋めて来たに決まってるだろ」

言いながら服を脱ぎ、脇腹の傷を見る。急所は外していたが、浅いとは言い難かった。

カルディナ学校で零に負わされた傷だ。

「何それえー？ 来る途中で獣にでも引つ掻かれたあ？」

「うつせーよ。これは任務中に負ったんだ」

「はあ？ 今日あんたの場所って東国の学校でしょ？」

「だから、その学校に通うガキに付けられたんだよ」

「ええ〜？ 冗談やめてよお〜」

女はスナック菓子を頬張りながら甲高い声でケタケタと笑う。つられて、周りを囲っていた数人も笑い出した。

自分の台詞がまるで信用されていないことを理解した白は、「ホントだつーの」と小さく不平の声を漏らすも、考えれば無理もないことだ気付いた。やり場のない蟠り^{わたかま}を舌打ちで和らげようと試みるも、女の笑い声はそれすら打ち消す。カビ臭い空間にはスナック菓子の独特匂いが蔓延し、いつもの事ながらも眉をひそめた白は、不機嫌そうな表情のまま自分で傷の手当てを始めた。

しかし、その話を冗談と思わない人物もいた。

「白、その話を」

「ぼくたちに詳しく」

「教えてくれないかな？」

声変わり前の男子特有の高い声が、広がりかけた笑いの波をピタリと止めた。

がさつな手当てを行う白の前にやってきたのは、些か場違いにも思える三人の幼い子供。しかしその三人は身長や声、そして顔のつくりまでもまるで同じだった。

三つ子だ。

「カルディナ学校に通う生徒に」

「その傷を負わされたって？」

「どんな奴だったんだい？」

薄く笑いながら

いや、笑い顔が貼り付いていると形容した方が良いか。

感情が感じられない。声もどこか機械じみていて生気がない。

這い上がるような怖気を帯びる無邪気な笑みは、さっきまで蒸し暑かった空間の温度を一瞬低下させた。

誰もが自分の言葉を信じない中、意外な人物が食いついたことに驚きを隠せなかった白の返答には、自然と多くの間が空いた。

「……………氷と風の魔法を使う黒髪のがきだった」

「他には？」

「あん？ 他？」

「そう。他には何もなかったの？」

くすくすと乾いた笑い声を上げながら、三つ子の子供は追求し続ける。白は、何故それほどこだわるのか疑問に感じ、思わず三つ子の顔をまじまじと見つめた。周囲の面々も思うところは同じだったようで、「ちよつと『帷』、どうかしたのー？」などと尋ねている。しかし、帷と呼ばれた三つ子は相も変わらぬ薄笑いを浮かべながら白の返答を待っていた。

他には、か。

一つあった、印象的なことが。

白の心臓を鷲掴みにした「恐怖」という感情。それを久々に感じさせたあの匂いだ。

もしかして、コイツは何か知っているんじゃないだろうか？

そんな期待は、白の口を開かせた。

「…………尋常じゃない死臭を纏ってたな。あれは間違いなく殺つたことがある奴の匂いだ。それも一人や二人じゃない。大虐殺の類だ」

39話 黒歴史再び（後書き）

伏線回収に向けて第一歩。
感想お待ちしております。

40話 ただひとつ確かなこと(前書き)

今回は主人公が出てきません。

瑠璃とマリアの長いやりとりになります。

誤字脱字などありましたら教えてください

40話 ただひとつ確かなこと

神無月瑠璃は啞然とした。

別に彼女は、1-Aの大騒ぎを耳にしたわけでも、零の女装を見ただけでもない（残念ながら）。

今は放課後。場所は瑠璃が住むマンション。

いつも通りドアの鍵を開け、いつも通り部屋に入った瑠璃は、そこで初めて、唯一いつも通りでない部屋の床に気付いた。

場合によっては、もっと早く気づいても良かったかもしれない。

しかし、注意していないと気づかないものもある。それが、普段通りであることを疑わない自分の部屋ならば尚更だ。

床に散乱するのはパンの袋やお菓子の包み、いわゆるゴミ。

そして……

「へろ〜〜 ルリリン、おかえり〜」

金髪の美女 マリア・フェレだった。

「なっ…… 何やってるんですか ！」

「ん？ 見てわかんない？ ダラダラしてるんだけど」

自分の部屋に予想外の人物が侵入していることの驚きで、口をパクパクさせる瑠璃。それとは対照的に、マリアは床で寝返りをうつと、大きな欠伸をした。

もはや、どちらがこの部屋の主かわからない光景である。

「それは見ればわかりますけど。そ、そもそもどうやってこの部屋に……」

「甘いよルリリン。ボクがこの程度の鍵を開けられないとも思っ

てるのかい？」

ニヤリと笑いながら、マリアはピッキング用の針金をこれ見よがしに見せつける。そんな彼女を見て、瑠璃は脱力したように大きな溜め息をついた。【知の権化《ミネルウア》】たるマリアが、ピッキング程度の技術を習得していないわけがない。

「開けるのに十秒かからなかったよ」

「だからって入らないで下さいよ……」

不法侵入。

立派な犯罪である。

「住所はどうやって知ったんですか？」

「フッフッフ、ボクに知らないことはないのだ。全てお見通しさ」

「はぁ……」

「ちなみに今日のルリリンの下着は水色」

「なっ！」

慌ててスカートを抑える。

凶星だったため、動揺も一際大きかった。

「だって、ボクは寝ててルリリンは立ってる。この位置関係で、さらにはそのスカート丈じゃあね。どうしたって見えちゃうよ。ボクに否はない。下からのガードが甘いルリリンが悪い」

「う……でも、だからっていちいち言わなくていいですよっ！
だいたい、下に寝転がってるなんて誰も考えませんから！」

真っ赤になって抗議する瑠璃を、「まーまー落ち着きなさい」と言って冷静に宥めた。

そもそも誰の所為かと問われれば元も子もないのだが。

「……はあゝ 話を戻しますよ」

すっかり疲れ切ったように、瑠璃は本題を切り出した。

「何で私の家に？」

「んー そのことなんだけどね。泊めて貰おうかと思ってさ」「
」 どうしてそう話がいちいち急なんですか!？」

パンツと床を叩く（先ほどの失敗も踏まえて、瑠璃は床に座っている。マリアは相変わらず寝転がっている）。

「だってー 一応この国からホテルは提供されてるけどさー あそ

こ息苦しくて苦手なんだよね。おまけにつまんないし」

「まあ、気持ちわかりますけど……」

瑠璃も他国のホテルに泊まったことがあるが、高級過ぎていまいち落ち着かなかった。《組織》の人間へ、国からの気遣いなのだろうが、寧ろ迷惑なくらいだ。マリアのような自由を好む人間にとつては地獄に近いだろう。

しかし、だからと言って急に、しかも何の断りもなく部屋へ侵入されても堪ったものではない。

何の反省も示さず、普段通りの笑みを浮かべるマリアを見て、瑠璃は複雑な感情に襲われた。

「それに、ルリリンと色々お話したいし。久しぶりに聞きたいこともあるしさ」

「……へ？」

突然マリアから悪意を感じ、対する瑠璃の返答は、思いがけず間抜けなものとなってしまった。

自分の留守中に、何か変なものでも見られたのだろうか。不安を滲ませる瑠璃とは裏腹に、マリアはニヤニヤと楽しそうな表情を浮かべると、後ろからゆっくりとそれを取り出した。

「この写……………」

「……………」

反射的に、叫ぶ。

それは、かつて校内模擬戦の時にターナから貰ったもの。

一度は飾ってみたものの、恥ずかしくなって結局やめてしまったもの。

零の写真だった。

「いいなコレ。ボクも欲しい」

「いや、えつと……………」

「せっかくキレイに写真立てに入ってるのに飾らないの？ 勿体ない」

「その、ちよっ……………」

「あ、そっか。ルリリンの夜のオカズか」

「違います！」

そこだけはキツパリと否定した。

そのまま流れて「はい」と言わせようというマリアの魂胆は失敗に終わり、また新たなネタを探そうと試みるも、「止めて下さい。追い出しますよ」という瑠璃の一言で、渋々引き下がった。

過去の経験からも、マリアを調子に乗らせると後々が大変と分かっているので、途中でしっかり釘を刺しておくことは重要なことだ

った。この経験がなかったら、今もその巧みな舌回りで弄り倒されていただろう。それを考えると、過去に散々からかわれたことも無駄ではなかったなと思い、恥ずかしさでくらくらする頭を、なんとか正常に働かせようと努めた。

「ふむうゝ その様子だと、ゼロちゃんとの関係は昔と全く変わってないみたいだねえ」

「……まあ、はい」
「ボクなんか半裸のゼロちゃんだっけって見たことあるのにさ」

もしもこの場に零がいたら、なんてことを言うんだと怒鳴っただろうか。あるいはこれを聞いていたのが瑠璃だけだったことにほっとしただろうか。

なににせよ、聞く人が聞いたら飛び上がりそうな話に、瑠璃は驚かなかった。それは、マリア・フェレという人間をそれなりに知っているからでもある。

彼女の本業は研究者。しかし副業として、医師としての顔も持っている。今回マリアが東国を訪れた建前は、カルディナ学校の文化祭開催時に事故などが起こった場合、医療班の一員として対処することだ。そんな彼女には、瑠璃も任務中の負傷を手当てして貰ったことがある。よって、零が治療のため、マリアにそんな姿を見せていたとしても、おかしくはなかった。

そういえば、マリアに治療して貰ったのも、もう随分と昔の話になる。まだ《組織》に属して間もなかっただろうか。今では完全な遠距離派の人間としての戦闘スタイルを確立させ、怪我をすることも滅多になくなったが、昔はよく血を流したものだ。その度にマリアの「治療」にお世話になっていた。

「一番変わったのはルリリンかもね。肉体的にも、精神的にも」

同じく過去に思いを馳せていたのか、不意にマリアが言葉を漏らした。

「変わったのは、やっぱりゼロちゃんと出会ったから？」

「……そんなに私って分かり易いですか？」

「うん。すごく」

瑠璃の力ない問いかけを、容赦なくバツサリと切り捨てる。

「ゼロちゃんに合わせてコーヒーに挑戦するし」

「う……」

「ボクが作った病人用スープには口付けがないのに、ゼロちゃんが作ると頑張って飲もうとするし」

「マリアさん、もう止めて下さい……」

「あ、ゴメンゴメン。でも、ゼロちゃんに出会ったからっていうのは事実でしょ？」

ピクリと反応し、瑠璃は動きを止めた。

窓から吹き込んだ風が、その髪を揺らしていく。

やがてしばらく経ってから、瑠璃はゆっくりと話し出した。

「マリアさんも知ってると思いますが、私の家って裕福だったんですよ。毎日幸せでした。とは言っても、あまり覚えていないんですけどね」

小さく笑う。

懐かしむように、けれどどこか苦しそうに。

「その家庭が壊れたとき、たぶん『私』という存在も一度壊れたん

「それって、いくらなんでも哀しすぎるじゃないですか…… しかも『哀しい』って思うことすらないんですよ。だって最初から知らないから」

「……うん、そうだね」

ここまで来て、静かに黙っていたマリアが小さく同意した。

「ボクもね、時々ゼロちゃんが分からなくなる。ボクを育ててくれた叔父さん…… もういないけど、愛情だけはボクの中に残ってるし、それのお蔭で今こうして生きていけると実感することもある。けど、天戸零にはそれが無い。彼は一体、何を支えに生きてるんだろっ……っね」

想像してみる。

世界が自分独りきりであることを。

想像してみる。

世界中から恨まれながらも、生き続けなければならないことを。

彼は何を求め、何を支えに生きているのか

「ただひとつ確かなことは、天戸零にとって、この世は不幸の連続ではないということだ」

「え？」

マリアの真っ直ぐな眼差しに、一瞬反応ができなかった。

その瞳に写るのは確信。そして 未来。

「今こうして、ルリリンのような理解者が傍にいる。月下家のような『家』もある。そして、同じ境遇ゆえに感情を共有できる少女がいる。それは間違いなく天戸零の支えになってるよ」

「そう……ですかね」

「そうだよ。だからこれからもさ」

頼むよ。彼は今日、苦しい方の道を選んだから最後の台詞は言葉にならなかった。

自分でないのが悔しかった。

自分では力不足なのが辛かった。

「……マリアさん？」

「まあ、それはそうとして」

ケロッと何事もなかったように笑う。

それが今自分にできる唯一のことだと悟った。

「ルリリンがゼロちゃんにベタ惚れだということはよく分かりました」

「……え？」

「ルリリンが初めてをゼロちゃんに捧げるつもりでいることも分かりました」

「い、言ってますんよ!」

「じゃあ、お腹減ったからなんか作って」

「どこまで勝手なんですか!？」

真っ赤になって叫ぶ瑠璃の頭を撫でながら、聞こえないように小さく呟く。

頼むよ

日はすっかり沈み、辺りは暗くなっていた。

40話 ただひとつ確かなこと（後書き）

書いてて感じましたが、瑠璃はMですね（笑）

次回は文化祭一日目（の予定）です（笑）

感想お待ちしております（笑）

41話 無自覚な囁き(前書き)

もう夏休みも終わりですね

ちなみに、この小説ではまだ六月です。どんだけ

誤字脱字等ありましたら教えて下さい

41話 無自覚な囁き

その日の朝、同居人 天戸明の機嫌はすこぶる良かった。

一見すると、学校でもお馴染みの隙のない無表情である。だが、その些細な変化に、ましてや零が気づかないわけがない。

良い夢でも見たのだろうか。

そんなことを考えながら、零はコーヒーを口に運んだ。

「おはよう、零子ちゃん」

「っ！ ゴホッ！ ゴホッ！」

危うく吹き出しそうになる。

慌てて飲み込んだコーヒ―は胃に到達することはなく、代わりに肺に流れ込んで呼吸を一時的に妨げた。

零子ちゃん？ どのどなただそいつは。

どうやら見ていたとしても、明が見ていた夢は零にとって最悪の部類に属するものだったようだ。

「零、大丈夫？」

「……………誰のせいだと思ってる」

聞いただけでは心配しているように聞こえる明の台詞も、含み笑いと共に発せられれば一気に信憑性を失う。

もう少し暴れてでも、あの姿を明に見せるべきではなかったと、零は今更ながらに後悔した。

「今日……………文化祭」

そんな零の心の内を知ってか知らずか

いや、おそらく知っ

てているのだろうか

明はあくまで変わらぬ調子で話を進めた。

「零は、何か予定ある？」

「いや、特にはなかったと思う。敢えて言えば、クラスと生徒会の仕事にこき使われることかな」

「休憩時間とかは？」

「まあ、貰えれば、一通り回ってみたいとは思ってる。なんせ、学校の文化祭って今まで見たことないしね」

実際はかなり微妙なところだが。

結局最後まで、教室のセットや、そのための材料の買い出し

いわゆる準備に、精力的に取り組むことはできなかった。(と言っても、零にも言い分はあるが)

そうになると、担任やクラスメイトに、一日中働かされることも十分に考えられる。

「そのときは……」

「ん？」

「その、私も……いい？」

一瞬、明が言う「いい？」の意味が分からず、目を白黒させてしまった。それを誤解したのか、徐々に不安が滲み始めた明の表情を見て、零は珍しく少し慌てた。

「ああ、別にいいよ」

断る理由はない。

明は一瞬だけ目をパチクリさせるが、それも束の間、笑顔へと変わった。

それは月明かりの中、一面に咲き誇る月の花を連想させた。静か

に美しく、けれどどこか儂い夢のような……

その笑顔に吸い込まれる。

おそらく初めて見た、明の心からの笑みだった。

それをぼんやりと眺め、ふと上機嫌なのは自分も同じかもしれないと考えていた。

学校に到着すると、教室は既に喫茶店の体を成していた。

並べられた机の上には、赤と白のチェック柄のテーブルクロスが敷かれ、中央には黄色い花が置かれている。広い窓にはカーテンが掛かり、光の具合を調節している。

なかなかどうして、本格的な雰囲気である。

「あら、おはよう。天戸くんに明さん」

「……藤本先生、お早う御座います」

「……お早う御座います」

零と明の挨拶がワントンポ遅れたのは、彼女の腕に巻かれた「店長」という腕章に対して、どのようなアクションを取るべきか迷ったからである。

軽快な足取りでやって来たのは、いつもよりも幾分か気合いが入った藤本香織だった。

「はい、二人には早速だけど、働いて貰うわ」

そう言って、香織は二つの衣装を取り出す。

明が手渡された服は、お約束とも言えるメイド服だ。白と黒の一般的な色合いで、その落ち着いたデザインは明によく似合いそうに思えた。

一方、零が手渡された服は黒を基調としたもので、以前に義之が着ていたものとは異なっていた。見方によっては、どこかの豪邸に仕える執事にも見えるだろう。何にせよ、もっと奇抜なものを予想していた零は、着ることに意外と抵抗がないデザインであったため、内心でホツとした。

「早く着替えて準備なさい。もうそろそろ始まるわよ」

チラリとカーテンをめくり、外を見ると、もうすでに校門には行列ができていた。間もなく開催である。

別室にて着替えを済ませた零は、何やらそわそわしながら廊下をうろつろしている芽衣を見かけた。彼女の仕事は「客引き」だろうか。握っている画用紙には、「1-A メイド&ホスト喫茶店 是非あそびに来てね！」と書かれた丸文字が踊っていた。

「あ、レイ……」

「宣伝係？」

「まあ、そうね。本当ならこんな格好で廊下には出たくないんだけど……」

「我がが担任様のご命令か」

「……ええ」

苦々しい笑みを浮かべる芽衣に対して、零は呆れたように天を仰いだ。確かに適材適所とは言えるが、本人の意思をもう少し尊重しても と思ったが次の瞬間、香織の笑い声が脳内に再生され、そんなことは考えるだけ無駄だろうという結論に至った。

無言で芽衣の肩に手を置く。

すでに同じ思考経路を辿っていたのか、自分の肩に無言で置かれた手の意図を、芽衣はしっかり理解したようだった。

「ナンパとか……気を付けろよ」

言ってから、気を付けようにも無理なことに気が付いて苦笑した。向こうから一方的に来るものに対して、どう気を付けようというのか。

しかし、芽衣の反応は悪くないものだった。

「……もしかして心配とか、してくれてる？」

「そりゃあ、心配くらいするだろ？」

「そっか…… そうね」

チラリと窺うような視線に、零は「おや？」と首を傾げた。特に喜ばせるようなことを言っただけでもりはなかった。心配することだつて、零にしてみれば当然のことだ。特に文化祭時はどうしても人々の自制心が薄れ易い。

それでも、芽衣の満足そうな表情は変わることがなかった。

派手なクラッカー音と共に、国立カルディナ学校文化祭一日目は始まった。

1-Aの場所は普段の場所と異なり、調理室の真横に位置している。それは、この喫茶店のメニューには、モカやカプチーノといったコーヒーの他に、ケーキやアイスなどの副食も含まれているからだ。それらの食品は、全てこの調理室で作られ、運ばれてくることになっている。その仕事を調理部の人間に頼んだのは、なんと担任の香織本人だという。

そんな香織の努力もあつてか、「メイド&ホスト喫茶店」はなかなか、いや、かなり繁盛していると言つて差支えないほどの列を作っていた。そしてその中で、零は気難しい顔をしていた。

「……疲れた」

「おい！ まだまだ客は来るぞ！ 休むな！」

奥の椅子にどっかりと座る零に、義之は喝を入れた。極限まで削られた体力に、彼の無駄に大きい声はよく響く。

「クマあ…… 人を過労死させるつもりか」

「お前を指名する女性が多いんだから仕方ねえだろう。寧ろ幸せなことだと思え。それにな、お前と同じくらい人気の明さんはまだ頑張ってるぞ」

「……知ってるよ」

明は、数人の男を相手に会話を喋っているのは男の方だけだが、していた。やたらとテンションを上げて話す彼らに対しても、明はいつも通りの無表情。話しかけられれば返事はしていたが、それ以上は口を開かなかつた。義之によれば、あのクールな態度が必要があるのだとか。確かに、明らしいと言えば明らしいのかも知れない。

「天戸くん、お客さんよ。お願いね」

「分かりました」

小休止を終える。

椅子から立ち上がって振り返ると、

「結衣と……柳沢先輩？」

「零くん、やつぽ」

「あ、どうも。えと……お邪魔でしたか？」

着物姿の結衣と葵がそこにはいた。

「おお〜 それ執事服？ よく似合ってるね〜」

「あ、私も……そう思いました」

「それはお二人もね」

周りの男子の目を引き付けて止まない二人に、零は心から賛美の言葉を送った。「そう？ ありがと〜」と遠慮なく笑う結衣と、「え、えと、どうも……」と赤くなって恐縮する葵の反応は対照的で、二人の仲が良いのも何だか頷ける気がした。

取り敢えずお客様ということで、席に案内する。

「なんか食べる？」

「雪見大福！」

「了解」

結衣の対応は三秒で済んだ。隣で見ていた葵は「本当に仲がいいんですね」苦笑し、自身はブレンドを頼んだ。

葵にコーヒーを渡してから、零は再び立ち上がる。

「……んじゃ、行ってくる」

「へ？ どこに？」

「隣。調理室」

「えっと、なんで？」

結衣は意味が分からないという表情で葵を見ると、彼女も同じような表情で見つめ返してきた。

「結衣の雪見大福は俺が作ろうと思ってさ」

「え……いいいの？」

「そっちの方がいいでしょ？」
「まあ、そうなんだけど……」

なおも洩る結衣に対して、ふわりと後ろから、耳元でそっと、囁いた。

「結衣のために、特製のやつをつくってやるよ」

直後、教室の外の、まだ並んでいる客の間から、黄色い歓声が上がった。

それらの声を全て無視し（正確には、その声の意味をよく理解していなかったのだが）、零は教室の扉へと向かう。その一部始終を見ていた熊沢義之と藤本香織は、驚いたように目を丸くして零に駆け寄ってきた。

「おいおいおいおい、大丈夫なのか？」

「……何が？」

質問の意図を図りかねて聞き返す。

「さっきの話だよ。お前、料理なんてできんのか？」

「変なもの食べさせて、このクラスの売り上げを落とすような真似は許さないわよ。できないのならば、売り上げのためにやめないさ。あなたは、いるだけで売り上げに貢献できるんだから」

「……どんだけ必死なんですか」

義之はともかく、この悪魔サタンは売り上げにしか興味はないのかと思いい、零は顔を引きつらせた。今の台詞の中で、すでに「売り上げ」と三回も口にしたことが良い証拠である。

「……お二人が心配するようなことにはなりませんよ」

「本当ね？ 調理室には古池君がいると思うけど、それでも本当ね？」

「ああ、それは予め排除して頂けると有難いです」

「分かったわ。待ってなさい」

香織が、任せるとばかりに親指を立てた。口の端から除く歯がキラリと眩しい。

「天戸、俺にできることはあるか？」

「んじゃ、粉寒天って調理室にある？」

「いや、リストにはなかったはずだ。調達してきてやる！」

義之も、任せるとばかりに親指を立てた。口の端から除く歯がキラリと眩しい。

意外とこの二人は、良いコンビではないかと思った。

後ろでは葵が、「結衣さ〜ん、しっかりして下さい！」と言って結衣を抱きかかえている。

零は気づかなかったが、結衣は先ほどの零の囁きで、空気が抜けた真つ赤な風船のようになっていた。

カルディナ学校文化祭は、まだ始まったばかりである。

41話 無自覚な囁き（後書き）

お話の展開が遅い気がします……

でも早くすると雑になっちゃうし、うーむ

感想お待ちしておりますー

42話 嵐の前の(前書き)

中盤は、齧ったことがある人でないと、よく分からないかもしれませんね。

流れだけでもザーツと読んでみて下さい。

42話 嵐の前の

「どっ!?」

「ど、どうって……」

「中には結衣が好きなストロベリーバナラがぎっしり。外は求肥きゅうひっていう餅で包んであってモチモチ。さらにカロリーは控えめ。もちろん味も保障する」

「そ、そうだけど……」

「なにか不満が?」

「不満っていうか……」

ひと拍置いてから

「こんなの食べられないよ!」

廊下にまで届くであろう大声で、結衣は叫んだ。

「……俺としては傑作のつもりなんだけど」

「い、いや、そういうわけじゃなくて! 傑作だよ。大傑作だよ! でもさ……」

零が作った雪見大福を指差し、

「そもそも何でウサギなの!??」

「だって結衣、ウサギ好きでしょ?」

「そうだけど! そうなんだけど……」

頭を抱える少女は、「うう……」と苦しそうにつめき声を洩らした。

「えと、天戸君。たぶんですけど、結衣さんが仰りたいのは、『こんな可愛い雪見大福が食べられるわけないじゃないか』ということではないでしょうか？」

「ああ、成程。そういうことですか？」

「はい。だってこの……雪見大福？ 本物のウサギそっくりですし……」

効果的なタイミングで出された葵の的確な助言は、零と結衣の双方にとって有難い助け舟となった。かと言って、彼女もまた驚きを隠せないようで、しきりに零がつくったそれを眺めている。

「このウサギの目はどうなっているんですか？」

「それは粉寒天をイチゴジャムと一緒にゼリー状に固めて、本物っぽくしてあります」

「じゃあ、この髭は？」

「チョコレートを細く固めただけです」

「この毛皮は？」

「氷を限界まで細かくしたものを上から振りかけてあるんです。『かき氷』みたいなものですよ。触ってみては？」

零に促され、そつと手を近づけると、熱で氷が溶け、葵の指に小さな水滴を作った。

「冷たい…… 本当に全部食べ物なんですかね」

「……まさか先輩まで疑ってたんですか？」

「いえ、ちよっぴり驚いただけです。本当に料理がお上手なんですね。こんなことなら、私も注文すれば良かったです……」

小さく笑いながら見上げる葵の瞳は、通常よりも幾分か熱を含ん

でいた。ただ、その瞳に気づいた者は、この教室中にはいなかった。

「さて結衣。いい加減食べないと溶けるよ」

「えええ！ と、溶ける？」

まるで死刑宣告を受けたかのように、結衣は弾かれたようにスプーンを手に取った。しかし、そのスプーンは宙を彷徨い、いまだ雪見大福ウサギに辿り着かない。

「ど、どこから食べればいいか分かんないよ」

「そんなものは知らん」

結衣の嘆きを、一言の下に切り捨てる。と、そこで何か面白いことでも考え付いたのか。零にしては珍しく、ニヤリと口を曲げた。

「ちょっと貸してみ」

「ふえ？」

結衣の手からスプーンを奪い取る。そのまま迷いなく、雪見大福を掬すくった。

「そんじゃ、俺が食べるかな」

「だ、だめ　　！」

静止の声には耳を貸さず、

「いただきます」

「あ　　！！」

パクリと一口。餅の食感の後、バニラの濃厚な甘みとストロベリー

「の甘酸っぱさが口の中に広がった。
……うん、まずまずの出来栄だな。
腕を組み、満足そうに頷く零。視界の端には、半分泣きそうにな
りながら、わなわなと手を震わせている結衣がいた。

「さて、もう一口」
「な　　！！」

食べようと見せかけて。

その瞬間、今度は大きく開いた結衣の口の中に、スプーンを滑ら
せた。

「……………んぐ？」
「うまい？」
「……………んん、ん」

徐々に結衣の顔がにやけていく。さきほどのお怒りはどこへやら。
相変わらず、食べる物のことに関しては目がないらしい。

「おいし　　！！」
「そりゃ良かった。もう一口いくか？」
「うん！！」

全てを結衣の好みに合わせたため、良い反応を貰える自信はそれ
なりにあったが。

一度味を覚えてしまえば、食べる手は止まらない。モグモグと、
先刻まで躊躇っていたことが嘘のようだった。

「あ、あの〜　ひとついいですか？」

申し訳なさそうに、葵。

「その…… 間接キス……ですな」

「……………！！！」

結衣が崩れていく。

……結衣が食べるのを途中で止めるとは、珍しい。

そんなことを考えていた零は、後ろから明に、トレーで思い切り叩かれた。

……いや、ゼロちゃんに言われて来てみたけど。

……なんかもう最高だね。ゼロちゃんに感謝！

零がいる校舎とは別の第二校舎四階。

そのさらに奥に位置する生徒会室。

「ロン。 フアンバイ 翻牌、 トイトイ 対々和。 40府3翻は ゴニ 5200」

「な……………に？」

「おお ……！ 神だ！ この女性神だぞ！ ひと」

変わり果てたその教室で、大歓声の中、長い金髪の女性 マ

リア・フェレは、勝ち誇った表情を浮かべていた。

「く…………… この私が二度も直撃を許すなんて」

対するは、カルディナ学校生徒会長、藤本千鶴。その表情に、いつもの黒い笑みはなく、代わりに苦痛を浮かばせていた。

今の一連の会話から分かるように、生徒会は学生として、およそ

相応しくない出し物をしている。

賭場だ。

雀卓やらトランプ、ルーレットなどが設置され、狭い教室の中で、大の大人たちが、あちこちで怒鳴ったり、汚く笑い合ったりしている。

「さて、ボクの親番だね。そこの……えくと宮城進くんだけ？」

サイコロ取ってくれる？」

「はい……」

「ありがとう。あーらよつと」

妙な掛け声と共にサイコロが振られる。

自五。

マリアの山が切り崩され、卓を囲む四人に牌が行き渡った。

三順目

「リーチ」

最初に動いたのは千鶴だった。

……三順目で聴牌か。

マリアはそのスピードに驚く。千鶴の配牌は、ウーシャンテン五向聴に近いものだった筈だ。場合によっては七対子チーツイツにした方が早くなるほど。それを、この少女はたったの三順で聴牌テンパイにしたのだ。

……ギッてる？ それともぶっこ抜いてる？

いずれにせよ、マリアの目の前でイカサマそれらを成功させてしまう千鶴の腕は相当なものだ。マリアは純粹に感心した。

……でもね、上には上がいるんだよ。ボクやゼロちゃんみたいにね。

「ツモ」

「っ！」

「門前清自摸和、三色同順、ドラ一。30府4翻の親は11600。
ザンク
3900オールだね」

それはマリアの勝利宣言。勝ちが確定した瞬間だった。

「へえ〜 見かけに寄らず凄いんだな、嬢ちゃん。俺たちが束になつても敵わなかった生徒会長さんを負かすなんて」

「いやあ〜 それほどでも〜 たまたま運が良かっただけですよ」

もちろん運だけで勝つたわけではないが。

……洗牌の最中に盲牌して、そのままガン牌したとは言えないよね。

言ったらどうなることやら。誰も相手をしてくれなくなるだろう。

知った上で相手をしてくれる人間など、零くらいだ。

「おい千鶴、元気を出せ」

「わ、私が負けた……」

「泣くな。ガキか」

「な、泣いてないわ」

教室の端では、千鶴が進に支えられていた。余程ショックを受けたのか。自信もあつたのだろう。

……ちよつと、やり過ぎたかな？

マリアは、かつて零に言われた言葉を思い出した。

？マリアさんは勝負事に一切手を抜きませんかからね？

？それってダメなことなのかな？？

？いえ、ダメじゃないですよ。むしろ手を抜く方が失礼ですからね。ただ、負かした相手が、そのまま潰れないように配慮する必要はあ

ると思います？

……潰れないように、か。

「えっと、千鶴ちゃんだよな？」

「……ええ」

無言で、スツと手を差し出す。

「……………」

人に寄れば、それを敗者への憐れみと受け取ったかもしれない。あるいは、勝者の奢りと受け取ったかもしれない。

しかし千鶴には、相手の目を見て、その意図を察する余裕があった。

……この人は違う。

千鶴はその手を握り返した。

「楽しかったよ。また機会があれば」

「……ええ。こちらこそお願いします」

笑い合う。幼馴染の急な変わりように、進は困惑する。かくして、決して美しいとは言えない友情が生まれた。

遠く離れた建物の一室。

髪をショートに切り揃えた少女

素羅ソラと、灰色の特徴的な髪

をした男

白ハクは、静かに時が過ぎるのを待っていた。

「……見つけました」

「どこだ？」

「1-Aの教室です」

「帷トバリの言った通りか。本当に学生なんて又ルイことやっぺんだな。
ターゲット
標的は？」

「……そっちもです」

「オイオイ、なんで同じ教室なんだよ。動きづれーじゃねえか」

チツと舌打ちをした後、面倒臭そうに頭をボリボリと搔く。

「分かってるだろうが、撃つなよ。『卵』が孵化するのは明日だ。
それまでは絶対に動くな。『シンラ』の連中にも伝えておけ」

やや乱暴に命令すると、返事も聞かずにその場を離れた。

脳内に、先日聞いた幼い三つ子 帷トバリの声が再生される。

？夜は良く眠れますかってね？

それが意味することは、ただ一つ。

あの少年…… 自分が戦った黒髪の少年は

……『零号』、こんなところにいたのかよ。

唇を噛み締める。

ずっと探していた。白だけではない。仲間の全員……とりわけ帷トバリは、七年前に零号が第一研究所を破壊して飛び出したあの日から、ずっと狂ったように行方を探し求めていた。そのため、大国によって零号が捕えられたという知らせを受けた時、彼の発狂っぷりは大変なものだった。

……あの黒い腕輪が制御装置とやらか。

瞼の裏に染み着いて離れない少年の姿。その腕に、重々しく取り付けられたものを、今一度思い返す。

強過ぎる猛者達の力をセーブする鎖。例え暴走しても、国には決して刃向えないようにするための首輪。その鍵は中央の大陸連合本部宮殿に、何重ものロックをかけて収納されており、国からの任務以外で手にすることは許されない。
国の思いがままに操られる人形。

……零号よ、俺たちが助けてやる。

問題は、果たして零がどこまでのことを知っているのか、ということだ。

ずっと《組織》という檻に閉じ込められていたのなら、何も知らない、いや知らされていない可能性が高い。
それらを一から説明している暇があるか？

「……………まあ、いいか」

フツと肩の力を抜き、懐かしむような表情を浮かべた。
俺たちは同志なんだから。

「そつだろうか？ 兄弟」

眩きは空の彼方へと消え、誰にも聞こえることはなかった。

42話 嵐の前の(後書き)

次回は文化祭の二日目です。第三章もいよいよ終盤に突入！

感想お待ちしております！

43話 黒い波（前書き）

えゝ 毎度読んで下さってありがとうございます。いつの間にかお気に入りも増えました。これからもどうぞ、お付き合いくださいゝ

43話 黒い波

ビリビリと、空気が肌に突き刺さる。

文化祭の一日目を無事に終え、翌日いつものように登校してきた零は、前日との変わり様に眉を潜めた。

別に、目に見える明らかな変化があったわけではない。準備に走り回っている者や、客引きのために階段付近で待機している者など、一見すると何もおかしいことはない普通の学園祭前の光景だ。

だからこそ解せない。この異様な空気の根源が分からない。そのことが、零の心をさらに掻き乱していた。

大地がうねる。狂気が輪郭を結ぶ。

それが地面の穴から虎視眈々と獲物を狙う蛇を想像させ、零はひどく気分が悪くなった。

「零、平気？」

「……え」

「顔色、悪い」

不安気に覗き込む明の顔。それを見て初めて、自分の表情が強張っていることに気が付いた。

額から汗が滲む。

「……いや、なんでもない。ちょっと考え事してただけ」

「考え事？」

「今日こそは仕事の合間に休ませてくれるかなって」

話題を逸らすために零が口にしたことは、結局クラスのことだった。昨日は、予定通り（？）一日中働きっぱなしだった。明は相変わらず男性客からの指名が絶えなかったし、零も零で、一度凄いモ

ノを作ってしまったため、それ以降はコックさんの役割も引き受ける破目になってしまったのだ。結果、女性客の相手と料理の双方に追われ、体力は限界まで削られた。

「昨日一日で相当儲けたはずだし、今日ぐらいは見逃して欲しい…

…」

「……私もそう思う」

明の無表情が苦笑で崩れる。だが、その表情は明るい。零はそのことに、密かに安堵した。気付いてなさそうだが、彼女自身、意外と楽しんでいるようである。

……何も起こらなければいいけれど。

一抹の不安は残るものの、徐々に騒がしくなる校舎内で自分だけが取り残されていくような錯覚を覚え、零はそれらを思考の隅へと追いやった。

「オッス、天戸。相変わらず夫婦で仲良く登校かい？」

「……………」

「………あり？」

いつも通り元気よく声を掛けてきた義之は、零からの返事がないことで振り上げた手の居場所を無くし、調子が狂ったようにそのまま下ろした。いつもなら、何かしらのリアクションを示す零である。返事がないというのは珍しいことだった。

「おいおい、大丈夫か？」

「……………」

「『何が？』じゃねえよ。まさか、昨日の疲れが残ってんじゃないか？ 顔色も良くないし」

まさか義之にまで心配されるとは思わなかったため、今度は零が調子を狂わせる番だった。確かに零は、今日の自分の体調が悪いことを認めていた。だが、それらを極力ポーカーフェイスの内側に押し込めていたため、外見からの変化は微々たるものだったのだ。

「お前の言う通り、昨日の疲れが抜け切れてないだけだよ」

「本当か？ ちゃんと寝たんだろうな？」

「……一応ね」

嘘をついた。それでも、義之は「そうか」と言って納得したため、それ以上この会話は続けられなかった。

後に零は、この体調不良が、あるものの前触れだったと気づくことになる。

それは、考えてもみれば当然のことだったのだ。嫌な予感がするというだけで、ましてや零が体調を崩すわけがない。

零が気づかなかつたのは、それがあまりにも早かつたからだ。

二日目が無事に始まり、時刻は昼。

カルディナ学校一階の階段付近には、珍しい二人組がいた。

「おお、やっぱり人が多いな」

「お義父さん、あんまり一人で進むと迷子になりますよ？」

「どこぞの子供とは違うんだ。こんなジジイが迷子なんかにならねえよ」

七十歳とは思えないほど軽快な足取りとピンと伸びた背筋。そして、鍛えられた筋肉によって引き締められた肉体が特徴的な老人。

その横にいるのは、四十歳を超えているにも関わらず、女学生と言われれば信じてしまうほどの若さを保った美しい女性。

月下家当主雷切、月下重夫と、月下鏡花である。

カルディナ王国において、知らない者はいないとまで言われる存在。しかし、実際に気づくことができる人間はほとんどいないだろう。重夫は、その名こそ知られてはいるものの、目立つことを好まず、そのために姿はごく一部の人間しか知らない。さらに、「東国の『剣聖』がわざわざ学生の文化祭を訪れるわけがない」という先入観も、重夫であるという事実を認識しにくくする手伝いをしていった。

この状況は二人にとって好都合と言えた。彼らは、結衣や芽衣、そして零がいるこの学校に遊びに来ただけなのだ。迷惑とまではいかないが、注目されれば動きにくくなるのは必然。それは非常に窮屈なことだった。

「あれ？ お義父さん、スリッパはどうしたんですか？」

「ああ、あれはどうも俺には合わない。やっぱり裸足じゃないと落ち着かなくてな」

「ふふっ お義父さんらしいです。でも、床は決して綺麗とは言えませんよ？」

「ハハッ それもそうか。取って来よう」

誤魔化すように笑うと、スリッパを求めて玄関へ歩き出した。近づくと、騒がしい喧騒が身を包んでいく。

活気があって、いい祭りだ。

満足そうに頷いた瞬間、包んでいた喧騒が一瞬だけ殺気に変わった。重夫は思わず足を止めた。

……………？

振り返る。誰もいない。

「どうかしたんですか？」
「いや……」

義父が突然足を止めたことに驚きながら、鏡花が問いかける。それに曖昧な返事をしたまま、重夫はその場に立ちつくした。

……気のせいかな？

無音になった意識の中に、再び喧騒の波が流れ込んでくる。

「なんでもない。さて、まずはさっそく結衣の様子でも見に行くか」
「あれ、スリッパはいいんですか？」

「ああ、気が変わった」

悪戯っぽく笑うと、重夫は今来た道を引き返し、最後にもう一度だけ振り返ると、再び歩き出した。

同時刻。

私服の内側に大量の銃やナイフを隠し持った大部隊が、カルディナ学校の門を潜り抜けた。

その擬装は見事という他はない。

カップルや親友同士の団体など、周囲に見事に溶け込んだ彼らを、一般客と見分けることは不可能に近かった。だから、門の所で案内をしている学生たちも、何の疑いもなく中へ招き入れた。

『全員中に入ったか』

耳に差し込んだイヤホンから、独特なイントネーションの言葉が聞こえてくると、彼らは貼り付けたまやかしの笑顔をそのままに、聴覚に意識を集中させた。

『AからE班は予定通り各教室の前で待機。合図があつたら制圧に向かえ。F班は校庭で待機。「卵」の孵化と同時に制圧。残りは職員室前で教員共の動きを抑えろ。また連絡する。それまでは動くな』

彼らの動きは洗練されており、指示を聞く間も、周囲に溶け込むことを忘れていなかった。そして、指示が終わった今も、ごく自然に自分の持ち場へと向かった。

月下芽衣は宣伝のため、1-Aの看板を持ったまま校舎中を歩き回っていた。二日目ということもあり、作り笑いを顔に貼り付ける元気もなくなっていた。

最初の頃のような恥ずかしさも、もうない。それはそれで恐ろしいことだと自覚していたが、一日中着ていれば嫌でも慣れるのだと半ば諦めていた。

しかし、悪い事ばかりではない。慣れてきたため、芽衣の心の中には、純粹に文化祭を楽しもうというゆとりが生まれてきていた。

ふと足を止めたのは、3-Aの教室。そこには、先輩である神無月瑠璃がいるはずだった。

足を止めたのは、それだけが理由ではない。1-Aにも劣らない行列を作っていたからだ。

……どんなことをしているんだろう？

そんな興味は、芽衣に教室を覗かせた。

窓を黒いカーテンが覆っているため暗く、詳しいことはよく見えない。それでも目を凝らしていると、不意に明るい光がぼつと現れた。

瑠璃は魔力を練った。

手の平に発生する熱の塊を圧縮し、球形に押し込める。術式の火ファイア球の応用だ。熱の塊は瑠璃が手を開くと徐々に上昇し、カーテンの隙間から洩れる僅かな日光を受けて虹色に輝きだした。

今度はそれを、五つ同時に生成する。すると、その虹色の球はお互いの光を受けて別々の輝きを見せ、フワリと空中に浮かんで教室中を虹色に染めた。

幻想的な光景に、誰もが息を呑む。

そこで、槍を持った赤髪の少女　ターナ・ニコラエヴナ・カ
レーニナが、シャボン玉を割るように、空中で輝く虹色の球を鋭く
突いた。

観客の中でアツという声が漏れるのと、パチンと球が割れたのは、
ほぼ同時。しかし、その後、ワアツという歓声に変わった。

割れた虹色の球は、まるで花火のように散ったのだ。五つの中に、
同じ色の球はなく、さまざまな色で空間を彩っていく。最後にはそ
れらが星屑のようにキラキラと輝き、儚げに消えていった。

大拍手が起こった。

「凄い……」

廊下からその様子を見ていた芽衣は、純粹に感動した。全てはっ
きりと見えたわけでもないが、そのレベルの高さは一目瞭然である。
なるほど、これなら並んでも見る価値があるだろう。

「なにあれ……　どうやってるの?」

瑠璃が作った虹色の球。いくら魔法の応用とはいえ、割ってみる
まで中の色が分からないという魔法は聞いたことがない。学生の域
を軽く通り越しているのではないか。

しかし、そんな疑問以上に、芽衣は瞼の裏に焼きついた幻想的な光景に酔っていた。

……零と一緒に見たかったかも。

密かに妄想し、少女は自分で頬を赤らめた。

その時、白は時計を凝視していた。

5、4、3、2、1、0

「時間だ」

そう呟くと、白は座っていた椅子を蹴り飛ばし、カルディナ学校の門を越えた。横には、気を失った生徒が二人。

「総員に告ぐ。時間になった。各々、おのれの持ち場を制圧しろ」

無線機に支持を出す。その直後、地震のように大地が揺れた。

最初に異変に気付いたのは零だった。

……なんだ？

気のせいではない明らかかな変化を感じ取り、すぐに周りを見渡した。

「あれ？　なんか揺れてない？」

「うん、確かに。地震かな？」

徐々に周りからも声が上がってくる。

……地震？ いや、違う。

地震は一種の波長だ。しかし、今の揺れには波がない。どちらかというと地響きに近い。

零は窓から外を眺めた。

(特に目立った変化は何も……ん?)

一瞬だけ、大地が揺れた気がした。さらにもう一度。

なんだあれは……?

心臓が早鐘を打つ。零の中で、最悪のケースが浮かび上がった。

大地が黒く波打つ。徐々に押し寄せるその波は、視力強化を施した零によって、はつきりと捉えられた。

まさか。

波ではない。

六本の足。黒光りする胴体。長く伸びた触覚。そしてギザギザの牙。その昆虫の大軍によって、黒い波に見えていたのだ。

零は最悪のケースが起こったことを悟った。

「みんな、逃げろ！」

声を張り上げる。零にしては珍しい大声に、誰もが驚いて動きを停止させた。

「できるだけ一般客を誘導して広い所へ逃げるんだ！ 事情を説明してる暇はない！」

「おいおい、どうし……」

「早くしろ！」

クラスメイトの言葉を遮って指示を出す。

「蟻だ！」

限界まで声を張る。

「蟻の大軍だ！」

その言葉の意味を、果たして何人が理解できただろうか。
カルディナ学校に押し寄せてきた黒い波は、巨大な蟻の大軍だった。

43話 黒い波（後書き）

いよいよ両者激突で御座います。シリアスは書くのが疲れる……

感想お待ちしております

44話 突き動かすもの(前書き)

はい、ちょっと遅くなりました。ゴメンナサイ……

活動報告の方にも書きましたが、どうやらこの小説は「学園」ではなく「ファンタジー」のようなので、これからはそちらのジャンルでやっていきたいと思えます。

まあ、大した変化はありませんよね？

44話 突き動かすもの

突然鳴り響いた悲鳴のような甲高いサイレンが、人々の意識の中に無遠慮に割り込み、賑やかだった文化祭の空気を切り裂いた。

大声で宣伝していた学生達。屋台の前で財布を取り出そうと、カバンに手を入れた女性。広い校舎内で、先を争うように走っていた子供達。サイレンはそれらの動きを全て止め、世界が一瞬停止したかのような沈黙を招いた。

何が起きたのか理解していない人々の間に、ゆらゆらと漂う動揺やがて、その不安を埋めるかのように空間がざわめくと、再び鳴り響いたサイレンがそれらを塗り潰した。

やや遅れて、状況に不釣り合いな「ピンポンパン」という間の抜けた呼び出し音の後、激しい息遣いが聞こえてきた。

『あーあー、もしもし？ あれ、これちゃんと流れてる？』

それは女性の声だった。

『えーと、無理かもしれませんが落ち着いて聞いて下さい。現在この学校に、魔獣の群れが押し寄せています。もう一度言いますね。現在この学校に、魔獣の群れが押し寄せてきています。ということ、急いで校舎内の大ホールに避難して下さい』

それを聞いて、何を思ったのだろうか。

恐怖か。

驚きか。

いや、中にはただの冗談だと全く取り合わなかった者もいたかもしれない。

そんな彼らが、しかしまず最初に示した一様の反応。

それは、ただ「呆然とすること」だった。

……嘘だろ？

……何かの間違いじゃないのか？

だが現実には彼らの期待を粉々に打ち壊す。

ギチギチギチギチと、重々しく大気を掻き巻く音が徐々に大きくなり、視界に歪みをもたらすと、やがてパニックに陥ったように人々は走り出した。

文化祭は、一瞬にして悲鳴の渦に飲みこまれた。

巨大な蟻の大軍がカルディナ学校に到着した頃、その変化は起こった。

ゴゴゴと地を揺らす新たな音。その音に呼応するかのようには揺れが大きくなり、その揺れが最高潮に達したとき、ポコツと、地面に穴が空いた。

一つ、二つ、三つ……次々と穴が空き、その穴から、また新たな音とともに、ぞろぞろと何かが這い出てきた。

ぬめぬめした白い体躯に、赤い眼球がギョロリと動く。それは、人間の拳こぶし四つ分ほどの大きさの白蟻だった。

次々と湧き出る白蟻はあつという間に数を増やし、大地は黒と白で埋め尽くされた。

巨大な黒蟻にも変化が現れる。

胴体部が二つに割れたかと思うと、その下から半透明で筋の通った、くしゃくしゃのものが現れた。わずかに濡れたそれは、やがて左右いっぱいに広がり、翅の形をとる。

ブンブンブンブンブンブンブンブンブンブンと、新たな音が大気を支配し、千にも届きそうな数の蟻たちが宙に浮かんだ。

小刻みに震える音が一帯に染み渡り、学校に向かって飛んで行っ

た。

放送の声には聞き覚えがあった。

深刻な状況であるにも関わらず、それを全く感じさせない天真爛漫と呼ぶに相応しいあの声は、マリア・フェレのものだ。さすが行動が早い。

しかし、それでも間に合わなかったようだ。

逃げる時間すら与えてくれないのか……

零の呟きの直後、意識の外側に溢れそうなほどの音の奔流と共に視界に大小さまざまな白と黒の蟻が噴き出す光景を見た。クラスメイトたちは、その津波を想起させる様子を見て息を呑み、一瞬思考を停止させたかのように見えた。

しかし、逃げ遅れた一般人らしき人物が、巨大な蟻に体を貪られ、周囲に赤黒いものを散乱させている事実を目の当たりにすると、鞭打たれたかのように我に返ることを余儀なくされ

「うわああああああ！」

「きゃああああああああ！」

「あああ……に、逃げろ！」

一人が叫ぶと、それが引き金となって恐怖が伝染した。

パニックに陥った人間に、言葉はもはや通じない。誰もが教室の外へと駆け出し、安全な場所　大ホールへ向かって走り出そうとした。

その瞬間、零は男女の二人組が教室の扉の前に立ちふさがったのを見た。見て、そして違和感を抱いた。

足音が全く聞こえなかったのだ。

その二人組はゆっくりと懐に手を入れ……

「伏せろ！」

反射的に、零は叫んでいた。

ズダダダダッと、激しい銃弾の音が巻き散らかされたのは、その直後。

別に当てるつもりはない、単なる威嚇射撃の類だろう。だが、それによって、教室は新たなパニックに包まれた。

「静かにしろ」

男がサブマシンガンを携えて、低い声で命令する。

「全員手を挙げて後ろを向け。少しでも不自然な動きを……」

しかし、その言葉は最後まで紡がれなかった。

反応できなかったのだ、あまりの行動の早さ故に。

ただの学生が、威嚇射撃の直後に反撃してくるなど、誰が予想できなかったらうか。男が最後に見たのは、限界まで体勢を低くした少年が、目で追えないほどのスピードで迫ってくる光景だった。直後の鈍い衝撃と共に、男は意識を失う。

少年は止まらない。

啞然とするもう一人の襲撃者の女に体の向きを合わせ、彼女が正気に戻る前に、氷の槍がその手から銃器を弾き飛ばした。

慌てたように懐に手を伸ばす。しかしそれは少年を前にして、およそ信じられない程の隙の大きさだった。

「遅い」

呟かれた言葉を最後に、女の体が宙を舞う。そのまま床に叩きつけられ、さらに少年の左踵が鳩尾みそめちにめり込み、女は背骨が折れる音と共に意識を手放した。

「おい、古池はいるか？」

未だ放心状態だった教室の人間たちは、その零の一言で再び我に返った。

「は、はい。僕はここですが……」

「お前の土魔法で校舎全体を覆え」

「は、え、全体ですか!？」

「いいからやれ。蟻の餌になりたいのか？」

「で、でも全体って…… 窓と出入り口だけでいいのでは？」

「阿呆か。召喚魔法専門のお前なら分かるはずだ。あの蟻の種類はなんだ？」

その零の言葉で、淳はようやく、本当にようやく気付いた。

「まさか『剛顎蟻』と『強酸白蟻』ですか？」

「そつだ。こんな校舎じゃ一瞬で食い破られる」

「わ、分かりました……」

普段は零に食ってかかる淳だが、今回はかりは零の有無を言わさぬ口調に押された。零が大の大人をいとも簡単に戦闘不能にしたという衝撃も大きかった。

「他にも土術師がいたら協力しろ。いいか？ 隙間一つ作るなよ。

あと、一人たりとも外へ出さな。廊下にはまだこいつらの仲間がいる可能性が高い」

チラリと、気を失って倒れている男女を見る。
それだけで、淳は理解したように頷いた。

「じゃ、頼んだぞ」

「ちよつ……天戸零、どこへ……」

「害虫駆除に行ってくる」

その言葉に、淳だけではない、義之や他の面々も、驚きで目を見開いた。

「正気か！？ さっきの見ただろ？ あの大きさだぞ！？」

「正気だけど」

「いくらあなたが強くとも死にますよ！？」

彼らの驚きは尤もなことだった。零はこの場において、「万能者」オールマイティではない。それを知る者もない。天戸零という一生徒に過ぎないのだ。

教員に任せればいい。生徒は守られるべき立場だ。

それは紛れもない正論なのだろう。

でも……

「俺は行く」

心当たりがあった。

今日、このテロを起こしているのはおそらくあいつらだ。取り逃がしてしまったのは自分だからだから、行かなくてはならない。

零は一步踏み出す。

その時、服の裾を何かに引っ張られた。

「……………アカリ」
「……………零」

不安という色で瞳を染める白髪の少女が、そこにはいた。

「ちゃんと、帰ってくる？」

「……………もちろん」

「信じてもいい？」

「俺は嘘をついたことはない」

「……………嘘ばっか」

ジト目で睨まれ、零は出鼻を挫かれた気分になって苦笑した。

「ま、まあ、ちゃんと戻ってくるって。だから、そんな顔するな」

取り繕うように明の頭を撫で、それで納得したのか、渋々といった様子で頷いた。

「……………約束」

「はいはい」

「行ってらっしゃい」

「……………行ってきます」

そう言うと、零は再び歩き出した。

空けてあった扉の部分が、零が外に出ると同時に土魔法によって塞がれる。これで、教室は完全な密閉空間になった。

なお、二人は気づいていなかったが、零と明のやりとりは、今の危機的状况にも関わらず、見る者を悶絶させるほどの威力を持っていた。

やはり零の予想通り、学校内にはすでにかなりの数の伏兵が潜んでいた。

壁の影に隠れて敵兵をやり過ぎつつ、その武器を観察する。

(あの銃器と背負ってるライフルは……ステアーAUGか？ だとすると、相手は『シンラ』か。そういえばさっきの男の東国語も微妙に訛ってたな)

そんなことを考えていると、外から爆撃音とともに、強い揺れが襲ってきた。

巨大蟻との交戦が始まったらしい。

しかし、いくらこの学校の教員が優れていようと、あの数を相手に何とかなるだろうかと考えた時、勝ち目の濃い戦いではないと結論を出すのは、零でなくともさほど時間は掛からないだろう。

……時間がないか。

そう判断すると同時に、発見されることを覚悟で駆けだした。

「なんだお前は！？ 止まれ！」

突然のことに驚く兵達は、しかし驚くべき速さで照準を合わせ、予告なく威嚇射撃をする。

零は自分の真横を通り過ぎる弾丸をチラリとも見ずに、そのまま距離を詰めると、引き金を引いた兵の顔面を掴んでコンクリートの壁に叩きつけた。

大きな音を聞きつけて、さらに三人の兵がその周辺に集まる。

「何事だ！？」

「お前、この学校の生徒か？　そこで何をしている」

零は手元から滑り落ちた拳銃を奪い取り、新たに現れた三人の兵達の理解が及ぶ前に、一人の右肩を撃ち抜いた。

全く無駄のない零の動きは、兵達にある種の恐怖を植え付ける。そしてその恐怖は、全ての行動を迅速に行う妨げとなる。

正気を取り戻し、引き金に指を掛けるまでもう一人、照準を合わせようとしている間に、さらにもう一人が同じ運命を辿り、最終的に立っているのは零だけとなった。

右肩の痛みによって恐怖を増長させた彼らは、もはや歩みを進める少年の行く手を阻もうなどと考えない。

分かってしまったのだ。手を抜かれていると。

絶対的な存在を前にして、人は抗う術すべを持たない。

右肩一本で済んだ彼らは、運が良かったと考えるべきだった。

「ひいひい！」

「どけ」

零の氷点下まで下がった無慈悲な瞳が投げかけられると、殺気の塊をまともに受けたその兵は、固まったまま指一本動かすことができなくなった。

零は進む。その先に、まだまだ銃を持った兵士が待ち構えていようとも。

突き動かすものがあつた。立ち止まることを本能が許さなかつた。それが何なのか、この時の零は理解していなかつた。

「さあ〜て、この子はいつ解るかなあ〜？」

カルディナ学校の校舎裏に、スナック菓子を頬張りながら楽しそうに呟く女がいた。

どう表現するべきかわからない。

色黒なのか色白なのか判断ができない。

子供のようにも見えるし、大人のようにも見える。

美人とも言えるし、醜いとも言える。

そんな女が、甲高い声でケタケタと笑いを撒き散らしていた。

「なんだ、ここにいたのか」

「あ、白じゃん〜 調子はどう？」

「どうもこうも、たった今始まったばかりかだろーが」

「あっはっは！ それもそうだねえー」

「帷はどこへ行った？」

「知い〜らない。予定通りに番号……今は天戸明だっけ？ その女

のところでも行っただんじやない？」

「はあ〜 相変わらずアイツは何を考えてるかわかんねー」

「ちゃんと働いてるんだからいいじゃん〜」

校舎裏には他に人影がない。

一般人は校舎内の大ホールに避難したはずだし、教員は蟻の魔獣に、虚しい抵抗をしているはずだった。

……勝ち目があるわけねーだろ。

…… たった数十人の人間が、どうやって千匹以上の巨大蟻と戦えるってんだ。

しかし、そんなことは彼らが一番よく分かっているのだろう。それでも戦わなければならない。生徒を守るのは、教員の義務だからだ。

「ねえ、白」

「あ？」

「えつとさ…… 『零号』は来るかなあ」
「……来るだろ」

この絶望的状况で、あいつが表に出て来ないわけがない。今の奴は「万能者」^{オールドマイティ}。本意ではないにしろ、魔獣狩りのプロフェッショナルなのだ。

「そっかあ…… なんか嬉しい」
「嬉しい？」

「だってさ、これでようやく揃うんだよお？」

そう言うと、女は白が見たこともないような笑顔を浮かべた。

「この子ももう孵るから、あたしももうそろそろ行くかなあー」
「そうか」

「厄介な女が…… 大国の犬がいるからねえー」

そこまで口にした時……

女の腹からどろどろとした不気味な緑色の液体が飛び出た。それと同時に体がぶくぶくと膨れ上がり、今までの巨大蟻を超えるほどの大きさになる。

足が生える。その数は六本。

岩山のようなゴツゴツした甲羅は、異様という他はない。うるよ
うな緑色。

丸々と育った腹には、所々に橙色の斑点があった。

女王蟻。

「行って来い」

白の言葉を受けて、元々は女性の姿をしていたその巨大な女王蟻

は、緑色の体を正門の方角へ向けた。

44話 突き動かすもの(後書き)

虫気持ち悪い！ あっち行け！
感想お待ちしております~~~~~

45話 掃討戦(前書き)

またまた遅れてしまい、申し訳ありませんでした……

45話 掃討戦

三人の幼い子供が、廊下を歩いてきた。

その顔、背丈、しぐさ、何から何まで、異なるものを見つけたのが難しい。何も知らない人が見たら、鏡の世界に迷い込んだのかと錯覚するほどだ。

容姿は、寒気がするほど美しい。完璧な美を身に纏い、幼い三つ子は、少女のような高く澄んだ声で笑い合った。

「さて、どこにいるんだらうね」

「どこだらうどこだらう」

「さがしてみようよ。かならずいるはずだから」

にたあと口を曲げ……………

「「「番号ちゃん、出ておいでー」」」

この蟻たちは何処から来たのか。

何故この学校を狙うのか。

考えることすら許されない圧力の中、プレッシャー片山徹はかたやまとおの魔力を練り上げると、しゃがんで地面に手をついた。

汗が滲み出る。

鋼のような甲殻と巨体を誇る黒蟻は、パツクリと開いた赤い口から、カギ爪状の牙を覗かせている。

その間をずるずると這いずり回る小さい白蟻は、時々体を震わせると、橙色の体液を吐き出してくる。

力で強引に獲物を貪るか、酸で溶かして軟らかくしてから貪るか

の違いだが、どちらにせよ骨も残らないだろうと判断し、徹は嫌な考えを振り払った。

「片山先生、準備はいいですか？」

「はい、お願いします！」

「では……いきます」

短い確認の後、徹の後ろでタイミングを見計らっていた藤本香織は、弓を上空に向かって鋭く構えた。

バリバリッ！

轟音を出して暴れる電撃の奔流を一本の矢に込め、放つ。

弓と雷属性の専門家である香織エキスパートの放った矢は、空中を飛び回る蟻の透明な翅を貫通し、さらに周りを飛ぶ蟻たちも電撃に巻き込み、まとめて地上に引きずり落とした。

翅もを？がれて落下した蟻が射程圏に入ったのを見届けると、徹は練った魔力を地に向けて一斉に解き放つ。土から形成された幾本もの剣が、蟻の体を真下から串刺しにした。

どす黒い色の体液と異臭を撒き散らして、死に絶えられる蟻たち。

死骸は残らない。

蟻たちは仲間の死骸に群がり、必死で貪っていた。そこに仲間を殺された怒りはない。ただあるのは、飢えた己の食欲を満たすという感情のみ。

そして数秒で綺麗に食べ尽くし、新たな餌を求めるのだ。

息をつく暇は与えられない。今倒した蟻も、全体で考えればほんの一部にも満たない数だ。目の前の集団を殲滅したとしても、その後ろから新たな蟻の集団が現れる。体の小さい白蟻たちは、死角から虎視眈々と攻撃の機会を伺っている。一瞬たりとも気を抜くことが許されないのだ。徐々に精神が圧迫されていくのを感じながら、徹は額に浮いた汗を乱暴に拭った。

「おい、大丈夫か徹」

「……ああ、まあ何とかこっちはまだ大丈夫だ。そっちこそ平気か。やっぱり肩、痛むんじゃないかねえのか？」

「お前が俺の心配をするとはな」

徹の言葉に薄い笑みで返したのは、親友でもある浅沼幸平だ。

強がっているようにも見えた。幸平が得意とする魔法にも、いつものキレがない。

事は数分前に起きた。

甲高いサイレンが響き渡り、女性の声で放送が流れた直後、銃器で武装した二人組が職員室に侵入し、いきなり発砲してきたのだ。

たかが二人。この学校の教員二十人以上を相手に、彼らが勝てるわけがない。案の定、二人組はすぐに取り押さえられ、今は気絶させられた上に縛られている。しかし、奴らの目的はこちらの戦力を削ることだったのだ。

最初の不意打ちの銃撃で、手痛い負傷があった。数人の教師が戦えなくなり、幸平は腕に怪我をした。

結果として、本来ならば蟻の集団と言えど退けられる戦力を持っていたはずのカルディナ校は、苦戦を強いられる羽目となった。

唯一の安心材料と言えば、生徒や一般人がいる校舎が土魔法で固められ、外部からの攻撃にビクともしない強度になっていることだった。誰が指示し、誰が実行したのか分からないが、これによって教員たちの負担は圧倒的に軽くなっていた。

「しかし藤本先生の弓の腕は見事だなあ…… 噂には聞いていたが、実際に見るのは初めてだ」

「普段がアレだがな」

同じ一学年の担任教師として、香織の問題行動をよく知る徹と幸

平は、焦りの表情の中でも読み取れるほどの苦笑を露わにした。

？上空の敵は全て私が撃ち落とします。私の生徒に危害は加えさせません？

生徒をオモチャにしたり、昼間から酒を飲んだりして、度々教頭から注意を受けていたが、実力もない人間がこの学校の、しかも A クラスの担任を任されるはずはない。今この瞬間、徹はそのことを再認識させられた。

香織の指揮の下、南の防衛を担当していた徹たちは、大量の蟻を相手に善戦していた。

……善戦していた筈だった。

一際大きな緑色の体躯が姿を現すと、今まで好き放題に暴れていた黒と白の蟻たちは、まるで畏れるように動きを止めた。

さあ、かわいいこどもたちよ。

あそびはもうおしまい。

あたしのいうとおりにごききなさい。

わるいこはおしおきだからね。

ギチギチギチギチという不協和音が、一定の規則性を生んだ。

「っ！」

異変は突然訪れた。

何の規則性もなく、ただ単純な攻撃を仕掛けてきていた蟻たち。その動きが一瞬止まったかと思うと、今までの倍近い速さで、ぐるりと香織たちの後ろに回り込んだ。まるで、明確な意思が備わったかのように。

「コイツら、急に……!!」

「挟み撃ちか!」

幸平は即座に空気の刃をつくって蟻の足を削ぐと試みる。しかし蟻たちは、その場で六本の足をバタつかせると砂煙を起こし、幸平の魔法の狙いをずらした。

結果、数匹が直撃を免れた。

他の教員の悲鳴が聞こえた。どうやら変化が起きているのは自分たちだけではないらしい。取りあえず、後ろに陣取られるのは危険と判断し、徹は背後の黒蟻に向けて斧を振るった。

肩から肘へ。肘から手首へ。手首から指先へ。

全身の筋肉を鞭のようにしならせて放ったその一撃は、黒蟻の甲殻をやすやすと砕き、そのまま真っ二つにした。それは誰の目から見ても、最善の判断だった。

徹は見た。

黒蟻の体内から、大量の白蟻が湧き出たのを。

その白蟻が宙を舞い、徹の体にへばりついたのを。

「まさか…… しまった!」

畏だった。

ピリリという鋭い痛みの直後、

「うぐああああああ！」

白蟻が貼り付いた腕から、勢いよく血が噴き出る。隣にいた幸平にも、何が起きたのか理解できなかった。気を失いそうな激痛の中、徹は腕に貼りついた白蟻を強引に引き剥がした。

一匹剥がすごとに、白蟻と一緒に皮膚も剥がれてしまう。その傷痕は、もう自分の腕ではないような色に変色していた。幸いなのは、辛うじてまだ手が動くことか。

「徹！」

「……いや、大丈夫だ」

「大丈夫なわけがないだろう！ 腕を見せろ！」

「そんなことやってる場合じゃねえよ。分かってるか？ 俺たち、
囲まれたんだぜ……」

「だが、そんな怪我じゃ……」

戦えないだろうという言葉を、幸平は飲み込んだ。

周囲を見回す。

一向に数を減らさない蟻の大軍は、既に徹たちの周りを完璧に囲んでいた。

もう逃げ場はない。抵抗しなければ、待つのは死だ。選択肢は与えられなかった。遠くには、同じように囲まれて逃げ道を失っている同僚たちの姿が見えた。どうやら、援軍は期待できないらしい。しかし、数で圧倒されている上に、間合いに入られたらどうすればいいのか。

……どうしようもないのかもしれない。

急速に、世界が色あせてくる。腕から噴き出す血の赤がやたらと生々しく感じ、そこだけが熱を持っているように感じる。あの白蟻

は毒も持っていたんだなと、まるで他人事のように思った。蟻の群れが、再び迫ってくる。しかし、体が動かない。

死を覚悟した。

誰かの叫ぶ声が聞こえる。

その時、徐々に薄れゆく世界の片隅に……

巨大な魔法陣を見た。

「召喚魔法：百手巨神

ヘカトンケイル

直後、その一帯の蟻が、一度に吹き飛んだ。

「何が……」

起こった？

香織は弓を構えたまま、思考を停止させた。

いきなり現れた異様な姿の巨人。その体からは、何本もの腕が生え、大樹の枝のように広がっている。その姿に、香織は昔読んだ神話の巨人を連想した。

？百の手を持つ奇怪な巨人は、その力を疎まれ、地の底へと封じ込められた？

まさかこれが？

しかし、誰が……

停止した思考の中に、ピンポンパーンパーンという場違いな

音が、再び響き渡った。

『国から魔獣駆逐のプロが到着しました。先生方はお疲れ様です。今すぐに校舎内のホールに避難して手当てを受けてください。医療チームが来ています』

教頭 ケビン・フロルの声だった。

「これでいいですか？」

「ありがとうございます、ケビン教頭」

零はケビンに頭を下げた。今の放送は、零が頼んで流して貰ったものだったのだ。実際は、国から援軍など来ていない。素直に教師を避難させ、かつ零たちが戦っている姿を見られないようにするための嘘だ。医療チームも来ていないが、ホールには治癒の力を持つマリア・フェレがいる。彼女なら今の放送で、零の意図を理解してくれるはずだと考えていた。

「しかし、なぜ国と連絡が取れないのか、君は分かりますか？」

「おそらくですが、この一帯に闇魔法の結界が張られているんだと思います。人はもちろん、電波すら通さない強固なものです。邪魔者が介入する危険性を潰したんでしょうね」

「君なら……『万能者』たる君なら、結界くらい破壊できるのでは？」

「できません……今は無理です」

断言しながら、零は腕についた黒い輪を睨んだ。仕組みはまるで分からないが、この制御装置リミッターは自分では外せないし、壊すこともで

きない。かと言って、鍵は中央の宮殿最深部に保管されているため、取りに行くことも不可能だ。

《組織》の一員としての「力」は、独断で勝手に振る舞うことは許されない。

だが、あの程度の魔獣ならば、今のままでも十分対処できるだろう。

「零、そろそろ行こっか」

途中で合流した瑠璃が、窓の外から呼びかける。

「では、ケビン教頭、先生方の誘導をお願いします」

頷いたのを見ると、零は大量の蟻が蠢く中へ飛び込んだ。

「ケビン教頭は事情通だから助かるね。もしそうじゃなかったら、私たち姿を隠しながらこの数を相手にしなきゃならなかったわけだし」

「確かに……それは考えただけで骨が折れる作業だ」

蟻で埋め尽くされた中、零と瑠璃は、まるで世間話でもするかのよような態度でのんびりと会話していた。

二人対数千。

常識的に考えたら、笑ってしまうくらい勝負にならない。しかし、零も瑠璃も、何もかも普通ではない。

「……どうしよっか？」

「取り敢えず、手当たり次第で。リリは虫って大丈夫なんだっけ？」

「うっん、大っ嫌い。気持ち悪いし」
「……そう言うと思った」

そんな話をしている間にも、蟻の一団が、二人に向かって襲いかかってきた。方や鋭い牙を向け、方や橙色の液体を吐きながら。その蟻の一団に……

「ちょっと待ってる。まだ話し中なんだよ」

振り向きもせず言った直後、

巨人の百の手が、蟻を吹き飛ばした。

不意の横からの圧力に、硬い甲羅はひしゃげ、歪む。さらに、上空から拳の雨を降らせ、数百の蟻を一瞬で潰した。

「それじゃ、百手巨神ヘカトンケイルは校舎の入り口付近。俺とリリは二手に分かれて半分ずつってことで」

軽く頷きながら、瑠璃は術式を展開させた。

理魔法：火：青炎矢

青白い炎が矢を形作り、一直線に飛んでいく。その数は五本。本来は弓矢に纏わせて放つ術式だが、瑠璃はその圧倒的な魔力量を生かし、疑似的な矢を創造していた。

高温の矢は豆腐に釘を刺したかのように蟻の体を易々と貫通し、それでも勢いが止まらず、五匹、六匹、七匹、八匹と、次々に巻き込んで、最後には爆発した。

零は薙刀を生成すると、向かってきた蟻の攻撃を跳躍してかわしつつ、その背に飛び乗る。堅い甲羅を避け、割れ目を狙って一閃。

さらにその背から跳躍し、翅を広げて飛び回る蟻の背に飛び乗った。
術式展開。

闇魔法：傀儡ノ糸

周囲を飛び回る蟻たちが突然飛び方を変え、お互いに激突する。その過程で翅を傷つけた蟻が落下し、下にいる蟻も巻き添えにする。ある程度数が減ったところで、まだ空中に残っている蟻を、今度は薙刀で直接地面に叩き落とす。
空中に身を躍らせたまま、

トランプスベル
時間差展開発動。

理魔法：氷：極寒魔氷域
ニブルヘイム

大気中の水分が凍り、白く色づく。その中、小さな渦が生まれたかと思うと、徐々に広がり、最終的には周囲を全て巻き込んだ。体内の液体を尽く凍らせ、臓器等の動きをそのまま停止させる術式。蟻たちは、外見上は変化がないが、動くこともできないまま死に絶えていた。

術式終了と同時に、空中にいた零は着地し、ゆっくりと息を吐いた。

カルディナ校の教員たちが苦戦していた大軍を、零と瑠璃はあっさり潰していった。

45話 掃討戦(後書き)

感想お待ちしております

46話 奪われた少女(前書き)

お、今回は割と早かったのでは？

46話 奪われた少女

……来たか。

校舎裏の影に身を潜めていた白は、周囲の蟻が急速に減っているのを確認すると、フワリと体を浮かせ、現状を肉眼で確認した。

驚くべき身のこなしで蟻の大軍を退け、薙刀と魔法を用いて、臨機応変に敵を蹴散らしている少年。それと少し離れた所では、五色の魔法を用いて蟻を圧倒している少女が見える。

【万能者《オールマイティ》】と【虹の女神《イリス》】。大陸において“最強ペア”と名高い二人である。

この二人が出てきたということは、予定通りに他の人間が全員校舎内に避難し、教員を含む邪魔者がいなくなったということだ。

「さて、俺もそろそろ行くかね」

眩くのと同時に、白の体がさらに上昇する。今まで無風だった地帯に豪風が舞い降り、砂埃を起こしながら周囲の圧力を上げていく。

信じられない程の大気を身に纏い、白は空を駆けた。

カルディナ学校校舎内「大ホール」

その場は重い空気に包まれていた。

耳を抑え、うずくまる者。我が子を抱きしめ、恐怖に震えている者。現状はどうなっているんだと叫びだす者。

これらの反応は普通と言えた。彼らはこの文化祭に娯楽を求めてやって来たのだ。誰がこんな状況に陥ることを予想できただろうか。みな、己の運の悪さを呪うばかりだった。

彼らを抑え、励ましているのは、藤本千鶴、宮城進、柳沢葵の生徒会の面々だ。明るく声を掛け、食料を運んだりして勇気づけている。しかし、生徒のやることとしては荷が重く、限界があった。徐々に重い空気に支配されていく。

そんな負の感情が蔓延する中、面白そうに口元をにやりと曲げる壮年の男がいた。

半袖のシャツにジーンズ。髪の色は黒という、これと言って特筆すべき点の見当たらない男。客観的に見れば、彼も同様に、不運な一般客のひとりには見えなかった。

……笑っているという一点を除いては。

その時、スピーカーから放送が流れた。

『国から魔獣駆逐のプロが到着しました。先生方はお疲れ様です。今すぐに校舎内のホールに避難して手当てを受けてください。医療チームが来ています』

場の空気が、明るくなったように感じた。伏せていた人々が顔を上げ、瞳の奥に希望という光を宿した。

反対に、この男は顔をしかめた。

「国から援軍？ そんなハズはねえだろ。帷トバリの結界はそうそう破れるモンじゃねえ」

顎を撫でながら現状を整理し、最も考えうる推論を探る。

なぜ援軍到着と同時に教員を下がらせた？ 協力して戦えばいい

ものを。

その指示の裏にはどんな意図がある？

「……なるほどねえ」

男は再度口元をにやりと曲げた。

実は援軍など来ていない。素直に教員を引き下からせるための方便だ。そしてそんなことを指示する裏には、戦う姿を見られないようにする目的がある。

「この校舎を覆う土魔法も、防御を固めると同時に、校舎内から外が見えないようにする意図もあったわけだな。いやいや、考えることにいちいち感心させられるねえ」

男の呟きは、誰の耳にも届かない。

「……ことは、そろそろ白と零号が^{ハク}出会うはずだな。シンラ兵は……と、はあ！？ 全然連絡が取れねえじゃねえか。まいったねえ」

やがて扉が開き、蟻と一戦交えたカルディナ校の教員たちがホール内にやって来た。中には血まみれの者もあり、外の戦いがどんなに壮絶であったかを物語っていた。

だが、男にとって、そんなことは眼中にない。

「はあ、どうすっかなあ」 今回、白には『動くな』って言われてんだけどなあ」

開かれた扉を見て、

「ま、いつか」

男は数千人の人々の、誰の目にも留まらず、その扉をすりと抜けた。まるで影のように、音もなく。

その後、重い音を立てて扉が閉まった。

カルディナ学校校舎「二階」

時を同じくして、月下結衣と月下芽衣は、一般の人々と生徒を、ほぼ避難させ終えていた。

その格好は、およそ場と状況にそぐわないものだ。

結衣は直前まで舞を舞っていたため、赤い着物を着用していた。方や芽衣は、宣伝の最中に事が起きてしまったため、メイド服のままだ。まさかこの非常事態に、呑気に着替えなどしている場合ではない。そのため、数分前に重夫と鏡花に出会った時は、興奮した鏡花によってもみくちやにされた（事態が事態なので、多少は自重していたようだったが）。

校舎内には、まだ逃げ遅れた一般人や生徒が多い。そして、彼らは武装した兵たちによって身動きが取れなくなっている。そこで、重夫と鏡花、結衣と芽衣の二組に分かれ、校舎内の人間を全て大ホールへと無事に避難させることにしたのだ。具体的に、三階と四階は重夫たち。一階と二階は結衣たちといった具合だ。

元々の生徒の数が多しカルディナ学校は、そのための校舎も広大である。本来、たったの四人では到底足りない。目的を果たすには、かなりの根気と体力が必要と言えた。

「ううー せめて制服だったらなあ」

結衣が不満げな声を漏らした。着物という服装は、お世辞にも戦鬪に適しているとは言えない。

「それを言うなら私だって……　こんなヒラヒラした格好で戦いたくないし」

「まさかこんなことになるとは思わなかったからね……」

結衣の表情が一瞬曇る。それは、誰もが思っていたことだ。

「早く、この危機を乗り越えないとね」

力強く掛けられた言葉に、

「うん」

芽衣は力強く答えた。

カルディナ学校校舎「三階」

月下重夫と月下鏡花は、武装した五人の男女によって囲まれていた。

「老人、何故ここにいる？」

「ん？ いやいや、孫を探していたら道に迷ってしまったてな。如何せん、この学校は無駄に広いから困る」

「孫だと？ ではそっちの女がその孫か？」

「きゃ〜 『孫』ですって、お義父さん。私やっぱりそんなに若く

見えるかしら？」

「はっはっはっは！ さすが鏡花だ。敵わないな」

どこまでも、マイペースな二人である。そして、状況を正しく理解していると言い難い二人の反応に、彼らもペースを崩されていった。

老人の様子を、訝しむように観察する。

手に持っているのは、極めて普通の傘一本。その横の女は手ぶらだ。こちらの戦力に対抗するだけの道具を持ち合わせている様子はない。完全に丸腰だった。

「いやー、結衣たちは今頃どうしているかなあ」

「きつとうまくやってくれてますよ。あの子たちなら大丈夫です」

この余裕は何なのか。

この場に居るのが老人だけだったならば、ボケてきていると考えれば済む話だった。だが、その隣の若い女性まで同じような反応である。ただ単に、頭のネジが緩んでいるだけなのだろうか。

どうにも、嫌な予感がしていた。

そして一人が苛立ったように前へ出た時、予感は的中したと悟った。

「おい貴様、自分の立場が理解できているのか」

「それは俺の台詞だが？」

「……いい加減にしろ！」

舐められたと感じたのか、激昂して銃の引き金を引いた。構えていたライフルから、銃弾が飛び出す。その銃弾は狂いなく重夫の上半身に向かい……

傘の先端で受け止められた。

「……は？」

「やれやれ、この傘、俺の所有物じゃねえんだぞ？」

いまだ何が起きたのか理解できていない兵の喉元に、傘の鋭い突きが走る。殺さない程度に加減された突きは、その兵の意識を刈り取るだけに留まった。

「あゝ 弾がめり込んでるじゃねえか。やっぱ弁償かね？」

溜息をつきながら、重夫は体を指一本動かさずに、残る兵との間合いを詰めた。例えるならば、空間を切り取ったような速さだろうか。その現象を理解できた者は、この場において鏡花以外に存在しなかった。

そのまま、目の前の兵の胸を打ち貫く。重夫を見失って混乱している左右の兵は、それぞれ腹と喉を。最も遠いところにいた兵は状況を理解しつつあったので、その手から銃器を弾き飛ばした後、傘を逆手に持ち替えて、

「シッ」

懐に潜り込んで下から顎を貫いた。

その一連の動作があまりにも素早かったためか。兵たちが床にドサリと倒れたのは、ほぼ同時だった。

「お見事です」

「いや、なんのなんの。しかし、刀がないってのは不便だな。傘だと突きしかできん」

「それでも十分だからいいじゃないですか。傘の持ち主には後で弁

償しましょう」

「そうだな。何にせよ、これで三階の兵は全部か。さっそくこの階の生徒さん方を避難させるかね」

「あとは四階ですね。それが終わったら、結衣ちゃんたちと合流しましょう」

カルディナ学校校舎「一階」

どれくらい時間が経ったのか見当もつかないまま、熊沢義之くまざわよしゆきは緊張で凝り固まった肩を動かした。

「なあ淳」

「……なんですか」

「外は今どうなってるのかな」

「出たいのなら止めませんが、死にますよ？」

土で固められた1-Aの教室は、温度は一定に保たれているものの、外部からの光を通さず、暗い空間となっている。誰も彼も、緊張状態が続く中で疲れ切っていた。

「今の放送聞いただろ？ 国から援軍が来たつてよ。もう大丈夫かも知れねえぞ。俺たちもホールへ移動しないか？」

義之の提案に、淳は思案顔になる。

「しかし、天戸零からは出るなと……」

「アイツもきつとホールで待ってるさ。だって、相手はあの数の蟻だぞ？ いくら天戸でも何ができるつてんだ」

歪みゆく殺意が、逃亡を強要する。

やがて、その三つ子の目が、一人の少女を捉えた。

「……え？」

白く長い髪の少女。

明だ。

「みつけた」

「みつけたみつけた」

「やっとみつけた。ようやくみつけた」

三つ子が歩みを進める。その行く手を阻める者は、一人として存在しなかった。みな、恐怖から顔が白くなっている。

「さあ、ぼくと一緒にいこうー！」

「あははははは！ いこういこう！」

「邪魔者には眠っててもらおうね！」

その大きな黒目が、真っ赤に充血しているのを、明は見た。

その瞬間

闇が、一面を支配した。

皆が次々に意識を失って倒れていく。それは、まるで生気を抜かれたようだった。

闇が晴れる頃……

三つ子と明の姿は、その場から消えていた。

46話 奪われた少女（後書き）

今回は主人公が出てきてないですね。珍しい……
次回は戦闘がメインになると思います。

感想お待ちしております〜

47話 剣姫と剣鬼（前書き）

ついにお父様の名前が……

47話 剣姫と剣鬼

「あゝあ、こりゃひでえな」

校内に潜伏させていたシンラ兵。そのどれもが、無様に廊下でびびっている光景を目の当たりにし、男は怒りを通り越して呆れ果てていた。

「使えない奴らだねえ〜 ったく、目的が果たせたからいいものを……」

手慣れた動作で、男は気を失っている兵の身体を調査していく。

相手の像を掴むためだ。打ち込まれた部位、その強度、その傷跡。他には床面の擦れ具合などからも、ここでどのような戦闘が行われたのかを想定していく。

「相手はふたりってところかね。武器は刀か。戦いに慣れてないわけじゃなさそうだが」

戦闘の跡は、その目にどう映ったのか。彼の分析力によって丸裸にされた情報は、いったいどんな映像を見せたのか。

「まだまだ甘いなあ……」

何も語らず、男はただ、にやりと笑った。

それは突然の声だった。

「なあ、この辺にいた兵どもは、みんな嬢ちゃんたちが片付けたのかい？」

「っつ！」

何の前触れもなく後ろから掛かった声に、結衣と芽衣は反射的に振り向いて刀を構えた。そして、ほぼ同時に驚いた。

声の主は、二人の真後ろにいた。半袖のシャツにジーンズ。どこにでもいる普通の男性だ。

それに驚かないわけがない。

結衣も芽衣も、散歩していたのとはわけが違うのだ。常に気を張って周囲を注意深く観察し、敵の存在を探っていた。にも関わらず、こんな距離になるまで、そして声を掛けられるまで、その存在に気付くことすら適わなかった。これを警戒せずして、なにを警戒しろというのか。

「困るんだよね、俺の立場としちゃあさあ。一応、コイツらは借りてるんでね」

「……あなたは誰ですか？」

「お、こりゃまた随分とかわいいお嬢さんだねえ。まいったな。俺は美人をいたぶる趣味はねえんだが」

男は顎に手を当てると、着物姿の結衣とメイド姿の芽衣を順番に見て、次に握られている刀を見て、納得と確信の入り混じったような笑みを浮かべた。

「まあ、簡単に言っと、あんた方お二人の敵だわなあ」

自分の腕に絶対の自信を持っているのか。それとも結衣たちの腕を見誤っているのか。あるいはその両方か。確かめる術はないが、

事実として、二本の刀が自分に向けられているにも関わらず、その壮年の男は態度を変えなかった。

自然、刀を握る手に過剰な力が加わる。焦っているのが、自分でもわかった。

今までの兵を「犬」に例えるなら、この男は「狼」だ。外見を一瞬見ただけでは区別がつかない。しかし、よく見ると犬にはない牙と爪を持っていて、不用意に手を出したら、怪我をしたでは済まされない事態になるであろう。それに気付いただけでも、いや、気付かせて貰えただけでも良かったかも知れない。

有能な獣ほど、己の牙と爪を隠すことに長けている。その気になれば、この男は自分の実力を隠すことなど容易だったはずだ。

……いや、あるいは未だに隠したままなのかもしれない。

いきなり、結衣は床面をカツと蹴った。

先手必勝。攻撃することと護ることはこれ同義。攻めさせないことこそが絶対の防御。

敵であるならば迷う必要はない。真っ直ぐで曇りなき剣筋が、男の目の前に弧を描いた。

「つととと、速いな。その格好でこの速さかよ」

素手のまま避けつつ、賞賛を送る。そんな声に耳を貸さず、己の刀のみに意識を集中させていた結衣は、無心のまま、その存在を気配ごと断ち切った。

それはある種の域に達した速さ。付け焼刃では適わない、何年もの修行を積んだ者のみが辿りつける域。

だが、それでも男は笑いながら、

「そらっ！　ここだろ？」

そのコンマ一秒の剣隙に、拳をねじ込ませた。

蛇のようにうねる一撃は結衣の右肩へ迫る。それは間違いなく、骨ごと粉碎する威力を秘めたもの。まとも食らったら最後、刀を握ることができなくなる。

だが、結衣は動かない。その拳を視界に納めることすらしない。必殺の拳は……

芽衣が受け止めてた。

否、利用した。

迫る拳の勢いを殺さず、抗わず、ぐるりと反転させることでベクトルを変え、己が力に上乘せする。それと同時に、相手の前方へ向かう力も利用して、拳の内側へ潜る。

「おおっ！」

予想だにできなかった体勢から攻撃され、男は大きく仰け反るも、かわしきれなかった分の剣撃が男の頬に一本の筋をつくり、そこから数滴の血を流させた。

姉妹であるに関わらず、芽衣の剣は姉の剣ものとまるで異なる。

力を力で迎え討つことはせず、寧ろ相手の力、威力、速さを利用して刀に乗せる。言うならば灯笼流し。結衣の剣が「速さ」と「鋭さ」を追求したものならば、芽衣の剣は「堅さ」と「柔軟さ」を追求したものとと言えるだろう。

「陽」と「陰」

月下の型を、それぞれが独自に極めていた。

「……………」

男が、無言で自分の血を拭う。しばし無表情でそれを眺めた後、値踏みするかのような視線をふたりに向けた。

「なあ、お嬢ちゃんたちのそれ……もしかして『月下流』？」

思わぬ単語に、姉妹はピクリと反応した。

その反応を見逃さない。

男は、まるで心の内側を全て見透かしたかのように口の端を釣り上げた。

「なるほどねえ…… だとしたら色々と納得がいく。じゃあ加えて聞くけどさ、『剣聖』の孫ってのは、あんたらかい？」

「……………」

「やっぱりそうか。…… ははは、こりゃあいい！ 最初はただの身内びいきかと思ってたが…… うん、これは確かに、自慢したくなる気持ちもわかる。いやいや幸運だぜ。会えるといいなと思ってたが、まさか本当に会えるとは。コイツあ……面白え！」

結衣たちの表情を読み取った男は、無言のふたりを差し置いて、ひとりで納得していた。

面白くて仕方がないというように笑みを深くする。瞳の奥から狂気が見え隠れする。そこから、彼の危険な「性」^{さが}を垣間見た気がした。

嬉々としながら、男は倒れていたシンラ兵の持ち物から、ある物を剥ぎ取る。

片刃の剣 刀だ。

「さて、お嬢ちゃんよ…… せっかくだし、ちゃんと名乗ってやるぜ」

獣 まさに狼のように獯猛な瞳をしながら、刀を鞘から抜き放った。

鈍い光が走る。まるで、今からそれを扱う人間に対して、刀の方

が呼応しているかのようにだった。

「俺あ華嶋かしまよりと依人よりとってんだ。分かるやつ……とりわけ、お嬢ちゃん達は知ってんじゃねえ？」

「え……華嶋？」

「それって三大部門の……」

聞き覚えのある家名だった。

華嶋家。

かつて、月下家を含む三大部門のひとつと言われていた一門だ。

月下家と同様に剣術を操り、その力は両家互角。

……いや、互角だった。

もう過去の話だ。華嶋家は滅んだのだ。綺麗さっぱり歴史上から姿を消した。

誰が滅ぼしたわけでもない。滅亡は彼ら自身が自ら招いたことだ。確かに華嶋家は優れた武の一門だった。しかし、彼らには他と違う、人間として明らかかな欠陥があった。

その家の者は皆、呪われているかのように、全員が快樂主義で「戦闘狂」だったのだ。

剣鬼

彼らは例外なく戦いを求めた。

彼らは例外なく強者を欲した。

彼らは例外なく血に飢えた。

その「欠陥」のためか、最終的には無惨な一門同士の殺し合いに発展した。

今や滅んだ一門である華嶋家の人間が目の前にいる。それは結衣と芽衣の二人でなくとも、十二分に驚嘆し得る事実であった。

「いいねえ、久々に血が騒ぐ。んじゃ、さっそく始めようぜ」

刀が真っ直ぐ降り、切っ先が近くにいた芽衣の方を向く。

素手の状態でも決定打を与えるに至らなかった華嶋依人の力は、刀を手にしたことによって、いったいどれほど跳ね上がるのか。

実力の底が見えない。だからこそ、芽衣は恐怖を抱いた。ここは下手に動かず、時間を稼いでおくべきではないか。

その躊躇いは、空気を媒体として依人にも伝わった。

「……なんだ、気が乗らねえのかい？」

本気のがぶつかり合うことを求める依人にとって、相手のやる気がないようでは楽しくはない。

だから、条件を付けることにした。

「そんじゃ、お嬢ちゃんたちが俺に勝てたら、面白い情報を教えてやるよ」

「……情報？」

「そつだ。絶対に知りたがる情報をなあ」

いきなり目の前にぶら下げられた餌に、素直に飛びつくほど、結衣も芽衣も馬鹿ではなかった。欲しいものを提示された時ほど、人間が無防備になる時はない。そんな時ほど、慎重な対応が求められるのだ。

だが、提示されたものは、二人にとってあまりにも価値が大きいものだった。

「お嬢ちゃんたちの父親

つきもとませお
月下衛つきげについて、俺が知ってること

全部ってのはどうだい？」

「え……？」

「なっ……!!」

空気が凍る。

……今この男は何と言った？
……月下衛と、確かにそう言ったか？

「いいねえ、いい顔になった。それでこそやりがいがあるってものだ」

「……何故あなたが父のことを？」

結衣の声は驚愕のためか、幾分涸れている。

「ああ、衛とは昔から戦友でねえ、意見はよく食い違うが、青春っぽく言えば親友ライバルみたいなもんでさ。【神々の黄昏へラグナレク】の時も一緒に戦ってたんだぜ？」

九年前も？

何かが引つかかった。

「……まさか、あなたが父さんを」

コロシタノカ？

たったの数回剣筋を見ただけで『月下流』と特定できたのは、前に戦って殺したことがあるからでは？

問いかけの代わりに、殺意が膨れ上がる。

結衣は怒り狂う猛火のように。芽衣は腹底に沈む暗い湖畔に写った影のように。

相反する二つの怒りを受け、華嶋依人は本日一番の、しかし狂った笑みを浮かべた。

「く、くくくく。ゾクゾクしてきた……！」

待ちきれないと言うように……

ゴウッ！

依人は駆け出して、より身近にいた芽衣に、刀を大きく振るった。それは、見方によっては素人の剣。刃物を、ただ闇雲に振り回しているだけに見えた。

芽衣は、怒りの渦中においても冷静そのもの。剣筋を見切って、受け止める。

「うぐうっ！」

呻き声を出したのは芽衣だった。

依人の剣は、そのスピードと雑な扱いの割には、信じられない威力を持っていた。

芽衣の刀を、力で無理やり抑えつける。先ほど見事なカウンターを魅せた芽衣の技術を、「力」という一点のみで封じる。

芽衣は痺れる手を動かして、鏢迫り合いの状態から、刃の向きを僅かに横へずらした。

月下流陰式『螺旋^{らせん}』

力を受け流し、鏢迫り合いから一転、お互いにすれ違う。唯一異なるのは、芽衣はすれ違い様に身体を反転させたのに対し、依人の身体は芽衣に背を向けたままということだ。

絶好の好機。文字通り隙だらけ。

しかし、芽衣は刀を動かさなかった。否、動かせなかった。

依人の刀は、持ち主が背を向けていてなお、蛇のように芽衣の刀に貼り付いたままだった。

「だから言ってるだろ。衛とはライバルだったんだって。月下流については詳しいんだぜ？」

「ぐ……っ」

「芽衣ちゃん、伏せて！」

姉の声を聞き、芽衣は反射的に身をかがめた。

頭上を結衣の刀が通り過ぎる。その一刀は、芽衣に迫った狂剣を弾き、さらに攻め続けることによって、依人を一步、また一步と下からせた。

「おいおい、速過ぎだ。おっとりした顔して容赦ねえな」

「……父を殺したのはあなたですか？」

「くっくっく、いやいや、まず前提が間違ってるぜえ〜？」

さもおかしそうに。

「月下衛は生きてるぞ？」

47話 剣姫と剣鬼（後書き）

思いの外長くなりそうなので、二つに分けることにします。
最近シリアスパート続きでスタミナが切れそう……

感想お待ちしております。

48話 半人半魔（前書き）

今回は白の過去がメインになります。
零の身体秘密も少し明かされます。

頷きながら、白は変わり果てた親友へと視線を移した。

在り得ない姿をしている。もはや人ということすら躊躇われる。腕が背中から飛び出ていた。本来腕があるべき場所には赤黒い塊がくっついており、胸からは肥大化した心臓が皮膚を突き破って、ドクンドクンと脈打っていた。

わけも分からなのまま収容されて人体実験のモルモット実験体にされ、散々遺伝子を弄られた結果だ。その痛ましい姿に耐えられず、白は目を逸らした。

ここは動物を飼う檻だ。

存在するのは飼い主と実験動物だけ。自分たちはもちろん後者だ。最初の頃はひたすら考えていた。

……なぜ自分たちはこんな目に合っているのか。

……… なのために奴らはこんなことをしているのか。
真相を追求する過程で、「ゼロプロジェクト」という単語も耳にした。どうやら、ここで取れたデータを基にして、あるものを造り出すようにしているらしいかった。

だが、途中で思考を放棄してしまった。

気づいてしまったのだ。そんなことをしたも意味がないと。どうせ、死ぬ。

たくさんいた仲間が日に日に数を減らし、檻に残っているのはごく少数になっていった。生き残っている仲間も

人間の姿を保っているのは、もはや自分だけだった。

成功例

誇らしくない称号だと思った。

？白、お前だけでも生き残れ？

？お前は俺たちの希望だ。必ずここを脱出して、俺たちの仇を討つてくれ？

みな、そう言っただけで死んでいった。

残飯に近い微々たる食事を、誰もが白に分け与えた。

自分は今もうダメだから。

せめてお前だけでも。

そんな言葉を聞かされたとき、成功例という単語が重くのしかかった。

徐々にひとりぼっちになっていくことが怖かった。

徐々に蝕まれていく自分の身体が怖かった。

徐々に何も感じなくなっていく自分の心が怖かった。

……零号というのはどんな奴なんだろうか。

正真正銘のひとりぼっちの暗闇の中、毎日を過ごしているのだろうか。

怖くないのだろうか。

毎日のように、あの拷問に近い実験を受けているのだろうか。

願わくば、会ってみたい。

それから数年後、ある事件が起こり、白は脱出に成功した。

僅かに空気の流れが変わったと感じた次の瞬間、零は重く鋭い、神経を脅かす気配の存在を、はつきりと捉えていた。

重々しく大気を軋ませる圧力が上空に迫る。その気配は覚えがあるもので、零は自分の予感が的中したことを悟り、大して驚いていない自分自身を客観的に眺めていた。

灰色の特徴的な髪。どこことなく面倒くさそうな雰囲気醸し出した、掴み所がない態度。そしてなにより、その身に纏う大気の密度。間違いない。あいつだ。

確信すると同時に、声が空から降ってきた。

「よお」

白は、まるで久しぶりに再会した友人のように零を見た。

「待ってたぜ、この時を。俺だけじゃなく俺の仲間たちも、何年も何年もずーっと待ち望んでたんだ」

白は笑う。自分が辿ってきた過去に思いを馳せていたのか。その笑みは、今にも消え入りそうなほど弱々しいものだった。

零は無言のまま、しかし前回と明らかに異なる白の態度に、思わず警戒心を強めた。

なにを考えているのか分からない相手ほど怖い敵はいない。

白は紛れもない今回の首謀者の一人だ。それは、彼が今ここに、当たり前のように存在していることが証明している。つまり、それを阻害する零は邪魔者に他ならない。本来ならば会話などせず、自身に優位な空中にいる間に、真っ先に殺しにかかるのが筋のはずだ。だが、この態度は何なのか。殺すどころか、その瞳には敵意すら読み取れない。零は動揺を押し隠すように無言を保ち、その横で探るように白を観察していた瑠璃も、あまりの不可解さに眉を潜めた。

「そつだ。そついや自己紹介がまだだったな」

そんな零たちの対応など、まるで気にした様子もなく、白はひとりで喋り続ける。

「俺は白。本名はとっくに忘れちゃったが、他の連中からはそう呼ばれてた」

相変わらず親しそうにしながら、白はあろうことが高度を下げ、空中から地上へと降り立った。近すぎず遠すぎず、ちょうど声が届くくらいの距離。その地点から、地面の感触を確かめるように数歩歩くと、ポケットに突っ込んでいた両手を肩の高さくらいまで上げ、パンパンと二回鳴らした。

何の意味のなさそうな動作。しかし、その動作の直後、凄まじく濃密な気配を宿した存在が増えたのを感じた。その源はどこか。探すより前に、向こうから姿を現した。

白の足元に、小さな穴が空く。そこから、ひとりの女が顔を出した。

「なにいろ？　なんか用？」

「そんで、コイツは」

「んおお！　もしかしてアレ？　あの黒髪の子？」

「……まあ、『京』^{キョウ}っていう俺の仲間なんだが」

おら、さっさと上がれ、と乱暴に言いながら、京と呼ばれた女を地面から引つ張り上げる。不満を漏らしながら渋々と地上に上がった京は、零を見てにこやかに手を振った後、

「…………チツ」

横にいた瑠璃を見て、今度は盛大に舌打ちをした。ギロリと睨みそれと同時に殺気が膨れ上がる。瑠璃は、身に覚えのない殺意に一瞬たじろいだだが、やましいことは何一つ記憶になかったため、逆に睨み返した。

「おい、止める京。いい加減本題に入るぞ」

それを見かねた白が、京を制しながら一步前が出る。

「零号、いや、ここでは天戸零だったか？ 俺たちと一緒に来い。俺たちはお前を歓迎するぜ」

その瞬間、轟音を撒き散らしながら放たれる暴風によって、零は一切の抵抗を許さない空中へと放り出された。その直後……

闇魔法：無限アビスの隔絶世界

「っ！」

暗闇が、全てを包み込んだ。

「零っ！」

「おっと、まあ待てや女神様イリス。零号とはもっとと落ち着いた所で話したいから、ちょっと退席してもらっただけだ」

「……あんた達、いったい何者なの？」

低い声で尋ねられ、白は肩をすくめた。

「ま、あわれな実験動物モルモットといったところかね？」

「実験動物？」

「そつだ。京、じゃ、こっちは頼んだぜ？ 俺は零号のところへ行ってくるから」

「ん、分かった」

京はコクリと頷くと、再び瑠璃に視線を移した。

「……零をどうする気？」

「あれえ？ 聞いてなかったの？ イリス様は随分と耳が遠いみたいだねえ。仲間にするんだよ」

敵意を剥き出しにしながら、京と呼ばれた女は瑠璃の前に立ちふさがった。

「零がそれに応じるとでも？」

「ああ、思うよ」

自信満々な答えが返ってきたことに、瑠璃は逆に動揺した。なぜそう言い切れるのか。

「そもそも、お前こそ、あたしたちの何を知ってんのさ？」

「え……」

「なんにも知らねーだろお？ いいか国の犬、よく聞けよ」

京の瞳に、影が落ちた。憎しみと怒りと、悲しみが混じった色だ。

「あたしたちは魔獣の細胞を移植された、人でもなく魔獣でもない半人半魔の存在だ。だから、通常では在りえない量の魔力を持っているし、普通の人間と比べて、圧倒的に睡眠時間が短い。魔獣って生き物は、もともと眠らないからさあ」

そのとき、瑠璃は自分がどんな顔をしているのか分からなかった。向けた感情は憐れみか、それとも怒りか。

ただ、受けた衝撃が大きすぎて、何も考えられなかった。

「知ってる？ 人間ってのは、眠ってる間に記憶の整理をするんだってさ。覚えるべきこと記憶として貯蔵し、忘れるべきことを忘れ

る。でもねえ…… あたしたちはそれが許されなんだよね。分かる？ どんどん溜まっていくんだよ、憎悪が、恐怖が。時とともに薄れるどころか、どんどん濃厚になっていく。あたしたちはこの地獄から抜け出せない。どう？ 零号はやたらと記憶力が良かったりしない？」

言葉の洪水が、音となって頭に流れってくる。周りの音が小さくなり、時間が止まったような錯覚を覚えた。そこで、ひとつ頭に引つかかることがあった。

「……じゃあ、明ちゃんは？」

そう、彼女も同じなはずだ。零と同じく、人の手で造られた存在ならば、彼女も半人半魔の存在なのか？
だが、対する京の答えは意外なものだった。

「いや、あいつはあたしたちとは違う。寧ろ……敵だ」

一面に荒野が広がっていた。
空の色は灰色。その灰色を映したかのような色の大地が、地平線の彼方まで広がっていた。

誰もいない。
何も無い。
いるのは自分だけ。

草一本生えていない涸れた大地に、明はひとりで横たわった。

涙が流れた。

ひとりが、こんなにも寒いということをおぼれていた。心の奥まで、

寒さが浸食してくる。

ワタシハダレ？

心の声に耳を閉ざす。

両手で肩を抱きながら、怯えるようにうずくまった。

「こんにちはアカリ」

声がした。

突然の生ある音に驚き、明は顔を上げた。

「ここはあなたの夢の中。正確に言くと精神世界かな？ まあ、どつちにしろ、あいつらが来ることはないから安心して」

思い出した。自分は、あの三つ子に気を失わされて……

そこで声の主の姿が目に入り、明は目を丸くした。

背丈、顔立ち、髪の色。どれをとってきても、自分と瓜二つだった。いや、瓜二つどころではない。まるで同じだった。

「ふふ。驚いてる？ 会うのは初めてだよね」

その少女は、愛らしく微笑んだ。

「ここは8000年前の大陸だよ。ここから全てが始まったの。生命が誕生して、発達して、文明を築いて…… その全ての原点となる時間軸」

この子は何を言っている？

さっき、夢だと言ったではないか。

「そうだよ。ここはあなたの夢の中。でも、確かに存在した場所であり、時間であり、次元なんだよ」

理解できない。

ここから出たい。

「それはもう少し先かな？ あの子…… 天戸零だっけ？ 彼が辿りついたら、出られるかもね」

天戸零……

零が？

何の関係があるの？

「それは私が言っても理解できないだろうから…… 時が来るまで待っててね」

少女は、ただ笑っていた。

48話 半人半魔（後書き）

最近忙しくて時間がとれない……
どうか見捨てないでやって下さい

感想お待ちしております

49話 交わらぬ二つの道(前書き)

お待たせしました。

書き上がったので投稿します。

49話 交わらぬ二つの道

身が溶けそうな暗闇が、妙に馴れ馴れしく感じた。状況を整理するため、零は周りを見渡した。

闇だ。

ただただ、闇だけが広がっている。他には何も無い。

……闇魔法、無限の隔絶世界。

外界からの干渉を全く受けない、別次元の空間を人為的に創り出す闇属性の術式。消費魔力量が多いことが欠点だが、奇襲、暗殺、防衛とその応用性は広く、九年前の大戦争では最も恐れられていた術式でもあった。

「こんな大規模な術式…… 展開させた術者は他に存在してるな」

暗闇に向かって問いかけたのとほぼ同時に、

「まーな。俺は風魔法しか使えねーし」

ぼうつと、浮かび上がるように白が姿を現した。光というものを一切排除した空間で、零と白の二人の姿だけが、場違いなようにくつきりと輪郭を結んでいる。

二人は再び、正面から顔を見合わせた。

「……『牙』の被実験体だったのか」

「お、その反応を見るに、ある程度は薄々感づいてたみたいだな」
「その法外な威力の風魔法を最初に見た時から、おかしいとは思っていた。人間に、あんな芸当はできない。でも、これでようやく説明がついた」

「さすが、理解が早くて助かるぜ。俺は七年前まで『牙』の第一研

究所で行われていた『零プロジェクト』の被検体No. 079だ」

零の対応に、満足そうに頷いた白を見て、過去の記憶のどん底から、無数の手が伸びてきたように錯覚した。

……やっぱりか。

周囲に充満する暗闇が、零の心の内側に、徐々に入り込んでくる。

零プロジェクト

それは、英雄と称えられた組織である「牙」が犯した、唯一にして最大の罪だった。

当時の「牙」は、表向きは大衆の英雄して、決して弱気な態度を見せなかった。常に凛々しく、常にたくましく、そして常に正しく在ろうとした。

だが、どんなに力をつけようと所詮はただのテロ組織。国家レベルにまで軍事力と政治力を拡大させようと、遙か昔から存在し、歴史と共にその地位を築きあげてきた四大国に比べれば、その力量差は一目瞭然だった。

日に日に高まる民衆からの支持。それに反し、日に日に不足していく資金力と軍事力。さまざまな方面からのプレッシャーに耐え兼ね……

ついに、「牙」の指導者は道を踏み外した。

てっとり早く「力」を求めたのだ。

そこで発案されたのが「零プロジェクト」だった。人工的に最強の兵器を創り出すという、人間の理に反した悪魔の所業。その非道さに、英雄と謳われていた彼らが気付かないはずはない。だが、彼らは信じていたのだ。

崇高な目的のためならば、手段は正当化される。

大量の資金を投入し、多くの優れた科学者を雇った。さまざまに遺伝子サンプルを闇ルートから購入し、四六時中研究に打ち込ませた。

……圧倒的な力さえ手に入れば、自分たちの手で世の中を変えていける。

その思いだけが、彼らを突き動かしていた。

「ま、こうして、順調に研究は進み、お前は創られていったワケだが…… やがて、ある問題にぶち当たっちゃった」
「予想はつく」

「そうだ。もしも薬剤投与や遺伝子組み換えに失敗したら…… 理論上は成功間違いなしだったとしても、もしも失敗して取り返しがつかなくなったら…… 長年積み重ねてきた大事な『作品』が一瞬でパーになっちゃう。だが、危険なドーピングは必要不可欠だ。『完成品』はあくまで『最強』でなければならぬ。でなければ、危険こそあれ、価値は全くない。なら…… どうする？」

言葉を切ると、白は自嘲気味な笑みを浮かべ、忌々しそうに自分の両手を見た。

「別に…… 壊れちゃっても構わねー人間で実験しておいて、予め効果を確かめておくのが…… 賢いやり方だろう？」

「……それが」

「ああ。壊れちゃっても構わねー人間が、最後まで壊れなかった。何の罰か、結局生き延びちゃった。そのなれの果て。それが今の『牙』のメンバーだ」

指が、零に突き立てられる。

「そして、このプロジェクトによって創り出された少年。それが『零号』、お前だ。これが俺の知っているお前の出生の秘密だよ」

「そんな……」

「ようやく分かったかあ？ あたし達がどんな存在で、あたし達にとって、あの子がどんな価値を持っているかが」

話を聞き終えた瑠璃は、驚愕と怒りに顔を強張らせた。

狂っている。何もかもが狂っている。人の命を何だと思っているのか。

「まあ、そういうワケで、零号ちゃんは残り少ない時間を、同胞であるあたし達と一緒に過ごすのが最高の幸せだろあ？」

「え……？」

何か、とてつもなく重要な言葉が耳に入り込んだ気がして、瑠璃は奥深くに沈んだ思考を無理やり引き上げた。

「ん？ なに、その反応。もしかして知らない？」

「……どういふこと？」

「ありゃあ、さすがに知ってるものだと思ってたけど…… そっか、周囲には内緒にしているのか。なんにも話してないんだなあ」

「どづいづいことよっ！」

「どづいづいことも何も、世の理だろあ？」

動揺のため、思わず荒げられた瑠璃の声に、京はしかし、全く動

じていなかった。当然のことを語るかのように、変わらぬ調子で話し出す。

「この世は等価交換なんだよ。『コインの表と裏の法則』って言葉くらい知ってるだろ？ 何かを得るには何かを犠牲にしなきゃならない。結果には必ず原因が付きまとう。片方がなければ、もう片方は存在し得ない」

……つまり。

「零号が生まれながらにして持っている膨大な力…… それはいつたい、何を犠牲にして得られたものなんだろうねえ……」

「もう一度、改めて誘うぜ」

白が、零に手を差し伸べた。乾いた冷たい手ではない。そこには、確かな人の温もりがあった。

「零号、俺たちと一緒に来い。俺たちはお前を歓迎する。お前を見た時の京の反応を見ただろう？ みんな探していたんだ。随分と遅くなっちまったが、これから俺たちと共に生きよう」

差し出された手を、見つめた。

ずっと求めていた場所が、そこにはある気がした。

同じ境遇を経て、同じ苦しみを経てきた者の集まり。

全く関係のない争いに巻き込まれ、見ず知らずの人間に人生を狂わされた者の集まり。

その手を……

零は拒絶した。

「なんでだ」

「……………」

「なんで耐えられるんだ」

白が聞いたがったのは、拒絶した理由ではなく、拒絶できる理由
だった。

問われて、自身に理由を投げかける。

何故？

「……前に、誓ったことがある」

「……………何を？」

「全てを背負うこと」

自分が奪った全ての人間の命を。

死んでいった人間が抱いた無念を。

残された人間が負った絶望を。

気が遠くなりそうな、一生かけても償えるはずがない罪を、途中
で投げ出さず、全て背負うことを過去に誓った。

何故誓ったのか。

それは、知ってしまったから。

月下家で数年間過ごし、

たった一人の人間の死が、家庭の幸せを崩壊させてしまうことを

知った。

たった一人の人間の死が、その数倍の人間をどん底へ叩き落としてしまうことを知った。

たった一人の人間の死が、癒えない心の傷を作ることを知った。父親の温もりを求め、涙を流す少女ふたりと共に成長することで、零は自分の犯した罪の深さに気付いた。

いったい何人を絶望の淵に叩き落としてきたのか、と。もはや数えることなど馬鹿らしい。想像することすら叶わない。

自分の手には、すでに血の匂いがこびりついていた。

「お前らがやっていることは単なる傷の舐め合いだ。自身の境遇を嘆き、そこから動こうとしない臆病者の集まりだ。俺がお前たちと共に歩むことはない。俺は逃げずに生きて、全て背負う」

「おいおい、背負うって……よく考えろよ。お前の境遇を聞いて、誰がお前の罪を責めるんだ？」

誰が責めるのか。

おそらく誰も責めないだろう。零を知る人間の中に、そんな者は思いつかない。

だが。

「俺が責める」

白の目を真正面から見据え、堂々と言い放った。

どんな理由があつてにせよ、結局のところは「殺した側」と「殺された側」の二つに区別される。殺された人間にとっては、「殺された」という事実だけが全てだ。殺した側の事情など関係ない。

命は尊いのだ。

「……………なるほどね、お前の考えは理解したぜ。どうやら……………お前は自分自身にまるで価値を見出してないみてえだ」

しばらくの間を開けて、白はどこか残念そうな声を漏らした。

「確かに、俺たちがやってることは傷の舐め合いかもしれない。お前の言ってることは正しいかもしれない。……………だがな、互いの傷を舐め合って何が悪い？ 『群れ』の中で、痛みを緩和することに何の罪がある？ 生き物なんて、誰しも『群れ』を作って、その中で傷を舐め合って生きるもんだ。俺は、俺たちがやってることを、間違いだとは思わねえ」

その瞬間、白が纏っていた空気が一変した。

重々しく、濃密な大気を周囲に渦巻かせながら、魔力の密度を上げていく。

「こつちも引けない一線があつてね。零号、お前が俺たちと一緒に来ないなら、力づくでも連れて行かせてもらう」

白の目が赤く光る。皮膚が白く変色し、羽毛のような歪な物体が、その身を包んでいく。

背中が形を変え、ミシツと音をたてながら、骨が内側から皮膚と肉を破る。そのまま左右に広がり、バサツと。

大きな白い翼になった。

「クウアアアアアアアアアア！」

渡風鴉^{レイヴン}

風魔法を操り、音波系魔法や圧力系魔法を使いこなすAランク相当の魔獣だ。本来は黒いはずだが、白が姿を変えたこのレイヴンは、真っ白い色を保ったままだった。

「それがお前のもう一つの姿か……」

異常なまでの風魔法の威力。無尽蔵に繰り出される魔力。その源が、移植された渡風鴉^{レイヴン}の遺伝子にあったとすれば、頷ける話だった。人の身であればどの威力を誇った白の風魔法は、渡風鴉^{レイヴン}の姿になった今、いったいどれだけ跳ね上がるのか。

「……………っ！」

反射的に、零は全身のバネを左に傾けた。直後、零が立っていた場所を、圧力の塊が通り抜け、零の脇腹を浅く抉った。

まるで大砲だ。当たったら「痛い」では済まない。全身の骨が碎かれることを覚悟しなければならぬだろう。

もはや言葉は無用。零は白たちと共に歩まない道を選択した。ならば、迷う必要はない。

「……………力づくで連れて行くって？」

ゆらりと、歩を進める。

「できるものならやってみろ」

氷点下の殺意が、渡風鴉^{レイヴン}へと姿を変えた白に注がれた。

49話 交わらぬ二つの道（後書き）

正しいって、人の数だけ存在すると思います。

読者の皆さんは、零と白のどちらに共感を覚えるでしょうか？

感想お待ちしております。

50話 剣聖 前編（前書き）

お久しぶりです。約一か月ぶりの投稿になります。

一つにまとめても良かったのですが、とても長いので前編と後編に分けます。

50話 剣聖 前編

一撃一撃を打ち合う度に、相手の刀を握る力が弱まっていることを、華嶋依人は確かに感じていた。

依人の剣撃は、そのひとつひとつが鉛のように重く、同時に蛇のようなしつこさで相手の剣に絡みつく。ガードの上から着実に体力を削るこの剣は、従来の華嶋家の剣技に、独自のアレンジを加えたものだ。

戦闘狂の華嶋家の人間の中で、依人は唯一、戦闘中に冷静な思考ができる人間。「戦いたい」という内なる欲望に抗い、理性的に物事を判断できる人間だった。今や滅んだ一族の中で、彼だけが生き残ったのはそのためといってもいい。

もしこの場に零がいたならば、戦闘中に思考をフル回転させるといふ点で、自分と似通ったところがあると感じたかもしれない。

「お？ どうした、もう終わりかい」

肩で呼吸をする結衣と芽衣を挑発する。

明らかかな疲れが見えているが、瞳の力に一切の衰えはなく、まだまだやり合えそうだと判断した。依人の内なる戦闘衝動が歪んだ笑みを形作る。なんとも久しい感情だ。

とは言っても、先程に月下衛つきぎとまもるの名を出したためか、二人には精神の乱れが見受けられた。精神を研ぎ澄ますことが絶対条件である月下流にとって、これは致命的となる。今でこそ気力で補っているものの、やがて大きなズレとなり、自らの刃で身を切ることとなるだろう。御しきれない力は使用者自身を傷つけるのだ。

(せいぜい、あと一時間ってとこかね)

そこまでいったら身を引こう。若い芽を摘むのは趣味ではない。それに、楽しみは取っておくに越したことはないのだ。

(さあて、帰ったらたっぷり衛ませのに自慢してやろう)

そんなことを考えながら、剣姫と呼ぶに相応しい親友ちかの愛娘を見据えた。

月下衛は生きてるぞ？

結衣の中では、依人が語った言葉が未だに呪詛のように、頭の中で渦巻いていた。

疑問は多い。

生きているなら、なぜ帰って来ないのか。なぜ何の連絡もなく、今まで死んだと思わせていたのか。そして、目の前の男となぜ親しいのか。

結衣の記憶にある月下衛という人物は、とても聡明な人物だった。一人の武人として、そして一人の父親としての確固とした考えを持ち、信念に反することは決して行わなかった。それでいて、当時幼かった自分たちの会話に混じるなど、子供っぽい一面も持っていた。近所からも、「美人夫婦」と評判だったことも覚えている。

そんな父が

「姉さん！」

「っ！」

芽衣の叫び声で、結衣の思考は現実に引き戻された。

間合いを詰めた依人が、見えない位置から刀を繰り出す。その剛剣の威力は、さんざん打ち合ったため、身に染みて分かっていた。

結衣は刀を逆手に持ち替える。

月下流陽式『蜘蛛落とし』

逆手に持った刀で、上段から振り下ろされる相手の剣の腹を叩き、軌道を逸らしながら切り上げ、その後即座に切り落とすカウンター技。どこから攻撃されても対応できるのが特徴であり、スピードを生かして戦う結衣とは相性がいい技だった。

刀がぶつかり合い、一瞬火花が散る。その後、絶妙なタイミングで漸線をずらし、依人の刀を真横から叩く。依人の剣の軌道が逸れたことを確認してから、刀の切っ先を返し、依人を両断しようとする。当たれば間違いなく相手の命を奪うであろう刀技。だが、この時の結衣に、そんなことを考える余裕はなかった。

相手が強過ぎたのだ。

「いまいちキレが悪いぜえ？」

依人は身を捻ると、軌道を逸らされた自分の刀をあっさりと捨て、結衣の腹に鋭い蹴りを叩き入れた。

「うっ……」

不意の一撃に、結衣がよろめく。瞬時に後ろへ飛び、ダメージを軽減したのはさすがというべきか。だが、後ろへ押し込むような依人の蹴りは、それでも背骨をきしませる程の威力を持っていた。

容赦のない追撃が迫る。それを止めたのは芽衣だ。

「くっ……！ まさか……剣士が刀を捨てるとは……思いませんでしたよ」

「くくく、月下流と違って、華嶋流は殺すことを目的とした剣だからなあ」

「その割に、随分と冷静に戦うんですね」

「当たり前合えだ。そうした方が生き残れるだろう？　この世は生き残ってナンボだからな。現に、今のこの会話すら……」

依人が力を込める。

「お前さんの呼吸をずらすための時間稼ぎだしなあ！」

そのまま、刀をねじったかと思うと、芽衣の刀に鈍い音が響いた。その音は全体に広がり、やがてひび割れという形で現れる。そして、

「……え？」

成す術もなく、芽衣の刀は砕け散った。

『蝕壊』という技がある。

一番最初に編み出したのは槍の名手であり、相手の突きを槍の先端で受け止め、武器もろとも破壊したという伝説が始まりだった。

武器の、最も力が集中する部分に、それ以上の負荷をかけて受け止めると、その武器の耐久値を越え、壊れるという原理だ。故に、相手が武器の性能を引き出す達人であればあるほど、成功した時に武器を壊しやすいという特徴を持っている。

これを刀の技として確立させたのが華嶋家だった。

一撃の威力として「線」の攻撃である刀は、「点」の攻撃である槍に圧倒的に劣るため、習得には独特の訓練が求められた。自分の刀の刃が欠けないように『蝕壊』を使うということは、一般の武家とは修行のベクトルがまるで異なる。

結果、『蝕壊』は華嶋家の主軸の技となった。月下家の象徴が神

速の「抜刀術」ならば、華嶋家の象徴は「蝕壊」だと言えるだろう。

刀を砕かれた芽衣は、何が起こったのか理解できなかったようだ。半ば呆然と、眼前に迫る依人の刃を見つめている。実践経験の不足を完全に露呈する形となった。

そして、そんな芽衣に追撃の一撃を加えようというときのことだった。

(……………なんだ?)

依人は自分の背に、見えない氷の柱が迫ったような錯覚を味わって、思わず追撃の手を止めた。

刀を砕かれ、無防備となった芽衣を前にして、止めを刺さないという愚行。数々の修羅場を経験した依人をしてこの愚行に走らせた人物は、遠くからでも充分伝わる圧倒的な存在感を放ちながら、いつもと変わらぬ動作でゆっくりと階段を下りてきた。

いつもと変わらぬ手本のような美しい姿勢。七十歳とは思えないほど軽快な足取り。

「おじい……………ちゃん?」

「師匠……………」

月下家、第十六代目当主【雷切】。

「……………剣聖、月下重夫か」

依人の呟きは畏れの現れか。それとも新たな強敵の出現に対する歡喜か。どちらにせよ、依人は指一本動かさず、重夫のあまりに静

かな動作を見つめていた。

重夫の周りだけ隔絶されたかのように、時間がゆるやかに進んでいるかのようだった。

「ふう、やれやれ。やっと大量の兵隊さん方を片付け終わって、孫と合流しようとしてやって来てみれば……なんだなんだ、随分と俺の孫と遊んでくれたらしいな。もしこの場に鏡花がいたら、お前さん殺されてるぞ？」

依人は、重夫と目が合った瞬間、その色のない殺気に戸惑った。燃え上がるような、真つ赤な殺意とは違う。かと言って、氷のような青々とした殺気とも違う。これまで生きてきた中で、体験したことのない感情をぶつけられ、依人は虚空を掴むような感情を味わった。

だが、それも即座に悦びに塗り替えられる。

あの【雷切】が目の前にいる。

その事実が徐々に実感として染み込んでいくにつれ、理性で抑えきれないほどの戦闘衝動が胸の内に渦巻くのを感じた。

「はは…… はははははははは！ 今日はいいい日だ。楽しい。こんな楽しい日は久しぶりだ！」

刀の切っ先を、無造作に重夫へと向ける。その独特の構えを見て、重夫は「ほう」と小さく息を漏らした。

「華嶋の子鬼か。なるほど、俺の孫が手も足も出ないわけだ」

「はは、安心しな。大した怪我はさせてねえからよお……」

「そりゃ良かった。お前さんを殺さずに済む。さすがに孫の文化祭で、天然記念物を殺したくはないからな」

心臓がバクバクと音を立てて鳴る。無意識の内に震えが走る。それは「武者震い」に似ていた。依人は、以前月下衛が言っていたことを自然と思い出していた。

「俺の父親は…… そうだな、あれは「化物」だ。今でも勝てる気がしない？」

【神々の黄昏《ラグナレク》】にて「鬼神」と呼ばれ、敵から恐れられていた衛をして、「化物」と言わせしめる人物。その実力はいったいどれほどのものなのか。

「おいおい剣聖よお…… あんた得物はどうした」

「んん、さすがにお前さん相手にや傘カサじゃ荷カネが重すぎるかね」

「ねえならコイツを使えや」

依人は脇に倒れているシンラ兵の身体を足で蹴飛ばすと、そこから転げ落ちたもう一本の刀を掴み、重夫へ向かって放り投げた。普段の依人ならば、他人を物のように扱うことはしない。ただ、この時の依人の視覚には、自分と重夫以外 先ほどまで戦っていた結衣たちすら入っていないかった。

「正気ではなかったのだ。」

「……………」

放り投げられた刀が床面と衝突し、やや大きな音をたてる。重夫はそれを無言で手に取り、一回だけ刀身を抜いて刃を確かめると、再び鞘に納めた。

「さあさあ！ とつとつと始め……………」

その時、すでに重夫は依人の視界にいなかった。

「……は？」

フワリと風が通り過ぎ、依人の髪を微かに揺らす。その風が、重夫が通り過ぎた証拠だったと気付くのは、しばらく後のことだった。

「おっと悪い。微妙にフライングだったか。まあ浅いから許せ」

後方から声が聞こえる。

呆けた顔のまま硬直する依人の左腕に、うつすらと赤いラインが走る。それは徐々に鮮明になると、やがてパツクリ開いた。

鮮血が舞った。

50話 剣聖 前編（後書き）

後編は大体書き終わってるので、それなりに早く投稿できると
思います。

感想お待ちしております。

51話 剣聖 後編(前書き)

皆様、メリークリスマスです！

本編の内容はまったくクリスマスっぽくないですが、本日はクリスマススイヴですね。

12/24……

「約分して1/2にしろ」と言っている方を見かけた時は、コーヒー返せと思いました(笑)

とりあえず後編です。では、また後書きで〜

51話 剣聖 後編

自分の腕が斬られたと気付くには、多少の時間が必要だった。

「うおおおおっ！」

悲鳴ではない。傷は重夫の言う通り浅いもので、戦闘にはそこまでの支障もない程度のものだ。だからこの声は、どちらかというところ不可解な出来事に対する驚きと言った方が正しかった。

速いなどという次元ではない。重夫は確かに、予備動作なしで距離を詰めた。それは依人の動体視力をもってしても視認不可能な速さ。

（あり得ねえ、速すぎる……！ これは何かもつと別の……）

その時、重夫の足の裏と廊下の床面に青白い閃光が走ったのを、依人は確かに見た。

リニアアクセル
磁場加速。

床を電流を流して一定の向きに磁場を作り、自分の足にはそれと逆の電流を流すことで、お互いに反発し合う力を生み出し、加速する移動術。重夫が裸足を好む理由はこれにあつた。何か履いていても、あまりの速度のために摩擦で溶けてしまうのだ。普通に見たら、床面を滑っているようにしか見えない。

雷を切ったという伝説が嘘ではないことを証明する、いわば【雷切】の業。

（オイオイ冗談じゃねえ……！）

防戦一方。圧倒的。

依人の身体には、徐々に刀傷が増えていった。あちこちから血が滲み、浅く裂かれた服が内側から赤く染まっていく。

結衣と芽衣の相手を同時にこなし、なお且つ圧倒していた依人を、重夫はまるで赤子のように扱っていた。その狂剣も、重夫にただの一発も掠ることなく空を切る。そんな中でも、急所をしつかり守っているのはさすがといえたが、時間の問題であることは一目瞭然だった。

「チク……シヨウがああああああああ！」

それは気合いか。もしくはプライドか。

依人は自身の身体が切られた瞬間、その切られた場所を目印に、刀を振りぬいた。重夫が戦い始めてから、初めて刀と刀がぶつかり合って金属音が鳴り響く。依人は、重夫が次の攻撃に移せないようにするために、刀をそのまま絡み付かせる。

だが、直後に無駄な足掻きであったと、依人自身思い知らされた。重夫の殺気には色がない。寄せては引き、引いては寄せる。まるで読めない剣筋。雲のように掴み所がない殺気。留まることを知らない流れは、依人の剣をいとも容易く掻い潜った。それでも、しつこく絡もうとする依人の刀を、先端を数ミリ動かして受け流し、依人の持ち味を發揮させない。

バランスを崩した依人の身体に、流水のような刀筋が奔る。

「がああああああああああああああ！」

悲鳴が響く。依人の脇腹から流れる血は衣服を染め、床に点々と赤い斑点を作った。依人が刀を床に落とす。

決定打だった。

「……すごい」
「……うん」

結衣の呟きに、芽衣も同意した。

あまりにも大きすぎる力の差を感じた。あまりにも遠い祖父の背中が目に焼き付いた。それは無力な自身へのやるせなさでもあった。客観的に考えれば、年齢や実戦経験の差もあるため、結衣たちと重夫や依人を比べようと言う方が無理な話である。だが、やがて重夫のようになれるかと問われたときに、頷く自信は二人にはなかった。

「ハア……ハア……」

「これまでだな」

「ハハツ、ちよつくら【雷切】っていう人間を舐めてたみてえだねえ。まさかここまで手も足も出ないとは思わなかったぜ」

傷を手で抑え、だがどこか満足そうな表情を重夫に向けた。

「ひとつ訊きてえことがある」

「なんだ」

「あんたは、あっちの嬢ちゃんたちにも、剣術を教えてんだろ？」

「そうだが、それがどうした」

「どうしてあんた……孫に本当の剣術を教えねえんだ？」

重夫の呼吸が、一瞬だけピタリと停止した。依人はその反応を見逃さない。

「あのお嬢ちゃんたち…… 戦い方は教わってるが、殺し方は知らねえように感じた。戦い方に滲み出てる。あれじゃあ相手には舐められるだろ。すぐにでも指導した方がいいと思うがなあ……」

依人は大戦争経験者ラゲナレクの一人だ。ゆえに、人を殺せる人間が、戦場でどれほどの強者となり得るのかを、よく理解していた。人を殺せない武人など、使い物にならないという事実が身に染みて分かっていた。

殺される前に殺さなければ生き残れない。

戦における鉄則。

戦場にいた人間は、遅かれ早かれ理解することになったのだ。依人自身、泣きながら引き金を引く戦場兵を飽きるほど見てきた。

彼らには取り返しのつかない強さがある。道を引き返さない……いや、引き返せないという強い信念があった。

「……………」

「まさか教えないつもりじゃねえだろうなあ？」

「そのまさかだ」

「はあ！？ オイオイ本気で言ってるのかよ！」

「本気だ」

「くつだらねえ！！ 見損なつたぜ『剣聖』ともあるう者がなあ！今さら良心に芽生えたワケじゃねえだろうが。あんた自身、過去に何人も斬ってきたはずだぜ。刀が人を殺す道具であることくらい、身に染みて分かっているはずだよなあ！？」

依人が荒々しく吐き捨てる言葉を聞きながら、重夫は過去の自分を回想していた。

まるで昔の自分と同じ考えをしている。それもついこの前までの

自分とだ。何十年もそう考えていて、疑うことすらせず、真実だと思っていた月下家の教え。重夫もかつて、自分の父親から教わった戦場での心構え。

そして、そのままを息子に　月下衛に教えた。罪悪感も何もなく、当然だというように月下の教えを伝えた。

だが、それは間違いだったのだ。

「俺は、孫に人の殺め方は伝えない」

確固とした意思があった。同じ過ちは繰り返してはならない。人を殺せる人間は確かに強い。だが、それは哀しい強さなのだ。本来、人が　少なくとも十代の少女が背負うべきものではない。

「ハッ！　あのお嬢さんたちも不幸だなあ！　人を殺す勇気もない人間が戦場でいったい何ができる！」

「お前は勘違いをしている。真に強いのは殺す勇気ではない。『殺さない勇気』と『護れる力』だ。血で血を洗う時代はもう終わった。お前の考えは古びて腐敗した過去の産物なんだよ」

命は尊い。

かつて零に、そして自分自身に幾度となく言い聞かせた言葉を、もう一度噛み締める。

「あの子らに血は似合わない。汚れソレ役は俺の仕事だ。分かったら失せろ」

瞳に、強靱な意志が宿った。重夫を馬鹿にして見下していた依人の表情が、凍りついた。

圧倒的な気迫が、依人の呼吸すら妨げる。重々しさを帯びた空気が、依人を押し潰そうと迫ってくる。

冷や汗が滲むのが分かった。

……これはやばい。

初めて本能が警告を鳴らす。悦びを感じる暇もない恐怖。だが、依人は逆に「これはチャンスじゃねえか？」とも考えていた。

普通にやり合ったら勝ちは100パーセントない。それよりも、むしろ一発の打ち合いの方が、勝てる見込みがある。

重夫が放つのは、おそらくは月下流抜刀術。驚異のスピードと爆発的な威力を誇る神速の居合斬り。だが、攻撃後に大きな隙があることを、依人は知っていた。すなわち、かわすか受け止めれば『蝕』を持つ依人が圧倒的に有利になる。

これまでの経緯からして、かわすことはまず不可能に近い。ということは、刀で受け止めるしかない。

……どこに放ってくる？

依人は思考を回転させ、かつて月下衛の抜刀術に対抗するために編み出した、対抜刀術用の構えをとった。その構えをとった理由は二つあった。

重夫が、ピクリと眉を動かす。

「……お前には色々と言わなければならない」

依人の構えを見た重夫は、その意図を読み取った。それは、かつて月下の抜刀術を見たことがある人間だと強調する構え。つまり、衛の知り合いであることを強調する構えだった。

それに、重夫が気づかないはずはない。これは依人の戦略だった。これによつて、重夫は依人の命を奪うことはしないだろう。殺してしまつたら「月下衛」の情報が聞けない。よつて、重夫が抜刀術を放つ場所は限られることになる。

最も可能性がある箇所は、腕か足だった。殺さずに再起不能にす

るには適した箇所だ。依人は、そこからさらに絞り込む。

左腕の可能性は低い。斬り捨てても、まだまだ再起不能とは言えないからだ。また抜刀術の特製上、走り抜けながら斬る必要があるため、狙いに適さない右足も候補から外した。

あとは右腕か左足。ここで、滅びた種族である「華嶋家」の剣術を、重夫が完全に潰すとは考えにくかった。仮にも長い歴史がある三大武家の一つだ。重夫があっさり、依人の右腕を切り落とす可能性は低い。

(ならば、剣聖は俺の左足を狙うだろう)

狙いを定めた依人は、重夫が案の定、抜刀術の構えをとったことに、にやりと口元を曲げた。

「華嶋の子鬼よ」

「ああ？　なんだ」

「お前は俺をうまく誘導したつもりでいるだろうがそれは間違いだ。俺がお前の誘いに乗ってやったんだよ。甘く見るな」

再び、依人の背筋を冷たいものが撫でた。

「俺が過去にこの技を使って、止められた人間は一人しかいない」

バチツと、青白い閃光が重夫を包んだ。身体中を駆け巡る電流は一定の流れを形作り、やがて一点へ集約される。それは鞘に納められている重夫の刀だ。

爆発的なエネルギーを内包した刀の振動は空気を介し、場にいる全員に伝わった。

(空気に飲まれたら終わりだ。集中しねえと……)

依人は滲む汗を無理やり払い、重夫が動く瞬間だけに意識を集中させる。そうまでしても、重夫の一撃を見切れる自信はなかった。次の瞬間には自分の体の一部がなくなっているかもしれない。しかし、そんな恐怖にすら悦びを感じている自分に気付き、ああ、やっぱり俺も華嶋の人間なんだなと、ぼんやり感じていた。

「いくぞ」

礼。

これから傷をつけるであろう武人に対する、敬意を込めた合図。やがて重夫の体から溢れる電流の流れが穏やかになり、反比例して青白い輝きは光を強めていく。

静寂が支配した。

月下流秘伝『抜刀術 吉ノ太刀』

それは、内包したエネルギーに反し、あまりにも静かに放たれた。言うならばゼロタイム。技を放った重夫からは、周囲の時が止まったかのように見えていたのだろうか。

音はない。

空気も動かない。

ただ、瞬きの間に刀身を失った依人の刀と、その後方十数メートル程の位置で、自分の刀を鞘に納める重夫の存在だけが、結果を物語っていた。

依人の予想は当たっていた。重夫は、予想通り依人の左足を狙った。また、神経を限界まで研ぎ澄ましていたため、依人はその神速の抜刀術に、刀を合わせることに成功していた。予想を裏切ったのは、その鋭さである。

重夫の一太刀は依人の刀とぶつかり合うと、まるでスポンジを斬るかのよう、音もなく刀ごと切り裂いた。かわすことも、防ぐこともできない奥義。それこそが重夫の最大の技だった。

「か、完敗……かよ」

宙を舞っていた依人の刀の刀身が回転しながら落下し、廊下につき刺さった。それとほぼ同時に、左足だけを残してドサリと倒れる。重夫は振り返らない。

血痕が一滴もついていない刀を、持ち主であろうシンラ兵の隣へと静かに置くと、放置していた傘を再び手に取った。

「二人目にはなれなかったな」

断面が恐ろしく綺麗な依人の左足は、持ち主が倒れても、未だ垂直に立ったままだった。

51話 剣聖 後編（後書き）

重夫の抜刀術を破った一人とは……

まあお分かりですよ。彼です（笑）

次回は瑠璃の戦闘がメインになる予定です。

年末になって、読者の皆様も忙しくなるでしょうね。私もです。

今年の更新はこれが最後になるかと思われます。読んで下さって本当にありがとうございます！ここまで続けて来れたのも皆様のおかげです。

では、よいお年を~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3800q/>

孤独と闇と希望と

2011年12月24日06時39分発行